TENTH ANNIVERSARY OF THE RELIGIOUS SUMMIT MEETING ON MT.HIEI

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者
平和の祈りの集い

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES

日本宗教代表者会議

TENTH ANNIVERSARY OF THE RELIGIOUS SUMMIT MEETING ON MT.HIEI

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者 平和の祈りの集い

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES

日本宗教代表者会議

1997 10th

祈りを世界に

一九八七年　夏　わたくし達は比叡山に集い、祈った。
「どうか世界に平和が訪れますように」と。
その思いは、人から人へと、国から国へ伝えられて、
国境を越えて　大きな流れとなった。
それから世界を揺るがせた十年があり、崩壊と再生があった。
一九九七年　夏　再びわたくし達はめぐり会った。
なつかしい顔があり、新しい顔があった。
そして、わたくし達は再び宗派の垣根を越えて、共に神仏に祈ったのだった。
「どうか、人類が助け合い、共に生きることができますように。
世界平和が一日も早く訪れますように」と。

世界の宗教指導者を迎え、世界平和を希求するために
日本宗教界が総力を挙げて結集した三日間が　ここにある。

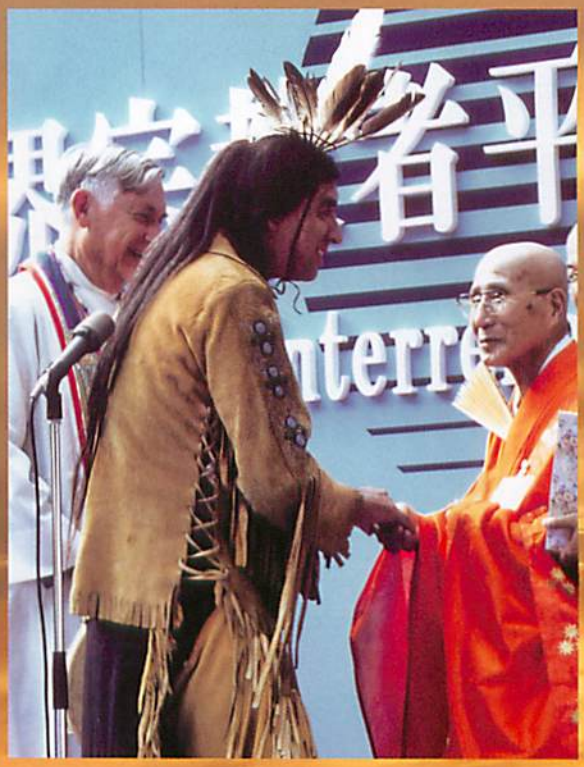
World, Let Us Pray!

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者
平和の祈りの集い

JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES

日本宗教代表者会議



Throughout The

開会式典の壇上に並ぶ海外代表者

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者 平和の祈りの集い

開会式典

左から明石康氏、小杉隆文部大臣、アリンゼ枢機卿

壇上に並ぶ名誉議長、名誉顧問をはじめとする日本宗教代表者会議の役員

海外からの代表者を紹介する
深田充啓議長

開会にあたり、挨拶を述べる
杉谷義純事務総長

来賓を代表し、祝辞を述べる小杉隆文部大臣

歓迎の挨拶を述べる廣瀬静水議長

祝辞を述べる中山善衛顧問

1997

平成9年8月2日　土曜日

8.2

開幕―。
国を越え、民族、人種、
宗教宗派を超えて、今ここに。

歓迎の挨拶を述べる白幡憲佑議長

歓迎の挨拶を述べる岡本健治議長

挨拶を述べる竹田眞議長

会場の様子

アッシジより比叡山へ。
時、流れゆけども、その精神は、
時空はるかに。

1986年10月27日、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世の呼びかけで、
イタリアのアッシジにおいて世界の宗教代表者が集い、
それぞれの伝統に従って祈りが捧げられた。
この祈りの精神は、比叡山での宗教サミットに引き継がれ、
そして10年を経た今、再び我々は集ったのである。

この祈りの集いに大きな期待を寄せる
世界の宗教指導者よりメッセージが届いた。（本文45頁参照）

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者
平和の祈りの集い

メッセージ

（写真=当時の山田恵諦天台座主と会見するヨハネ・パウロ二世）

ローマ教皇のメッセージを披露するフランシス・アリンゼ枢機卿

アズハル総長のメッセージを披露する
アハマッド・オマル・ハーシム師

ムハンマド・サイィド・タンターウィ アズハル総長（イスラム教）

1997

平成9年8月2日　土曜日

8.2

サンヤ・ダルマサクティー世界仏教徒連盟会長（仏教）

世界仏教徒連盟会長のメッセージを披露する
チャロム・ウィスモル氏

1997

平成9年8月2日　土曜日

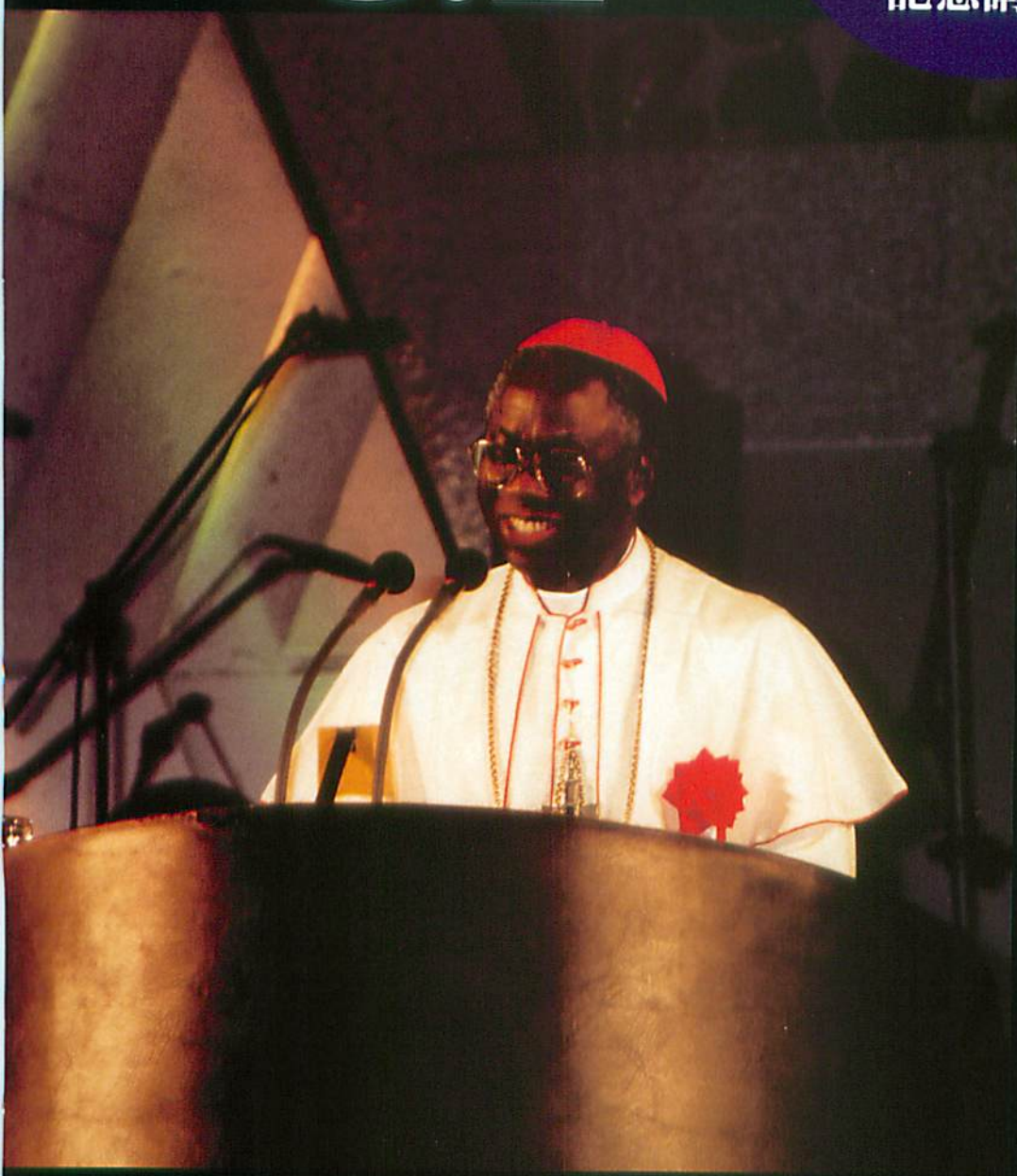
8.2

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者 平和の祈りの集い

記念講演

「今も残る傷が一日も早く癒えるように…」



「宗教間の協力と民族の和解」と題して講演を行う、フランシス・アリンゼ ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官

「自分の心の中にもう少しの勇気と
もう少しの希望、もう少しの責任感、
もう少しの相互理解、
そして愛を見つけることができれば…」

「世界平和と人類の叡智」と題して講演を行う、明石康国際連合人道問題担当事務次長

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者 平和の祈りの集い

特別演奏

「平和祈念ー世界への響き」と題して、サヌカイト琴を演奏するツトム・ヤマシタ氏

特別演奏で使用されたサヌカイト(四国特産の石)は、制作者の前田仁博士のご好意により、海外代表者への記念品として寄贈された(78頁参照)

京都・八坂神社に伝わる勇壮な「祇園太鼓」が披露された

歓迎レセプション

宝ヶ池プリンスホテルにて行われた歓迎レセプション
再会そして出会いの場となり、和やかな一時を過ごした

1997

平成9年8月3日　日曜日

8.3

意見発表部会

意見を交わしあうことが相互理解のはじまりになる。

「宗教協力と世界平和」「21世紀における宗教の役割」を二大テーマに国内外28名のパネリストがそれぞれの立場から意見を発表

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者 平和の祈りの集い

平和の祈り式典

主催者を代表して挨拶をする渡邊恵進名誉議長

1997

平成9年8月4日　月曜日

8.4

夏の日の比叡山山頂を
涼風が渡って行った。
静まりかえった根本中堂前に
祈りの言葉が流れた。

比叡山宗教サミット10周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

根本中堂前広場は約1200名の参加者が集まり、共に祈りを捧げた

「うみぶえの会」のフルート演奏が式典に華を添えた

午後3時30分。「平和の鐘」の音が響き渡り、
祈りの集いが始まった

各宗教代表者が登壇。「比叡山メッセージ」が全世界に向けて発信された

21世紀を担う青少年も式典に参加

閉会の挨拶を述べる小林隆彰常任委員（延暦寺執行）

2 比叡山宗教サミット10周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

比叡山宗教サミット10周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」特別フォーラム

21世紀へ向けての人類の課題と宗教

Human Issues & Role of Religion in the Twenty First Century

主催・日本宗教代表者会議

特別フォーラム 8月4日、特別フォーラムが催された（NHK教育テレビで放映）

広島県宗教連盟主催の慰霊法要で、広島来訪者を代表して献花する杉谷義純事務総長（写真上）と献香するポーリーン・E.タンジオーラ師（写真下）（8月6日）

ノーモア ヒロシマ。
み霊安かれ。

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者 平和の祈りの集い

ヒロシマ訪問

原爆資料館を見学する海外代表者一行（8月5日）

原爆慰霊碑に献花する一行

1997

平成9年8月5日火曜日・6日水曜日

8.5/6

REPORT

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

REPORT

発刊にあたって

比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が、平成九（一九九七）年八月二、三、四の三日間にわたり、国立京都国際会館及び比叡山延暦寺を会場に開催された。海外十八ヶ国三十五名の公式代表と三十二名のオブザーバーはじめ、国内から延べ四千人の宗教代表が参加、日本の宗教史上最大の宗教者の集いとなった。

想えば一九六二年より開催された第二バチカン公会議おいて、当時のローマ教皇パウロ六世が、カトリック教会以外の広大な世界との対話推進の教書を発表以来、諸宗教間の交流が公式的にはじめられるようになった。そして日本においては一九六七年に世界連邦日本宗教委員会、一九七〇年に世界宗教者平和会議日本委員会が発足するなど、宗教間の対話が地道にその歩みをはじめたのであった。

一九八一年二月ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が来日、日本の宗教代表者と懇談の折「宗教協力には、日本の偉大なる教師最澄の言葉を用いるならば、『己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり』の精神が最も大切である。」と述べられた。この挨拶は宗教対話に対する日本の宗教界へのローマ教皇の期待のあらわれと受けとられ、以後急速に諸宗教間の交流が促進されていったのである。一九八一年六月東京及び京都における世界宗教者倫理会議、一九八六年十月ローマ教皇提唱によるアッシジ世界宗教者平和祈願集会、これらの流れは、やがて一九八七年八月の比叡山宗教サミットへと結実していったのである。

それから十年、内外の諸宗教組織の相互理解は一段と進展し、また世界の情勢は宗教間の協力を一層要請する状況を迎え、この度の世界宗教者平和の祈りの集いが開催されたのである。今回も十年前と同様、主催団体として日本宗教代表者会議が組織され、日本宗教連盟協賛の全日本仏教会、神社本庁、教派神道連合会、日本キリスト教連合会、新日本宗教団体連合会の五団体、さらに世界連邦日本宗教委員会、世界宗教者平和会議日本委員会などの諸宗教組織が参加、そのうえ今回は上記組織に未加盟の団体にも呼びかけ、文字通り日本の宗教界の総力を結集して開催したといっても過言ではなかろう。

冷戦から解き放たれた人類は、喜ぶのも束の間、紛争、環境、貧困、難民、食糧、人口など、生存を脅かす大きな問題に直面している。一方、驚異的な生命科学の発展はクローン人間の誕生さえ可能とし、この歪んだ文明のあり方に人類は大いに呻吟せざるを得ないところに立たされている。これらをもし看過するとなれば、宗教は過去の存在と化すであろう。その意味で危機感を持ちながら世界の平和を希求する宗教者は、京都に集い「宗教協力と世界平和」「二十一世紀における宗教の役割」を二大テーマとし、具体的に人類の直面する諸問題について意見交換を行い、最終日は比叡山上において、共に祈り、比叡山メッセージを全世界に向けて発信したのであった。今回はバチカン、世界教会協議会、世界ムスリム連盟、世界仏教徒連盟など世界宗教組織の代表、先住民族宗教代表、ボスニアやカンボジアなど紛争地域の代表はじめ、国際諸宗教組織代表など、実に多様な宗教代表が対等の立場に立って意見の交換ができたことは、宗教対話の歴史のうえでも特筆すべきことであろう。その意味で二十一世紀を直前に控え今後の宗教者のそれぞれの役割に少なからぬ影響を与えるものと信じるものである。

もちろん祈りだけで、又話し合うだけで平和が到来するわけでも、人類の直面する問題が解決するわけでもない。しかしこのような宗教者の集いは、長年にわたる宗教間相互の不信感を取り除き、連帯の絆が結ばれることによって、新しい展望が開かれてくるのであり、やがてそれが問題解決の足がかりを構築することにもなるのである。そのためには宗教者の謙虚な反省と、未来に対する洞察、それからそれぞれが信じる目に見えない尊い存在に対し、お互いに尊敬の念を持ち続けることこそ肝要であろう。

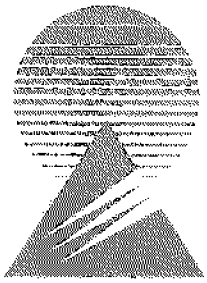
私たちは今新たなる出発点に立っているとの認識をもたざるを得ない。そして自分の宗教のみを至上のものと思い、他を顧みない人々には理解の外にあることかも知れないが、此の度の世界宗教者平和の祈りの集いにおいて、宗教の垣根を越えて、共に汗を流したこの経験は必ずや目的地に向かう灯明となるであろう。御協力いただいた諸先生に甚深の謝意を表すると共に、お手伝いして下さった、未来を担うボランティアの方々のこれからの活躍を大いに期待しながら、この我々の営みが留まることなく、目的達成まで続けられることを神仏に祈るものである。

一九九七年十一月一日

日本宗教代表者会議事務総長
杉谷義純
（天台宗宗務総長）

世界宗教者平和の祈りの集い

目次



比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い

○プロローグ 2

○開会式典・意見発表部会・平和の祈り式典・ヒロシマ訪問（カラーグラビア） 4

○世界宗教者平和の祈りの集い（比叡山宗教サミット10周年記念） 17

発刊にあたって 18

比叡山メッセージ 24

開催趣意書 26

○平和の祈りによせて 29

主催者代表　挨拶 30

○日程・内容 39

○世界宗教者平和の祈りの集い 会場 44

○メッセージ 45

○記念講演 53

世界平和と人類の叡智　国際連合人道問題担当事務次長　明石　康氏 54

宗教間の協力と民族の和解　ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官　フランシス・アリンゼ枢機卿 66

○特別演奏 77

CONTENTS

○意見発表部会❶ 宗教協力と世界平和 79
○意見発表部会❷ 二十一世紀における宗教の役割 111
○フォコラーレ（一致をめざす少年少女運動） 141
○特別フォーラム 143
○平和の祈り式典 147
○「平和の祈りの式典」挨拶 150
○広島平和祈念式典参加日程・内容 155
○資料 159
開催までの経過 160
日本宗教代表者会議規約 162
日本宗教代表者会議組織図 163
海外参加者一覧 164
日本宗教代表者会議役員名簿 166
○共に祈った三日間（マスコミ報道） 176
○あとがき 190

A Message from Mt.Hiei

比叡山メッセージ

一九九七年八月二十日、三日、四日、比叡山宗教サミット十周年を記念し「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催して、比叡山上に結集したわれわれは、世界平和をめざし日夜、心を寄せる宗教者や世のすべての人に対して、心からのメッセージを送りたいとおもう。

われわれは、一九八六年十月、ローマ教皇の呼びかけに応じたアッシジでの世界平和祈願の集いの精神を継承し、翌年八月、ここ比叡山の地で「アッシジから比叡山へ」の名のもとに開催した祈りと対話の集会において、さらに祈りをこめて平和の鐘を打ち鳴らした。そして、重ねて世界の諸宗教の伝統を尊重し合い、自らの信仰を通じて病める魂を癒しつつ、苦悩する世界の現実に対し不屈の精神をもって対応する諸宗教共通の決意を再確認した。

以来、十年の歳月が流れる中で、諸宗教間の対話と相互理解は着実に進められ、平和を渇望する宗教者の紐帯は、一層、固く結ばれてきた。しかしその反面、現代が直面する地球温暖化による環境問題、貧困・飢餓と連動する食料問題や人口問題、差別・人権や暴力・抑圧と絡む民族問題等、混沌とした世界の危機的な現実に対して、宗教がどれ程の癒しの働きかけをしてきたかを省るとき、われわれは自らの非力さを痛感せざるを得ない。

現代の諸問題は、極めて複合的であるが、環境の保全と生けるものとの共栄こそ、人類共同体としてのわれわれにとって、最大の課題と言わねばなるまい。しかし、近代科学の急速な発展は、地球生態系を破壊し、自然・環境との共生に背いてきた。一方、平和への志向は、今なお進められる軍備の増強や核兵器の開発によって無視

されつつある。しかも、生命の尊厳を冒涜し、人間存在をも犯しかねないクローン開発等、生命科学の挑戦は止まるところが無い。人類は、まさに存亡の危機に瀕していると言っても過言ではなかろう。

われわれは、この現実を直視し、それらの背景に「もの」の豊かさをのみ追求する人間の飽くなき欲望と、生命の尊厳と畏敬の念を忘れた自己本位の思い上がりが潜在していた事実を指摘したい。それを踏まえて、われわれは、生きとし生けるものの生命を大切にし合う宗教的土壌を培い、正義と愛、寛容と慈悲の宗教心を滲透させる努力を積み重ねるべきである。

平和のために祈ることは、平和のために働くことである。それは、平和のための自己犠牲と奉仕に徹することに外ならない。われわれは、今こそ自らの祈りが足りないことを真摯に反省し、我欲の虜となりかねない人間の心に自制心を喚起し、苦しみや痛みを分かち合い、宥し合って共に生きる世界の実現を目指してなお一層、邁進しなければならない。

われわれは今、「比叡山宗教サミット」十周年に際し、ここ比叡山上に集い、力を合わせて世界の宗教者と共に、この混迷の世に光を掲げるべく心に「平和の砦」を築きたい。われわれは、今こそ平和の尊さを新しい時代の担い手となる若者達に強く訴えると共に、全人類が渇望してやまない平和の賜物が、この地球上に恵まれんことを切に祈る。

一九九七年八月四日

「世界宗教者平和の祈りの集い」参加者一同

Prospectus

開催趣意書

一九八七年、世界平和具現のために世界各地から比叡山に集い、各々が信奉する神仏に対して真摯な祈りを捧げた諸宗教代表者は、世界の恒久平和を願い、更に祈り続けることを誓い合いました。

以来、十年の月日が流れ、諸宗教間の対話と相互理解は一段と進み、私たち宗教者は、全人類共通の願いである、平和を渇望する心によって堅く結ばれて来たのであります。

しかしながら、世界の現状は今なお混沌とし、閉塞的ですらあります。民族問題・環境問題・人口問題・食料問題等々、解決が急がれる問題は枚挙に暇がありません。このような深刻な状況を現出させた遠因は、結局の所、私たち一人ひとりの心に潜む欲望であり、所有を主目的に構築してきた文明にあると思料されます。生きるための欲望が限度を超えてしまった結果、貧困に喘ぐ人々に不当な苦しさを与えるばかりでなく、我々自身に解決不可能と思わせる程の難問が突き返されているのです。

すなわち、過剰な物質万能主義は、すべてに歪みを生じさせ、倫理の崩壊を加速し、人びとの宗教離れを助長する結果となったのです。

さらに、奪い合いの心は、軍備の増強や核兵器の開発を止めることができないばかりでなく、南北に大きな格差をも生じさせました。

「比叡山宗教サミット」十周年を迎えた私たちは、世界の現状を顧みて、いたずらに悲観的になるのではなく、

祈りの足らざることを痛切に感じて心から懺悔しつつ、更に決意を堅くしなければなりません。

今私たちは、このような現実に対し、どのように向き合っていくのかを真剣に考えました。その第一は、私たちは神仏に対して更に祈り続けなければならないということです。すなわち、近代文明を超克し、愛や慈悲を前提とした睦み合いの文明に移行するため、我々自身が心を入れ替えるべく、祈らなければならないのです。

私たちは日常物質文明に埋没し、更に飽くなき欲望を求める心を潜在的に持っていますが、今敢えて、神仏から本来与えられている、愛や慈悲の心に目覚めるべく祈るのです。

そして、私たち一人ひとりは、自ら我が心をしっかりと見つめ、過剰な欲求を抑え、睦み合いの心に変われるよう、努力精進しなければなりません。自己中心、自国中心の心から、共に認め合い、尽くし合う心に変えて行かねばならないのです。

そうして、欲望を押し止め、睦み合いの心が行動として現れるとき、地球の未来には光明が射し、人々の倫理は回復し、平和がこの世に具現するでありましょう。

一人の心が変われば家庭が変わり、家庭が変われば社会が変わり、国家が、世界が、そして地球が変わります。それは決して不可能な事でないことを、私たちは強く認識しなければなりません。

人類の未来を過度に悲観することはありません。希望を持とうではありませんか。私たちが更に一層心を合わせて真剣に祈れば、道は必ず開けます。神仏のご加護は無限であります。

私たちは今ここに、「比叡山宗教サミット」十周年に際し、比叡山上に集い、世界の宗教者と共に、心を変えることの他に人類幸福の道はないと確信し、声を大にして世界に訴えたいと思います。

同時に、宗教を異にするがゆえの紛争を抱えているすべての国々に対し、宗教協力から生じる対話や相互理解の大切さを、心から強く訴えるものであります。

日本宗教代表者会議

平和の祈りによせて

明るい未来への出発点に

日本宗教代表者会議名誉議長
天台座主
渡邊恵進

世界の代表的宗教指導者が再び比叡山に集い、人類が直面している数々の大きな問題について宗教者として果たすべき役割を確認し合い、共にそれぞれの信仰に基づいて祈る「世界宗教者平和の祈りの集い」が開催されます。この祈りの集いは「比叡山宗教サミット」十周年を記念して開かれるものですが、この十年間で世界は大きく変わりました。従って単に十周年を記念する目的ではなく、この間に宗教者自身が果たしてきた役割について深い反省に立って、新たな対応を構築していかねばなりません。

人間は元来自己中心的になり易い存在ですが、宗教はそれを助長する立場にあったのではないでしょうか。

人々が信仰を異にすることが、それぞれの違いを強調することでなく、信仰を有する者という共通性を確認することにならなければならないと思います。このことに目覚めてもらうことが、宗教対話や宗教協力の大きな命題のひとつであります。十年前は異なる宗教の指導者が一堂に会することで評価されましたが、今回は信仰を持つ者がそれゆえにお互いに深い信頼で結ばれ、連帯して人類の未来を明るくすべく歩み出す出発点にしたいものです。

この度の集いが日本宗教連盟協賛の各宗教団体はじめ、多くの日本の宗教代表者の協力のもとに開かれますことに感謝と敬意を表します。

合掌

祈りと誓いをあらたに

日本宗教代表者会議名誉顧問
大本教主
出口聖子

比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が、国内外の諸宗教代表の皆さま方のご参加をいただき、盛大に開催されますことは、まことにありがたいことでございます。

各々の信仰を尊重しつつ、互いに協力させていただかないと、真の平和が実現しないと信じて、日本や世界の宗教指導者が、比叡山に集い、平和を祈り、宗教協力を誓い合って十年の歳月が過ぎました。

しかし、世界は今なお深刻な自然環境破壊や異常気象、災害が起こり、民族・宗教紛争や政治の腐敗、凶悪犯罪などが多発し、不安と混乱の渦に巻き込まれています。

このような世界の出来事は、「人の心のあり方」と深くかかわるものと思われます。神仏は私たち宗教者にまず、その反省を求めていらっしゃるように思われてなりません。今こそ私たちが自らを省み、お互いの立場の相違を越えて協力し、今日の問題を解決する努力をさせていただかないと、世界の平和も人類の未来もないでしょう。

今回の集いのテーマに「奪い合いから助け合い」が掲げられていますが、それは祖父出口王仁三郎が早くから提唱してまいりました「人類愛善の精神（こころ）」と一つだと思います。そのような世の中が一日も早く実現いたしますように、日本や世界の宗教指導者の皆さまと共に祈り、共に誓いを新たにさせていただきたいと願っています。

現代を救う宗教の心

全日本仏教会会長
日本宗教代表者会議名誉顧問
高井隆秀

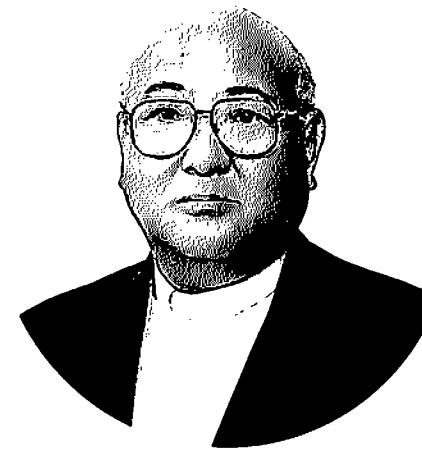
「仏法遥かに非ず心中にして即ち近し」心の平和あらずして地上に平和あるべきや。

神仏の教えを尊ばずして真実の幸福はありません。本来宗教は安らぎと幸せを希求する祈りから始まります。そして真の宗教は国家や民族の枠を越えて、宇宙的視座を持つあらゆる位相を包括した実践的な教えでありますから、多様な価値観を持つ現代を救い得る唯一の依り所であると信じます。科学と技術を唯一絶対として来た現代の弊害を是正する為にも、叡知と共生を尊重し、精神文化の中枢に位置する宗教者が、まず結団し、その協調を続ける力が大切だと思います。

かつて十一年前、イタリアのアッシジでの祈りが原点となり、その翌年、しかも日本仏教の母山といわれる比叡山において、宗教サミットが行われた意義は実に大きなものでありました。そしてそれが更に十年後の今日、再び世界の宗教者が一堂に会して万物の調和と平和を祈る事は、まさに時代の要請に即応する人類の叡知の証であると思います。

今や世界も日々に相互の理解と協調に向かっております。これまで野放しにされて来た為に人間の煩悩が惹き起こした誤算と、宇宙的規模のゆき過ぎを、神仏のお慧しで解決しなければなりません。お互いに手と手をしっかり握り合って、更なる緊密化の為に邁進を誓い合いましょう。

「世界宗教者平和の祈りの集い」のより一層の意義ある結実を、心からお祈り致します。



生命への文化を築こう

日本カトリック司教協議会会長
日本宗教代表者会議名誉顧問
濱尾文郎

第二次世界大戦をはじめ、絶えまない内線で民衆が苦しめられてきた二十世紀も、後三年で終わります。まだ各地で難民が増加し、人々の命がおろそかにされていると同時に、生活の向上だけを目指した結果、自然環境が破壊されています。

核兵器やすべての兵器の製造、それらの実験や使用は、環境破壊を伴う人類の「死への文化」と言えるでしょう。カトリック教会の最高の指導者である教皇ヨハネ・パウロ二世は、この「死への文化」に対して、「生命への文化」の確立が現在、全人類の課題であり、特に宗教者の使命であると強調しています。

日進月歩と言われる医療技術の発達は、必ずしも生命を助けて、人間としての尊厳を保つように方向づけられているとは言えません。臓器移植による治療、命が助かる愛の実践がある一方、臓器の売買のために幼い子供の命が失われている現状があります。事前に胎児の健康状態を診て、障害のある胎児を堕ろすことを正当化する法律を持つ国もあります。

自然と共存し、あらゆる生命と人間の尊厳を大切にする「生命への文化」の確立こそ、二十一世紀に向けての平和への課題ではないでしょうか。

諸宗教協調のために

日本宗教代表者会議名誉顧問
神社本庁統理
細川護貞

「宗教」とは本来、実に多様なものであって、ひとくくりにすることなど到底できません。その中にあって、「世界平和の希求」という一点において、世界の様々な宗教の代表者が集い、十年前の「比叡山宗教サミット」の精神を引き継いで、いま一度宗教者の役割を自覚し、それぞれの立場から祈りを捧げることは、誠に意義深いものであります。

米ソ対立という冷戦構造の崩壊が、数多くの民族紛争を生んだことは、歴史的な皮肉というべきだと思いますが、真の世界平和の実現のためには、思想信条の違いを乗り越えて、互いを認め合うための不断の努力が必要です。その意味において、この「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催は、世界人類の将来に向かって、大きな役割を果たすものと存じます。

「宗教」には元来、世界平和を成し遂げるだけの力があることを確信し、この「集い」が世界の諸宗教協調のための、大きな飛躍となることを心から祈念致します。

分かち合いの時代へ

日本宗教代表者会議名誉顧問
新日本宗教団体連合会名誉理事長
立正佼成会開祖
庭野日敬

「比叡山宗教サミット」が、はや十周年を迎えるといいます。あっという間の十年という気がいたします。それは、日本のバブル経済の崩壊とそのショック、また世界的にもバルカン半島での戦火をはじめアフリカの諸地域における紛争や飢餓など、あまりにも問題が次々と起こったために、またたく間に時が経ってしまったように思えるのかもしれません。

開発途上国では、依然として人口増加がみられます。したがって食糧がますます不足することになり、それは援助の必要性がさらに増大していくことでもあります。しかも、それに旧ソ連から援助を受けていた国々も加わるわけですから、援助の度合いはますます増えていくといっても過言ではありません。

聞くところによると、援助を「する国」と「受ける国」に分けてみますと、二〇〇〇年頃には援助をする国々の人口が八億人、援助を受ける国々のそれが五十三億人に達すると予想されるそうです。約一対七の比率になるわけで、つまり、私たち一人が恵まれない国々の七人の人たちの面倒をみる覚悟が要請されているのです。

奪い合う二十世紀は終わり、分かち合いつつ共生する二十一世紀を迎えて、私たち宗教者はいかにあるべきか、「世界宗教者平和の祈りの集い」に期待するところ大なるものがあります。

共に祈り、共に歩む

世界宗教者平和会議日本委員会理事長
日本宗教代表者会議議長
白柳誠一

紀元二〇〇〇年を前にして、いま、人類は不安と希望の錯綜するなかに生きています。憎しみと争い、科学、技術の発展と物に振りまわされた二十世紀が、そのまま続くのかという不安、或いは、人間が大切にされ、真に人間性が開花される時代がくるのかという期待との狭間にです。このような大きな節目をまえにして、比叡山に世界の宗教者が集い、平和のために祈り、人類の真の進歩のために心を開いて語り合い、協力の絆を固めることは誠に意義深いことです。

現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものが、私たち宗教者の喜びと希望、悲しみと苦しみでもあることを、この機会に確認したいものです。何故なら、真に人間的な事柄は宗教者の心のなかに大きな反響を呼び起こしているからです。

宗教者は人間の真の幸福、平和のためには人間の力を遥かに超える神・仏の力、恵みが必要であることを知っています。共に祈り、固い決意をもって、共に歩もうではありませんか。

共生きの未来を開く

日本宗教代表者会議議長
世界連邦日本宗教委員会委員長
池田瑩輝

二十世紀は後三年で終わり、やがて第三の千年期を迎えようとしています。

さて、このような大轉換期の扉を開くように、明年にはアメリカ、ロシアをはじめ世界の二十カ国の科学者の協力によって、国際宇宙ステーションの建設が、二〇〇二年の完成をめざしてスタートすると発表されています。まさに宇宙時代の到来を告げているようです。

そこで想い起こしますのは、一九六三年に第二バチカン公会議におくられたヨハネ二十三世教皇のパーチェム・イン・テリス(地上の平和)と題された最後の回勅です。教皇はそのはじめに「この宇宙の感嘆すべき秩序に対して、いたましいまでに対照的なのは人間及び民族相互間の無秩序であって、その相互関係を律しうるものは、ただ力以外にないかのようである」と、訴えられています。

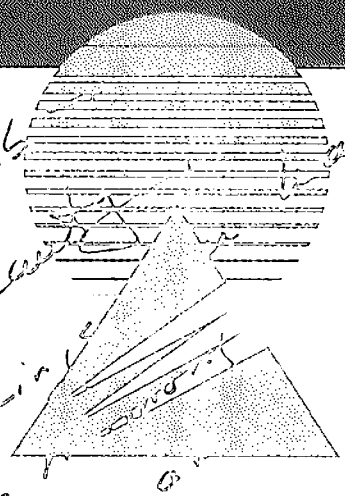
平和は私たち人類の到達点ではなく、共生きの道標(みちしるべ)として秩序づけられなくてはなりません。

幸いに、きょう比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に重ねて相会うことができましたことは、この上ない慶びであります。恐らく今世紀を締めくくる世界宗教者の祈りの集いとして永く歴史に記録されることでしょう。

この地球上に平和の心が満ちみちて新しい未来が開かれますことを切望してやみません。

TENTH ANNIVERSARY OF THE RELIGIOUS SUMMIT MEETING ON MT.HIEI

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE



1997 8.4

JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES

PROGRAM

日程・内容

1997.8.2

平成9年8月2日　土曜日

開会式典・記念講演・特別演奏

国立京都国際会館（大会議場）

11:00	開場
11:00~13:30	受付
13:30~13:45	開幕を告げる音楽
13:45~14:35	**開会式典**
13:45	・開会挨拶　杉谷義純師（事務総長）
13:50	・外国代表者紹介　深田充啓師（議長）
14:05	・歓迎挨拶　廣瀬諍水師（議長） 岡本健治師（議長） 白幡憲佑師（議長）
14:15	・海外代表メッセージ ローマ教皇メッセージ（キリスト教）　ーフランシス・アリンゼ枢機卿 アズハル総長メッセージ（イスラム教）　ーアハマッド・オマル・ハーシム師 世界仏教徒連盟会長メッセージ（仏教）　ーチャロム・ウィスモル氏
14:25	・祝辞　小杉　隆氏（文部大臣） 中山善衛師（顧問）
14:35~14:45	小休憩
14:45~16:45	**記念講演**
14:45	・講演①　「世界平和と人類の叡智」 国際連合人道問題担当事務次長 明石　康氏
15:45~15:55	小休憩
15:55	・講演②　「宗教間の協力と民族の和解」 ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官 フランシス・アリンゼ枢機卿
16:45~16:55	小休憩
16:55~17:40	**特別演奏**「平和祈念ー世界への響き」 打楽器奏者・作曲家　ツトム・ヤマシタ氏
17:40~17:45	・閉会挨拶　竹田　眞師（議長）

歓迎レセプション

宝ヶ池プリンスホテル（プリンスホール）

18:30~20:30	**歓迎レセプション**
18:30	・開会挨拶　田中健一師（常任副委員長）
	・歓迎挨拶　高井隆秀師（名誉顧問） 庭野日鑛師（顧問）
	・メッセージ　橋本龍太郎氏（内閣総理大臣） コフィ・アナン氏（国連事務総長）
	・アトラクション　祇園太鼓
	・サヌカイト贈呈
	・乾杯　加藤知衛師（常任委員長）
20:20	・閉会挨拶　黒住宗晴師（顧問）

意見発表部会①「宗教協力と世界平和」部会

国立京都国際会館（ルームA）

9:30	開場
10:30~16:45	意見発表部会①
10:30~10:35	開会挨拶　　議長　白幡憲佑師
10:35~11:15	テーマ　1)「宗教の平和活動と民族紛争」 ①アゴスティーノ・ジョバンニョーリ教授（聖エジディオ共同体）イタリア ②テップ・ボーン師（仏教）カンボジア ③ヴィンコ・プルジッチ師（カトリック）ボスニア
11:15~11:20	挨拶　　議長　廣瀬静水師
11:20~12:15	テーマ　2)「東西の宗教対話と相互理解」 ①トマス・ミッシェル師（カトリック）イタリア ②アブドッラー・イブン・サーリフ・アル=オバイド師（イスラム）サウディ・アラビア ③グレゴリオス・ヨハンナ・イブラヒム師（オーソドックス）シリア ④ディビッド・ローゼン師（ユダヤ教）イスラエル
12:15~14:00	休憩・昼食
14:00~14:05	挨拶　　議長　宮西惟道師
14:05~15:00	テーマ　3)「宗教者間の連帯と人類に果たすべき役割」 ①大江真道師（日本聖公会京都聖ヨハネ教会司祭ーキリスト教）日本 ②スージャン・シン・ウーバン師（シーク教）インド ③ウィリアム・E.スウィング師（聖公会）U.S.A. ④宋月珠師（仏教）韓国
15:00~15:40	小休憩
15:40~15:45	挨拶　　議長　南　佳伸師
15:45~16:45	テーマ　4)「宗教対話の歴史と未来」 ①ジェームズ・P.モートン師（ニューヨーク宗際センター）U.S.A. ②ロバート・トレーヤー師（IARF）イギリス ③黒住宗道師（黒住教教嗣ー教派神道連合会）日本 ④ウィリアム・F.ベンドレー師（WCRP）U.S.A.
16:45~17:00	閉会挨拶　　議長　白幡憲佑師

意見発表部会②「21世紀における宗教の役割」部会

国立京都国際会館（ルームB-1）

9:30	開場
10:30~16:45	意見発表部会②
10:30~10:35	開会挨拶　　議長　池田瑩輝師
10:35~11:15	**テーマ　1)「若者や無信仰者に対する宗教者の使命」** ①ナターリア・ダラピッコラ女史（フォコラーレ）イタリア ②ジーン・リーブス師（プロテスタント）U.S.A.
11:15~11:20	挨拶　　議長　深田充啓師
11:20~12:15	**テーマ　2)「人権問題と宗教者の責務」** ①ゴンザロ・イトゥアルテ・ヴェルドゥスコ師（カトリック）メキシコ ②西田真因師（真宗大谷派教学研究所所長ー仏教）日本 ③ポーリーン・E.タンジオーラ師（民族宗教）ニュージーランド ④ウェスリー・S.アリアラジャ師（プロテスタント）スイス
12:15~14:00	休憩・昼食
14:00~14:05	挨拶　　議長　竹田　眞師
14:05~15:00	**テーマ　3)「共生の理念の確立と宗教」** ①A.T.アリヤラトネ師（仏教）スリランカ ②後藤俊彦師（高千穂神社宮司ー神道）日本 ③ウマ・シャンカール・シャルマ師（ヒンドゥー教）インド ④タリー・スポティッド・イーグル・ボーイ師（民族宗教）カナダ
15:00~15:40	小休憩
15:40~15:45	挨拶　　議長　奥田宗弘師
15:45~16:45	**テーマ　4)「宗教に基づく社会貢献」** ①シェイク・アハマド・クフタロ師（イスラム教）シリア ②アゴスティーノ・ガルディン師（カトリック）イタリア ③御木貴日止師（PL教主ー新日本宗教団体連合会）日本
16:45~17:00	閉会挨拶　　議長　池田瑩輝師

1997.8.4

平成9年8月4日　月曜日

特別フォーラム

国立京都国際会館（ルームA）

10:00~11:30	**特別フォーラム** 「２１世紀に向けての人類の課題と宗教ー民族対立・人権・生命倫理などをめぐってー」 アル・オバイド博士（世界イスラム連盟事務総長）イスラム教 アリアラジャ博士（世界教会協議会副総幹事）プロテスタント アリンゼ枢機卿（ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官）カトリック ローゼン師（ＡＤＬ諸宗教対話部部長）ユダヤ教 シャルマ博士（パトナ大学教授）ヒンドゥー教 杉谷義純師（日本宗教代表者会議事務総長・天台宗宗務総長）仏教

平和の祈り式典

比叡山延暦寺根本中堂前広場

13:30~15:00	受付
15:00~17:00	**平和の祈り式典**
15:00~15:20	・宗教者入場
15:20	・開会の挨拶　田中恆清師（事務次長）
15:30	・平和の鐘《平和の黙祷》
15:35	・主催者代表挨拶　渡邊惠進師（名誉議長）
15:45	・平和の祈り 仏教　キリスト教 教派神道連合会　新日本宗教団体連合会 神道　ヒンドゥー教 民族宗教　イスラム教 ユダヤ教　シーク教 ゾロアスター教　バハイ教 諸宗教組織・WCRP日本委員会・世界連邦日本宗教委員会
16:40	・比叡山メッセージ発表　白柳誠一師（議長）
16:50	・平和の交歓
16:55	・閉会の挨拶　小林隆彰師（常任委員）

広島平和式典参加日程

（海外代表者のみ）

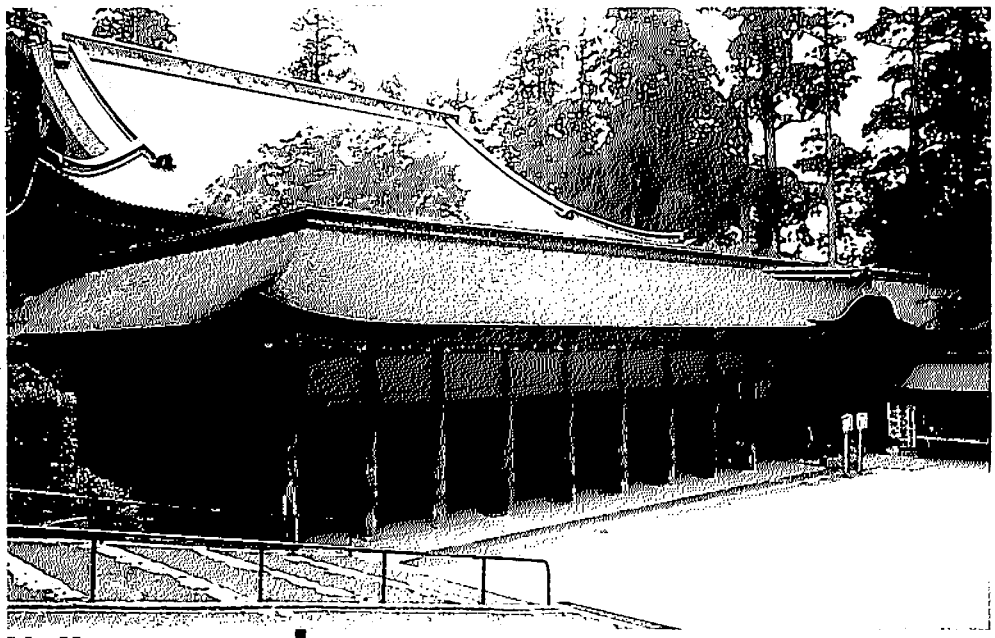
8月5日（火）	
14:00	原爆被災者供養塔参拝
15:00	原爆資料館見学・記録映画鑑賞
8月6日（水）	
6:00	慰霊行事参列（広島県宗教連盟主催）
8:00	平和の式典参列（広島市主催）
10:00	歓迎懇談会（広島県宗教連盟歓迎委員会主催）
12:00	レセプション（広島県宗教連盟歓迎委員会主催）

比叡山宗教サミット10周年記念

世界宗教者平和の祈りの集い 会場

● 比叡山

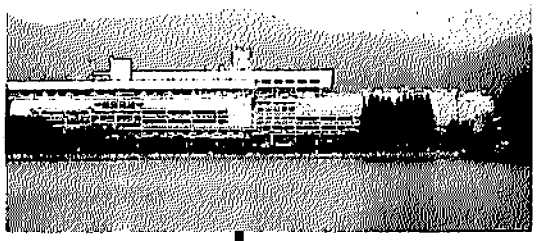
根本中堂



Mt.Hiei
Konpon Chudo Hall

比叡山は標高848メートルで、山全体に延暦寺の堂塔伽藍が点在する。伝教大師最澄の開山(788)以来、日本仏教の母山として知られる。1995年には国連ユネスコの世界文化遺産の一つに指定された。本堂は根本中堂で、その堂内には1200年以上の間絶えることなく「不滅の法灯」が光り輝き続けている。

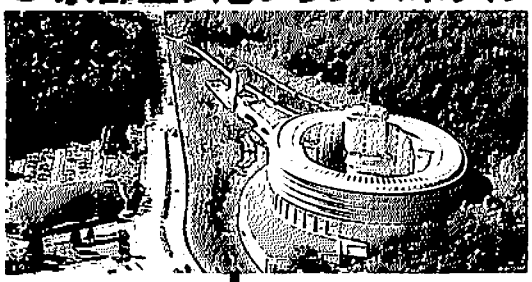
● 国立京都国際会館



Kyoto International
Conference Hall

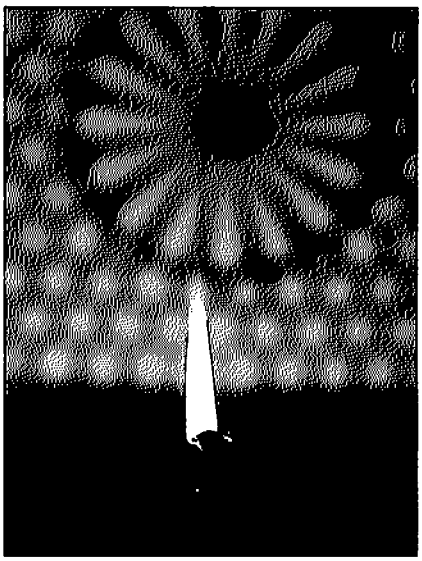
1963年に開館した国立の国際会議場。京都の洛北、宝ヶ池のすぐそばに位置し、毎年多くの国際的規模の主要会議が開催されている。

● 京都宝ヶ池プリンスホテル



Kyoto Takaragaike
Prince Hotel

国立京都国際会館に隣接する同ホテルは、建築家・村野藤吾氏の基本設計によるもので、全体に曲線を用いたデザインは、周囲の景観になじむよう意匠的配慮がなされている。



不滅の法灯
Perpetual Dharma Light

メッセージ

ローマ教皇　ヨハネ・パウロ二世聖下

一九八七年に開催された、「世界宗教者平和の祈りの集い」は、その一年前に行なわれたアッシジでの集いと同じ精神を引き継ぐものでした。今、その集いの十周年に当たり、皆様が過去十年間の実績を振り返りながら、自己の宗教への狭い頑なな信仰や執着のために生まれる不寛容と、他の宗教への差別をなくすために、どのようにして世界の諸宗教者が協力すれば良いのか、意見を交わし合ってくださることを確信し、豊かな神の祝福がありますようにお祈りいたします。

アズハル総長 ムハンマド・サイイド・タンターウィ博士

あなたがたに平安がありますように、そしてアッラーの慈悲と祝福がありますように。

まず始めに、このように偉大で歴史的な会議を開催するために、色々とご尽力下さいました、日本宗教代表者会議の皆様に、感謝の意を表します。そして、比叡山宗教サミット十周年を記念して、この会議にお集まりの諸宗教代表者の方々をはじめ、ご列席の皆様に心からご挨拶申し上げます。私は、全人類に福利をもたらすこの会議が大きな成果を収めることを祈念しております。また、この会議は、テーマも目的も機を得た大変意義のあるものです。

世界平和実現のため、今日の国際体制とすべての宗教の信者達は、より効果的にその任務を果し、その行動を起こさなければなりません。

なぜならば、被抑圧者が生きて行く上で直面している諸問題や危機の解決の遅延は、毎日のように彼らに犠牲をもたらしているからです。そして、そこには罪のない人々の集団殺害、婦女暴行、老若男女の殺人がみられます。

このような悲惨で険悪な数々の犯罪がそれらの人々の権利を侵しています。これは、すべての国にとって恥ずべきことであり、歴史の中での人類の汚点であります。特にこのようなことが科学と技術の進歩した二十世紀において文明をもつ人類に起きたからです。

イスラームはムハンマド以前のすべての使徒たちを信じ、すべての啓典を信じることを信者に呼びかけています。アッラーは語られた。

使徒は主から下されたものを信じる。信者たちもまた同じである。

彼らは皆アッラーと天使たち、諸啓典と使徒たちを信じる。私たちは使徒たちの誰にも差別を付けない（二章二八五節）。

これらの証言で明らかなように、イスラームは安寧を呼びかけ、暴力やテロを受け入れません。そして他宗教の人々と平穏に生活することを呼びかけ、盲目的な熱狂者とならず、人種差別をしません。

私は、イスラーム世界において最も権威あるエジプトの誉れ高いアズハルの名において、すべての国々、政府、国際機関、他宗教の人々が人類の危機に団結し、戦争を回避し、世界に平和と公正を広めるように呼びかけます。

イスラームのメッセージをもって世界へのメッセージとし、アズハルは常に他宗教との対話を歓迎しています。人類愛の絆を強め、真理、公平、平和のために尽力しております。

また、肌の色、人種、宗教の区別なく、人類擁護に努力しております。

主よ、あなたから慈悲をお授け下さい、そしてわれわれを正しい道にお導き下さい。

あなたがたに平安がありますように。

世界仏教徒連盟会長　サンヤ・ダルマサクティ氏

仏暦二五四〇（西暦一九九七）年八月二日から四日まで開催されます、比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」に当り、タイのバンコクにあります世界仏教徒連盟の本部から全参加者と主催者に対し、心からお慶び申し上げます。

お釈迦様は、人の心には智恵、正直、寛容、平和という、四つの徳が堅く刻まれるべきであるとおっしゃられました。

このすばらしい会議において、智恵、正直、寛容、平和という四つの徳が、様々な信仰の共通の糧としてあらんことを望みます。

イスラエル国首長ラビ　イスラエル・メイール・ラオ師

敬愛いたします世界宗教サミット会議ご出席の皆様。

大変遺憾ながら、私は一九九七年八月二日から四日まで京都で開催される「世界宗教者平和の祈りの集い」に参加することができなくなりました。身体的には私はこの集いに出席しておりませんが、それでも私の心は皆様と共にあります。

ユダヤ教において「平和」は中心的なテーマであります。全能者の名前の一つに平和を意味する「シャローム」がございます。ユダヤ国家の霊的センターの名前であるイェルシャライム（エルサレム）という言葉の中にも、「シャローム」を見いだすことができます。ユダヤ民族の言葉（ヘブライ語）において「シャローム」という言葉は、歓迎と別れの挨拶として使われております。

私は次のように祈るものであります。

「いと高き所に平和をもたらし給う貴神が、全ての諸国間に平和をもたらしてくださるように」

「そして彼らはその剣を打ちかえて鋤とし、その槍を打ちかえて鎌とするように」（イザヤ書二章四節）

エルサレムから祝福をもって

内閣総理大臣

橋本龍太郎氏

比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催を、心からお慶び申し上げます。

一九八七年、「世界宗教サミット」が開催され、人類の直面する核兵器の恐怖からの解放を始め、東西冷戦の危機克服について意見を交換し、世界平和を祈られたと伺っております。

以来十年、東西冷戦の終結、ベルリンの壁の崩壊など人類の未来に光明の射すような歴史的事件もありましたが、一方では、民族紛争が次々と起こり、悲惨な事態を現出しているばかりでなく、環境、人口、食料問題など、克服すべき大きな問題に直面しています。

このような現状を憂い、再び世界の宗教者が集い、「世界宗教者平和の祈りの集い」を開催し、世界の恒久平和を祈るとともに、揺るぎない平和を求める比叡山のメッセージを世界に向けて発信しようとすることは、誠に有意義なことだと思います。

皆様方のこの取り組みに敬意を表するとともに、本集いが成功裡に大きな成果を収めますことを祈念して、私のメッセージといたします。

文部大臣
小杉　隆氏

本日ここに、比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が、海外から多数の宗教界の代表者の参加を得て、ここ京都及び比叡山におきまして、このように盛大に開催されますことを、心よりお慶び申しあげます。

本年は、比叡山宗教サミットが昭和六十二年八月に開催されて以来、十周年に当たる記念すべき年であります。十年前、世界各地から宗教者がこの地に集まり、「世界平和祈りの集い」が開催され、世界の恒久平和を願い、更に祈り続けられることが誓い合われたと聞いております。

しかしながら、この十年、不断の努力にもかかわらず、世界各地で人類の平和を脅かすような様々な問題が起こり、無辜の命がそこなわれていくという現実もあります。世界の如何なるところにおきましても、恒久の平和を求める声は今もって止むことがありません。

世界の宗教者の平和を求める熱い気持ちが、今日ここに開催されます比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」として結実したものと思います。

この期間中、様々な行事が行われ、明後日の最終日には、比叡山延暦寺におきまして、平和の祈りの式典が予定され、世界の宗教者の祈りとともに比叡山メッセージが発表されると聞いております。比叡山延暦寺とともに京都の社寺は世界遺産として多くが登録されており、千二百年を越える歴史を担ってきております。

悠久の歴史とともに歩んできた京都を舞台に、世界の宗教界の代表者が一堂に会し、未来に目を向けて意見を交換し、祈りあい、揺るぎない平和を求めるメッセージを、世界に向けて発信されることに敬意を表するものであります。

最後に、平和の祈りの集いに、世界各地、日本全国から参加された皆様のますますの御発展を祈念して、お祝いの言葉といたします。

国際連合事務総長

コフィ・アナン氏

比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」によせて、心からお祝いのメッセージを送ります。

私は、一九八七年以来平和という共通の目的に向かって、努力を続けている皆様の実績を高く評価するものです。それは様々な宗教を持つ著名な宗教指導者の経験と努力は、私たちに力を与えてくれるかけがえのないものだからです。

この十年で世の中は大きく変化し、平和のために話し合う機会が増大しました。この会議と国連の目的とは完璧に一致しています。世界平和のために、このような機会を大切にしていくべきであります。

たくさんの個人や団体がそれぞれの宗教的理念を基盤として、生活や人権の向上など、多くの人道的営みを続けてこられました。そして国際社会の支援により、ナンビア、モザンビーク、ハイチ、ボスニア等多くの国々が自国の再建に着手しております。一方では、アフガニスタン、アフリカの大湖地域、カンボジアの様な問題をかかえる国々に対しては、信頼と対話、そして人道的、経済的援助を通して、引き続き平和文化の構築に貢献して行かねばなりません。

世界平和の維持と、貧困地域の人々の生活向上のための努力を、これからも続けられますようお願いし、私も皆様と共に歩んで行きたいと思います。

記念講演

世界平和と人類の叡智

国際連合人道問題担当事務次長　明石康氏

はじめに、本日私をお招き下さり、スピーチの機会をお与え下さった、日本宗教代表者会議の皆様に御礼を申し上げます。特に、このような広範囲の方々に、そして「世界平和と人類の叡智」という大きな課題について、お話しできることを大変嬉しく存じます。私は様々な会議でお話をする機会がありますが、それらのテーマは、人道問題の危機に関わるものが多いのです。そこで、私の話は、現在の国際社会が直面する最も複雑な問題に焦点を当てることが多くなります。ところが皆様方のこの集いは、それとは大いに異なる性格を持っています。これから行われる会議、討論、祈りは、社会を向上させ力を与えることがテーマであり、それはここにお集まりの皆様のみならず、幸運にも同席させていただいている私自身も含め、この会議の関係者の全てを力づけ向上させる可能性を持っています。私たちは、世界中のいたる所で、人間が同じ人間に対し、これほどに酷い、残忍な行為をどうして出来るのかという局面に遭遇します。しかし、このような暴力と混乱の中から、理性と平和の声は沸き上がらねばなりません。本日この場で皆様と私の声を合わせ、共に人間の連帯を主張するために、この講演がお役に立てば有り難く存じます。

この集いが提唱する世界平和への課題は、人類にとって本当に基本的で重要な問題です。世界の主な宗教指導者である皆様は、何世紀もの長きに亘り、戦争と平和について心を痛めて来られています。戦争ほど社会を脅威に陥れる事件は他にないからです。戦争と平和というテーマは、この会議のみならず他の機会でも、等しく重大な課題なのです。

私の講演テーマである「世界平和と人類の叡智」は、常に人類にとって重要なテーマですが、しかし今日、特に以前にも増して、重要な課題となっております。皮肉なことですが、一九九一年のベルリンの壁崩壊以来、そして冷戦の終結以来、この地球とそこに住む人々の上に、死と破壊が増加していることは事実です。これは第二次世界大戦後四十五年以来の事態です。更に深刻なことには、人類は今まで以上に、兵器拡大の脅威にさらされています。それは、核戦争への直接の使用目的ではなくとも、より多くの国が核兵器やその他の兵器を、所有するようになったからです。生物兵器や化学兵器が、技術革新による兵器の開発や長距離ミサイルと融合して、私たちの未来に更に暗い影を落としています。また、何万という小型兵器の増加があり、これらを読み書きのできない十代の若い兵士達が、玩具のように持ち運びしているのです。

冷戦時代、国際機構は米ソという二つの陣営による明確な支配がありました。その緊張関係によって創られた二極世界の中で、国際社会の重要な

意志決定は、ほぼ独占的に、その両国政府によってなされていました。これら二つの政府は激しくお互いを牽制し合いながら、各々の国民の意志とは全くかけ離れたところで決定を下し、そしてそれは世界の他の市民から更に隔絶していきました。

しかし、現在私たちの住んでいる冷戦後の世界は大いに違います。両極世界の硬直状態がなくなったばかりか、今までは禁止されていたり、または国際交流が困難だった国と国との壁が低くなってきました。「国」の政府は、国際関係において今でも支配的役割を担っていますが、以前のように絶対的権力は有していません。各々の自治体、社会、国家、及び国際関係に影響を与える決定は「国」の政府によってなされはしますが、それは多くの場合、国連、会社の取締役室、政府、非政府組織、更には地域の自治体や宗教団体、マスメディアの言動等によっても左右されるのです。

ここで一息入れましょう。私が皆様に御紹介したいことはたくさんあるのですが、その中から一つの例をお話ししたいと思います。ナイジェリアのオゴニ族の指導者であったケン・サローウィワ氏は、仲間と共に、シェル石油に対し石油採掘のため発生した土地の自然環境の悪化を訴えました。この紛争に関連して、ケン・サローウィワ氏は仲間八人と共に殺人容疑で告発され、そして絞首刑になりました。公正な裁判がなされなかったことに対して、ナイジェリアの市民グループのみならず、国外からも抗議の声は上がり、そして市民グループとナイジェリアは正面から対立して、事態は危機的状況に発展しました。その結果、ナイジェリアは国際的非難を浴びて苦境に立たされました。一つの小さな名もない声が、このようにして世界の国々の最高権力をも動かしたのです。

宗教や自治体の指導者たちが、その社会全体の意志決定に及ぼす影響は、多大なものがあります。意志決定の過程に、より広い意見を反映させることができる今日において、宗教や自治体の指導者がその社会を向上させる目的で、特に平和のために、彼らの道徳理念や叡智を伝えることは望ましく、時流に沿ったことです。指導者たちが、各々の問題に対しどのように関わりたいのか、そしてその関わり方はどのような形をとるのか、ということは各個人の考え方によって左右されます。どんなタイプの活動や関わり方が彼らの社会では望ましいか、選択するのは指導者たちです。しかし大切なことは、あなたが、あなたの自治体、社会、そして国の行政に影響を与え、意志決定に関わるということなのです。

四十年間国際政治と外交に関わってきた一人として、私が是非皆様にお伝えしたいことは、宗教指導者である皆様には、世界平和のような重要な課題が問われるときには、その声を広く知らしめていただきたいということです。人類全体に関わるような大きな問題について、政治家に盲目的に任せ、いたずらに処理を遅らせてはならないのです。政治家は、事態に対し、もう既に独占的に影響力を及ぼす力を失っています。そこには埋めるべき空白があり、宗教指導者は、その空白を、少なくともその一部の空白を埋めるのに最適な存在です。また政治家は、行動したりしなかったりすることによって、人類全体に想像を絶する苦しみをもたらしてきました。彼らは、戦争に訴えたり、極端な国家主義や暴力的民族主義を黙認したりしてきました。従って安定的な世界平和の実現を擁護したり発展させたりすることを、政治指導者のみに任せておくことはもはやできないのです。彼らには皆様の援助が必要です。そして、同じような志を持った個人やグループのリーダーの協力も求められているのです。

私は、個人の道徳観と国家間の道徳観は、同一視されてはならないと思っています。また、大きな逆境に立ち向かう行動力を賛美する言葉は、説得力に欠けることもあります。「私個人が行動したところで、世界平和のような大きな課題に影響力を及ぼすことはできるだろうか」と自ら問いかけることはごく自然なことですが、しかし、どのようなことでも、個人からまず始まるのです。政府、国家、地方自治体等、全て個人から成り立って

います。ここで偉大なカンボジアの僧侶の言葉を引用させていただきます。「平和な心が平和な人を作り、平和な人が平和な家庭を作り、平和な家庭が平和な地域社会を作り、平和な地域社会が平和な国家を作る」。皆様は、これと同じような中国の格言を覚えていらっしゃるかもしれません。人間は皆共通の運命を担っているのだと、気づくことから全ては始まるのです。ということは、私たちは全て、弱い、不完全な、変化する存在で、偉大な生命と宇宙の神秘に囲まれているというへりくだった認識が必要なのです。

冷戦の終結により、私たちは社会参加の機会が広がるという利点も得ましたが、同時に大きなリスクも背負うことになりました。硬直した二極世界は、各々の国に、ある種の規律を求めたため、無制限の暴力を行使できない仕組みを作り上げました。しかし冷戦の終結により分岐していた国際システムは崩れ、大きな政治的、感情的空白状態が生じた結果、利己的で視野の狭い指導者がその空白を埋めるような事態も起こってきたのです。このような指導者たちは、権力を最大限に行使するため、暴力的手段を用いて社会や国々を廃墟の道へと進ませました。彼らは大きな権力と経済力を持っているので、一般市民、地域住民、社会、国家は、彼らの下で貧窮し、教育の無い若い兵士の長靴の下で、希望を粉々に打ち砕かれる状況が生じました。

このようにして戦争、特に内戦は起こり続けられました。イデオロギーの論理や市民の生活向上のためといった大義名分もなく、ある特定の指導者とその取り巻きグループの権力を強化するためにのみ、です。このような戦争は、市民のためという名目のもとに行われてはいるものの、人々に言葉では表現できないほどの想像を絶する苦しみをもたらしました。苦しめられた人々は、多くは市民ですが、彼らの名の下に行われる戦争を起こしたいと考える人などほとんどなく、それに対して興味すらないのです。そして苦しみが恐ろしい結果をもたらすのですが、指導者たちは人々の感情や興味に訴えてそれを上手にごまかし、戦争や暴力を正当化して少年や男たちを兵士に仕立て、新しい領土を広げて搾取を続けます。

戦争犠牲者数の統計がこの事実を裏付けています。今世紀初頭、つまり第一次世界大戦中、戦争犠牲者の九十パーセントは軍人でわずか十パーセントが一般市民でした。ところが冷戦終結後の紛争では、この数値が逆転しているのです。戦争関連の犠牲者の九十パーセントが市民です。この簡単な、しかし驚くべき統計は、現代の戦争が社会にもたらす恐ろしい犠牲を物語っています。そしてそれ以上に、人々が戦争に抱く恐怖心と不安感を利用し、私腹を肥やす指導者の欺瞞が、この数字に浮き彫りにされています。

戦争の悲惨さを最も明確に伝えるのは人間の死ですが、一方で社会が紛争に巻き込まれて起こる破壊は、その影響が幾世代までも後に残ります。戦争による憎しみと恐怖の感情は、戦争で利益を得る側によって意図的に煽られ、人々の生に対する姿勢、行動を変化させ、生きる意欲と、戦争が終わったら力を合わせて働こうとする気持ちをなくします。民主的に建設された社会や文化を持つ地域間の調和は、僅かに数ヶ月、または数年の戦争で壊すことが可能ですが、異なった社会の人々が仲良く暮らすための社会的心情的な絆は、いったん壊れると元通りになるまでには、少なくとも数十年はかかるのです。そして、各々の社会の歴史上重要な部分を占めていた文化的宗教的遺跡や建物は、ほんの数分の戦争で破壊されて甦ることはありません。

ボスニア・ヘルツェゴビナでは、一九九二年の戦争勃発以前、農村地帯では様々な民族が混じり合って生活し、小さな町や都市では、セルビア人、イスラム教徒、クロアチア人が隣り合って同じアパートに住み、同じ学校に行き、同じ工場や事務所で働いていたのです。人々、特に子供やティーンエイジャーは、隣人や学校の友達の宗教や民族が自分と同じかどうかなど知りませんでしたし、興味もありませんでした。異民族間の結婚は普通のことで、首都のサラエボでは三十パーセント以上にものぼっていました。この国にはイスラム教のモスク、カトリックやオーソドックスの教会が入り乱れて建っていましたし、サラエボにはシナゴーグもありました。人々は自由に各々に合った宗教を信仰し、個々の神を信じ、それを咎める者はいませんでした。

イスラム教徒、セルビア人、クロアチア人は、六百年間バルカン半島で争っているので、今更仲良く暮らすことなど出来ないのだという人もいます。そのようなことを考えている人たちには、戦争前のボスニアをよく見ていただきたいと思います。そしてボスニアの人々と、彼らの国や社会について話し合って欲しいのです。一九九二年四月以前、この三つのグループが平和に暮らすことは不可能であったかどうか尋ねてみて下さい。一九九二年以前は、問題なく平和な暮らしをすることができたと、多くの人たちが答えることでしょう。しかし、その後お互い同士が争い、恐ろしく残酷なことをしたために憎しみが生まれ、以前のように暮らすことが難しくなったと、彼らは付け加えるに違いありません。熾烈な戦争で三年半の間に失った信頼関係を立て直すには、数世代とは言わないまでも、長い時間を要する他ないでしょう。信頼とは傷つきやすい花のようなもので、たやすく枯れ、育てることは難しいのです。

民族間と宗教間の不寛容、憎しみは、ボスニアで戦争を起こした当事者にとっては、意図的に望んだことでした。何故ならば、彼らは、間違った信念のもと、個人的な利益を得んがために争いを起こしたからです。これはセルビア人と、クロアチア人の場合に良く当てはまります。戦争初期のセルビア人統治地区では、数百のモスクが建っていました。しかし、戦争終結時にはそれらは一つも残っていませんでした。政策の一部、あるいは感情的に逆上していたこともあるでしょうが、壊されたものの中には、何世紀もの古い歴史があり、文化的に貴重な遺産もありました。しかし、それらは一つ残さず破壊されました。また、この地区内ではクロアチア人が礼拝していたカトリック教会も、ほとんど壊されています。それと同様のことがクロアチア人占領地区でも起こりました。多くのモスクとオーソドックスの教会が、彼らの手によって破壊されたのです。もちろん、それぞれの地区で、支配していたグループと異なる宗教、民族に属する何千人もが殺され、レイプされ、逮捕されました。そして何万もの人々が家を追われ、難民となりました。このような経験をすれば、感情が屈折し、疑い深くもなり、自分や家族が再び危険を犯しかねない状況を避けるようになるのは当然の成り行きでしょう。

戦争の後遺症は、爆弾や弾丸で命を失ったり、物を破壊されたりするに留まりません。戦争は、社会の本質を攻撃し、修復困難な被害をもたらします。皆様方は宗教の指導者として、皆様が住んでおられる社会の精神的健康に、日頃から関心を向けていらっしゃるのではないでしょうか。その意味で、戦争は、皆様にとって特に心を痛めることに違いありません。

社会における戦争が及ぼす悪影響については、多くの人が議論しています。私もこれから皆様と一緒に、この事柄について考えてみたいと思います。そして「戦争は無くすことができるだろうか」ということを問いかけてみましょう。

世界中で最も大きな紛争の原因は、紛争が暴力によるものであれ非暴力のものであれ、また、内部紛争であれ国際紛争であれ、不寛容により生じると断言できます。ジュリアン・ベンダが皮肉を込めて、「知識階級の裏

切り」の中で、次のように書いています。

「今世紀は実に、知識階級による構造的憎しみの世紀であったということができるでしょう。これは、人類の道徳の歴史の中に、最も偉大な出来事の一つとして足跡を残すでしょう。」

一九二七年に書かれたこの本は、ベンダ自身想像もしなかったような、予言的な書物でした。知識階級による構造的な憎しみ合い、あるいは不寛容は、二十世紀の人類に破壊的な影響を及ぼし、戦争の炎を燃え上がらせ、社会をバラバラに引き裂きました。一九九五年グルジア共和国のトビリシでユネスコは会議を開き、「不寛容を越えた連帯と諸文化の対話のために」というテーマで話し合いを行いました。その場で、不寛容は伝染病に例えられ、「全世界に広がる癌のようなもの」と表現されました。

もちろん、不寛容には様々な要因があります。それは社会の偏見や恐れからも起こるでしょうし、また、ラルフ・ダーレンドルフが「文化的絶望観による政治の極端な形態」と言っているように、新たな原理主義の現れであるともいえるでしょう。しかし全ての場合において、不寛容は、ある一部の人によって、教え学ばれ、やがて全体に広まっていくものなのです。子供は生まれつき不寛容ではありません。それどころか彼らは最も世界に開かれた寛容な存在です。社会的、文化的、そして時には宗教の教えるところによって、子供は不寛容を身につけ、独断的で恐怖心を持つ人間になるのです。

ここで、子供をアナロジーとしてお話をしましょう。スペインのECメンバーである、マルセリーノ・オレイヤの言葉を次に引用します。

「不寛容とは無知な子供である。その無知は、反民主的方法によって権力を行使する目的を持った人間によって行われ、指導される。そして、その無知なる人間は、一定の人々の支持を得んが為に、その人々に、人種、宗教、言語、文化などの異なる人々への恐怖心を教え込むのである。」

悲しいことに、この言葉は、何世紀も遡った多くの紛争のルーツを的確に言い表し、同時に、紛争の当事者の責任である、利己的な動機をも表現しています。しかしこの言葉は、不寛容さを縮小し、紛争を減らす為の方法を探している私たちへの指針も含んでいるのです。私たちは、敢えて無知を広めようとする人間の出現を、完全に防ぐことはできません。また、無知ゆえに生じる恐怖、これが起こる状況を無くすこともできません。しかしながら、社会を構成する人々が教育を受けることによって、その状況を改善することはできます。教育とは、自分とは異なる人を受け入れること、そして彼らを恐れる必要がないことを学ぶことです。人々を教育することによって、彼らに寛容の精神を教え、それによって彼らが搾取されることがないように、彼らは自分自身を守ることができるようになります。このことは、さらには、望まない戦争へ引きずり込まれることから、社会を守ることにつながります。ウルグアイの知識人であるヘクター・エスピルが言うように「寛容は平和という文化の真の土台」なのです。宗教指導者及び宗教の教えは、民族間に寛容を広め、平和という文化の土台を作るため人々を教育するというなくてはならない役目を担っています。偉大な宗教は、隣人をグループ、個人の別なく理解し、愛を持って受け入れるよう、人々を導きます。

寛容と受容は、紛争の勃発を回避する鍵になるだけでなく、紛争の解決にも、等しく不可欠な要素です。どのような紛争であれ、当事者同士を会わせ、解決に向けた建設的討論を始めるためには、まず、相手を受け入れることが必要であり、考え方を含め自分とは違う人々への寛容さが必要です。

しかし、寛容は支援と解釈されてはなりません。寛容とは、相手が表明した考えを正しいことと認めたり支援することとは違うのです。寛容は相手を受け入れ、その人の自分との違いや考え方を、正当なものとして受け入れ許容することです。日本のように単一民族の島国では、民族や国々の

多様性を受け入れることは歴史的に前例がなく、難しい作業となります。それ故に日本では「外国人」や「外国人のように振る舞う人」に対して、もっと開かれた姿勢を育てていかなければなりません。

宗教と宗教指導者の方々は、この意味において二重に役割を担っています。まず、宗教とその教えは、不寛容を助長するために不当に使われたり、間違って利用されてはなりません。宗教指導者自身が声をあげることによって、これは回避されなければなりません。二番目には、宗教は寛容を広めること、すなわち個人、地域社会、国家全体が寛容になることを助ける活動を行うべきです。

不寛容は、多くの場合、他者への恐怖から生じます。そこで「人はそれぞれ違うものであるが、その中で何か人間として基本的な共通の性質、又は特色はないだろうか」と、問いかけてみることが大切です。お互いの寛容を広げるために一番いい方法は、個人同士が出会い、知り合うことです。しかしそれ以前に、全ての宗教、共同体、社会には、共通の価値観があります。私には神秘的な洞察力はありませんが、私は、たとえ全てを現実に体験出来なくても、あらゆる社会が認める、ある一定の価値観が存在するという考え方に賛成する一人です。

ある人々が示唆したところによれば、「世界人権宣言」は、このような価値観の枠組みのもとで作られています。この宣言は一九四八年の国連総会で採択されましたが、内訳は四十八対ゼロで、棄権が八カ国（ソ連圏五カ国と、サウディアラビア、南アフリカ、ユーゴスラビア）でした。世界のあらゆる地域の四十八カ国がこの宣言文に賛成票を投じ、これらの地域の中には、主な宗教が全て含まれていました。世界人権宣言は、全ての国家が努力しなければならない人権の一般的基準であることに、ほぼ議論の余地がないと思われます。けれども、その宣言の中に唱われている基準が、現実に全ての国で遵守されているとはいえないことも事実です。

私たちは皆、世界人権宣言に掲げられている権利が、全面的に尊重される世界に住みたいと望んでいます。しかし残念ながら、多くの社会はこれらの権利を守る姿勢に欠けています。それどころか、厳しく守られなければならない価値観であると認識すらされていません。さらに、真っ先に守らねばならない権利が何であるか、その強調されている権利は国によって異なります。ある社会では、それは先進国で工業化された国家に多いのですが、政治と市民の権利に重きを置いています。一方で、発展途上国に多くその傾向が見られますが、経済と社会の権利を重視する国もあり、人権は西洋的考えであり自分たちには適応しないと批判する人もいるのです。

世界人権宣言〈前文〉

人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認することは、世界における自由、正義及び平和の基礎であるので、

人権の無視及び軽侮が、人類の良心を踏みにじつた野蛮行為をもたらし、言論及び信仰の自由が受けられ、恐怖及び欠乏のない世界の到来が、一般の人々の最高の願望として宣言されたので、

人間が専制と圧迫とに対する最後の手段として反逆に訴えることがないようにするためには、法の支配によつて人権を保護することが肝要であるので、

諸国間の友好関係の発展を促進することが、肝要であるので、

国際連合の諸国民は、国際連合憲章において、基本的人権、人間の尊厳及び価値並びに男女の同権についての信念を再確認し、かつ、一層大きな自由のうちで社会的進歩と生活水準の向上とを促進することを決意したので、

加盟国は、国際連合と協力して、人権及び基本的自由の普遍的な尊重及び遵守の促進を達成することを誓約したので、

これらの権利及び自由に対する共通の理解は、この誓約を完全にするためにもつとも重要であるので、

よつて、ここに、国際連合総会は、

社会の各個人及び各機関が、この世界人権宣言を常に念頭に置きながら、加盟国自身の人民の間にも、また、加盟国の管轄下にある地域の人民の間にも、これらの権利と自由との尊重を指導及び教育によつて促進すること並びにそれらの普遍的かつ効果的な承認と遵守とを国内的及び国際的な漸進的措置によつて確保することに努力するように、すべての人民とすべての国とが達成すべき共通の基準として、

この世界人権宣言を公布する。

私は個人的には、世界人権宣言に記された諸権利は、全ての社会が守るべき共通の基準であると信じています。しかし一方で、これらの基準は、全ての社会が一様に採用したり受け入れたりできるものではないことも明らかです。国によって、各々の価値へウェイトの置き方は大いに違います。その結果、人権は、現時点では、人類共通の価値観として機能するガイドライン的役割を果たすことは出来ません。

しかし、最近になって、また人類共通の価値観を明らかにしようとする動きがあります。一九九三年ベトナムで人権に関する世界会議を開催し、現在ある人権の規範をなぜ世界共通の価値として認められないのか、その文化的社会的障害の背景を分析しようという試みがなされました。この会議では合計百八十三カ国が「宣言文」と「行動計画」の採択に参画しました。そして、国連でも人権の世界的コンセンサスを得るために、苦しい努力を重ねていましたが、やはり以前と同じような多くの問題に対し、根強い反対意見が出されました。百八十三カ国の参加という大きな成果があり、一定の進展は見られたものの、我々が求めているような、普遍的価値に関する人権の実用的なガイドラインを提示することは、この会議においてもできませんでした。

その後、同じ一九九三年、シカゴにおいて「世界宗教議会」が開催され、そのテーマは「世界倫理の確立に向けて」というものでした。会議の目的は、世界の宗教と文化によって既に認められている道徳的価値観を、基本的なものにまとめて提示することでした。会議は「宣言文」を発表し、大きな寛容を育てていくための実行項目を提示しました。しかしそれは、ある意味では希望を連ねたリストとも取れるような、最大公約数的内容であり、従って、世界的なコンセンサスの基本となり得る、最小範囲から適応する具体的なアプローチではありませんでした。しかしそのコンセプトは奨励されるべきものであり、このような権威ある組織が、さらに努力を続けていくことが望まれています。

またローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、一九九三年教皇回勅 Veritatis Splendor（真理の輝き）の中で、人類共通の価値観を定めようと努力し、「善と悪を区別するには」との問いかけに回答する形で、これを提示しました。しかしこの試みも先の事例と同じように偉大なものではありますが、大局的であり観念的なのです。いかにこの回勅が道徳性において正しくとも、実行に移す段階では、世界規模の賛同を得られるか否かは疑問でありましょう。

最後に、この一連の試みにおける、一般の側からのアプローチを御紹介いたします。このケースも、世界共通基盤の指針となり得るかに見えましたが、結局実際に共通の価値観を設定するには至りませんでした。これはイングヴァール・カールッソン前スイス首相とシュリダツ・ラムパル前ガイアナ外務大臣が、「世界統治委員会」へ「我ら世界市民」と題する報告書を提出した事例です。この二人の作者は、報告書の最後を次のように結んでいます。「人類の生存のためには、人々はお互いに平和に暮らし、働くことが大切です」。この目的達成のために、二人は次の三つの方策を提唱しました。

一、中核となる価値観の育成
二、一定の権利と責任の育成
三、これらの価値観に合わせた国際規範の変更

私は、この努力に大いに賛同し、カールッソン氏とランパル氏に高い敬意を表します。彼らのアプローチは、国連の普遍的課題へのそれとよく似ています。しかしこの二人の著名な紳士達の提案も、前例と同じように、巨視的である傾向は否めず、知識人の賛同は得られるでしょうが、結局のところ、国際的規範となるために必要な一般的合意は充分得られないでしょう。例えば、著者はアプローチの基礎となる中核の価値観の一つに、「自由」を提唱しています。しかし世界の現状を見ると、多くの人々は自他の自由を守ることはおろか、自由を広めるため努力することすらできない社会に住んでいるのです。何百年間、多くの社会で、市民の解放や自由とい

った価値以外の価値を重要視した独裁者や専制君主は、日常的にこの価値を弾圧し続けました。それでも、解放又は自由を、人類普遍の価値の中核と言えるでしょうか。

このように、様々な、しかし同じような努力を重ね、各々には良い内容を持ちながらも、未だに全ての人間が賛同できるような、人類にとって最も基本的な価値体系は見つかっていません。

私は、普遍的で国際的に受け入れられる価値体系を得るためには、本当に現実的なアプローチが必要であると信じています。そこで、発展可能な基本的価値体系について、さらに議論を進めたいと思いますが、それはカールッソン氏とランパル氏のアプローチに近いものがあります。ここでアメリカの作家シッセラ・ボクの言葉を一部引用したいと思いますが、私は彼の著作の中から、基本的価値体系を見出しました。それは次の三つの要素から成り立っています。

一、正義の仕組み

全ての社会と宗教は、多かれ少なかれ正義が追求される基本的仕組みを持ち、また正誤の基準を有している。正義の仕組みは、一定の法律や裁判所の司法制度と混同してはならない。正義の仕組みについて、多くの社会は、これを機能的形態としては持っていない。

二、正当と認められない暴力への非難

三、虚偽に対する非難

どんな社会も宗教も、正当と認められない暴力や虚偽に対しては、間違いなくこれを否定するでしょう。私が「正当と認められない」暴力といったのは、あらゆる社会が、合法的自己防衛を認めているからです。これには、名誉が守られるかどうかの瀬戸際といった具体的なケースも含まれます。この例外でユニークなケースとして上げられるのが、戦後の日本の場合でしょう。この国は、「個人的または集団的自衛権」の行使でさえも、是か非かで激論を戦わせたからです。しかし、隣人宅に侵入しその隣人を撃ち殺したあと、殺した隣人の家族と共にその家に居座るような人間を容認する社会など、私が知る限りにおいてはありません。

偽りに対しても同じことが言えます。汝、嘘をつくなかれとは、ご存知のように聖書の十戒の一節です。しかしこの戒めは、ユダヤ教、キリスト教に関わらずいかなる社会、宗教でも、ある一定のレベルまでは共通しています。我々は皆、利益を得るために嘘をつくことは悪いことだと知っています。

これらの提案は、一見大したことではないように思われます。しかし、これらはより具体的な価値を包括する、大きな体系を構成する基盤として意味があるのです。そして、それは本質的に普遍性に通じるものを備えているのです。

さて、もし私が提案した人類の普遍的価値体系を受け入れるとして、次は「共通の価値体系を作る目的」が疑問として上がってくるでしょう。先に申し上げましたが、普遍的価値体系を確立する最も重要な目的の一つは、この分野の未来に向けた発展の基礎を築くことです。二番目は、他に共通基盤が何も見つからないようなとき、世界共通の価値観があれば、異なった文化を持つ紛争当事者同士の対話の出発点になり得ます。私の国際外交と紛争解決の体験から申し上げると、紛争の関係者を同じ席に着かせ、彼らの紛争についての話し合いの場を持てるようになれば、争いごとはもう半分収まったようなものです。このような対話が始まらない限り何も進展しません。しかし、もし当事者同士が、本質的な事がらであまりにかけ離れているような場合、例えば先に指摘したような、一定の基本的理念について了解を取り付けることができるならば、その紛争は、和解に向けた重要な一歩を踏み出せるのです。

共通の価値体系を設定する第三の目的は、紛争を起こし武力による争い

を、慢性的に望む人間に対しての防波堤とすることです。戦争や暴力は、しばしば破廉恥な指導者による、個人的な野心追求の道具として利用されます。このような場合、紛争によって生じた重い代価を支払うのは市民であり、またそこから市民が得るものは何もありません。そして、市民こそは紛争の間、その災難を防ぎようがなく、また正面からその影響を受けざるを得ない人々なのです。普遍的に了解された人類の価値観は、このようなとき助けになります。そして、人々を悲惨な目に遭わせた責任者の行動を、このような価値観に照らし合わせて判断することが出来ます。

このような事柄で直ちに紛争が終結すると信じるような単純な人は、誰もいないでしょう。しかし、それでも責任者に対し道徳的効果はあり得ますし、紛争を終わらせたり、さらには暴力に訴えるような相手を抑制する効果もあるかもしれません。

さて、これで人類への基本的な問いかけを発するところまで、私の話しは進みました。その問いかけとは、全ての宗教が関係していて、今京都で行われているこの会議の様な集いでも、考えなければならない問題のことです。つまり、それは「世界規模で平和は達成されるだろうか。私たちは戦争のない世界を作れるだろうか」ということです。

平和、安全、非武装等の課題に取り組んできた国連での長い経験、戦争で引き裂かれた四つの国での国連事務総長特別代表としての役割などを通して、私は暴力紛争の悲劇を見てきました。私はこのようなとき、よく自分自身に問いかけたものです。「全ての社会が、あるレベルまで、暴力が悪であると信じているにも関わらず、どうして世界中で戦争や暴力が絶えないのか」と。鋭い社会批判を行い、偉大な映画作家で俳優でもあったチャーリー・チャップリンの言葉を借りて言うならば、「戦争では人間を殺せば殺すほど英雄視されるのに、なぜ個人は一人を殺しただけで有罪なのか」と。すなわち個人の暴力は告発され、集団の暴力は賞賛されているのです。

一体戦争行為というものは、人間社会において変わることのない特質の一つなのでしょうか。古くから哲学者たちはこのことについて討論を重ねてきました。そして、その答えを探してきた人々は、大体次の三つの世界観の一つに行き着くようです。

それは、まず**現実的アプローチ**です。これは、個人でも国家でも全ての行動に当てはまるもので、いわばマッキャベリの「君主論」の様な考え方です。

二番目は**平和主義のアプローチ**です。この考え方はどんな状況であろうと戦争を認めません。

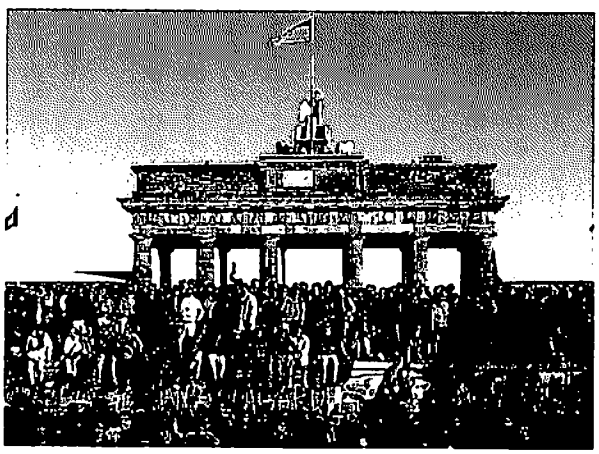
三番目は**正当な戦争説**で、ある理にかなう目的にのみ武力紛争を認める考え方です。これには宗教的、道徳的、イデオロギー的性質があります。正当な目的というものは、その説を主張する人間の世界観に左右されるのです。最も有名な正当戦争説の擁護者を挙げるならば、当然、アウグスティヌスとトマス・アクィナスの二人でありましょう。しかしながらこの「正当な戦争」の論理は、あまりにも多くの場合に使われ、そして大概が不当に利用されてきたので、人間はこの種の論理に健全な懐疑主義を抱くに至りました。

また、この他にも、**平和主義と現実主義をある方法で混合するアプローチ**があります。これを支持する人々は、この論理で安定した世界平和が作り出せると主張しました。この世界平和の達成は、人類の高い道徳的側面に訴える方法ではありません。むしろ基本的生存本能へ訴える、現実主義的アプローチです。カント、エラスムス、サンピエール・ド・アビなど偉大な哲学者たちが思想し、主張したことは、戦争は防ぐことが出来るが、しかしそれは平和が人間の自然な状態であるからではなく――彼らはこのことを認めています――むしろ人間の興味は生き残ることであり、戦争はその興味に反することに属するからである、というものです。この主張は、

戦争というのは人間の生き方にとって常にその一部分を占めてきたのだから、これからもそれは変わることはないという戦争運命論的仮定に挑戦するものでした。

私はこの考え方に賛成です。紛争と紛争解決の現場に立ち会った経験から、私は「戦争は避けられないものではない」との結論に達しました。戦争は、決定を下す地位にある人々の意志的選択、または間違った選択の結果、起きるものです。もしくは一連の出来事の結果、彼らが次第にエスカレートし、事態が結局個人でコントロールできる範囲を超えてしまった場合です。指導者が理にかなった行動をとれば、平和的、外交的方策によって解決の糸口を見つけることは可能です。誤った選択は制度上の無理を生じやすく、結果的には、力のある、より上位の国際的権力に立ち向かうことにもなりかねません。

私が、何人かの哲学者の助けを借りながら取り組んでいるこの問いかけは、核兵器やその他の大量殺戮兵器の出現で、人類にとってさらに必要な問いかけとなっています。今や戦争は隔離された戦場における軍隊の問題ではなく、またそれら軍隊を支える市民の数の問題でもありません。一九四五年以降、全く突然に、戦争の可能性は世界の最も巨大な国家の間で勃発することとなり、それが、この世界のあらゆる男女・人・人の最も大きな関心事となってしまいました。



そんな中で、一九九一年に終結した冷戦体制の崩壊は、我々にある意味で利益をもたらしました。しかし大規模破壊を目的とする兵器は益々増大し、その危機と脅威は今までと変わりなく、また従来からの兵器も今だに存在しています。それどころか、膨大な経済機構によって支えられた科学技術の力が野放しにされていたため、世界は未だかつてないほど大きな脅威にさらされ、それがほんの一握りの人々の手に委ねられているのです。これが世界の現状と言えるでしょう。核兵器、生物兵器、化学兵器は、テロリスト、自分たちの理屈のみで行動し他のことは一切目に入らない軍人、あるいは単に正常ではない人間の手中にあり、人類史上初めてと言っても過言でない、あまりにも巨大な破壊の危機がいつ起こってもおかしくない状況に、私たちは置かれているのです。

冷戦が終結し、それに伴って二極社会が終焉したため、安定した国際平和実現の可能性は、個人同士、共同体、社会、そして国家と各自治体、地方、国際の各レベルにおいて、政治と複雑につながり合った関係に左右されるようになりました。このように多様な当事者同士の関係は、明確に識別し把握することが困難を極めます。しかし、これらの関係は、関係を構築するプロセスが大変なのであり、それが常に変化するので困難であるということとは全く違います。この新たな関係を構築するプロセスに立ち向かうことは、大いなる挑戦であり、この挑戦のために、そして複雑多岐にわたる当事者たちを連帯させるために、以前にも増して、世界はより明確な政治上、道徳上の枠組みを必要としています。この枠組みは、共同体同士の交流を支援し、そのためには、どのような行動が修正され、裁かれなければならないか、という基準を提示するのに必要です。

いわゆる現実主義者でさえ、大量殺戮の場面に遭遇すれば、戦うために兵器を強力にするよりも、人々と協力して多国間ベースで争いが起こらないように働くことの方が良いと気づくでしょう。この認識こそが大切であ

り、かつて核開発に関わった科学者や退役軍人将校が、最も雄弁な武装解除運動家の一人になっている事例は納得のいくことです。

新しく、より複雑になった政治と道徳の枠組みを発展させるには、宗教指導者の皆様方の積極的な参加が是非必要です。このような枠組みは、一度議会を通過すれば完成するようなものではありません。目的に向かって一歩一歩努力する過程があり、回を重ねるごとに進歩し、連帯が深くなること、これが最も大切なことなのです。この会議も、その目的を一歩前進させる一つのプロセスであると、私は思っています。

最後にいくつかの事例をお話しして、結びにかえたいと思います。私はこのように高いところから、世界平和と人類の叡智を探求するため、世界の宗教指導者の先生方には積極的な関与をお願いしたいなどと申し上げましたが、どうかぶしつけなことだとはお考えにならないで下さい。私の見方は、様々な課題に対する個人的な意見と、国際外交における私の経験によるものです。特に、複雑な紛争を解決するために働いておりますと、宗教、教育、政治、道徳、市民問題等の分野で影響力のある人々との協力がもっと必要であり、国際政治上の仲裁役として、総合的なアプローチが必要なことを痛感いたします。

誰であれ、このような仕事は一人で成し遂げることなどできません。より多くの人が、それぞれの立場で、少しづつ援助して下さることが不可欠です。私は、各々の宗教の特質と異なった世界観を尊敬し、へりくだった心でお話をしてまいりました。もちろん、世界平和という大きな目的に向かってどのような貢献をされるのか、それは各宗教および皆様の選択に任されています。

私の意見では、各々の宗教とその指導者である先生方にとって、最も基本的な目標は次の四つであると思います。

一、しばしばあるように、宗教は暴力や虐待の口実や正当化に用いられてはならない。

二、道徳価値を広めるために、偉大な世界の諸宗教の教えを活用すること。人間は「頭の知識」だけでなく、バランスのとれた道徳観を学ぶことが必要である。こうして各個人は自信を持つことができ、暴力を煽る人々に立ち向かう力を養うことが出来る。

三、もし地域社会や共同体が暴力による紛争に巻き込まれたならば、道徳と宗教の教えをもとに、暴力反対の声を上げること。そして紛争をもたらした指導者の政策を批判し、紛争の平和的解決に向けて支援すること。

四、紛争の終結に際し、当事者同士の和解を促進すること。これは、勇気と社会全体に根付いている深い偏見に立ち向かう能力を要求される、格別困難な仕事である。

以上の四つの役割全てを進めるには、人間の同胞意識に基づいた寛容の精神を広めて、一人でも多くの人が、自分と違う他者を受け入れられるようになることが必要です。他のどのような分野の指導者よりも、宗教の指導者である皆様方は、世界中の様々な場所で非常に攻撃的に広がっていく「疫病のような不寛容」に挑戦するのに最も相応しい方々です。

今この世界は、寛容を広め人間本来が持っている良さを示す例を、たくさん見出すことが出来ます。しかしその一方で、恐るべき不寛容と、人間が同じ人間に犯す残酷さを体験することもあります。恐らく全ての偉大な宗教にとって、二十一世紀を目前に控えた現在、これが一番大きな挑戦になるのではないかと思われますが、つまりそれは、残酷さや悪と対決しこれらと戦いながら、全ての男性、女性にとって善なるものを育て、それを発展させていくことです。そしてこれは過去、現在の歴史を通じ、一貫して、あらゆる宗教にとって、大いなる挑戦ではないかと思われます。

今我々が住むこの世界は、想像を絶する破壊力を持つ兵器の増大という事態があり、他方では従来の国家の枠組みと「世界」の境界線が希薄にな

ることで、様々な社会の接触が密になっています。このような時代に、この挑戦は限りなく大きく感じます。おそらく、今こそが人類の存亡を賭けた岐路であり、我々はまさにそこに立っているのです。

今申し上げた「挑戦」は大きなものでありますが、世界平和という目的は必ず達成できるものだと、私は信じています。確かに単純なことではなく、また容易いことでもありません。しかし私たちは現実的であることは必要ですが、同時に楽天的でなくてはいけないのです。そして粘り強く、信念を持って正しい方向に進みましょう。そうすれば、きっと最後には勝利を収めることが出来るに違いありません。

最後に、現代の最も偉大な哲学者の一人である、ヴァクラヴ・ハヴェルチェコ大統領の言葉を御紹介いたしましょう。これは、実際的楽観主義の精神と、警告が一つになった教えであり、私たちが目的を達成するために必要な言葉であると思います。

「私がわかったことは、この世界がいかに小さいかということ、そして苦しむ必要のないような数限りない事がらで、いかに自分を痛めつけているかということです。もし、人々が自分の心の中に、もう少しの勇気と、もう少しの希望、もう少しの責任感、もう少しの相互理解、そして愛を見つけることができれば…。」

この叡智に満ちた言葉を最後に、私は素晴らしい聴衆の皆様方にもう一度心より敬意を表します。この厳粛な時間にお話をする機会をお与え下さり、本当にありがとうございました。そしてこの時代に、最も重要な課題について考えておられる皆様方とこの会議のご成功をお祈りいたします。どうもありがとうございました。

略歴

1931年、秋田県生まれ。54年、東京大学教養学部卒業。フルブライト基金により米バージニア大学、フレッチャー・スクール等に留学。57年、日本人で最初の国連職員に。日本政府国連代表部大使、広報担当・軍縮担当各事務次長等を歴任。92年3月～93年9月、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）事務総長特別代表。94年1月から、旧ユーゴスラビア問題担当国連事務総長特別代表。また97年6月、人道問題局長として朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の水害被害地域など視察。著書は「国際連合」「国連ビルの窓から」「国連から見た世界」「AN AGENDA FOR HOPE」「忍耐と希望ーカンボジアの560日」など。

宗教間の協力と民族の和解

ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官　フランシス・アリンゼ枢機卿

民族の和解は非常に重要な課題です。事実、平和と静けさを確立するためには不可欠です。和解は人間の心、家族、そして小さな社会、大きな社会にも必要です。どのような宗教でも人間存在のこの側面に無関心であれば、宗教の価値はありません。

従って、日本宗教代表者会議が一九八七年に始まった比叡山宗教サミットの十周年を祝うために、世界の祈りに再び焦点をあて、和解の問題について考える選択をされたことは喜ばしいことです。この八月の集いに、民族の和解を進めるための宗教間の協力について考察する前に、私はまず、今、民族間の和解が求められている、いくつかの地域の人々の現状について少しお話ししたいと思います。和解への道については、そのあと、困難ではありますが、必要な徳である和解の方策と共に考えてみることにいたします。そして、更に宗教の役割についても言及し、宗教間の協力の大切さを特に強調しながら、話しを進めてまいります。次いで、諸宗教がいかにして他の組織を触発し、和解を進める誘因となるか、示唆をし、最後に、キリスト教徒の和解へのヴィジョンをお話しして結論にしたいと思います。

Ⅰ　人生の様々な場面での和解の必要性

和解という言葉については、赦しを与え赦しを受ける行為、改心がなされ連帯が再構築されること、対立が克服され平和が回復される、このようなイメージが頭に浮かびます。このように社会を鎮める鎮痛剤や軟膏の役割を果たすものが、人生の様々な場面で必要です。

○　人種または民族

人種や民族の違いによって、人々の間に誤解や緊張、さらには暴力が起こることがあります。過去に起きた痛ましい人種差別や、民族紛争の記憶が、今の世代にまで取りついて離れないことがあります。

このようなとき和解は必要です。

○　社会的階級

その他、社会的階級から生じる考え方の違いでも、人間関係は難しくなります。例えば、若者と年配者、学歴のある者とない者、また自由民や貴族と見なされる者と低い身分と見なされる者の間でも、考え方は異なります。

この場合も、和解は必要になります。

○ 物質の豊かさ

富める者と貧しい者、持てる者と持たざる者、満腹な者と空腹な者の間にも容易に緊張は生じ、そこにはしばしば怒りも加わります。ある人々は地球の北側は裕福で南側は貧しい、また北側は先進国で南側は発展途上国だといいます。また、第一、第二、第三、さらに第四世界まであるという人もいます。専門家によれば、地球の二十パーセントを占める第一世界の人々が、全世界の八十パーセントの資源を消費していると言われています。

このような状況の中で、和解への積極的行動が求められていないと誰が言えるでしょうか。

○ 所有と権力

所有と権力は、容易に分極化と緊張を引き起こします。大地主のグループと、土地を持たず地主に使われる小作人や農奴、産業資本家とその労働者、これらの間にも緊張は起こります。政府と市民、貿易のライバル、政党間、さらには教師と学生の間にさえも誤解が生じることはあるのです。

ここに述べた全ての状況で望ましい相互理解、和解、協力が必要です。

○ 人間の尊厳

人間の尊厳が尊重されないとき、植民地の統治者と被統治者、搾取する者とされる者、抑圧する者とされる者、奴隷売買者と奴隷などに代表されるような関係が生じます。

このような状況での和解に必要なのは、改心と正義です。

○ 迫害

ある人々は、宗教、言語、出身国や民族によって、差別や迫害を受けています。他の人々にとってその迫害理由は、単に女性であったり、肌の色が違うといったことに過ぎません。

このような人々が少数者であるかどうかは、些細なことです。彼らの基本的人権の尊重とその権利への認識が、和解への本質なのです。

○ 暴力と戦争

暴力と戦争は、破壊と傷害を招き、それは一時的に終わる場合もありますが、永久に続くこともあるのです。暴力を振るう者と暴力の犠牲者、戦争を起こす者とその結果苦しむ者、すなわち殺されたり、傷ついたり、飢えたり、住家を追われホームレスになったりする人々。真の改心とそれに続く償いがなされないなら、これらの人々の間にどうして平和があり得るでしょうか。

和解は、戦争と暴力を体験した、全ての人々の祈りと願いです。

○ 宗教間

二つないしそれ以上の宗教間で健全でない競争が起こることがあり、メンバー獲得のために、不正なあるいは恥ずべき方法を用いることがあります。また、同じ宗教の中でさえも、穏健派と過激派あるいは原理主義者との間に緊張が起こることもあります。

このような場合のすべてに、あらゆる真の宗教が唱えている、愛と和解への呼びかけに立ち帰ることが求められます。

このような、またこれに似たような誤解、緊張、不正義、暴力あるいは戦争の状況において、和解へ至るどのような道があるのでしょうか。その答えを捜すために、さまざまな宗教からどのような価値観を引き出せばよいでしょうか。

Ⅱ 和解への道

真の安定した和解への道は、真実と相互理解、正義、痛悔、償い、わかち合い、それに良い指導力によって導かれます。

○ 真実と相互の知識

先に述べた様な不幸な関係がふさわしく解決されるためには、先ず始めに全ての関係者が真実を知ることが必要です。その関係によって苦しみを受けている側と、苦しみの原因を作っているとみなされる側の双方が、状況の客観的把握をすることが先ず重要です。双方ともに話し合いが必要であり、お互いにオープンになり、問題点を率直に出し合って討論しなければなりません。

対話は贅沢品ではありません。必需品です。お互いに聞き、与えたり受け取ったりしながら、お互いをより良く理解する努力をし、互いに真実を追究することが、最も健全で開かれた方法です。いくつかの困難な問題の解決に対しては、誠実な対話が不可欠です。今件に関して、やりすぎるということは殆どありません。

中途半端な真実や偽り、嘘あるところには、疑いと分断が勢力を伸ばしやすくなります。政治、イデオロギー、特定のグループの偏った見方を弁護するために人々を誤った方向に導くような意見は、和解を壊す勢力となります。赦しは真実を必要とします。傷つけた側が先ずしなければならないことは、相手側に犯した悪を誠実に認めることです。

深刻な紛争を体験した国々は、和解を目的として真実を突きとめるための方法論をうち立てました。これは、痛みを増やしたり、対立を倍増させたりして、和解をさらに難しくすることのないように賢明な措置を講じるならば、役に立ちます。確かなことは、自らが為した過ちを誤魔化そうとすれば、真の和解に到達することは出来ないということです。

宗教や政治の指導者は別として、教育者や両親、マスメディアを動かす人々は、想像以上に大きな力を持ち、緊張関係にある全ての関係者同士が、真実のコミュニケーションを実現することを助けます。

○ 正義

正義は和解のために、二番目に大事なことです。ギリシャの哲学者たちは、すでに正義の徳の重要性を理解し、四つの「基本的」徳の中に入れています。その中に他の全ての徳を分類することが出来る四つの徳です。残りの三つの徳とは、冷静沈着、忍耐、節度です。

正義は自然道徳で、他者に当然与えるべきものを与えようとする、不断の堅い意志のうちにあります。人類仲間に対しては、正義は、他者の権利を尊重し、人間関係の調和を確立するよう、人を導きます。

私たちがいう人権の中には、受胎から死にいたるあらゆる段階での生命への権利、人として尊重され、受け入れられ、従って利用された上で排斥される対象となることなく、主体として扱われる権利、働き、物を所有し、労働の実りの正当な分け前にあずかる権利、社会での表現の自由への権利、信仰の自由への権利などがあります。

この他者の権利の尊重を強調する表現を、「黄金律」の中に見出すことが出来ます。「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなた方も人にしなさい」（マタイ福音書7：12）。キリスト教に見られるこの勧告は、ほとんど全ての宗教に伝えられている教えでもあるのです。さらに、イエス・キリストは彼の愛の律法を、お互いに広めるよう教えました。「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ福音書22：39）。これと全く反対の姿勢は宗教の熱狂主義です。それについて、ここで特別に申し上げる必要があると思います。それは、最も残念な正義の侵害の一つだからです。宗教的熱狂主義者、原理主義者、あるいは過激派の人々は、時として、宗教的動機に訴えることによって、他者への抑圧、暴力や対立を正当化しようとします。このような人々は、大きな過ちを犯しています。他者に対する暴力は、真の宗教を広めません。「もし人間にとって価値のある闘争があるとすれば、それは自分自身の秩序を逸した情熱に対する闘いであり、全ての利己主義に対する、他者への抑圧に対する、全ての憎しみと暴力に対する闘いです。すなわち、平和と和解に反する、全てのことに対する闘いです」。これは、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が一九九二年の世界平和の日メッセージ（n.7）の中で言われた言葉です。

知恵者である釈尊は、すでに我々にこう教えています。「戦争に千回勝ち、そのために千人の敵を持つ者と、自分自身にのみ勝つ者とでは、後者

の方が全ての戦いに勝利する者に勝っている」（ダンマパーダ、○…より、Canone Buddhista Torino 1986 P.112）。

○ 痛悔と償い

和解のために必要なことは、加害者が自分の間違った行為を反省し、出来る限りの償いをすることです。事実、償いとは、加害者が悪の行為から利益を得ることがなく、また赦しを乞われている被害者が欺かれることがないように、正義が求めているものです。しかし、償いの行為は、悔い改めた加害者の可能性の範囲内で、加害者の人間としての尊厳を十分に尊重してなされなければなりません。多くの人々、国々、宗教が死刑制度を支持せず、それに変わる償いの方法を求めているのはこのためです。それは社会の中で加害者が悔い改め、立ち直ることが出来る道を開けておく方法です。

○ 日常生活のわかち合い

緊張や紛争の解決は、多くの場合何か特別な魔法があるわけではなく、日常の助け合いと地道な努力の結果です。この場合、様々な宗教の信者個人々々の方が、何世紀も昔の習慣やプロトコール（儀礼）によって身動きが出来なくなっているような宗教指導者よりも、早く目的を達成することが出来るかもしれません。和解への努力は、静かに公にされることもなく始まるのが良いのですが、知名度の高くない、一般の人々の方がたやすく成果を上げることが出来るものです。

家庭での日常生活、職場、国家、国際社会など、どのレベルでも起こり得る争いに際して、損傷を修復し、新たな関係を立て直すために、まず双方の話を聞くことが必要です。この相互交流は困難な仕事です。しかし同時に、対話は深い満足も与えてくれるでしょう。日々の対話は共存のためだけでなく、協力のために、大いに勧められる手段です。

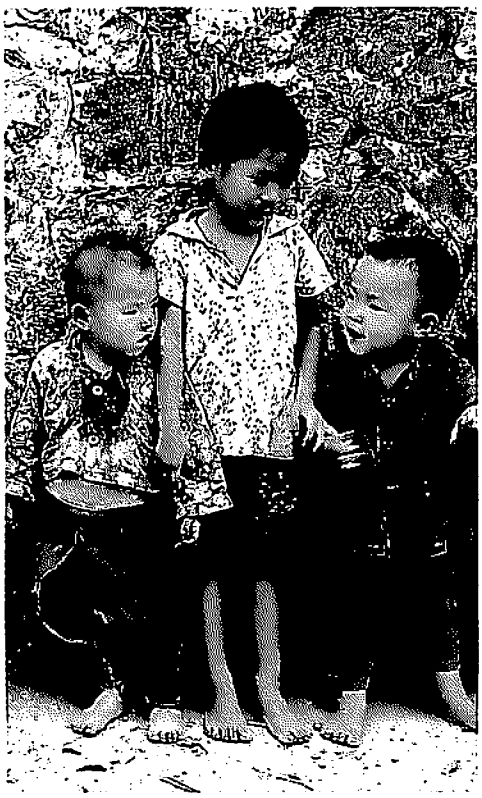
○ 良いリーダーシップ

和解には、社会、文化、政治、経済、宗教の諸問題に先見の明のある良い指導者の存在が大きな助けになります。穏やかなバランスのとれた、自己抑制の出来る指導者、そして、人間の弱さに対する深い理解を備えた指導者は、真の和解への道の扉を開く重要な媒体です。

Ⅲ 和解―困難ではあるが必要な徳

○ 歴史の重荷

過去の記憶が人々の心に重くのしかかるとき、和解は簡単には得られません。先祖がひどい苦しみを受けた抑圧、暴力、争い、戦争の重圧は、容易に頭を離れるものではありません。それは、家族同士、人種間、全民族に恐怖、疑い、分断、ある時は憎しみという負の遺産を残します。人間の条理は、時として復讐の誘惑に道をゆずってしまいます。また、加害者や



その子どもたちにまで、彼らが為した行為の高い代価を支払わせようとしたり、被害者自身の子供たちに、受けた行為を決して忘れさせないよう教えようとする誘惑もあります。

これらは厳しい現実で、善意の和解推進者に試練を与えます。これらの一つの解決策として、正しい歴史の解釈があります。他民族との紛争の歴史は、偏見のない正しい目で書かれ、読まれなければなりません。これは簡単に勧められることではありません。なぜ相手方がそのように感じるのか、理解する努力が求められます。歴史を書くのは多くの場合、勝利者または支配的立場のグループです。本当に客観的であるためには、関わり合った全ての当事者の立場を考慮に入れなければなりません。誤りがすべて一方の側にあるということはめったにないからです。国の歴史の記述にあたっては、自分の国、民族、宗教を弁護して、歴史を曲げてしまう傾きに注意する必要があります。

違いを尊重することは、真の関係を結ぶために勧められるもう一つの有効な手段です。違いを否定することは、相手のアイデンティティを否定することになります。たとえ、圧力をかけて同一化することに成功したとしても、それは見せかけの平和に過ぎないことが多々あります。なぜなら、それによって、次の対立、緊張、新たな暴力の前触れともいうべき不安定な状態が生まれるからです。不愉快な歴史の記録は、正直に、そして道徳的勇気をもってなされねばなりません。

○ 時に必要な英雄的努力

和解は、時に英雄的行為に匹敵するような努力を要します。もしある人が、子供、兄弟姉妹、両親、またはその他の愛する人、あるいは家族全部を戦争やテロ、犯罪行為などで失ったとすれば、相手を攻撃するために行動を起こしたい衝動に駆られるのは当然のことです。

家を奪われたとき、仕事や大切な持ち物を奪われ、戦争やその他の暴力行為によって難民となり行くあてもないとき、人間が犯した間違いによって飢えと病気に苦しめられたとき、人は心の底から憎しみが沸き上がり、復讐をしたいと思うこともあるでしょう。

このような試練の時、何か深い宗教の信念、または現在ある人間関係の暖かさ、受容、尊敬、理解と愛、このようなものだけが、そのような感情や誘惑を乗り越える助けとなってくれるのです。これだけが人間の感情の均衡を保つ支えとなるのです。ここに宗教の重要性が浮かび上がってきます。神を信じる強い信仰のある人々にとって、愛と赦しは、このような傷を治す、特別の癒しの力となります。何故なら、愛と赦しは神から来るものだからです。人間は、愛と赦し、そして和解を相手に差し出すとき、神のこの深い恵みと愛をほんの少し反映することができるのです。

○ 戦争の後の和解

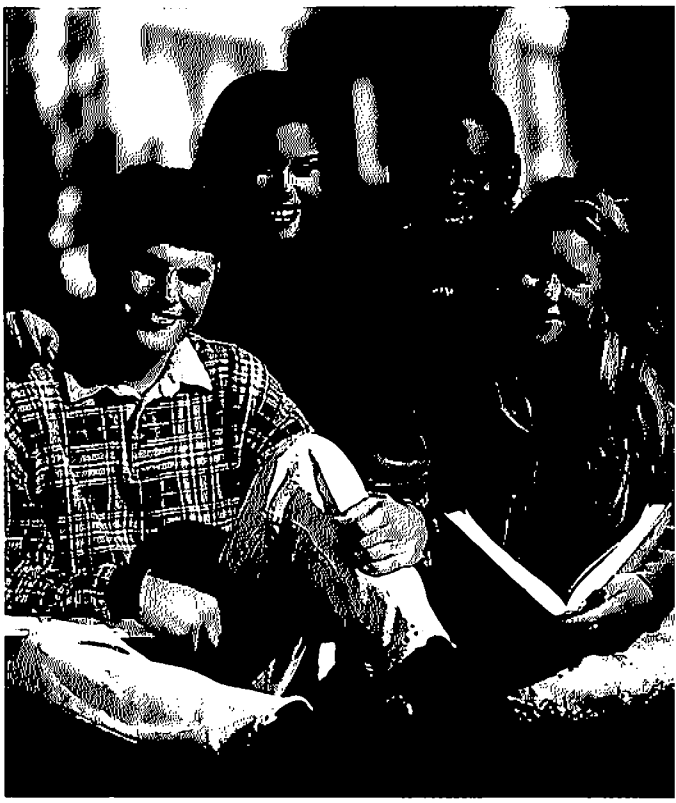
和解は、戦争の後では特別に困難です。戦争を続行しようとする人は、彼らはそれによって「解決」したいのだと、よく言います。しかし、戦争の後には破壊の犠牲者と遺物が残されるだけであり、和解を進めることはできません。もちろん彼らは、墓場の平和、死人と彼らを殺した人々の間にある、沈黙の冷たい平和を求めているのではないでしょうか。

全ての善意の人々、特に世界の諸宗教の信仰者は、戦争の文化から立ち上がり、平和の文化を創るよう求められているのです。人間の問題が本当に存在するところには、それを解決するための高潔で平和的な道があるはずです。戦争は不可抗力ではありません。兵器産業と、いやおうなくそれに続く兵器の取り引きは、農業と産業への投資に取って代わられるべきです。そして、全ての人々の利益となるような経済を構築しなければなりません。

剣は鍬に、槍は鎌に作り直さなければなりません（イザヤ書2：4）。

○ 和解は偉大さのしるし

和解は、弱さのしるしではありません。それは高いレベルの徳を示します。心から赦しを求め、赦しを与え、そして協力しようとする度量と意志は、強い道徳心の現れです。一方で、復讐は降伏の行為であり、強さの欠



如です。

「私たちは、全ての人々から赦してもらわなければならない存在なのです」とローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は述べております。「だから私たちは人を赦す覚悟が必要なのです。赦しを求め、赦しを与えることは、人間にとって深遠な価値のある行為です。時には、長く暴力的憎しみに縛られた状況から脱する唯一の道が赦しなのです」（一九九七年世界平和の日メッセージより、四）。

○ 平和に至る不可欠の道

関係が傷ついたり、壊れたりした状況では、和解は平和への必須の義務です。関係者が心から赦す姿勢を示さなければ、安定した平和への道は始まりません。

和解への意図が失敗した例を歴史の中に見るとき、心底からの痛悔と赦しが欠けているときには常に、傷は癒えることなく化膿し続けるということがわかります。さらに悪いことには、その先人の実例を、若い世代が受け継いでしまうことです。そこで気がつくことは、復讐への欲望は、新たな暴力を生み出す温床になる、ということです。

ですから、真実の安定した平和に達するためには、相手を赦し、自分も赦しを願うことが必要です。それがすなわち和解であり、平和のために私たちが通らなければならない道なのです。その道を歩むために、世界の大多数の人々は宗教に教えを求め、宗教に支えられることを望んでいます。そして、そのためにさまざまな宗教が協力すれば、良い結果をもたらすでしょう。このことについて、次に考えてみましょう。

Ⅳ 和解を進めるための諸宗教の責務

○ 人間の心の深い望みに応える

さまざまな宗教の中で、人々は人間の心の深い願望への答えを捜しています。そして、その心の中にある人間存在の深刻で困難な問題の答えを求めています。そして、抑えることのできない強い願望の一つに、平和と和解への望みがあります。

近代科学と技術の発達により、世界が狭くなっている今日、国際社会は益々相互依存が進み、恐ろしい破壊兵器の使用により、お互いが攻撃を受けやすい状況にあります。このような現状の中で、連帯とわかち合いへの願望、自由と安全への憧れ、そして相互の和解への保証について、どのような宗教でも注意を払い、そのために働かなければなりません。多くの場合、和解は、真実の宗教心とその実践に結びつき、宗教によって常に助けられます。

○ 宗教は和解と平和を誉め讃える

全ての宗教は、和解と平和を誉め讃えます。

私の宗教であるキリスト教は、その両方に高い評価を置いています。イエス・キリストは、彼の真実の弟子たちに、彼自身の平和を保証しました。それは、この世が与えることのできない永遠の平和です（ヨハネ福音書14：27）。それは、神を愛すること、隣人を愛することによって得られる平和です。そして、利己主義を克服する闘いと、神と人間同士との和解を求める意志によって、もたらされるものです。

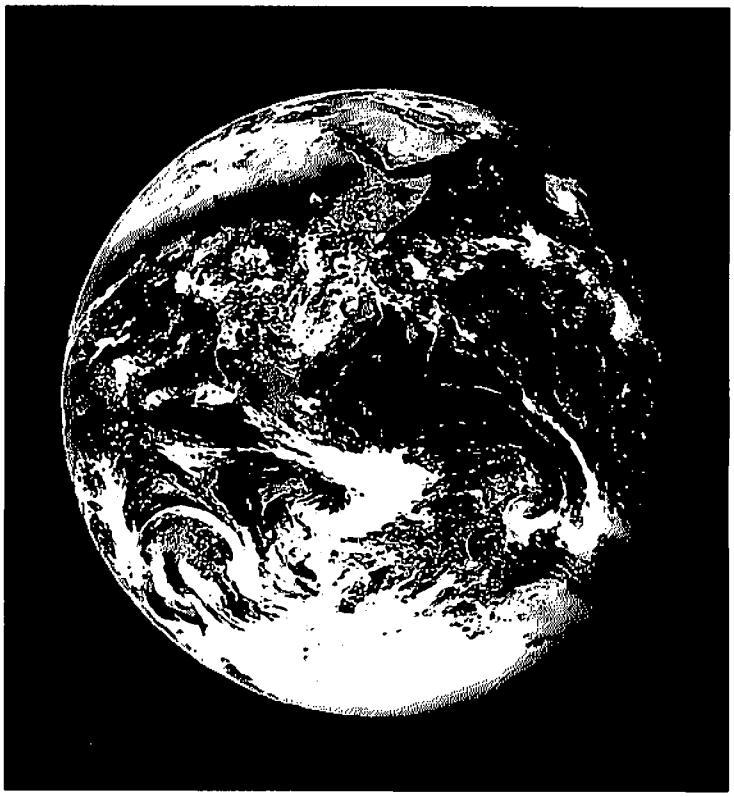
ヒンドゥー教では、サンスクリット語でよく使われる「シャンティ」は、平和という意味の言葉です。この言葉は、平穏、心の静けさ、激情に流されないこと、そして、社会状況において平和であることが強調されます。

釈尊の教えによれば、平和は、消極的には非暴力（アヒムサ）の実践によって、また積極的には全ての生き物に対する善行慈悲（マイトリカルナ）の実践によって実現されます。このアヒムサの理想は、シーク教とジャイナ教にも共通しています。釈尊は次のように教えています。「憎しみは憎しみによって決して静まることはない。愛によって癒されるのだ。これは普遍の法則である」（ダンマパーダ五　Canone Buddhista P.99より）。

ユダヤ教は、愛、真理、神の掟への服従を説きます。ここから正義と平和がいだき合うメシアの御国のしるしである「シャローム」があふれ出ます（詩編85：11）。シャロームとは、包括的で全てを内包する言葉です。願いと祝福、そして神、自分自身、他者、被造界との調和を意味します。

イスラム教では、平和は「サラーム」と言い、神の美しい名前の一つです。イスラム教徒たちが、祈りや日常生活の中で互いに挨拶を交わすとき、彼らは、隣人に対し「アルーサラーム、アライクム！（平和があなたと共にあるように）」と言って、この神の平和を祈ります。

インドネシアのジャワ島では、イスラム教徒、キリスト教徒、そしてヒンドゥー教徒は、皆等しく平和について、次のように教えられています。神の創造された世界の中で、人間の生涯には三段階の目標があります。



すなわち、
宇宙の平和、自然との調和
人類家族の平和
心の平和、深い内的な平和、です。

様々な伝統宗教も、民族宗教も同じように、神や霊、先祖に対して、和解、平穏、平和がもたらされるよう祈りを捧げます。

これらは多くの実例のほんの一部です、ここにお集まりの御高名な皆様は、もっと色々な面から、ご自身の宗教の和解と平和についてご意見があろうかと存じます。

○宗教は和解を進める力となる

宗教は、人々が和解を推進する偉大な原動力となります。深い宗教的な動機によって、人々は自分自身の失敗と過ちを認め、痛悔し、赦しを求める心の備えができます。その同じ動機が、赦しと和解へと人々をうながします。宗教は、人が破壊的な自己中心的利益追求に陥らないように支えます。敵と見なされる人々に対して、深い憎しみに凝り固まってしまうようなさらに悪い場合は、そうならないように助ける役目を果たします。宗教なくして、このような困難な状況の出口を見つけることは難しく、時には解決を見ることができないこともあります。

経験によれば、誠実に実践される本当の宗教は、必ず平和を推進し、人と人との連帯を深めます。なぜなら、そのような宗教は、善なる慈悲深い神、さらに強い絆を育てているからです。それゆえに、一九八六年ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が世界の宗教者をアッシジにお招きし、平和のために祈り、断食したとき、教皇は、信仰者の連帯と世界に平和を希求する宗教の重要性を強調したのです。

○宗教間の協力

宗教は、それぞれ平和と和解を達成するために従うべき道を説いたり、そのためになすべき行動をとるための独自の方法論を持っています。それぞれの宗教の違いを無視したり、その重要性を過小評価しないよう、コミュニケーションの拡大や相互依存を認めることが益々大切になっています。宗教にとって、和解を促進するために協力することは、今や義務であることを認識しなければなりません、宗教は皆、益々人類の真の福祉のために働く責任があることに、気がつき始めています。そして特に、協力して一つの事業を進めるときに、和解はそれを率先して進める力があることを知っています。

多くの宗教が共通に持っている価値観がいくつかあります。そして、それらは和解を進める上で大変有用な働きをします。例えば、省察や黙祷、祈り、罪の存在を認めること、喜んで与えること、黄金律、神に赦しを求める必要性、共同体の精神、家族のわかち合いの気持ちなどです。様々な宗教の信仰者が、平和と和解を実現する具体的なプロジェクトにたずさわるとき、必ずこれらの価値から得るものがあるでしょう。

多くの、緊張、問題点、挑戦にとって、宗教の境界線は問題になりません。人種や民族間、または社会階級の異なる人々の間、富める者と貧しい者、雇用者と被雇用者、圧力をかける側とかけられる側、暴力とその犠牲者の間の対立や緊張関係にとって、どの宗教に属するかはどうでもよいことです。従って、全ての宗教は手をつなぎ、的確で確かな解決策を捜すよう、求められているのです。

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は、「一九九二年平和の日メッセージ」(n.6)で次のように宣言されました。「諸宗教の交わりは、キリスト教会一致の対話と共に、今や必須の道であります。それは、何世紀もの長きにわたり増え続けた、たくさんの痛ましい傷をこれ以上増やさないためです。そして今もなお残るその傷が、一日も早く癒えるようにしなければなりません。」

宗教は、国連やその関連組織と協力したり、各組織を活性化することができます。同じように、大陸規模やある一定の地域、また地元の組織にも働きかけ、和解を助ける実用的な機構を援助したり、仲裁役を果たすよう努めなければなりません。宗教は、全人類に和解の巡礼を行うよう呼びかけ、共にその旅に赴かなければなりません。

○黙想と祈り

宗教が、和解の精神的基盤を提供する役目を果たすための方法の一つに、黙想と祈りを盛んにすることが挙げられます。

祈りは、心を集中させ、へりくだった信念と忍耐を要する行為ですが、その祈りによって、信仰者は、神の救いのわざに自分自身を開きます。黙想と祈りは、信仰者が自己をふり返り、他人に見られたいようにではなく、自分をありのままに見ることができるよう助けてくれます。その結果は、過ちを犯した者が無意味な自己弁護をするのでなく、その過ちを自分から

認め、痛悔し、赦しを求めるようにうながされます。

従って、黙想と祈りは、人々を結びつけ、互いの尊敬と受容、他者への愛を促進するのに役立ちます。このような傾向が高まれば、市民としての互いの義務を尊重し、もっと平和な世界を造ることができるでしょう。信仰者たちがへりくだり、それぞれの宗教の伝統に従って、祈りの中で神の前に頭を下げれば、不平等、誤解、苦い屈折観、敵意などが克服されるような次元での出会いが可能となるでしょう。なぜなら、皆等しく真摯に神、主、万物の父を求めているからです。

V 宗教は和解を進める他の媒体を活性化することができる

今までの話しによって、和解を促進しているのは宗教界のみであるとの印象をお持ちになった方が居られたとしたら、それは間違いです。

事実、他の分野でも、和解のために働いている人々はたくさんいます。しかし、それらの媒体は、さまざまな宗教の、単独のあるいは協力しての活動によって、刺激を受け、勇気づけられ、助けられるのです。その例を少し挙げてみましょう。

両親は、子どもたちにとって、最初で、最もかけがえのない教育者ですが、その両親は、子どもたちとの信頼、受け入れ、愛と赦し、調和、一致する姿を、宗教から学ぶことができます。これらは、行動によって最もよく伝えることができますが、教えることによってもできるものです。

先生は子どもたちに歴史、地理、倫理、社会などの科目を教えますが、彼らは、歴史や過去についての記述を子供たちが客観的に読むように、指導する機会が与えられています。そして、他の民族やその文化を尊敬することなど、多元的な世界での生き方を教えることができます。宗教の価値観は、このようなことと深く関わり合っています。

マスメディアに携わる人々は、良いことをたくさん伝える力を持っています。彼らは、人々がお互いに尊敬する姿勢を、ほめ讃えることができます。彼らは、和解の徳を高い道徳の水準として示すことができます。彼らは、憎しみ、偽り、復讐、暴力といった、道徳の破綻を明らかに示す力を持っています。マスメディアに関わる人々が、高い宗教的文化をもってすれば、その目標に達することができるでしょう。

公的機関の当事者たちは、市民の宗教的良心を尊重するようながされるでしょう。そして、宗教が文化に、人々のあらゆる面での発展に、平和と和解に貢献できることを評価するようになるでしょう。高い宗教的感覚があれば、行政者が権力の手段として、宗教を利用したいという誘惑に抵抗するのに役立つでしょう。それどころか、彼らは、諸宗教に対して、個々に、また互いに協力して、人々の共通善のために働くよう奨励する道を考え出すでしょう。

それぞれの国で、特に紛争や社会の緊張が高い地域で、行政者は和解を進める、他の様々なグループを支援する役割を担っています。その行政者の良心を検証するのは、宗教が最も適任なのです。

VI カトリック教会の和解への貢献

最後に、少し個人的な話をさせて下さい。宗教は和解を進めるというだけでは、実は充分ではありません。私たちは、各々に次のような問いかけをする必要があります。「私の宗教は、どのように和解に役立ってきたのだろうか」。私自身を例にとれば、私の宗教、具体的にはカトリック教会がどのように和解推進のために努力してきたのでしょうか。

○ 慈悲に富める神

神は慈悲に富み、神に帰るものは赦しに満たされると、私の信仰が教えてくれます（エゼキエル書18：23、イザヤ書38：17、詩編32：5、103：8―14、エ

フェソ書2：4―5、コリント書Ⅱ3より）。神は、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らせて下さる（マタイ福音書5：45）。

全ての人類に注がれる神の愛は、人間の理解をはるかにこえており、それは、全ての人々が招かれている和解の基盤となるものです。全てを赦す神の愛は本当に大きかったので、永遠の父は、全人類を救うために、彼の独り子を人間として世に送って下さったのでした。

○ イエス・キリストが実践し、教えた和解

神の子であるイエス・キリストは人間となり、平和の福音を説きました（エフェソ書6：15）。彼は平和の君と呼ばれます（イザヤ書9：6）。平和は、彼から弟子たちへの大切な贈り物です。「私の平和をあなたがたに与える」（ヨハネ福音書14：27、同じくヨハネ福音書20：19、26）。彼によってもたらされた神の国についての声明の中で、イエスは宣言しています。「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ福音書5：9）。

イエスは弟子たちに教えています。復讐してはならない、「目には目を、歯には歯を」といわれているが、「むしろ、だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。もしだれかが一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい」（マタイ福音書5：39、41）。

彼の教えによれば、隣人との和解は、神が我々の祈りを聞き、供え物を受けて下さる以前になされなければならないことなのです。「あなたが祭壇に供え物を献じようとし、兄弟が自分に反感をもっているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰ってきて、供え物を献げなさい」（マタイ福音書5：23―24）。もし私たちが、過ちを犯した人を赦すならば、神は私たちの過ちを赦してくれるでしょう（マタイ福音書6：12より）。主人より多額の負債を赦された家来は、彼の仲間の少額の負債を免除することを拒んだので、罰を受けました（マタイ福音書18：23―35）。放蕩息子のたとえ話は、神の赦しの愛をあらわしたものです（ルカ福音書15：11―32）。

イエス・キリストは、赦しと和解を教えただけではありません。彼はその教えを生きたのです。イエスは、十字架の上で、彼を十字架にかけた人々を赦し、彼らのために祈りました（ルカ福音書23：34）。

○ 和解を使命とするカトリック教会

カトリック教会は、和解に奉仕することを「神との親しい交わり、および全人類の一致のしるし」とみています（Lumen Gentium 1）。聖パウロは、彼の職務を和解であるとみていました。「神は、キリストを通して私たちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務を私たちにお授けになりました」（コリント書Ⅱ5：18）。

カトリック教会には、和解あるいは告解の秘蹟と呼ばれる荘厳な儀式があり、これは「他者の罪を赦すものは、赦される」とのキリストの言葉に従うことを意味します（ヨハネ福音書20：23）。公けになされ、続いて個人的になされる告解、そして和解へとつながっていくこの秘蹟の実践は、約二千年の間、カトリック教会によって大切に守られていました。

カトリック教会は、エキュメニズムによって、他のキリスト教の諸教会との和解を推進しています。第二バチカン公会議で、これは一九六二年から一九六五年の間に、世界中のカトリック司教が集まって開催された壮大な集まりでしたが、全キリスト教会の和解が急務であることが大きく取り上げられました。今からわずか五週間前に、ヨーロッパのキリスト教会のほぼ全部が集まり、オーストリアのグラーツで一週間の会議が開かれましたが、そこで、より具体的な一致の追求と、民族の和解のための一層の献身が強調されました。

よく知られているように、第二バチカン公会議は、キリスト教徒と他の諸宗教との対話と相互理解や協力も推めました。ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は一九八一年に日本を訪れ、この決意を明確に示されました。一九八一年二月二十四日、日本の諸宗教のリーダーたちへのスピーチの中で、日本の天台宗を開かれた伝教大師最澄の言葉を次のように引用されました。「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」。そして、日本の宗教者の皆様は、美事にお返しをして下さったのです。教皇は、次の世紀と新たな千年紀を迎えるための準備として、和解の促進にさらなる努力を続けるよう、キリスト教徒をうながしておられます（Tertio Millennio Adveniente 33・34より）。

カトリック教会は、前線で戦争勃発の危機にある国々の和解や、紛争後の平和構築に貢献してきました。三十年前、私の国であるナイジェリア内戦中とその後も引き続き、司教としての私が和解を進めることが出来たのは、私のカトリックの信仰が大きな要因であったと断言することができます。しかし、時間の都合上、個々でその詳しいお話をするのは差し控えます。

○ 結びに

日本の代表的宗教者の皆様、そして世界の宗教者の皆様、民族の和解を促進するために協力することは、各宗教にとって名誉なことであり、同時に、責務でもあります。そして、そのために世界の宗教を挙げて、それに応えないでいられるものでしょうか。

一九九七年八月二日

略歴

1932年11月1日、ナイジェリアのエジオウェレ生まれ。ナイジェリア、エヌグのバイガード・メモリアル神学校哲学科、ローマのアルバーノ大学神学部、ロンドン大学教育学部教育学科卒業。ナイジェリア・オニシャ大司教（1967―85）、ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官（1984―）、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世により枢機卿に任命（1985）。

著書「神と私」（1987）、「他宗教の信仰者との出会い」（1997）など多数。ヌスッカ・ナイジェリア大学より名誉博士号授与。

特別演奏

平和祈念 ―世界への響き―

Stomu Yamash'ta

ツトム・ヤマシタ

1947年京都に生まれる。17歳で渡米。クラシック、ジャズなどを学んだ後、打楽器による新しい音楽を創造し、世界を代表する数々のオーケストラ（ベルリンフィル、フィラデルフィア、シカゴ響他）と共演、「打楽器のイメージを変えた人」として世界に知られる。1972年演劇と音楽を融合した芸術集団「レッド・ブッダ・シアター」を組織し、500回を越える公演を開催。又同時にロックグループ「GO」を結成、ジャンルを越え世界各地で活発な活動を行う。同年芸術選奨文部大臣賞「新人賞」受賞。1973年グラミー賞「作曲・監督賞」ノミネート。1980年京都・東寺にて仏教音楽を研究し、「供音式」なる新たな形態を確立。その後、国内及び英国ストーンヘンジ他でこの式を行う。

国内外の多くの映画音楽も手がけ、1984年映画「空海」（佐藤純弥監督）で日本アカデミー賞「優秀音楽賞」を受賞。以降、受賞、招待公演多数。

音楽・芸術監督としても国際的に活躍。

サヌカイト及びサヌカイト琴について

この石は、讃岐地方に多く産出する安山岩で、3万年以上前には槍や斧など石器の材料として使われていた。そして、近代になりドイツの鉱物学者が「サヌカイト」と命名。また地名より讃岐岩、叩くとカーンという音がすることから「かんかん石」とも呼ばれる。

地元の前田仁博士はこの石を「もう一度暮らしの中で生かしたい」と考え、石音の研究に取り組んだ。前田博士は、個人的に古代中国の文献を探り、5千年前に黄河を中心に栄えた文明の中で生まれ、今なお伝承されている板石を用いた楽器「磬（けい）」や、その他に現在も使われている様々な楽器を調べる一方、多くの専門家から指導を受け、1981年、サヌカイトによる石琴（2.5オクターブ、30鍵からなる木琴のような楽器）を製作した。そして音楽家はもちろん、振動工学などの学術的助言を受けながら、サヌカイト固有の振動特性や波形の解析を繰り返し、最初の作品より10年後、石の楽器「サヌカイト琴」は完成した。このサヌカイト琴によるツトム・ヤマシタ氏の演奏は、今や現代日本を代表する音楽として、世界の各方面より大きな注目を集めている。「世界宗教者平和の祈りの集い」開催に際し、前田博士からこのサヌカイトを使った記念品が日本宗教代表者会議に寄贈され、これは海外からの来賓に記念品として贈呈された（右の写真）。

特別演奏

Special Musical Performance

1 オープニング

果てしない刻

COSMOS

2 記念演奏
神々のささやき

月光/真如の月

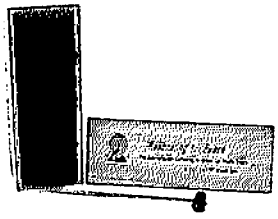
（作曲・LVベートーベン）

PEACE AND LOVE

3 エピローグ

懐かしき未来

FOR THE FUTURE



意見発表部会 ①

宗教協力と世界平和

テーマ ①　宗教の平和活動と民族紛争
テーマ ②　東西の宗教対話と相互理解
テーマ ③　宗教者間の連帯と人類に果たすべき役割
テーマ ④　宗教対話の歴史と未来

テーマ① 宗教の平和活動と民族紛争

信仰者の力を結集し息の長い活動を

聖エジディオ共同体
アゴスティーノ・ジョバンニョーリ教授

まず最初に、この集いの実現にご尽力なさいました日本の宗教代表者の皆様に御礼を申し上げたいと存じます。聖エジディオ共同体の代表団をお招きいただき、このような栄えある集いの席でお話しさせて頂きますことを感謝いたします。ご承知の通り、聖エジディオ共同体は、宗教間の対話の促進、平和の祈りの実現、民衆の連帯をめざす具体的なイニシアチブに深く関わってまいりました。これらの目的を達成するため、聖エジディオ共同体は、ここに代表を送ってこられた全ての宗教団体と長期間にわたる協力関係を維持しております。ご出席の代表者の皆様に、深い敬意と友情を込めてご挨拶申し上げます。

本日の会議のテーマは「宗教の平和活動と民族紛争」です。まず最初に、平和を求める宗教の決意についてお話しさせて頂きます。宗教同士で紛争が起きる可能性があることは、皆様もよくご存じのことと思います。そのような例は過去においても枚挙のいとまがなく、また現在でも世界のどこかでこの種の紛争が起きています。しかし、比叡山宗教サミット十周年記念にあたるこの会議は、平和を求める宗教の決意をさし示すものです。

今から十年前、山田恵諦猊下の呼びかけに応えて、日本の諸宗教による最初の平和会議が、世界中の数多くの宗教から著名な代表者を招いて開催されました。この会議が実現するきっかけとなったのは、その一年前の一九八六年、ローマ教皇ヨハネパウロ二世がイタリアのアッシジに宗教代表者を招いて催した、平和の祈りの集いです。それ以来毎年、聖エジディオ共同体は、アッシジの祈りの集いと同様の集いを催し、日本を含む世界中の宗教指導者の皆様にご参加いただきました。この「人々と宗教」国際会議が、ローマ、ワルシャワ、ブリュッセル、ミラノその他で毎年開催される一方、日本の宗教者の方々は、アッシジの精神を受け継いで比叡山に集いました。

この十年の間に、ヨーロッパや日本のみならず、世界中で進歩が見られました。毎年一堂に会し、相互に知り合い、共に祈りを捧げることによって、国籍や文化や宗教の異なる人々の間に強い友情の絆が生まれたのです。この進歩は、何よりも共通の信念を培うのに貢献しました。すなわち、あらゆる宗教は戦争ではなく平和を推進する、という信念です。宗教を悪用して残虐な紛争をあおる者はいても、実際に信者に戦争をせよと説く宗教はありません。あらゆる宗教者は、自らの信仰を深め、そこに愛と平和の種子を見い出すという、きわめて重要な責務を負っているのです。

ここに集った私たちは、日本の宗教の中にある叡智の宝を思わざるを得ません。釈尊の説法は、自分自身や他者を苦しめることを戒めています。神道においては、自然と社会における深遠な調和という理念が受け継がれています。日本という国では、さまざまな伝統宗教が、同じ地域や家族あるいは個人の中においてさえも平和に共存し、それが不和や争いの原因になることは決してありません。のみならず、日本の宗教は、この十年間に他の信仰、特にキリスト教との対話を進めてきました。これは日本の宗教史上前例のないことです。仏教、神道、キリスト教の信者が、二千年に及ぶ無関心、時には敵意を乗り越えて、友情の対話を持つため、今日一堂に

会しています。一九八九年のワルシャワそして一九九二年のブリュッセルにおける、山田恵諦猊下の熱意に満ちた訴えは、今なお私たちの心にこだましています。猊下はあらゆる宗教者に対し、第二次大戦の悲劇に対する自らの責任を問いただし、このような悲劇が二度と起こらないよう全力を尽くすことを呼びかけられました。

一九八六年のアッシジの集い以来、信仰を持つ多くの人々が、さまざまな宗教において平和への原動力を見い出すという責務に、粘り強く取り組んできました。ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南米を含む世界中の多くの場所で、さまざまな目的を掲げたプロジェクトが始まりました。一九九一年にマルタで開催された「人々と宗教」国際会議では、イスラム教徒とキリスト教徒とユダヤ教徒が、パレスチナの平和を求めるアピールを発表しました。この訴えは一九九五年のエルサレムで繰り返され、そこに集った宗教指導者は、平和のシンボルとしてオリーブの木を植えました。中東や地中海の国々においては平和への道のりが今なお遠くても、宗教者は戦争に反対の立場を明確に打ち出すことが大切です。

以上の例からわかるように、宗教は平和の実現のために多大な貢献をすることができます。今日の世界は十年前と比べ、大きく変化しています。二大勢力圏が武力で対峙し、世界を絶え間ない核戦争の脅威にさらし続けた恐怖の時代は去りました。しかし、この大いなる脅威が去って、新たな脅威が出現したのです。第三次世界大戦という悪の可能性が一方で減少し、他方では局地戦争の可能性は増大したのです。数十年間の平和を享受してきたヨーロッパにおいても、旧ユーゴスラビアやアルバニアを始めとする数多くの地域で、緊張が頂点に達しています。最近では、スペインなど、西欧の主要国においても民族テロリズムが発生しています。中央アメリカおよびラテンアメリカにおける民族紛争は、暴力では解決できない社会問題や経済的不平等と複雑に絡み合っています。ここからそう遠くない地域でも、特に大変な事態が起きました。たとえばカンボジアです。二十世紀最大と言うような大虐殺でこの国の国土を血に染め、歴史に残る悲劇を生みだした原因は、民族の再生という狂気のもくろみだったのです。

今、特に目を向けたいのはアフリカです。ここでは、数々の大きな騒乱が起きており、そのために数百万人の人々が苦しんでいます。なかでもサハラ以南の中心部のグレートレーク地方においては、不安定だった均衡がゆり動かされ、大きな変動が始まっています。この地域で起きているのは、大規模な民族紛争や異なる部族間の衝突のみではありません。私たちのような外部の者が陥りやすい危険は、表面だけからいわゆる民族紛争と判断することです。ブルンジにおいてはコンゴのような、また南スーダンにおいてはリベリアのような複雑な政治的、経済的状況が存在し、しばしば植民地主義や冷戦の影をひきずっています。「アフリカは手のほどこしようがないのだから、放っておけばよい」と考えたり、言ったりする人が多いために、アフリカの人々は見捨てられ、歴史の縁（ふち）へと流されるがごとき状態です。

宗教者は力を結集し、このようなものの見方、いい方に対抗しなければなりません。「自分には関わりない」と言うことはできません。なぜなら、信仰者にとって、人間がいる所には兄弟がいるからです。「暴力の責任は、それを行使した者にのみ帰する」と言うこともできません。なぜなら、あらゆる信仰は、己の心に照らし、直接であれ間接であれ自身の責任はどうかと問うことを求めるからです。また宗教者は、貧しい人々が助けを呼ぶ声に耳をふさぐこともできません。なぜなら、人々の痛みと苦しみの声が常にキリスト教徒に問いかけるからです。仏教徒、イスラム教徒あるいは神道の信者の場合も同じです。ですから、今日「世界中が、特に戦争のため苦しんだり亡くなったりする人々のいる所が、私たちに関わりがある」と言えます。

私たちの力を結集する道のりは、ここ比叡山を通っています。この十周年記念の集いは、ここに参加した私たちにとって喜びに満ちた機会であり、

同時に、世界の平和を追及するあらゆる人々にとって励みとなるものです。しかし、この道のりはここで終わるわけではなく、私達は今後も決意を固めてなお一層の努力を続けねばなりません。来年以降も引き続き、比叡山の集いが実現することを祈っております。また十月には、イタリアのパドバとベニスで、ここにご出席の皆様をお招きし、聖エジディオ共同体の会議が催される予定です。

地上から兵器をなくそう

カンボジア仏教会会長
テップ・ボーン師

比叡山宗教サミットにお招きいただき、本日ここに参加できたことは、誠に意義深いことであり、またこのサミットを企画、準備された皆様に厚く御礼申し上げます。第二次世界大戦以降、日本では戦争が起こってはいません。それは今日の繁栄した姿を見れば明らかであり、その根本をなすものは、仏教が全ての人々、年代層に信仰され、守られて来た証拠であると思います。しかし残念ながら我が国では、三〇年にわたり内戦が続き、御存じのように先月も死傷者五〇〇人を超す銃撃戦がありました。日本と同じ仏教国として、この現実の差を痛感せずにはおられません。民族紛争と平和という問題を考えたときに、仏教を抜きには考えられません。なぜならば、仏教は暴力を否定しているからです。暴力をもっては、何も解決できないということです。それには常に中立、中道、公平という道を歩み、右にも左にも偏らない正しい見方、考え方を一人一人が身につけなければなりません。そして一人一人が変わることにより、世の中も変わっていくのです。もしそれができなければ、欲望と、悪業、怒りを呼び、社会が混乱することは間違いありません。この仏教の教えにより具体的に平和活動をするということは、人々を殺戮する兵器、自然環境を破壊する兵器、戦争を引き起こす兵器を生産するな、売るな、買うな、という運動を実践していかなければなりません。この息の長い活動を積極的に押し進め、続けていくことにより、人々はより強く仏の力を信じ、やがては人々の心を満足させ、平和をもたらすものと信じております。最後に、この活動を共にする皆様の御健康と、御精進、さらには活動の更なる前進を祈念いたします。ありがとうございました。

民族と宗教を超えた勇気ある赦し

サラエボ大司教
ヴィンコ・プルジッチ枢機卿

日本文化の源であり、日本における仏教発祥の地でもある比叡山で催される、この世界宗教者平和の祈りの集いに、多くの宗教を擁するボスニアの一市民として、またボスニアのカトリック共同体の宗教指導者として参列させて頂き、喜びと感謝の念に堪えません。

本日は時間的制約の中で、私の民族的、宗教的立場を鑑みまして、私が体験したボスニアにおける現在の緊張状態についてお話ししたいと存じます。さらに、一九八六年のアッシジから一九九七年のサラエボまで、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世がご発表になりました、宗教による平和維持と平和創造に関する声明のいくつかをたどりたいと思います。

ボスニアにおける紛争は民族のなわばり争いであり、宗教戦争ではない

ボスニア・ヘルツェゴビナは、面積がわずか五一、一二九平方キロメートルの小さな国です。一九九一年四月に行われた国勢調査によれば、人口は四、三四〇、〇〇〇人です。その地理的位置と激動の歴史のため、住民の民族的アイデンティティと宗教的アイデンティティは、数世紀の間変わらず一致しています。四三％がボスニア人―イスラム教徒、三一パーセントがセルビア人―正教徒、一七％がクロアチア人―カトリック教徒です。

私たち市民と、デイトン平和協定後のボスニア・ヘルツェゴビナにおける二つの政体の支持者の間では、一九九一年十一月に始まり一九九五年十二月に終わった過酷な戦争の原因と結果をどう評価するかについて意見が分かれます。この戦争は、ユーゴスラビアが分裂し、スロベニア、クロアチア、マケドニアという新しい国家が承認された後に勃発しました。一九九二年三月一日に国民投票が合法的に実施され、私たちボスニア・ヘルツェゴビナの市民は、区分されたユーゴスラビアに住むか、あるいは祖国の独立を支持するかの選択を迫られました。ボスニアのセルビア人指導者らは、彼らが自治体や警察を掌握していたセルビア人地区における投票を一切禁じました。このような禁止令が敷かれたにもかかわらず、有権者の六三パーセントが国民投票に加わり、その六二パーセントがボスニア・ヘルツェゴビナの独立に対し賛成票を投じました。それ以来、セルビア人民兵は、ユーゴスラビア正規軍の支持を受けて、彼らがセルビア人の領土であると主張する地域を組織的に力づくで奪取し始めました。一九九一年十一月から一九九五年十二月までに、彼らは国土の七二パーセントを占領しましたが、デイトン平和協定により、結局国土の四九パーセントを保有することを認められました。

殺された市民、破壊されたモスクや教会、レイプされた女性、行方不明者、追放された家族、民族「浄化」の名のもとに自分の家や地域から追い出された人々、これらがいったいどのくらいの数に達するかをご報告して皆様を驚かせるのは、この場に相応しくないでしょう。外国のジャーナリストは、リポートや記事の中で、各派の指導者や戦士たちが民族と宗教の一致を示すシンボル、つまり十字架や三日月の旗、イスラム教の緑の帽子、カトリックのロザリオなどを身につけていることを挙げて、民族の縄張り争いであるこの戦争における宗教的要因を指摘しました。私たち宗教指導者は戦争中にたびたび集まり、この戦争は宗教戦争ではないこと、また宗教の名のもとに犯される罪は宗教に背く罪である旨の声明を発表しました。一九九七年六月九日、私たちは共通の道徳的責任に基づきある声明に署名しました。その中で私たちは「我々の宗教的、霊的伝統（＝イスラム教、オーソドックス、カトリック及びユダヤ教）は、多くの価値を共有してお

り、これら共通の価値は、相互の尊重、協力及びボスニア・ヘルツェゴビナにおける自由な普通の生活のための確かな基盤を提供できる」ことに同意しました。そしてお互いの宗教上の差異を認め、罪のない人々に対するあらゆる暴力と、基本的人権に対する全ての侵害を告発しました。私たちは、自分ならばこのように処遇されたいと思うような態度で他者に接するよう、それぞれの信徒に説きました。

私たちは、今年の六月に四人のメンバーによるボスニア・ヘルツェゴビナ宗教協力協議会設立準備委員会を発足させました。この協議会は、我が国における宗教指導者間の協力を促進することを目的とした、四つの伝統的宗教共同体による諮問機関となります。現在、私たちは、この機関が特定の会派に支配されたり、政党に操られたりすることのないよう、規約の起草と事務局の設置のために鋭意努力している最中です。

赦し、和解させる宗教の力

キリスト教の聖書では、国家間の平和を神との和合に不可欠なものととらえています。そのような平和は常に正義と結びついています。「正義は平和を生じ、正義の結ぶ実はとこしえの平安と信頼である。我が民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所にいる」（イザヤ書32：17―18）。聖パウロは大ローマ帝国で全く少数派であったキリスト教徒にこのように説きました。「あなた方は、出来る限り全ての人と平和に過ごしなさい」（ローマ人への手紙12：18）。私たちカトリック教徒には、教皇、公会議、司教という指導の権威がおります。第二バチカン公会議（一九六二年～一九六五年）では、我々の教義において、信教の自由、キリスト教会と非キリスト教の関係ならびに現代世界における多元主義に関し、革命ではなく重要な進化が起こりました。この公会議は、現代の世界における教会規則（Gaudiumet Spes）第五章で、「平和の醸成と国際コミュニティの確立」（七七―九〇）について述べています。

カトリック教会が宗教協力による平和活動を支援する中で、その転機を迎えたのは一九八六年十月二十七日にアッシジで行われた世界平和の祈りと断食の日においてでした。その折りに、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世はキリスト教コミュニティの代表との会合で次のように述べられました。「キリスト教会は人類の和解と平和の象徴と手段となるべく召されたのです」。閉会式では、世界中の様々な宗教の代表者を前にして、このように訴えかけられました。「良心の尊重と良心への服従は、世界中の宗教に共通しています。この良心は、真理を探究すること、あらゆる人とあらゆる民を愛し、彼らに奉仕すること、その結果、人と人、国家と国家の間に平和を創造することを私たちに教えます」。教皇は全ての参加者をそれぞれの信念に従って最高の平和の承認とされました。このスピーチの中で、教皇は次のように指摘なさいました。「人類は、その結束を一層深め、社会正義を一層強く望む時代に突入しました」。その二日後のローマで、ヨハネ・パウロ二世は、アッシジの集いに参加した非キリスト教徒に礼を述べられ、こう強調されました。「私たちは、さまざまな宗教が平和に貢献できることがわかり、また貢献せねばならないと確信したので、アッシジへの巡礼の旅に出たのです。」

一九九五年十月五日、ヨハネ・パウロ二世は国際協力のための機関であるニューヨークの国連本部を、その五十周年記念の折りに訪問されました。教皇は総会での演説で、国家の自己決定権についてお話しされました。このテーマの中で、人類の普遍性の領域に対抗するような、強力な民族的、文化的意識が再び出現していることに触れられました。「特殊性と普遍性の間の緊張関係は、人間に内在するものと思われます。同じ人間性を備えているおかげで、よくあることですが、人はごく自然に自分が一つの偉大な家族の一員であるように感じます。しかし現実の歴史的状況のもと、この同じ人間性の結果として、人は必然的に特定の集団に強く拘束されます。人が所属する集団には、家族から始まり、民族的文化的集団全体まで、さまざまな集団があります」。この演説の中で、教皇はボスニアと中央アフ

リカにおける民族紛争に触れ、各国が民族的文化的差異をもっと尊重するよう呼び掛けました。「歴史的な不満の種と、不謹慎な者たちの操作によって増幅された「差異」に対する恐怖は、「他者」の人間性そのものの否定に至る可能性があります。その結果、人々は誰一人として子どもたちでさえも免れ得ない暴力の循環に陥るのです。私たちは皆、現代のこのような状況を熟知しています。今このとき、私の心と祈りは、特にボスニア・ヘルツェゴビナの疲弊しきった人々の苦しみに向けられています。」

ヨハネ・パウロ二世聖下が、多様な民族と多様な宗教を抱える首都の住民と、その苦しみ、恐怖、不安を分かち合うため、包囲下のサラエボを訪問したいと強く主張されたのも不思議ではありません。しかしこれが実現したのは、一九九七年四月一二日、一三日のことでした。サラエボにおける全てのスピーチで、教皇は、お互いに赦し、赦しを請うことを重ねて強調されました。ボスニア・ヘルツェゴビナの共同管区のメンバーに向けた演説の中で、教皇はこう述べられました。「過去の因縁のため、或いは多様なものが近接しているために、個人或いは民族間に緊張関係が生じることがあります。そのような場合は、中庸と節度と理解を旨とし、建設的な協力関係を目指す理由を宗教的価値の中に見いだすべきです。この内的な姿勢こそ、ボスニア・ヘルツェゴビナ国内において、また近隣諸国や国際社会との関係において培っていかねばなりません。流血と憎しみの背景に対抗し、赦す勇気の上に強固な平和の体系を築くことが必要です。民は赦しを請い、また赦すことを学ばねばなりません。」

ボスニア・ヘルツェゴビナのイスラム教信者や神学者の多くは「和解」という言葉を好みません。なぜならば、この言葉は、罪もないのに殺された市民、レイプされた女性達、破壊されたモスク、追放されたり行方不明になった人々のことを忘れること、さらには戦争犯罪者を訴追しないことさえ含む場合があるためです。彼らはこう主張します。国際社会が難民の安全な帰還を保証できるか、あるいは戦争犯罪者が投獄されることによって、初めて和解が成立するのだと。だからこそ、ヨハネ・パウロ二世は、ボスニア・ヘルツェゴビナのイスラム教代表者に向けてのスピーチでこのようにおっしゃったのではないでしょうか。「お互い赦し合い、同胞愛に根ざした誠実な対話を再開すべき時が来ました。ボスニア・ヘルツェゴビナに真の平和を再建するのを妨げている、憎悪と復讐心を乗り越えるときが来ました。神は慈悲深いのです。この真実は、あらゆるイスラム教徒が大切にし分かち合っているものです。神は慈悲深く、慈悲を望んでおられるからこそ、あらゆる人間は心から赦し合うという目標を達成するため、自らを愛の論理にゆだねなければなりません。」

祖国において民族間の緊張という悲劇を経験し、キリスト教を深く信仰する私は信じております。宗教には、赦し、和解させる力があると。

テーマ② 東西の宗教対話と相互理解

未来を開く新しい宗教地図

イエズス会諸宗教対話事務局長
トマス・ミッシェル神父

ここ比叡山に集うとき、私たちは人間の宗教生活における二つの事実に興味を惹かれます。第一には、世界の主要宗教のルーツは全てアジアにあるという点です。西アジアでは、ユダヤ教、パールシー教、キリスト教、イスラム教、南アジアでは、ヒンドゥー教、ジャイナ教、仏教、シーク教、イスラム教、道教、神道、シャーマニズム及び伝統宗教という具合です。

第二の重要な事実は、これら全ての宗教がその発祥の地を離れ、新しい様々な地域と文化環境に根付いたという点です。

今日、シーク教徒はカナダに、パールシー教徒はインドに、ユダヤ教徒は米国と中国に、仏教徒はヨーロッパとアフリカに、ヒンドゥー教徒はオーストラリアとフィジーに、イスラム教徒とキリスト教徒はアジア、アフリカ、南北アメリカ全域に、それぞれ分布しています。アジア、アフリカ、オセアニア及び南北アメリカにおける伝統宗教の信者は、神の概念、価値、崇拝のしかたや社会構成が、各伝統宗教間で共通していることに気づいています。世界の宗教地図は、人類史上前例のない複雑さを呈しています。

現代社会における宗教の状況は、新たな形をとった古代宗教の活発な動き、信仰復興運動、昔からある熱狂的な信仰を現代的な視点で捉え直す動きなどで、更に複雑化しています。新しい宗教活動は、非正統的であるという疑いを免れなかったり、また伝統的形式による信仰活動との関係を定義するのが難しい場合も多いのですが、これらの動きは、現代における宗教的探求の活力を示すものであると同時に、自己の信仰を全うするために納得のいく適切な方法を見つけたいという、現代人の切実な欲求の現れでもあります。

宗教と文化

こうしたことは全て、信仰と文化の関係を検討するのが重要であることを指し示しています。かつて宗教は、文化的様式や実践、宇宙と人間の関係の独特な捉え方などに関わるものと思われがちでした。宗教は、民族的或いは国家的アイデンティティを識別する上での重要な要素であると見なされていました。しかし、最近催されたアジア人キリスト教神学者による会議においては、アジア人の信者として、キリスト教信仰を実践する方法を見つける必要があるのではないかと懸念する声が目立ちました。キリスト教はかつてヨーロッパからアジアに伝わりましたが、現代、アジアのキリスト教徒はヨーロッパ的な様式と伝統に従うことをよしとしないのです。彼らはキリスト教徒ですが、アメリカ人でもイタリア人でもありません。彼らはキリスト教徒であり、文化的に「違和感を覚えない」やり方で信仰を実践したいと考える韓国人、インドネシア人或いはタイ人なのです。この会議に出席された神学者の皆さんは、植物学者が在来品種から新しい環境に適応しやすい新種のランや杏をつくりだすような具合に、「異種交配(hybridization)」について語っていました。

三年前ヨーロッパで、私は若い世代のイスラム教徒と会合をもつ機会を得ました。オランダとスコットランドでそれぞれ別の会合をもったわけですが、興味深いことに、参加者の示した懸念は共通していました。トルコやパキスタンから移住してきた祖先を持つこの若者たちは、二つの基本的

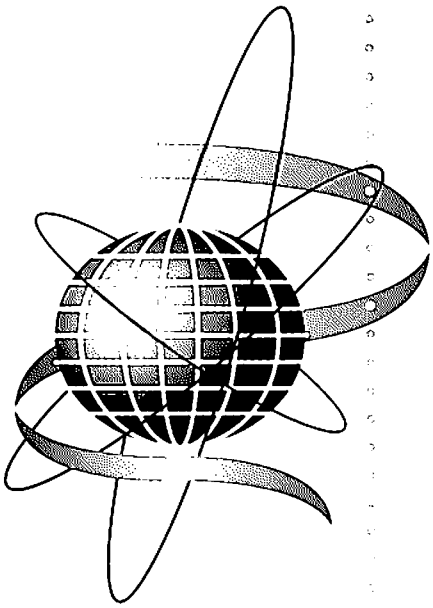
な要件を両立させることを切実に望んでいました。つまり、彼らはイスラム教徒であると同時にヨーロッパ人でもあるわけです。いかにしてイスラムの教えに忠実なやり方でイスラム教信仰を実践しつつ、ヨーロッパ文化においてしかるべき居場所を見つけるかと言うことが問題でした。オランダのイスラム教徒は、「相互創造（intercreation）」という新語を考案しました。彼らは「同化」を望まず、従ってアイデンティティを失いたくないと考えています。またイスラムのゲットーに隔離されるような、「敵対」や「アパルトヘイト」も望んでいません。彼らはトルコ流でもオランダ流でもドイツ流でもない新しい何かを、ヨーロッパのイスラム教徒として生きる術を確立したいのです。グラスゴーのイスラム教徒は同じ様な懸念を別のことばで表現しました。「私たちはパキスタン人ではありません。パキスタンのことなど何も知らないのです。私たちはスコットランド人ですから、スコットランドのイスラム教を築くことを望んでいます。」

世界中に散らばった全く異なる信徒集団において、同じ懸念が表明されると言う事実は、今日、信仰と文化的規範を区別する必要があることを示唆しています。東西の宗教対話について語るとき、ある宗教は「東」、またある宗教は「西」であると区別するだけではもはや不十分です。今日、世界のキリスト教徒の過半数はヨーロッパと北米以外の地域に分布しています。イスラム教徒のほぼ三分の二は、中東ではなく南アジアと東南アジアに分布しています。ヨーロッパで最も急速に普及しつつあるのは仏教であるという報告もあります。私は、昨年台湾の仏教寺院で、コンゴ、南アフリカ、カナダ、フランスからやってきた見習い僧に会いました。

新しい現実を直視すること

相互理解を促進したいと願うならば、最初にやるべきことは古い固定観念を捨て、新しい現実を直視することです。現代の信心における最も基本的な要素は、東西どちらの信仰者も現代社会において個人の宗教的責任を果たすための適切な方法を模索しているということです。これはしばしば困難を伴います。経済状態、政治的立場、新しい形の家庭生活や男女関係、通信や新しい世界的メディアの迅速化が、伝統に根ざした信仰生活の実践に影響を及ぼしているためです。これら全ては、信仰者が直面せざるを得ない倫理的問題を提起する場合があります。ヒンドゥー教徒も仏教徒もイスラム教徒も、伝統宗教の信者も、クローン羊のドリーやインターネット、或いはマクドナルドのハンバーガーを無視することは出来ません。何故ならこれら全ては彼らの生活と密接な関係を持つためです。

端的に申し上げるならば、私たちは好むと好まざるとに拘わらず、みな運命を共にしているのです。私たち信仰者はみな、現代における生活はかくあるべしというビジョンを持ち、また子孫のためにこのような世界を築きたいというビジョンも持ち合わせています。東西の宗教対話は、このような共通の関心事から出発し、そこから相互理解を目指して努力していかねばなりません。歴史は良き師であり、歴史の教訓をなおざりにする者は必ずや同じ過ちを繰り返します。しかし宗教対話の主旨は、過去を掘り起こしそれをもとに非難を浴びせ合うことであってはなりません。私たちの対話の主眼点は、現代の信仰者としての生活、ならびに正義、平和、尊厳そして友愛に満ちた未来を築く務めに置かれるべきでしょう。



平和はイスラームの基本理念

世界イスラーム連盟事務総長
アブドッラー・イブン・サーリフ・アル＝オバイド博士

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において
最も聖なる御方にして平安の源なる王、アッラーに讃えあれ。
平和を愛される使徒、われらが長にして預言者であるムハンマドとかれの家族、教友たちに祝福と平安があらんことを。

議長、ご来賓の皆様、ご列席の皆様。

私は、日本宗教代表者会議により本年組織された世界平和のための宗教者首脳会議十周年に代表として参加し、宗教と平和というテーマのもと、東西間の相互理解、宗教対話のためにこのスピーチを通じて貢献できますことを大変光栄に思います。

ご列席の皆様、本会議は、東西共通の問題であり、特に啓示宗教信者の間で関心が高まっている「世界における宗教と平和」というテーマについて、皆様と一緒に話し合える絶好の機会であります。私は今ここで、皆様方に世界平和確立の必要性を呼びかける要因や、世界平和確立の必要な理由を人々に説明する要因について話そうと思いません。しかし、私たち世界イスラーム連盟は、平和・平安の共同体であるイスラーム共同体を構成する世界の十二億を超えるイスラーム教徒の声を代弁して、平和のためにイスラームの立場を明確にし、人びとへの平和の呼びかけが、イスラーム共同体にとっては目新しいことではないことを申し上げます。それはクルアーンでも述べられています。

「だが彼ら（敵）がもし和平に傾いたならば、あなたもそれに傾き、アッラーを信頼しなさい。本当に彼は全聴にして全知であられる」

聖ハディース（預言者ムハンマドの言行録）には、

「本当にアッラーは平和を愛される御方」とあります。

またムスリム（イスラム教徒）の祈祷には、

「アッラーよ、あなたは最も平和を愛される御方、あなたから平和がもたらされます」とあります。そして、ムスリムは朝な夕なにいつでも、アッサラーム・アライクム（あなたに平安がありますように）と言って挨拶をしているのです。

イスラームは啓示宗教であり、神の法です。人間の作る法ではなく神が定めた正しい道なのです。それはアッラーが人類を創造する時、人間に与えた人間の質性にふさわしい宗教であり、あらゆる時と場所において適応し得るのです。至高なるアッラーの叡智により、預言者ムハンマドへの法（啓示）が人類への最後の法規範として下され、それ以前の啓示宗教に法の廃棄という制約が設けられました。そして、新たな法が下されないこと、そして預言者ムハンマド以後、預言者が遣わされないことが決定されたのです。つまりイスラームをもって宗教の完成を見たのであり、預言者ムハンマドへの法（啓示）をもって法（啓示）の完成がなされたのです。

アッラーは語っておられます。

「今日われはあなたがたのために、あなたがたの宗教を完成し、またあなたがたに対するわれの恩恵を全うし、あなたがたのための教えとしてイスラームを選んだのである」

アッラーは聖クルアーンを紛失、改竄、加筆、訂正から守られたのであります。聖クルアーンにあるように、

「本当に我こそは、その訓戒を下し、必ずそれを守護するのである」

イスラームとは何か。

イスラームとは、「アッラーの外に神はなく、ムハンマドはアッラーの

使徒である」という言葉を唱え、アッラーを信じ、天使たち、諸啓典、使徒たち、最後の審判、善悪の定命は至高なるアッラーからもたらされること、死後の復活を信じることです。一日に五度の礼拝、そして貧者に喜捨を施し、ラマダーン月に斎戒・断食をし、可能な限り聖なるアッラーの館に巡礼を行うことです。つまりイスラーム法の諸規範に基づき現世の諸事万端についてあらゆる人々に親切・丁寧に接することです。

平和に関して言えば、イスラームの本質と密接な関係にあります。なぜならイスラームの基本理念は平和と安寧に基づき、人々が相互に密接に生活し、共生・共存することであり、たとえ宗教、信条、国籍、出生地が異なっていても、紛争や戦争、暴力、テロ、隷属化、植民地化などを避けることにあります。

さらにイスラームは、人種的、部族主義を喚起する戦いを許しとせず、決して部族主義的な連帯意識を正当化しないのであります。なぜなら、すべての人間の源はひとつであり、ひとつの魂から創造されており、お互いに知り合えるように種族や部族に創られているからです。至高なるアッラーは語っておられます。

「人々よ、我は一人の男と一人の女からあなた方を創り、種族と部族に分けた。これはあなた方をお互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者はあなた方の中、最も主を畏れる者である」

最も敬虔なことはアッラーの定めた法規範を守りアッラーの道に最も献身的になることです。

アッラーからの法規範やそれへの道への説明は、人びとへ懸命に、優しく、正しい言葉で行い、彼らにアッラーへの信仰について呼びかけることです。アッラーの使徒は聖都マッカ（メッカ）で長期にわたり賢明さと良い訓戒によって布教を行いました。そして敵対するマッカの人々とも丁寧に意見を取り交わしました。しかしマッカのムスリムたちは多大の迫害を受けました。そこで彼らは預言者にマッカの人びとの迫害に武力で応報する許しを求めました。すると預言者は言われました。

「（アッラーは）戦いを命じられなかった。戦いを命じられなかった」

だが迫害が強まるに至り、至高なるアッラーから次の言葉が下り、ムスリムたちは彼らと戦うことが許されたのです。

「戦いを仕向ける者に対し戦闘を許される、それはかれらが悪を行うからである。アッラーは信者を力強く援助なされる」

不当な扱いを受けた者は同様の方法で抵抗する権利があります。これによってイスラームは敵対する不正や侵略行為に対抗すること、信仰・信条の自由を守ることが法として確立されたのです。至高なる御方アッラーは語られています。

「誰でもあなたがたに敵対する者には同じように敵対しなさい」

真のイスラームは、あらゆるテロ行為や地上における不正行為や腐敗を遠ざけるのです。一方、近年の西欧諸国の一部の人たちが、ムスリムたちに「テロリスト」「過激派たち」等という不適当なレッテルを貼ることは、それらの人たちがイスラームの真の姿を知り得ないというもっとも端的な証拠であるといえましょう。なぜなら、彼らの許でのイスラームの姿とは、イスラームを醜い姿に描写したり、イスラームのイメージを汚すことを目的とした書物等から得たものであり、イスラームそのものは無実なのです。イスラームの国々やその他の地域での政治的テロ行為について言えば、それは屈辱、不正、独裁をもたらす過激派による行為に対する反動の別の過激派の行為の結果であります。それゆえ、侵略者はイスラーム諸国の人びとを支配しようとしたり、ムスリムの正当なる権利と義務の要求を無視することは中止すべきです。

世界平和を人類に呼びかける目的で宗教者が集ったこの壇上から、私は宗教的、人道的義務感から平和を愛する人々の声に、私の声を付け加えたいと思います。ムスリムや非ムスリムの権利を尊重するために私は呼びかけます。それらの権利とはアッラーから人びとに与えられた権利であり、

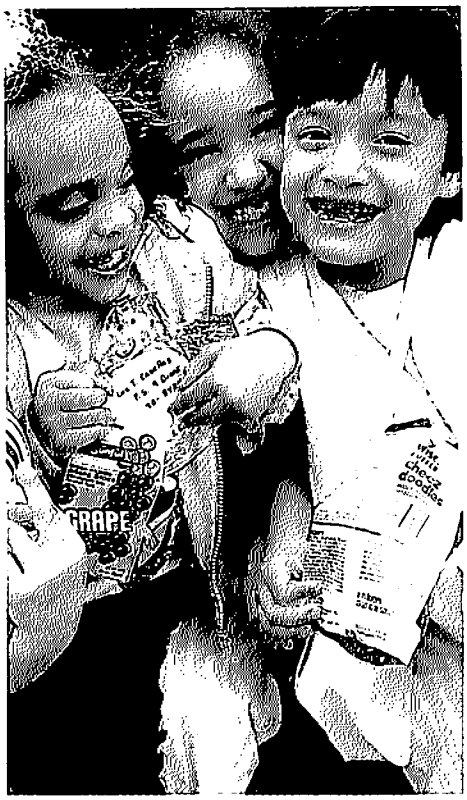
不正行為と人種差別の排除、平和的・合法的権利の要求、人権の尊重であります。

至高なるアッラーが聖クルアーンで語られているように、本当に私たちは皆、アッラーから栄誉を与えられた人類の兄弟です。

「われはアーダムの子孫の名誉を考え、海と陸にかれらを運び、また暮らし向きのために種々の良い物を与え、またわれが創造した多くの優れたものよりも更に優れたものとさせたのである」

アッラーは私たちに理性と知恵を与えて下さり、私たちが良きものに出会うようにして下さいました。また、アッラーは私たちを最も優れたものに創造して下さいました。それゆえに、私たちはアッラーの御命令と否定されたことに耳を傾けるべきです。

ここに私は、私たちすべてを真実と平和の道へ導いて下さるようアッラーに懇願いたします。アッラーは平和の主であり、アッラーから平和がもたらされ、アッラーに平和が帰されます。アッラーは常に私たちの側におられ、私たちの祈りを聞かれ、それに応えられる御方であられます。



キリスト教とイスラム教間の理解を深めるために

シリア正教アレッポ総主教
グレゴリオス・ヨハンナ・イブラヒム師

一九五〇年代以来、キリスト教徒とイスラム教徒の対話を求める呼びかけがなされています。最初に対話を呼びかけたのは北米とヨーロッパの西方教会でした。

これより以前に、特にこの二つの宗教ならびに中東のユダヤ教の間で対話が、順調に進行していました。当時の中東におけるこれら神聖な宗教の信者たちがめざしたのは、単なる文書や話し合いによる交流ではなく、実生活と共同作業に基づく日常的な対話でした。この対話に関する歴史上の知識と経験は、信者たちの間に愛と友情の精神を培うのに大いに役立ちました。

過去においてキリスト教とイスラム教の間に真摯な関係が欠けていた理由は、時には戦争という手段に訴えて行われた、キリスト教への改宗、他者に対する支配や思想の押し付けなどの暴挙が再び行われるのではないか、という深い危惧の念が存在したためです。

しかし、今日の東洋においては、これら神聖な宗教を連帯させる力は、引き裂こうとする力をはるかに上回っているとの意見の一致が見られます。したがって、対話の呼びかけは宗教間ではなく、宗教者間の対話を目的としたものです。というのも、宗教者の間の疎遠と不和の背後には、宗教上の解釈の違いが存在していたからです。しかし、神は唯一無二の存在であるため、本質は一つであることに変わりはありません。

中東諸国は、一九四〇年代以来、困難な時代を経験してきました。今なお同じような状況下に置かれている国もあります。そのため、イスラム教徒もアラブ人も、東西の宗教対話に対してきわめて懐疑的になってきました。

したがって、第一に必要なのは、中東において、神聖な宗教間の友愛関係に基づく、公正かつ包括的な平和を実現することです。第二に必要なのは、東洋人としてのイスラム教徒が、西洋人としてのキリスト教徒と対話を持つ際に、相互理解に努めることです。

ここで言う対話は、信仰や独自性を捨てることとは無関係です。また東西の宗教対話は、政治的、経済的な目的が主眼ではありません。

東洋の富の源は、メソポタミア、エジプト、ペルシアならびにシリアで栄えた古代文明にあります。これら古代は、互いに胸襟を開くことを求める対話の源泉です。東洋には、西洋のマスメディアが言うようなテロリズムはなく、我々の想像するような西洋の支配もありません。また東洋には、西洋が言うような無知もありませんし、一部で言われているように、西洋に完璧な啓蒙が存在するわけでもありません。

人類が兄弟として生きることがこの対話の目的であるなら、その目的は、人が神の形に似せて造られ、人と人の間に差別はなく、信心と徳のみを常に判断のよりどころにせよ、とする宗教の目的と一致します。

世界中の宗教の代表者が、世界平和を祈るために一堂に会したこの集いは、全世界に平和を浸透させるために祈ることの大切さを示す意味で、人間生活のあらゆる局面における手本あるいは指針となるものです。

この集いでの対話は特殊です。つまり、全員が神と対話すると同時に、相互に対話するからです。

このような友好関係の堅固な基盤があって初めて、世界中の人間の考えから生まれる災難や不幸や荒廃を追放するために、東西が力を合わせることができるのです。

私は、キリスト教やイスラム教が生まれる以前の時代にルーツを持つ、シリア正教徒の立場から、いくつか例を引くことができます。メソポタミアーたとえば、シリアとエジプトーのキリスト教徒は、イスラム教を歓迎しました。なぜなら、彼らは、教義上の違いゆえに自分たちを迫害する同胞の不当な仕打ちを一掃したかったからです。

イスラム侵攻の当初に見られた協力関係は、神が人間に授けた最も尊い賜物、すなわち自由を獲得することを目的としていました。

十字軍の名のもとに西洋が東洋を侵略した時も、同じような反発が起きました。東方のキリスト教徒は、自分たちの土地と尊厳と自由を守るために、この侵略と戦いました。

歴史的に言えば、ムガール人の侵攻に続いてオスマントルコによる占領があり、最終的には西洋の統治領となるこの地域には、広い意味でのキリスト教とイスラム教間の紛争はありませんでした。もっとも、特定の地域において、わずか数ヵ月しか続かなかったものの、有力者の意向による紛争はありました。歴史という書物には、異なる時代を通じてこの地域全体に見られる一致と協力を描く章、またキリスト教徒の専門知識の恩恵を語る章が豊富にあります。

問題は、いかにすれば、東洋人としてのキリスト教徒とイスラム教徒が、西洋との関係を築くことができるかという点です。

私は、東洋人の経験を東西協力の糸口にすべきだと考えています。今日、イスラム教はほぼ世界中に普及しています。西洋はイスラム教の影響を認め、イスラム教のイメージを歪めたり、その役割を認めなかったり、あるいはその経験から学ぶのを避けようとすることを、止めねばなりません。

しかし、まず最初に、東洋と世界中に離散したイスラム教徒が理解しておかなければならないことがあります。それは、福音と使徒の教えと教皇勅書に従うキリスト教は、イスラム教の役割に疑問を抱いたり、そのイメージをゆがめたり、あるいはイスラム教徒について偽りの情報を流したりする行為とは、まったく無関係だということです。

キリスト教は何よりもまず愛の宗教です。イエス・キリストは、平等と無差別をもってキリスト教の基礎と成しました。

使徒パウロはこのように言っています。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、私たちは知っています」（ローマ人への手紙8：28）

彼はこのようにも言っています。

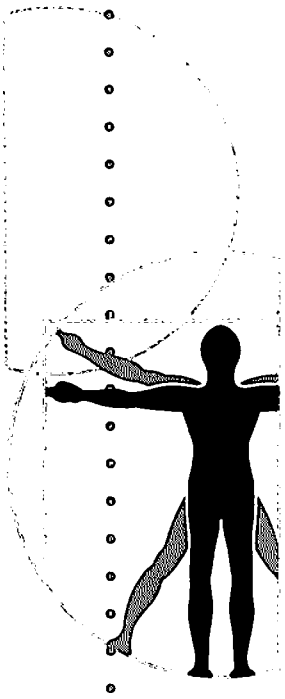
「ユダヤ人とギリシヤ人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自身を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです」（ローマ人への手紙10：12）

またこのようにも言っています。

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです」（ガラテヤ人への手紙3：28）

イスラム教の中に、キリスト教に対するこのような理解が生まれた時、初めてキリスト教とイスラム教の間に、東洋においてはさらにユダヤ教とイスラム教の間に、対立、不一致、疎遠、分離を求めるあらゆる考えが、崩壊し、消え失せるでしょう。

このようなイメージによってのみ、東西の協力は再開されるでありましょう。



他宗教の英知に目を向けよう

ADL諸宗教対話部部長（チーフ・ラビ）
ディビッド・ローゼン博士

宗教は、人間の存在に意味づけと方向性の認識を与えようと務め、その事によって私たちが誰であるか、また何であるかについての理解を促します。従って宗教は、個人、配偶者、家族、共同体、国家など人間のアイデンティティを構成するさまざまな要素と分かち難く結びついています。

これらは人間のアイデンティティの拡大する輪であり、その各々にはしかるべき場所と価値があります。私たちは、自分自身を構成するこれらさまざまな要素を無視するという危険を犯しています。確かに社会学的分析によれば、現代社会における疎外ならびに周囲の自己に関する正しい認識の欠如は、人間のアイデンティティを構成する伝統的な要素の欠如に起因するとされています。

これら人間のアイデンティティの輪は、螺旋状に外に広がり、家族などの小さな領域から、地域社会や国家などのより大きな領域を経て、ついにはあらゆる人々を一つに結びつける最大の輪に至ります。しかし、小さな領域が物理的或いは心理的に脅かされていると感じると、逆の現象が起こります。つまり脅かされているアイデンティティの構成要素を守るため、小さな領域は人間のアイデンティティの大きな輪へと広がっていかず、他者と断絶し、孤立してしまうのです。このような状況において、宗教は狭量な精神に荷担するのみならず、その温床となり更に事態を悪化させる役割を担うことがあまりに多いのです。

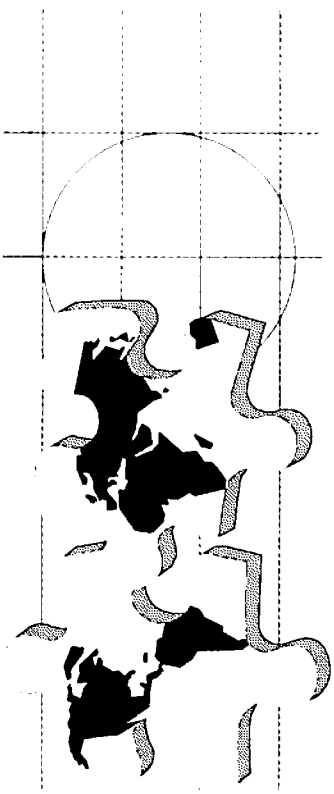
他者との断絶につながる恐怖と不信感をコミュニティから一掃するため、私たちはコミュニティの物理的な安全を確保するのみならず、コミュニティ同士を疎遠にさせる不信感や、敵意のもとになる偏見や固定観念、ならびに事実が誤って伝えられることに対抗していく必要があります。なぜならば、宗教は人間のアイデンティティのあらゆる側面と深く結びついており、宗教間の相互理解は偏見という障壁を壊し、相互の敬意と信頼を生み出すプロセスにとって無くてはならないものであるためです。他者の中に人間性とアイデンティティを認めることができて初めて相互の連帯が可能であり、紛争の原因となる誤解、不信感、恐怖感、疎遠な関係をなくすことができるのです。

最も根強い固定観念と偏見は、差し迫った脅威を与えていると思われる対象に向けられることが多いのですが、コミュニティ同士が疎遠になればなるほど、相手を無視し事実が誤って伝えられる可能性が高まります。このような現象は、いわゆる西と東と呼ばれる地域の間で常に起きていました。世界が狭くなり、共通の未来のための持続可能なエコシステムを保証するために、私たちが益々相互に依存するようになるにつれ、お互いを理解し尊重し合う必要性はなお一層差し迫ったものになりました。このためには、東西の宗教の相互理解が中心的な役割を果たします。なぜならば、先程も申し上げたように、宗教は私たちのコミュニティの独自性と集団的な感情において、中心的位置を占めているためです。

この問題に効果的に取り組むためには、神学的謙虚さとでも呼ぶべきものが必要です。私たちの宗教的伝統は全てそれぞれの文化的背景から生じます。人類の多様な経験と英知の全てを包括できる宗教は一つもありません。また、真理、実在、神或いはそのようなものを表すことばは、いかなる単一の宗教的伝統よりも、また、全ての宗教的伝統を集結したものよりも偉大であることは、言うまでもなく明らかです。従って私たちは、他の信仰の霊的道徳的見地を受け入れるとともに、進んで他の宗教的伝統の持つ智恵を見出し、それに学ぶ必要があります。このような霊的啓発は宗教の責任と見なすべきです。

私は今、以前ハーバード大学におられた偉大な神学者であり対話の人でもあるスウェーデン・ルーテル教会のクリスター・ステンダール主教の賢明な助言を思い出しています。ステンダール先生は、宗教対話のための基本的な三原則に従うことを勧めています。第一には、他のコミュニティを見るときは常にその最良のものに目を向けることです。第二には、自分たちを理解するのと同じように他のコミュニティを理解するよう務めることです。第三には、神聖な渇望の念を抱く余裕を持つことです。他の宗教的伝統の中に特有の美や見識を見いだせることは、決して自身の宗教に対する背信行為にはなりません。

東西の宗教対話では、東西の多様な宗教的伝統の美と英知を見出すことに主眼を置くべきです。ですから、会議や出版物などの計画的活動を通じ、私たちの幸福と持続可能な未来にとって重要なテーマや問題について、他の宗教の考え方を取り入れながら自身のコミュニティを啓蒙する必要があります。そうすることによって、私たちは一つの肉体の手足であることを実感すると同時に、全人類のため私たちの地球全体のために、活かさねばならない結集された英知によって、私たち全てが貴重な貢献者であることを、より良く認識できるでしょう。



テーマ③ 宗教者間の連帯と人類に果たすべき役割

「平和の器」として

日本聖公会京都聖ヨハネ教会司祭
パウロ 大江真道師

地球上に沢山の河があるようにこの地上には多くの宗教が存在します。河の源流は小さな泉ですが流れ下って多くの支流を集めて大河となります。しかし逆に、世界の諸宗教は歴史の経過とともに単純な泉から沢山の支流となって分流しています。かつて、哲学者カール・ヤスパースが機軸時代(Axial Period)と呼ぶ期間(BC1000—AD500)に宗教が現れました。創始者、哲学者、祖師たちは神話や古典を人間実存の深みから把握し直して自己を発見して、全世界に内面的に対峙し、解脱と救済を達成し、偉大な宗教的真理を発見し、人類に示し、人間存在のともしびとしました。しかし、宗教教団は分離、分化し、複数の宗教が対話し、連帯する機会は歴史上稀でした。

二十世紀は覇権を握った大きな連邦や帝国主義が崩壊し、諸権利を奪われていた群小民族国家が分離や独立を求めつつ、共存と連帯を希求してきた歴史でありました。世界の人類は二十一世紀に向かってあらゆる困難を排除して連帯し、平和を求めていかねばなりません。しかし、これは政治家だけの任務だけではなく、世界の諸宗教者こそが、そのためにまず連帯・和解し協調すべきであります。

私たちが他者をよく知ろうとする場合どうするでしょうか。まず、その人についての情報を集め、次にその情報を分析して判断します。しかし他者を本当に理解するための最も良い方法はその人と話してみることです。話し合ってみると、自分の理解の誤りを認めることができます。更に時間をかけてその人と交際していくとき自分と他者との境界線は自然に取り払われてきます。諸宗教間の対話も同じであると思います。信念体系(Belief System)や、究極の実在(Ultimate Concern)について、象徴の表現方法(Symbolic Expression of Religions)や言語(Religious Language)が異なっているお互いに知らない宗教について各宗教者は異なる宗教の歴史や教義を謙虚に学ぶことが大切です。そして、その宗教の担い手である専門職の人々や信徒の生活・実践について知るとともに、その人々との交わりの場を持つことができるなら対話は促進される筈です。

今夏、このように聖フランシスのアッシジの地で行われた諸宗教の対話と十年前に比叡山で行われた会議の精神を記念して異なった宗教者たちが互いにここに集うことが出来たのは喜ばしいことと思います。

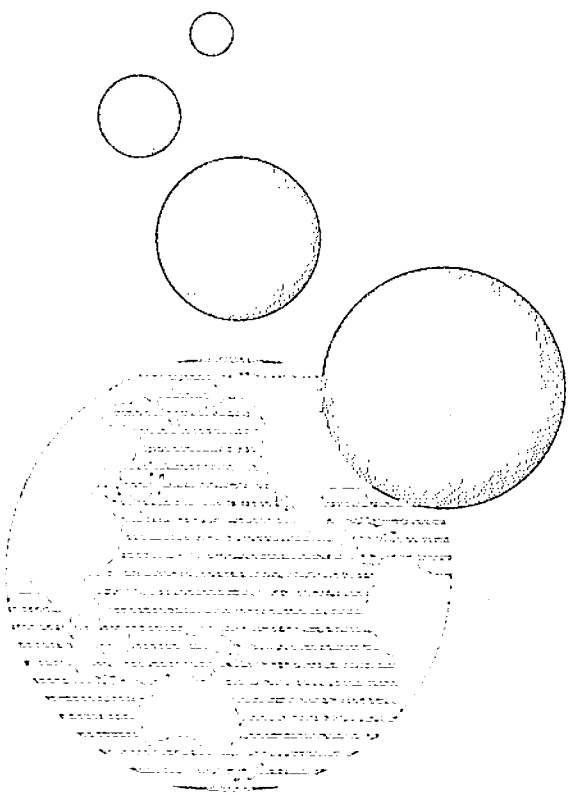
歴史の上で宗教者が常に直面してきた課題は、国家や世俗の政治との関わりでした。日本の歴史をみますと宗教者は政治家たちに奉仕させられてきました。また近代日本においては国策に合致しないとされた宗教は弾圧されました。宗教的価値観はたえず、政治的価値観に従属させられてきました。明治以降の日本近代史をみると第二次世界大戦の終結までは明治憲法で条件付きの自由を得たとはいえ、諸宗教は国家の厳しい統制下におかれていて、宗教者たちは完全に国家の政策に服従させられました。明治以前の日本の宗教も全く世俗の政府に服従させられてきました。しかし、弾圧を堪え忍んだ仏教の日蓮宗不受布施派やカトリック・キリスト教徒たちがいました。日本の軍国主義はアジアの他民族を圧迫しましたが、国内で政府の厳しい弾圧で迫害されたのは大本でした。また、長い時代を通して

差別された集団と連帯し彼らを守り続けたのは浄土真宗の僧侶と信徒であったことをこの機会に想起したいと思います。

日本は戦後、信教の自由が保証された結果、世界の状況に対応して諸宗教の対話も促進されています。最近では、マザー・テレサの事業に禅宗の若い僧や信徒が連帯し奉仕活動をしていると聞いています。私たちの国、日本では一九九五年の阪神淡路大震災で多くの人々がボランティア活動に参加しました。この相互援助の働きは日本人に人間が互いに愛し合い助け合うことの喜びを実感させてくれました。人類の歴史を見ますと宗教がもたらす価値観は世界の文化と政治に深く影響を与えております。しかし宗教戦争など他民族迫害に同調した恥ずべき愚かな行動も指摘できます。日本の宗教もかつて体制側のイデオローグとして他宗教弾圧に一役買った事実があり、更に明治以降の日本の諸宗教のたどった道は今日の視点から批判的に認識・検証されねばなりません。日本の急速な近代化は結果的に教育や社会福祉を宗教者に押しつけてきました。戦争への準備のため社会福祉は押し退けられ、それを担った宗教者さえも政府は圧迫しました。かつて日本の宗教者たちはアジアの人々への軍事的侵略を許容し、民族の悲しみを感受し、戦争を阻止するための自覚と認識をもっていませんでした。

一つの民族の悲しみは人類全体の悲しみであり、一つの国家の安定と平和は人類全体の喜びであるべきです。しかし、政治的価値観を至上として宗教的価値観を無視するとき、人間の精神的な分野では悲劇がおこります。日本の近代国家当局は国民の幸福より国家を優先しました。そして、社会事業などは宗教者が担当してきました。しかし、国から非民族的宗教として位置付けられていたキリスト教徒さえも献身的な社会事業や教育事業における自らの働きを「国家の器」として自覚し、自らの意志で国家に服従していました。彼らの信仰と意識の中にも国家の存在は大きなウェイトを占めていました。宗教者の人類に対する責任は、国家権力や民族的なエゴイズムを超越した普遍的な価値観を再認識することです。それは各宗教が自分の宗教に忠実であろうとするとき、その教義から必然的に導き出されるものである筈です。

宗教者は彼らの置かれた場所で「国家の器」や「民族の器」であるよりも更に普遍的な「社会の器」「人類の平和の器」となるべきであります。それを可能にする大きな力は異なった宗教者間の連帯です。「平和の器」とは私の属する小さなプロテスタント教派の日本聖公会が一九八七年に組織成立百年の式典で誓ったモットーでして、この言葉は聖フランシスの祈りの言葉です。宗教は他者の救いのために、人類の平和のために存在すべきものです。自分の宗教や教派の存立にさえそれは優先されるべきであると私は考えています。自分の宗教・宗派・教派がそのためなくなったとしても、人類の平和に役立つならば幸いであるとすべきです。今こそ世界の宗教者たちは世界の平和のために祈り、連帯すべき時であります。



宗教のるつぼインドから和解の提言

シーク教「バンガード・フォー・ピース協会」会長
スージャン・シン・ウーバン師

人類進化における現在の段階

人類は、歴史を通じて最も悲惨な時期の一つをくぐり抜け、やっと、人類が生き残るためには、来るべき二十一世紀においては地球規模で考え、諸国間で協力しなければならない、という結論に達しました。植民地を求める侵略戦争は、一九一四～一八年の第一次世界大戦に発展し、世界は、いわゆる先進諸国と、さらに搾取を受ける第三世界とに分断されました。この大戦による略奪に飽き足らず、三つの独裁国家は、一層大きな略奪のために手を結び、第二次世界大戦を勃発させました。拷問と大量殺戮が巨大な規模で行われたこの戦争は、極貧と失業ならびに故郷を追われた人々の外国への大規模な脱出、すなわち難民問題を生み出しました。

第二次大戦後の五十年の間に、大きな戦争は回避されたものの、全世界で百三十を超す小規模な戦争が起こりました。古傷はいまだその傷口をさらし、人類は全滅の瀬戸際に立たされています。

科学の役割

空前絶後の繁栄と、その結果もたらされる平和の先ぶれとしてもてはやされた科学は、戦争、あるいは国家間の果てしない競争や紛争の手段となってしまいました。そして埋められぬほど深い溝をつくりだしました。核を「持てる者」が「持たざる者」の運命を左右するようになり、核保有国の間で「相互確証破壊（ＭＡＤ）」の競争が始まりました。

科学は死の兵器を配備した誇大妄想者に奉仕するようになり、偶発事や誤報による戦争の脅威が生まれました。核行使の警告時間があまりに短くなったため、誰かが不注意にせよボタンを押してしまえば、人類の破滅は避けられません。

一触即発の場にいること

六万基を超える核弾頭が二つの旧超大国に貯蔵されています。これは、地球上の老若男女を含む全ての人間一人当たり三トンのＴＮＴ爆薬に相当します。核兵器の他にも、人間の肉体と精神に対して強力な破壊力を持つ生物化学兵器が存在します。殺人レーザー光線やスターウォーズ計画の開発などは、心胆を寒からしめるものです。

恐ろしいほど大量の通常兵器が、ＮＡＴＯおよびワルシャワ条約機構諸国に常備されています。全世界で約二千二百万人が、いわゆる祖国の防衛のために常時、武装態勢にあります。一億個の対人地雷が六十八カ国に埋設されており、世界中で毎日、罪のない市民が命を落としたり重い障害を残す重傷を負ったりしています。テロリズムとイスラム原理主義の資金源となっている麻薬中毒と麻薬密売は、かつてない水準にまで増加しました。

食料とワクチンの不足から、毎分三十人の子供たちが亡くなっています。全世界の軍事予算を合計すると、一分当たり百三十万米ドルになります。全世界で五億人がひどい栄養失調にかかっており、数百万人が必要な最低の栄養をはるかに下回る食事でやっと生きています。原子力潜水艦一隻の建造原価は、発展途上国二十三カ国の一億六千万人に及ぶ学齢児の年間教育予算に相当します。全世界からマラリアを撲滅する世界保健機構のプログラムには、四億五千万ドルの費用がかかります。これは世界の軍事支出の半日分にもなりません。世界人口は西暦二〇〇〇年に六十億人に増加すると予想されており、それからほどなく、八十億人という驚異的な数字に達するとされています。地球は過密と飢餓に突入しつつあります。家庭を土台とする文明社会の考え方は時代遅れとなり、ゲイの文化が台頭しています。

平和の必要性

以上述べたことから、人類が絶滅の危機を回避して生き延びるためには、平和の実現が急務であることは明らかです。平和とは、単に戦争がないことではなく、人間の意識が幸福で創造的な状態にあることが基本です。平和には個人、集団、国家、そして国家間など多くの次元がありますが、これらはすべて分かちがたく結びついています。人が平和を求めることは、幸せと喜びを求める生来の本能と同じくらい古いものです。戦争、破滅の恐怖、危険で不安な状態などは平和の反対の極に位置するものです。

平和の可能性をもたらすためには、貧困、不公正、失業、難民、人口過剰などの問題を改善しなければなりません。

宗教の役割

あらゆる宗教は、あわれみ、協力、分かち合い、思いやりなどに重きを置いてきました。歴史上のあらゆる宗教は、非暴力を信条としてきました。世界のあらゆる宗教の本質に、そして宗教間の違いを超越したところには、霊性ならびに万物の明らかな一体性が存在します。賢者、聖人あるいは預言者と呼ばれる人々による、至高の力すなわち神との一体性の経験は、あらゆる宗教と人類共通の倫理の基盤となるものです。この経験はまた、人間の意識をより崇高なレベルへと高めるための輝かしい道しるべでもあります。今こそ、地球規模で考え、地球規模で計画し、一つの世界連邦国家へと発展させることによって、戦争を撲滅させる時なのです。人類進化のキーワードは、神を信じること、愛、そして人類が皆同じであるという認識です。これらによって、私たちは物理感覚的生活から精神的生活へと進歩を遂げ、調和と幸福に満ちた世界を創造できるでしょう。

インド、偉大なる歴史のるつぼ

ヴィシュヌ神の化身であるラーマ、釈尊、ジャイナ教の創始者マハービーラ師、シーク教の神についての教義を作ったとされるナーナク導師、シーク教の聖人ファリッド導師を生み出したこの国は、常に平和のために尽くしてきました。さまざまな宗教が共存しているという点では、世界のどの国にも引けをとりません。分割による宗教的分離にもかかわらず、この国にはイスラム人口ではインドネシアに次ぐ世界第二位の、九千万人のイスラム教徒が住んでおり、その崇高な思想でインドの土壌を豊かなものにしています。また一千五百万人のキリスト教徒がいます。最初のシリア正教会がインドの地に築かれたことは、私たちの誇りです。さらに、ヒンドゥー教とイスラム教の橋渡しをする崇高な哲学を持ったシーク教徒が二千万人います。インド人口の大多数を占めるヒンドゥー教徒は、適合性と協調性に富んでいます。仏教徒、ジャイナ教徒、ユダヤ教徒、スーフィー教徒、さらにバハーイ教徒、アフマディー教徒もいます。以上の事実から、私たちが「多様性の中の統一性」に誇りを抱いていることが、おわかり頂けると思います。

平和の偉大なる使徒マハトマ・ガンジーが、非暴力、不服従という独自の方法で当時の支配者である英国から、インドの独立を勝ち取った背景には、このような風土があります。ガンジー精神の継承者であるパンディット・ジャワハラル・ネールは、非同盟運動の基礎を築き、開発途上の世界で苦しんでいる弱者に平和の希望を与えました。また、ノーベル平和賞受賞者のマザー・テレサは、あらゆる宗派の貧しい人々への奉仕に生涯を捧げました。

提言

過去の傷を癒し、信仰を異にする諸国間に和解と友情と協力関係をもたらすために、世界のさまざまな地域に宗教指導者和解委員会を設立することを提案します。この委員会は、過去を許し、忘れるために貢献し、二十一世紀における愛と友情と平和の新たな時代の先駆けとなります。委員会は、東京、チベット、ニューデリー、南アフリカなどの非核地帯に設置します。時間的余裕がないため、委員会事務局は早急に開設しなければなりません。これらの委員会は国連機関の指導のもとで機能するべきです。

草の根レベルの諸宗教対話とURI

米国聖公会カリフォルニア教区主教
ウィリアム・E・スウィング師

まず最初に、ジョージ・L・ケアリー・カンタベリー大主教から、祈りを込めてご支援申し上げますと申しつかってまいりましたことをお伝えしたいと存じます。

日本宗教代表者会議と天台宗の皆様に、比叡山という聖地におけるこのような気高い努力の集いにご招待頂きましたことを厚く御礼申し上げます。また大本の皆様にも御礼を申し上げます。大本の方々は、私が生まれる以前に、日本の宗教協力活動に真剣に取り組み、想像を絶する受難を経験されました。私と妻のメアリーを温かく歓迎してくださったことを心から感謝しております。

これからお話しさせて頂くことは、私の長年にわたる祈り、瞑想、あるいは道徳的闘いの中から生まれたものです。平和を求める神の御心は人間の理解を超えるものですが、なおその御心に忠実たらんとしてきた私の最善の努力をこのスピーチに込めたいと思います。また本日の私の話は、カンタベリー大主教、英国国教会、あるいは聖公会カリフォルニア教区の公式見解ではありません。あくまでも私個人が導きに従って行いを重ねてきたことをお話しいたします。

「宗教協力と世界平和」は、課題として既に称賛すべき努力を引き出してきました。草の根レベルの宗教協力は、病院、刑務所、大学における教会活動を通じ急速に出現しつつあります。世界中の都市において、宗教協力のための委員会がめざましい勢いで組織されています。国内あるいは多国間の宗教協力さえも生まれつつあります。ここにご出席の皆様は、国際的な宗教協力組織が素晴しい成果をもたらしてきたことをよくご存知のことと思います。ヨルダン皇太子設立による諸宗教対話王立研究所などのイニシアチブは、現在進められている多くの対話に関わっています。これら一つ一つの努力が、全世界にまたがる宗教協力活動の基盤となっているのです。これらの活動はどれも心から感謝し賞賛するに値します。

では、既に存在する宗教間協力の他に必要なものがあるのでしょうか。これはきわめて重大な問いです。私たちは、全世界の幸福のために、拡大されつつある諸宗教間の協調と協力に対してオープンに語り合う必要はないのでしょうか。この問いに答える努力を通じて、宗教間のホスピタリティーと対話と行動の核を大きく広げようとする、宗教連合期成会（以下URI）という組織が生まれつつあります。

現在、世界中で宗教弾圧が行われています。世界の至る所で、宗教に基づく憎悪が子供たちに植えつけられています。世界中で宗教紛争が起きています。しかし、いまだに宗教は、このような宗教的病弊と戦うために力を合わせていません。URIは、全世界に霊的な希望をもたらすため、宗教界の力を合わせようと努めています。今のところ、宗教界の連帯は表面に出てきていませんが、これが表に現れれば、平和創造と地球共同体建設のための豊かな資源になるはずです。宗教が昔ながらの宗教的競争を乗り越え、宗教協力の新しい次元へとほんの一歩踏み出すことができれば、全世界に果てしなく大きな希望が訪れるでしょう。

宗教会議において、発言者は宗教全体によるアプローチを求めます。しかし、そのようなアプローチを可能にする世界規模の総合機構を提案する方はいらっしゃいません。また宗教が世界の傷を癒すことについてお話しされる方はいても、まず最初に宗教界内部の傷を癒すこと、あるいはそれを可能にする機構についてお話しになる方はいません。URIは、諸宗教

間の世界規模の国際協力と霊的伝統を結集して、そのような機構、すなわち宗教連合のような機関をつくろうとする試みなのです。

ＵＲＩのアプローチがどのような点で独自であるか、ご紹介しましょう。

一、私たちは活動の出発点を若い世代に置きました。若い世代は、今の宗教界を支配する現実とは異なった、新しい形の宗教協力に対し、世界的な希望を抱いていると私達は信じているからです。

二、霊性と癒し、霊性と環境、霊性とビジネスなど、霊性に関わる現代的な動向を取り入れたいと考えています。従来の見方からすれば宗教とは関係ないが、宗教の崇高な目標に貢献できるような方面から、豊富なエネルギーと洞察力が提供されています。

三、世界的な希望に関する討論には、女性の意見を取り入れたいと考えています。宗教指導者の地位には女性がいない場合が多いためです。

四、私たちの最初の活動は草の根レベルで行うつもりです。ＵＲＩの特質は、現在の階層構造の上層部ではなく、草の根レベルから生まれるでしょう。もちろん、話し合いの場には主要宗教の指導者の方々をお招きし、途中経過をそのつどお知らせします。皆様のご批判を心待ちにし、いただいたご批判に対しては真摯に取り組みます。そして、宗教連合の最終的な目標は、宗教指導者の方々に恒久的な対話のための安全な話し合いの場についていただくことである、という点をご理解いただきます。しかし、当初は、偉大な宗教指導者の方々は宗教連合の創設に関わりません。そういった機関が設立されるとすれば、それは宗教や霊的運動の草の根レベルのみから生まれるものでなければなりません。

五、ＵＲＩの活動資金は、非宗教的な財源に求めたいと考えています。宗教団体から提供される資金は、たいてい条件付きである場合が多いためです。私たちは、宗教に対して世界的な希望を抱く、普通の人々に資金を提供してもらうことにより、共通の話し合いの場をつくりたいと考えています。

六、ＵＲＩの組織構想は、宗教的、霊的分野から可能な限り幅広く意見を取り入れ、自由な発想の中から生みだしたいと考えています。ケース・ウェスタン・リザーブ・スクール・オブ・マネージメントにお手伝い頂き、この組織構想が自由かつ自然発生的であるよう努めております。

七、私たちは、わずらわしい官僚主義を避けたいと考えています。二十一世紀の初めに実現する技術的可能性をもってすれば、ほぼ全員が巨大なビル群に収容されるような官僚機構なしに、連絡をとったり相談したりすることができるでしょう。

次はＵＲＩの活動年表です。

・九九六年　事務局を開設し、常務理事とスタッフ各１名を採用しました。

一九九七年　理事会を組織し、三大陸で地域サミットの開催を始めました。最近では、世界中から二百人がカリフォルニアのスタンフォード大学に集い、ビジョン、使命ならびに価値観などの基礎を築く作業を開始し、代表制、管理運営機構などに関する研究開発に着手しました。

一九九八年　世界の十二地域で地域サミットを開催します。六月に再びスタンフォード大学に集まり、憲章の起草に着手します。また国際諮問委員会を発足させます。

一九九九年　世界二十五カ国にＵＲＩの支部を発足させ、六月には憲章を起草する作業を継続します。

一九九九年十二月三十一日　いかなる宗教の信者も他の宗教の信者に危害を加えない、という、二十四時間の全世界宗教休戦を呼びかけたいと思います。この一日は、神の名のもとあるいは宗教的理由で加えられた被害を省みるために捧げられます。深い悔恨のつとめと共に新たな宗教協力の誓いを呼びかけるつもりです。

二〇〇〇年六月二十六日　あらゆる宗教の信仰者を誘って、一緒に町や

村々、都市を歩き、その終りに憲章に署名してもらいます。

二〇〇一年六月　ＵＲＩは解散し、宗教連合が発足します。

この過程全体を通じ、私は可能な限り触媒の役割を果たすつもりでおりますが、同時にきわめて込み入った教区を受け持つ主教としての務めも続けるつもりです。私とＵＲＩは、宗教連合をつくりだす人達が立つための足場を築いているに過ぎません。宗教連合創立の暁には、足場と私はお役ごめんになり、新たな創造物に生命が吹き込まれ、全世界の希望となるでしょう。

このような場にお招きいただき、尊い使命に加わる栄を賜わりましたことにあらためて感謝いたします。

人類平和を目指した世界宗教者の友好と連帯

韓国仏教宗団協議会会長
宋　月珠師

敬愛する世界各国の宗教指導者の皆様。

比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」の開催に際し、韓国佛教界を代表いたしまして、この会場にご招待いただきましたことを、大変な光栄に思っております。

本日、このような由緒ある古都・京都におきまして、共に集い、私たち宗教者の友好と連帯を築き上げ、世界平和と人類の発展に、寄与する宗教の役割について、互いに会話を交えることができますことを、心より大きな感動と喜びとして感じております。

十年前に、日本の天台宗総本山であります比叡山において始められました「比叡山宗教サミット」以降、この集いは、世界各国の様々な宗教者が集い、人類が直面している懸案と、宗教者の責任を論じる重要な会議として、世界に注目されておりますことは周知の通りであります。

このことは、日本宗教指導者の歴史と社会に対する使命感の結実であり、人類に対する限りない愛情によって、成し遂げられたものと拝察し、韓国佛教界を代表いたしまして、ここに慶賛の辞を述べる次第です。

また、このたびの集いの重要性に共感し、世界各国より集まられました宗教指導者の皆様に対し、敬意を表するものであります。

今世紀に入り、人類は生産力の飛躍的な発展により、物質的には今までにないほどの豊饒さを得ました。科学と先端技術の発展は、これまでの人類が想像もできないほどの水準に達しており、人間の能力の限界を超えるものに至っております。このような科学の発展の成果により、地球以外でも生命は存在しているだろうかという探求も大きな進歩を見せております。

しかし、生産力の発展、科学技術の発展、物質的豊饒ということが、人類に肯定的な恵みのみをもたらしてくれるとは限りませんでした。

今世紀に入り、さらに多くの資源と市場を拡大するため、大規模な国際戦争を二次にわたって繰り広げることとなりましたし、また、局地戦に至っては数え切れないほどの有様です。

一つの都市を瞬間に焼け野原にしてしまう大型の殺傷武器が実際に使用され、多くの犠牲者を出し、国家間でそのような武器を開発し所有しようとする競争が、激烈となっているのです。国家が自国民族の手を汚さずに相手を抹殺することのできる核兵器の保有は、国力の象徴として台頭してもきました。

幸いにも、国際平和と生命の尊さを愛する私たち宗教者を始め大勢の良心的な人たちの貢献によって、このような競争は少なくなっているとはいえ、未だ完全に解消されたとはいえません。

更に、科学と技術の発展のためにもたらされた深刻な弊害は、自然形態の破壊ということであります。

全地球的次元で進行される開発で資源を枯渇させ、無分別な資源の浪費で水と空気を汚染させ、そうして私たちは悲しいことに人類生存に対して悲観的展望を持つまでになりました。

絶滅に瀕する生命体の数が日毎に増加していく一方、人間の欲望で変化させられる生命体が生まれているのです。人為的に操作された生命体は、それがたとえ人間の寿命を延ばすことに寄与するかも知れないとはいえ、このような行為による自然破壊の攪乱はいうまでもなく、究極的には生命の危機を自ら招くことになるかも知れません。

このような危機に接して、私たち宗教者は深刻なる反省が必要なのです。今こそ、全宗教者は世界と人類が目指す普遍的価値を宣揚する時節にあるのです。すなわち、対立と葛藤を止揚し、和合と友愛の実践を教え説くのです。宗教は、全ての民族と人種の区分、階級と身分の差別、理念と思想の違い、それらを越えて存在する全てのものに対して尊厳を認め合うことを実現しようとするものであります。

しかしこのような素晴らしい教えにも拘わらず、逆に宗教は、宗教によって生じた葛藤と対立が民族紛争の原因になっていることや、人類の危機に対して正しい代案を提示することもなく、その危機の原因を迷信的に解釈し混乱を増大させてしまう場合もみられます。

西洋とは異なり、東洋での宗教の本来持つ意味に「究極に対しての教え」ということがあります。それは、世界と宇宙、そして生命体の関係について悟り知ろうという過程であり、これを先に證得した人がまだ悟っていない者たちへの道標となること、そのことを宗教と呼んでいるのです。

特に、仏教は、この悟りの過程を重視し、全ての存在や現象から教えを得ようとするのです。虚空に舞い落ちる木の葉一つからも悟りを得ることができるというのが仏教の教えの要諦なのです。

仏教の世界観からみるとき、私たちが生きるこの世界と宇宙は巨大な一つの水瓶と同じで、互いに入り乱れている構造であり、人間はそれを形成している一つの要素でしかありません。

水瓶が壊れてしまえば、その中に水は再び蓄えることができません。それと同じで全ての存在するものは、相互に依存しあっているのです。

海水の中に数え切れないほどの微細なプランクトンが存在しているお陰で自然界はかたち創られているわけであり、人類もまたその関係の中にいるのです。

そしてこのような精神こそが、そのまま私たち宗教者の連帯として目指すものであるといえます。多様な宗教間の認め合いと友好こそが連帯の根本精神といえるならば、そのような連帯を通じ、私たちは世界の平和と、人類の普遍的価値観の具現と、生態系の破壊による生命の危機からの解消をなすために、共同で対応しなければならないのであります。

各国の宗教指導者の皆様、二十一世紀は生命尊重の時代とならなければなりません。今世紀に人類がたどったような、生命の価値が手段化された否定的な物質文明の時代ではなく、人類普遍の価値が具現され、一切の万物が一体となる「一生命精神」が具現される精神文明の時代としなければなりません。

その実現のために、私たち宗教者が連帯の模範を見せることができるならば、人類の未来は決して絶望的ではないでしょう。

それ故に、この度の集いはとても意義深く歴史的な出来事であるといえます。私たちの友好と連帯への忍耐と弛まざる努力により、地球の未来を清涼なる気運で充満させ、輝かせることができるでしょう。

ここに、この席の因縁功徳によって、我々が意とすることを成就せんことを合掌祈願し、ご招待いただきました日本宗教代表者会議に深く感謝するとともに、今後の発展と隆盛をお祈りいたします。

カンサハンニダ

テーマ④ 宗教対話の歴史と未来

個人レベルの交流を基本に国際ネットワークへ

ニューヨーク宗際センター所長
ジェームス・パークス・モートン師

私たちの仕事は未来について考えることです。今日の午後の部会の最後の部分では、宗教対話の将来の展望、すなわちこれをどう促進するかに焦点を合わせています。私が申し上げたいのは、宗教対話の発展は、三つの異なる要因に非常に大きく依存しているということです。第一は宗教対話が生じる情況、第二はそのスタイルあるいは宗教対話が生じる時の一種の雰囲気、第三は宗教対話にだれが招かれて参加するかです。

私はこれら三つの要素がきわめて重要であると考えております。なぜならば、近年の宗教対話の多くが、残念ながらこの会議も例外ではないと思いますが、宗教対話のほとんどが非常に格式ばった堅苦しいものであり、その参加者のほとんどが、専門の宗教指導者や官僚などの中高年男性で占められています。それ自体は少しも悪いことではありません。しかし、全体的に見れば、宗教対話のスタイルは、非常に堅苦しく、専門的で、男性中心、中高年中心の傾向にあると言えましょう。このような会議はどれも参加者の顔ぶれが似通っています。それが悪いというわけではありません。しかし、私たちは集まるたびに顔を合わせているわけです。

通常ほとんどの宗教会議においては、情況とスタイルが非常に組織化されています。あまりにも過度に組織化されているため、異なった背景、信仰、スタイル、慣習、経験を持つ人々が、心の底から霊的体験を分かち合うことはほぼ不可能です。非常に大きな会議においては、私自身もやっておりますように、スピーチを読み上げるのは、気持ちを分かち合うことの妨げとなります。聞いている人々が反応を示す本当の機会がありません。皆さんが私の話しをお聞きになり、私が完全に間違っている、自分の経験は違う、と発言することは、会議の構造上あり得ないようになっているのです。要するに、非常に格式ばった会議においては、対話は本当は歓迎されておらず、したがって尊重されていないように見えるのです。

このように申し上げましたが、こういう情況は必然的なものではありません。と申しますのは、定期的に開催されている非常に大きな宗教会議は色々あり、雰囲気もスタイルも参加者も、全く異なっています。ですから、私たちのような者は、そこから学べることがあるのではないかと思います。それらの会議は規模こそ大きいものの、この会議とは違います。どういう点で違うかといいますと、男も女も、老いも若きも参加しています。専門家も先住民族も一般庶民も参加しています。一方、私たちは専門家ばかりです。私が申し上げている会議の類は、規模は大きいですが、参加者が小さなグループごとに集まって、自分の気持ちを表現できる構造になっています。具体例を申し上げましょう。過去十五年間、フランスのテゼーで非常に大きな会議が開催されています。その会議において、この方法が完成の域に達しています。夏に開催されるこの会議には、四、五千人が参加し、そのほとんどが若者です。この大きな会議はふつう、小さなグループと時々開かれる大きなセッションで構成されますが、小グループでは真の分かち合いが行われます。

過去百年間の宗教対話の歴史を振り返ってみますと、大きく二つのグループに分けることができます。私が申し上げたいのは、本当に必要とされ

ているのは、第三のグループに属する宗教対話であるということです。少し歴史を振り返ってみましょう。

第一のグループに属する会議は、ほとんどが一人の真の意味でのカリスマ的指導者を中心に組織され、その参加者は、指導者の信奉者ならびに多様な信仰と背景を持つ友人たちで構成されます。カリスマ的指導者の信奉者を中心に組織される大きな会議の例としては、まずニューデリーで開催されるサワン・カーパル・ルハーニ・ミッションの諸宗教会議が挙げられます。これらの会議が開催された年代は、現在の指導者であるラジンダー・シン師の祖父あるいは父親の時代にさかのぼります。例の二番目は、一九三〇年代に英国のフランシス・ヤングハズバンド卿が与えた驚くべき影響です。彼は World Congress of Faiths を発足させました。三番目は、三十五年前に、非凡な女性であるアメリカのジュリエット・ホリスターと彼女の世界中の知人が、アメリカの理解の殿堂を組織したことです。四番目は、ここにいる私たち皆が知るべき大事なことですが、非常に多くの宗教協力訪問団の中心的存在だった葉上大僧上の偉業です。私は師の訪問団の一員として、さまざまな宗教の本部を訪れるという名誉にあずかりました。葉上大僧上は今だに私たちに霊感を与えてくださっています。なぜなら十年前の比叡山宗教サミットに天台宗の代表として議長の役を果たされたからです。驚くべきお方です。出口王仁三郎師の信奉者と七十年にわたって続いている大本の活動は、このカリスマ的指導者を中心に据えています。先ほど触れた宗教共同体に戻りますが、ロジェ・シュッツ師を中心とするフランスのテゼー・コミュニティーは、世界の宗教協力における精神的支柱の一つです。

第二のグループに属する宗教対話は、この会議もその一つですが、宗教団体や学術団体が主催する会議です。この種の会議は、非常に大規模である場合が多いようです。そして非常に多くのさまざまな方々がスピーチをなさいます。一人のカリスマ的人物ではなく、さまざまな宗教を代表する大勢の方々がスピーカーを務めます。すなわちこの会議のようなスタイルです。そして参加者は、いくつかのプログラムの中から好きなものを選ぶことができます。この形式は、諸宗教による一週間程度の宗教的催しにおいては、非常に一般的です。また通常はどちらかといえば親しい個人的な触れ合いはありません。

このように二種類のグループの宗教対話があります。カリスマ的人物を中心に組織される最初の形式は、今後も続いていくでしょう。なぜなら、カリスマ的人物は人々をひきつけ、それが一番肝心な点だからです。私たちがここで経験しているような形式は効率的です。大きな数の集団を扱うことができますし、多種多様な信仰を持つ人々が参加できます。この形式もまた今後続いていくと思います。

最後に、第三のグループに属する形式についてお話しさせて頂きたいと思います。これは、諸宗教の出身者から成る小さな集団を中心に構成されます。ある状況や事情について情熱を分かち合うことにより、信仰を異にする人々が一つにまとまるのです。ではこの状況とはどういうものでしょうか。まず、それぞれ特別な必要を抱える地域における、宗教協力に基づく共同体プロジェクトが考えられます。住居、職業訓練、自然災害の後の復興、選挙人の登録、青少年問題などです。二番目に、障害者など特別な必要を抱える個人を対象にしたプロジェクトが考えられます。障害者や独り暮しの老人の介護、麻薬やアルコールの中毒者、釈放された服役者のための社会復帰プログラムや施設に住んでいる人々などを対象にした、多様な宗教やグループによる宗教間協力プロジェクトがあります。三番目に、環境破壊によって荒廃した共同体に入って環境を回復するプロジェクトが考えられます。四番目に、子どもたち、高齢者、十代の若者などを対象にしたレクリエーション・プロジェクトがあります。五番目に、これは私は沢山の経験をしましたが、宗教間協力に基づく文化芸術プロジェクトがあります。これはミュージシャン、アーティスト、ダンサー、俳優などによっ

て構成されます。六番目に、教育プロジェクトがあります。子どもたちのためのカリキュラムを開発するプロジェクトです。

最後に申し上げたいのは、二十五年に及ぶ私の経験によれば、この第三の形式を軌道に乗せる助けとなるのは、人々の交流であるということです。これは、個人同士の交流、あるいは同じ信仰を持つ小グループが非常に異なる共同体で一緒に生活し、働くのです。大本の私の友人たちと私が、一九七五年以来大聖堂で行ってきたような交流です。私たちは、二週間、二カ月間の共同生活を通じて、キリスト教、神道、仏教の間の交流をはかっています。私の娘は神道の共同体で五カ月間暮らしました。二十五年にわたって続いている大聖堂の交流では、五十人の人々が夏の間、他の共同体で生活しました。大本の四十人の方々が三カ月間、私たちと大聖堂で生活しました。ですから、草の根レベルの共同生活が純粋の体験の分かち合いを可能にするなら、それによって諸宗教間の深い理解も可能になると私は考えております。

そして最後に、私の望みは、将来、そのような交流および小グループから構成される宗教間プロジェクトが例外としてではなく、規範になることです。従うべき手本はたくさんあります。The Friends World Service、平和部隊、The Experiment International Living、その他さまざまな宗教、宗派の組織が国際的な奉仕プログラムを試みており、素晴しい反響を呼んでいます。しかし、今、私たちは新たな状況を迎えています。非常に積極的な活動が展開されています。この状況は私が考えますには、都市での運動として我々がニューヨークおよび世界中の都市で組織しているような、宗教協力センターを設置する動きです。さらにスウィング主教が発表なさいました、宗教連合を国際的ネットワークにする動きなどがあります。このようにして、非常に広範囲に及ぶ交流が本当に可能になるでしょう。これらは、将来の深い諸宗教対話と宗教間の理解の基礎になるものと思います。

ご清聴ありがとうございました。

宗教対話による「調和」の創造

国際自由宗教連盟事務総長
ロバート・トレアー博士

まず初めに、比叡山宗教サミットの開催者の皆様に対して、今回お招きいただきましたこと、衷心より深く御礼申し上げます。また、私が事務総長を務めます国際自由宗教連盟（ＩＡＲＦ）を支援して下さるたくさんの日本の方々、特に現ＩＡＲＦ会長であります椿大神社宮司山本行隆先生をはじめ、一燈園、金光教泉尾教会、立正佼成会、四天王寺、椿大神社、日本自由宗教連盟、そしてＩＡＲＦ日本チャプターの皆々様にも心より感謝申し上げます。

本日は「諸宗教対話の発展と将来展望」についてお話しするよう要請されており、私の拙い意見をお話しさせていただきます。はじめに、私たちの文化の中に「調和」を創造するため、私たち自身、また私たちが所属する宗教団体自体の波長を調律させる手段としての諸宗教対話について、皆さんにお考え頂きたく思います。もし私たちの文化の中の各宗教間に「調和」が存在するなら、世界の諸文化間に対話と調和の存在を期待することが出来ます。しかし、もし私たちの文化の中に「調和」が存在しなければ、またもし各宗教間に「調和」が存在しなければ、そしてもし私たち自身の中に「調和」が存在しなければ、この世の中に「調和」が存在する可能性はありません。

それゆえ、ＩＡＲＦは各国また各地域共同体の中に、相互尊重、宗教的自由の擁護を推進する運動を支援することによって、この世界に「調和」

を模索しているのです。これらの運動は各々の状況に応じて形を変えます。

いくつかの例を挙げます。パキスタンにおいて、IARFは、イスラム教徒とキリスト教徒の政治活動家が、宗教的少数派の権利擁護の支援を行っている公開フォーラムを主催しました。当時パキスタン政府はこのような会合の開催許可申請を拒絶し、またある町ではこのフォーラムの主催者の一人が、宗教的過激派の手によって暴力による攻撃を受けました。それにも拘わらず、公開討論がパキスタンの異なる諸宗教間に相互尊重と宗教的自由を擁護するために開催されております。イスラム教徒、キリスト教徒は各々の聖典であるコーランと聖書の理解に基づき宗教的少数派の権利を主張しており、また宗教、信仰の自由という権利を含む国際法で是認される人権擁護のための支援を、声を大にして表明しております。

第二番目の例は、非常に異なる文化背景から浮かび上がる例です。昨年の夏に韓国で開催されたIARFの世界大会では、IARFの日本のメンバーならびに韓国のメンバーが、両国民の間に繰り広げられた今世紀の紛争について対話に入ったのです。その世界大会の一年以上前から、日本のメンバーは大会期間中に二つのワークショップを開催する為に、韓国の大会準備委員会と交渉を始めました。この交渉過程で、日本のメンバーは、韓国側から「日本の神社関係者はその祭衣を着ないこと」また「神道の祭司を行わないこと」を要求されました。それは、韓国人には、朝鮮半島が日本によって統治されている間日本政府によって強制された〈国家神道〉と日本のIARFメンバーの〈神社神道〉の区別が付かないと言う理由からでした。日本の神道関係者は、大会で繰り広げられるであろう素晴らしい対話の成功のために、これらの要求を受け入れたのです。結果的に、この大会は、南北朝鮮を隔てる三八度線の非武装地帯で、韓国の宗教リーダーならびに外国人ゲスト、そして山本行隆宮司による平和祈祷集会をもって終了いたしました。

第三番目の例は、貧困を乗り越えるための取り組みを行っている共同体についてです。IARFでは、インドにおいて宗教的寛容と相互協力を擁護する共同体開発計画を遂行しております。例えばカルカッタの近郊では、現地のイスラム教の女性たちが、その村において、「消毒」ならびに「公衆衛生」の改善と、マイクロクレジット（自助努力による貧困克服のための貸付で長期にわたる返済を可能にする）の機会を得ることを可能にする貯蓄プログラムの開発の為に、共同体の自助努力を促す地域リーダーとしての訓練を受けております。これらの女性たちは、「西ベンガル地方におけるイスラム教とヒンドゥー教の間に〈調和〉を醸成するためにどのように貢献できるであろうか」という質問を彼女たちを支援しているIARFの地域コーディネーターから考えるよう促されると、彼女たちの隣人であるヒンドゥー教徒の心に近づくために、ヒンドゥー教の祝日であるディバリーを歌や踊りによって、イスラム教の立場で祝福することを考え出しました。勿論、イスラム教徒としてヒンドゥー教の神を祝福する人はいませんので、彼女たちはディバリーを宗教的に祝福することは控えます。但しインドに住むイスラム教徒として、「インドの大多数を占めるヒンドゥー教の大切な文化的伝統を分かち合い尊重しているのだ」ということをヒンドゥー教徒に分かってもらえるよう、これらの女性たちとその村々では、今やヒンドゥー教の祝祭日でもありインドの祭日でもあるディバリーを村を挙げて祝祭しております。

北アイルランド、ウクライナ、ロシア、ハンガリー、ルーマニア、チェコ共和国、ポーランド、エストニア、ドイツ、オランダ、フランス、イギリス、イスラエルとパレスチナ国家委員会、バングラディッシュ、スリランカ、カナダ、米国、ナイジェリア、南アフリカ、台湾、韓国、そして日本においても同様に、IARFではそれらの国々にいるメンバーを通じて、「宗教的自由」と「相互尊重」を確立することに従事しております。

種々様々な文化において宗教対話を進めるためには、多くの方法があると思われます。しかしそれぞれのケースにおいてIARFは次に紹介する

原則に基づいております。

一、宗教協力は「人」から始まるものであり諸問題を指摘することから始めるべきではない。

私たちは信仰者として集い、各宗教間の精神的倫理的教えに基づいたコミットメント（貢献）を分かち合うわけです。私たちは、一般的な問題に直面する単なる個人ではありません。私たちは「祈り」や「教え」を理解し、それらに根差した信仰者であります。故に、私たちはそれぞれの共通の問題を語り合う新しい方法を見出すことが出来るかもしれません。問題へのアプローチの違いは小さなことかもしれませんが重要であります。私たちは自分自身また各個人の義務や自身の宗教から、問題解決の模索をはじめるのであり、互いに問題を指摘することからはじめるのではありません。私たちはキリスト教でいう「創造への道」や仏教でいう「法」、神道の「神」等々の意思を理解するが故に行動するのであり、問題解決のためだけでなく、他の人々やこの地球と調和しながら、誠実に生きるよう、導かれているのであります。

二、宗教協力は結果ばかりで評価されるのではなく「関係」の重要さを強調すべき。

私たちは、解決すべきどんな問題があろうとも、他宗教の人々に対する深い理解と信頼、相互尊重の念を育んでいかなくてはなりません。結果を優先させるために人間関係を犠牲にしてはなりません。何故なら、結果を導き出すには人間関係が必要だからです。私たちは諸宗教者との関係を、単に最終的な結果として目指すことは避けるべきであり、その代わり、諸宗教者との関係そのものが、その目的とその目的を得るために創造される方法を明瞭にするということを理解しなくてはなりません。私たちは、私たちの隣人や他宗教との間に友情や信頼を築いていかなくてはならず、また感謝していかなくてはなりません。

三、諸宗教協力では、自分自身の責任感を他の人々や地球に対する責任へと広げていくべきである。

従来の伝統的責任感の概念は、自分達の文化や家族に対する責任を定義してはおりますが、現代社会における相互宗教間、相互文化間への責任については考慮されていないのではないでしょうか。私たちが年長者や師に対して感じる感謝や義務感は、今日においては、異なる宗教や文化を持ちながら同じ社会を構成する人々に対しても、尊敬がなされなければなりません。現代社会における人間の尊厳性のため、私たちは社会基盤としての「人権」を堅持しなければなりません。また、私たちは社会を構成している他のメンバーと共に歩まねばなりませんし、この地球、つまり私たちを生かし、全てを生かしている地球に対する責任を積極的に負わなくてはなりません。

地球上に「調和」が存在するならば、宗教間にも「調和」が存在するはずです。そしてこの「調和」は、私たち自身の文化から始まらなければなりません。地球的視野で考え、地域に根ざした行動をしなくてはなりません。なぜなら、私たちの選択や行動は各々の場で違ってくるからです。私たちは皆、各々の持ち場で個人として、また地域の団体として責任をはたし、「生命の大きな調和」へ貢献しなければなりません。

オーケストラは、美しい音楽を奏でるために一人一人が一つのセクションにおいて楽器を演奏し、全てのセクションが一緒になって演奏します。オーケストラの団員は、セクション毎の「調和」を奏でるために、各セクションの団員それぞれが調律し、オーケストラ内ではそれぞれのセクションとの「調和」を保つために、今度はセクション自体が調律します。宗教対話による「調和」とは、オーケストラと同様に、私たち自分自身の心や思考を、自身の伝統の中にある精神的な教えを通じて整え、宗教対話を通じて他のメンバーに合わせて自分自身を調律し、そして各宗教自体が互いに調律することです。それによって我々の「調和」が全地球市民に反映し、不思議な力を添えてくれるにちがいありません。

「利他の心」を基本に

黒住教教師
黒住宗道師

ただ今ご紹介をいただきました黒住教の黒住宗道です。ご覧のとおりの若輩にもかかわりませず、本日このような貴重な発言の機会を賜りましたことを、心より光栄に存じております。どうぞよろしくお願いいたします。

「宗教対話の歴史と未来」というテーマをいただき、まず思いましたことが、世界の宗教を代表したそうそうたる出席者のご賛同のもと、この度の「世界宗教者平和の祈りの集い」が「比叡山宗教サミット」の十周年を記念して、こうして誠に盛大かつ意義ある会として開催されますこと、それ自体が日本仏教の母山である比叡山の長き尊き伝統のなせる技であり、また宗教法人大本の皆様を中心とした諸宗派と立正佼成会の方々をはじめとした諸教団の日ごろからの、まさに宗教協力の歴史の賜物であるということです。誠に僭越ながら、宗教協力の実践に今まで尽力してこられた各位に、この場をお借りして心からの感謝と敬意を表するものです。

ところで、世界の平和と人類の安寧を祈る宗教が、ともすれば戦争や抗争の原因であるとみなされ、冷戦終結後とりわけ顕著な宗教や民族間の争いをさして「これからは宗教紛争の時代」とまでいわれがちであることを、一人の宗教者として私は誠に遺憾に思っています。確かに、宗教や民族をめぐる争いが人類史上に頻発してきたことは認めざるを得ませんが、宗教や民族が紛争そもそもの原因であるとは私は思いません。日本人には実感しにくいことですが、同じ国内で宗教や言語が異なるのは、世界中のほとんどを占める多民族国家においてはいわば当然の現象で、さまざまな違いを超えて人々は同胞意識や連帯感を培いながら国家を形成して共存しています。ところが残念ながら、この同胞意識や連帯感というものが薄らぎ、共存が不可能になって、終には相互の不信感や憎悪感が生じてしまったとき、人々は宗教や民族といった自らの拠って立つルーツに強烈なほど固執し、また人心を統合するためにそれらを利用して、結果として宗教や民族をめぐる争いごとに発展してしまうのだと思います。

そこで、過去も含めて世界の様々な紛争や抗争に改めて目を向けたとき、実は宗教戦争といわれるものの多くは、領土問題や通商ルートの確保などといった経済的な要因で起こっていることに気づきます。限られた人たちの野心や利権争いも経済的な要因と呼べなくもありませんが、やはり多くは一般大衆レベルでの、いわゆる貧困問題だと思います。人間は毎日の生活に困窮したとき、すなわち食べて行けない状況に陥ったとき、それまでは共に生きてきた仲間たちを思いやる心を失って、個人の拠って立つルーツに固執して、結局は宗教や民族の違いを理由とした敵対意識を持ってしまうのではないでしょうか。

南北問題の深刻化に見られますように、経済的な問題の根の深さは言うまでもないことですが、宗教や民族が争いごとのそもそもの原因ではないと考えられたとき、どの宗教も共通して掲げる「無私の精神」と「利他の心」の教えに基づいた相互扶助による弱者救済の人道援助活動を積極的に推進することによって、世界平和実現のための具体的な行動が、宗教間の対話と協力によって可能であると私は信じます。

昨年十一月、私が事務局長をつとめる「国際貢献トピア岡山構想を推進する会」という国内外のNGO（国際民間ボランティアグループ）のネットワークが主催した「第三回おかやま国際貢献NGOサミット」において、私たちは「人道援助宗教NGO会議」を開き、アジアを中心とした十カ国の宗教者三十四名の正式出席者の賛同を得て「人道援助宗教NGOネットワーク」を設立しました。このネットワークは、ニュースレターを通して参加者の日ごろの活動に関する情報を定期的に相互交換し、必要とされる人道援助活動を宗派・教団を超えて協力して行おうとする「宗教

による共同活動」の実践です。共同活動といっても、全員で一つの同じ活動に取り組むことを目的とするのではなく、ニュースレターや緊急連絡網を通じて入手された情報を各参加者が独自の判断によって分析し、可能な範囲でそれぞれの人道援助活動に活かすことを、このネットワークでは目指しています。今まで築かれてきた宗教対話の実績をもとにして、一般社会に、とりわけ支援を必要とする国の人々に対して具体的な人道援助の手を差し伸べることが、これからの宗教協力のあるべき姿の一つではないかと思います。また、こうした宗教協力の実践によって、一般の人々の抱きがちな宗教に対する誤解が少しでもなくなればと願うものでもあります。なお、「人道援助宗教NGOネットワーク」について関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、後ほど私までご連絡下さい。参考資料をお渡しいたします。

最後に、「宗教による共同活動」の二つの提言として、私は日本の宗教者の立場から本日ご出席になっている世界の宗教者の皆様にぜひとも申し上げたいことがあります。それは、「母子の絆」の問題です。幸いにわが国は、今や世界有数の経済大国として発展するにおよびましたが、物質文明社会の進展に伴い、精神的に非常に脆い青少年層の出現を深刻な社会問題として抱えるに至っています。過日日本国中を震撼させた神戸での児童殺害事件の実に残虐な犯行が、十四歳（当時）の中学生の手によるものであったことは、その象徴的な事例です。この事件の遠因としても一部で指摘されていることですが、幼児期における母子の絆の薄さが、一般にわが国の青少年層の精神的な未発達に影響しているという声を、私は宗教者の一人として強く訴えなければならないと感じています。私たち人類にとって、一人の子供として生まれ出るときから親離れをするまでの数年間ほど重要な期間はないということを、とりわけ世のお母さん方に今こそ伝えなければならないと思うのです。このようなことを言うと「女性の社会進出に対する反対意見」と短絡的に捉えられるかもしれませんが、胎教にはじまり、乳幼児期の子育てからある程度の自我の形成の時期まで、育児は母親以外に誰も代わりのつとまらない女性だけの大いなる聖業だと思います。しかも、母乳をはじめ本物を与えて、母親という本物による育児こそ人間の魂を育てる源だと信じます。父親の協力ももちろん重要ではありますが、母親の比ではないことは明らかです。いかに「手抜き」をせずに最大限の愛情と時間をわが子に費やすことができるかという、いわば当然のことながら現代社会において、つい後回しにされがちな点を、私たち宗教者が共通の問題意識を持って人々に説いて行くことも、大切な「宗教による共同活動」と思い、皆様のご賛同をいただきたく申し上げた次第です。

以上をもって、私の提言といたします。ご静聴、誠に有り難うございました。

宗派を超えた「協力の第二言語」を共有しよう

世界宗教者平和会議事務総長
ウィリアム・F・ヴェンドレー博士

諸宗教の尊師、猊下、大司教、司教ならびに卓越した御出席の皆様。

本日の会議に皆様とご一緒に参加できますことは大きな喜びであります。私もまた、このすばらしい催しを組織された方々にお祝いを申し上げたいと存じます。ここで皆様のお許しを得まして、二十年前、まだ若かった私が日本におりました時の禅の恩師、阿部正雄先生に感謝の言葉を述べさせて頂きたいと存じます。阿部先生から私は五年以上にわたり、禅仏教のご指導をいただきました。先生は妙心寺で私を導いてくださったばかりでなく、度々ご自宅に連れていってくださり、じっくりと時間をかけて私のような若い男女に禅の精神をご指導くださいました。また非常に賢明であられた阿部先生は、私に自身のカトリック信仰を真剣に考えるよう、そして私の「人格の四つの実在」を尊重すべきだと励ましてくださいました。

公けの席をおかりして、若輩の私に与えられました御恩に対し御礼申し上げます。

今朝目が覚めた時、私はエネルギーと活気がみなぎり、すばらしい気分でした。そこで座って、用意してきた原稿を取り上げ読み始めました。すると突然、どうしようもない眠気と疲労感が私を襲ってきたのです。これは午後の最後のセッションです。もし私がこの原稿を読み上げたら、皆さんは深い昏睡状態に陥入り、このセッションの後に予定されている食事の機会を逃してしまうのではないかと心配です。そこで議長のお許しを得まして、原稿の主要点につき例を挙げてご説明したく思います。同時通訳者には負担をおかけすることになりますが自由に話してよいとのことですので、お許し頂けますでしょうか。

私に与えられましたテーマは、宗教対話の未来です。私は原稿の中で、今後の宗教対話の発展の成否を決める中心は「協力」であり、現実問題に対処する実際的協力である、と申しております。もし宗教が他人に対する究極的な関心を持つことであり、究極的な思いやりを与えることだとすれば、私たち宗教者は、思いやりが交差するかぎり、共に思いやり、共に活動するというまさに試練が与えられております。私の原稿では、さらに「協力の言語」について述べております。話の最後に、この大変重要な点に戻りたいと思います。

私は、今まさにこの会場において非常に劇的なかたちで存在する現実を差し示すことにより、「思いやり」の例としたいと思います。ここにご出席のブルジッチ枢機卿がその方です。真の宗教協力に関心を持つ私たち全てにとって、驚嘆すべき実話をお伝えしたいと思います。

今年一九九七年六月九日、ブルジッチ枢機卿と宗教上の同志の方々は、サラエボで驚くべき勇気、協力を実現する勇気を示されました。この方々は公衆の面前に並んで立ち、協力の機構を作る決意を示す共同声明を発表しました。この機構の特徴をご紹介したいのですが、その前に、この協力の行為の真に英雄的な側面にご注目ください。ブルジッチ枢機卿は、サラエボが内戦の包囲下にあった全期間、そこにとどまりました。ご自身の共同体からも、サラエボから避難するよう度々の勧めがありましたが、ブルジッチ枢機卿はそれをお断わりになりました。すべての人々と共に生きる努力をすべきである、との自らの信仰の教えに従ったのです。このような状況下では、宗教共同体は非常な圧力にさらされます。そして共同体はその指導者に圧力を振わせようとします。サラエボでは、どの共同体も同じ状態でした。共同体の外部からは脅威にさらされ、共同体の内部にも圧力があったのです。

その圧力がどれほど過酷なものであったか、ブルジッチ枢機卿の同志のお二人を例に取りましょう。この方は、ボスニア・ヘルツェゴビナにおけるイスラム指導者の第二の地位におられる方です。彼は、二人のお子さんの命を狙撃兵に奪われました。奥様も狙撃で亡くなりました。お孫さんも狙撃兵に殺されました。想像してみてください。もし皆さんがこの方の立場におられたら、いかに皆さんが高い修養を積まれた宗教指導者であっても、話し合いの会場に足を踏み入れ、会場の中を歩いて行き、自分の最愛の家族が四人も殺されたことに相手の共同体が関与していることを知りながら、相手方の宗教指導者と握手できるでしょうか。これは劇的な例ですが、かの国のどの宗教指導者も、直接的にせよ、あるいは彼らの信徒を通じて間接的にせよ、同じようなことを経験せざるを得なったのです。

ですから、ブルジッチ枢機卿と同志の方々が断固として貫き通した勇気の陰には、このようなとてつもない圧力があったのです。手短に申し上げれば、このようになるでしょう。ブルジッチ枢機卿は許し得ない者を許す勇気を奮い起こし、同じことを彼の共同体に求めたのです。しかし、枢機卿はさらに行動しました。それには一層大きな勇気が必要です。それは、戦争という恐ろしい重圧にさらされた自らの共同体が、相手に対しても神聖ならざる行為をしたことの許しを請う勇気です。何にもまして、宗教指導者に求められるのはこのような勇気です。しかし、幸いなことにこのような勇気は伝染します。広がりを得るのです。

今申し上げた例と関連してもう二つの例をご紹介しましょう。ごく最近、ブルジッチ枢機卿は私たち全ての者を助けてくださいました。枢機卿は、ベオグラードのセルビア正教総主教を自ら訪問し、偉大な着想を実行に移され、トップレベルの一対一の対話に道を開きました。この対話の成果は、セルビア正教会が、ブルジッチ枢機卿、イスラム教指導者ならびにユダヤ教指導者と共に、ボスニア・ヘルツェゴビナの

内戦後の社会復興を推進する宗教協力協議会の設立を正式に約束したことです。プルジッチ枢機卿のご指導に対し、ここに皆様と共に感謝の心を表わすことをお許しいただきたいと思います。

次に申し上げたいのは、今お話ししたような勇気と指導力がもたらす絆です。宗教の絆は、まさに世界を結び、この会場に今存在しています。この会場にある絆のみに言及しても、それは感動的としか言いようがありません。カトリック側では、たとえば、ボスニアでの様々なイニシアチブを深く理解しておられるアリンゼ枢機卿が、プルジッチ枢機卿に極めて重要な支援を提供することができました。イスラム側では、たとえば、私たちはヨルダン皇太子と連絡を取ることができました。またこのすぐ隣の部屋にはアル＝オバイド博士がいらっしゃいますが、博士は世界イスラム連盟その他の方々と共に、ボスニア・ヘルツェゴビナのイスラム宗教指導者層に大きな極めて重要な支援を提供することができました。こちらにいらっしゃるディビッド・ローゼン師は、皆様よくご存じの通り私たちの心からの友人ですが、ボスニア・ヘルツェゴビナのユダヤ共同体では有名なお方ですので、彼らと接触を保つことができました。そのため、師は、私たちがボスニア・ヘルツェゴビナで開催したいと願っていた会議で発言する代表者を招待したいと、私を通じて要請されました。オーソドックス側では、代表者の方は今、この会場にはいらっしゃいませんが、ロシア正教のパブレ総主教、コンスタンティノープルのバーソロミュー総主教を始めとする世界中の高名なオーソドックス指導者の方々とお会いすることができ、困難な時代に直面しているオーソドックス教会の兄弟姉妹を支援することができました。これら全ての勇気と創造性に満ちた行為が同時に起こり得たのですが、そのために注意深い支援が提供されていたことも忘れてはなりません。ここ日本においては、三宅龍雄先生が、この戦争の初期の段階に人道的援助の提供を表明され、実行に移されました。そして我々の組織である世界宗教者平和会議は、プルジッチ枢機卿とその同志の方々と協力して活動するという名誉にあずかり、サラエボに事務所を開設し、スタッフを集めるための手段と活力を求めて奔走しました。私は庭野日敬開祖に厚く御礼申し上げます。師は、非常に静かに控えめに進み出て、宗教上の同志の活動をただひたすら支援してくださいました。このように、私たちの絆は誠に深いのです。そしてこの絆を十分に活用することが、私たち宗教者にまかされているのです。また、この会場にいらっしゃるアジア宗教者平和会議事務局長の飯坂良明先生、WCRP日本委員会事務局長の三宅美智雄先生は、日本、アジアそして世界中で、これらの絆を生かして意義深い活動を行う優れたお仕事をしておられます。

最後に、先にふれた、プルジッチ枢機卿が起草と署名において活躍された声明に戻りたいと思います。この声明はイスラム教の声明ではありませんでした。またカトリックの声明でも、オーソドックスの声明でも、ユダヤ教の声明でもありませんでした。これら偉大な宗教には、それぞれすばらしい第二言語があります。この声明は公的な声明であり、これら各共同体にとっての第二言語で書かれました。この声明は、私たち全ての共同体が、自らの第二言語を所有し、それを大切にした上で、バイリンガルになる必要があることを示しているのではないでしょうか。第二言語は、それが育てたあらゆる伝統、すなわち風俗、習慣、祈り、芸術などの宝に満ちています。しかし、私たちはこれを超えて、「協力のための第二言語」を鍛錬する方法を見い出さなければなりません。これは、私たちが共有する思いやりの地図を描くことのできる言語です。他者が自らの信仰に持つ誠意をおとしめたり、ないがしろにしたりすることなく、見解の相異を表明することに合意できる言語です。

最後に、この会場の皆様に申し上げたいことがございます。ここからほど遠くない所にいる隣人が大変苦しんでいます。北朝鮮の友人たちです。そこで、皆様にご提案申し上げたいのです。プルジッチ枢機卿と同志の方々が示された創造的な指導力を称える最上の方法は、私たちが宗教者としてまた宗教共同体としてのそれぞれのやり方で、北朝鮮の兄弟姉妹を援助する方法を考えることではないでしょうか。

ご清聴ありがとうございました。

意見発表部会 ②

二十一世紀における宗教の役割

テーマ❶ 若者や無信仰者に対する宗教者の使命
テーマ❷ 人権問題と宗教者の責務
テーマ❸ 共生の理念の確立と宗教
テーマ❹ 宗教に基づく社会貢献

テーマ① 若者や無信仰者に対する宗教者の使命

「愛の文明」を理想に

フォコラーレ運動
ナターリア・ダラピッコラ女史

今回、宗教サミット十周年記念式典に、フォコラーレ運動の代表としてお招きいただき、若者と特定の宗教を持たない人々への働きかけについてお話しする機会をいただきましたことを、主催者の方々に厚く御礼申し上げます。

今、私は、心からの敬意と感謝の中に故山田恵諦猊下を思い起こしております。猊下は、遙か先まで見通す目、平和と慈悲にあふれる深いお心をお持ちの方で、この宗教者の集いを率先してお始めになられました。私は、一九八六年第一回平和の祈りの際に、イタリアのアッシジで猊下にお目にかかりました。その後も何度かお話しする機会に恵まれましたが、それらはかけがえのない思い出として、私の心に深く残っております。この数日間、猊下はきっと私たちと共にいて下さることと存じます。

また、今から十年前、世界平和のために集められた十五万人の子供たちの署名とメッセージを、フォコラーレの少年少女の代表がここ比叡山で諸宗教の代表者の方々にお渡ししました。その時、山田猊下が彼らの姿に深く心を打たれていらしたことも思い起こされます。

彼らは「一致を目指す少年少女」と呼ばれ、この十年間に、その数も世界中で大きく成長して参りました。彼らのうちには、人類の未来を背負っていこうとする若者の姿勢が大変顕著に現れております。

ところで、この「一致を目指す少年少女」とはどのような存在なのでしょうか。彼らはフォコラーレ運動の中で、「新しい若者運動」と共に、青少年の部門を形成しております。

フォコラーレ運動には、カトリック教会や三百の諸キリスト教会、多くの諸宗教の人々の他、特定の宗教を持たない人々も参加しております。

この運動は、「一致した世界」ということばで表される未来の世界を目指しながら、個人やグループの間、民と民との間に、一致をもたらすことを目的としています。そして世界の平和のために、独自の貢献を果たしたいと願っております。

さて、あらゆる宗教の人々が、私たちの運動に関心を抱く理由は何でしょうか。特定の信仰を持たない人々でさえ関心を寄せる、一致と平和の源はどこにあるのでしょうか。

「それは全ての人の心の奥底に息づいているもの、即ち「愛」です。この愛は、キリストに従う人々にとっては「アガペ」と呼ばれるもので、神様の愛そのものにあずかって生きることだといえるでしょう。これは強い愛で、相手が愛で応えてくれず逆に攻撃してくるような敵であっても愛することが出来ます。またそれは許すことを知っている愛です。

他の宗教では、この愛を「慈悲」ということばで呼ぶかもしれません。また宗教の素晴らしさを示す「黄金律」、即ち「自分にして欲しいことを他の人にもしてあげなさい。自分のして欲しくないことは他の人にもしてはなりません。」という教えによっても、この愛は表現されるでしょう。

更に特定の宗教を持たない人々は、この愛を「博愛」「連帯」「非暴力」と呼ぶこともできるでしょう。」注1

この愛は、現代の若者たちに働きかける時の「鍵」となるものです。彼

らは、「教えを説く人」よりも「証しをする人」を求めているからです。自分たちが信じる理想を実際に生き、リーダーとなってくれる、自己表現した人を、彼らは求めています。そして、若者たちがリーダーとして従っている人々の中には、フォコラーレ運動の創立者・会長であるキアラ・ルービックもおります。

第二次世界大戦のさなか、キアラが神聖な冒険に乗り出したばかりの頃、私は十九歳でしたが、彼女の身近にいることが出来ました。私はこれを、人生の中で最も大きな恵みだったと思っております。こうして、私は一つの運動が生まれ成長していくのを目にしてきましたが、それは決して単なる人間の努力によるものではありませんでした。天から来る霊的な力が、この運動全体の魂となっていたのです。

「私たちの運動は新しい生き方を生み出します。それはキリスト教の教えを土台としていますが、他の宗教や文化の中にある価値観も大切にするものです。そして、再び平和を築き、それを確かなものにすることを求めてやまない、この世界に、私たちは平和と一致をもたらしてきました。」注2

共同体的なこの特徴を持つ、この精神、この生き方は、「愛」の中に力を見出します。この精神は、神様が私たちを愛でておられ、父でおられることを発見したところから始まりました。そして、私たちが唯一の父の子供、即ち兄弟姉妹として生きていく中で、その実現を見たのです。

キアラが「愛の芸術」と呼ぶものも、この生き方から生まれてきました。これは福音に根差したものですが、他のあらゆる宗教の人々にも受け入れられています。また、特定の宗教を持たない人々も、自分たちが信じている価値観が浮き彫りにされるのを感じ、これを共に生きています。

この「愛の芸術」には四つの要点があります。

第一点は「全ての人を愛する」ことです。この人は感じがいい、悪い、美しい、そうではない、自分と同じ国の人だ、外国人だ、白人だ、黒人だ、黄色人種だ、アメリカ人、アフリカ人、アジア人だなどと分け隔ていません。愛は、差別というものを一切知らないからです。

第二の要点は「自分から先に愛する」ことです。真の愛を持っている人は、愛されるのを待たずに、自分の方から愛し始めます。相手に対して、自分から最初の一歩を踏み出すのです。

第三は「相手を自分と同じように愛する」ことで、「黄金律」にもある通り、自分にしてもらいたいことを他の人にもしてあげるのです。次のようなガンジーのことばもあります。「私とあなたは一体ですから、あなたを傷つけるなら私自身も傷を負います」。

第四番目は「相手と自分を一つにすること」で、他の人の重荷や考え、苦しみや喜びも自分のものとして受け止めることです。これを実践しようとする時には、相手と全く一緒になって、相手を理解するために自分を完全に空っぽにすることが求められます。

若者たちの中には、この「愛の芸術」を自分たちの理想として選び、個人レベル、社会レベルでも、数多くの具体的な活動を通じて、この愛を実践している人たちがいます。

また特に、この若者たちの間に浸透しているのが「与える文化」です。彼らは、極端に利己主義と所有の文化を生みだした利益優先の考え方を受け付けません。人間が「与える」ようにつくられ、他の人々と連帯し、互いに分かち合うときにこそ自己実現が出来るのだと確信しているからです。またキアラが経済分野で提案してきたプロジェクトには、「共済の経済」と呼ばれるものがあります。これは利益の一部を貧しい人々に分配するため、会社を新たに設立したり経営体制を変革するものですが、この提案を自分のものとして受け入れた若者も数多くあります。

さて、人類が抱えるもう一つの問題があります。それは国内紛争や種族民族間の争いが、国全体にまで及ぶものです。キアラはこのことについても、「他の国を自分の国のように愛する」という提案をしました。これは一見ユートピアのように感じられるかもしれませんが、実際は、愛の文明

を築き、民と民の間に、調和ある一致を築くための基盤となるものです。

戦火冷めやらぬ世界の各地で、また種族や社会層の対立が最も強く見られるザイール、ブルンディ、ボスニア等の国々においても、和解を進め、紛争を防ぎ、暴力を否定するための数多くの活動を、若者たちは畏れることなく勇気を持って行っております。

未来の世界を真剣に考える人々にとって、これらの活動や他の多くの具体的な働きかけは、大きな希望を与えるものでしょう。数多くの若者が、彼ら自身の、そして人類の未来を変え得る一つの冒険に乗り出したと思うとき、私たちは皆、勇気づけられるのを感じます。

最後になりましたが、皆様にお伝えしたいことは、若者たちは表面的で快楽に走っているように見えても、人生の中で逆境に立ち向かっていることを知っているということです。なぜならば、彼らが生きようとしている「この相互愛、一致は大きな喜びを与えると同時に、日々の努力と鍛錬、犠牲も要求するものだからです。苦労や、苦しみを受け入れずに、世において、良いこと、役立つこと、実りあることは、何一つ成し遂げることはできません。力を尽くして生き、平和をもたらすことは、生半可なことではないからです。勇気が必要ですし、苦しむことも知らなければなりません。」注3

フォコラーレ運動の若者たちはこのことを良く理解しており、これらが彼らを成長させています。また、彼らは次のことを心に留めています。

「もっと多くの人々が、愛ゆえに苦しみを受け入れるなら、愛するときに求められる苦しみを受け入れるなら、その苦しみは、人類に最高の尊厳を与えるための、最も強力な武器となるでしょう。その尊厳とは、多くの民が争いの中に共存するのではなく、各々の違いが豊かさとなり、それぞれ独自性が生かされた唯一の民として、お互いに認め合い感じ合うことです。」注4

教皇ヨハネ・パウロ二世の励ましのお言葉を思い起こしながら、私の話を締め括りたいと思います。

「今終わろうとしている今世紀、そしてこれから迎える二十一世紀のために、人間に相応しい一つの文化、自由と平和の真の文化が築かれる」よう願っております。

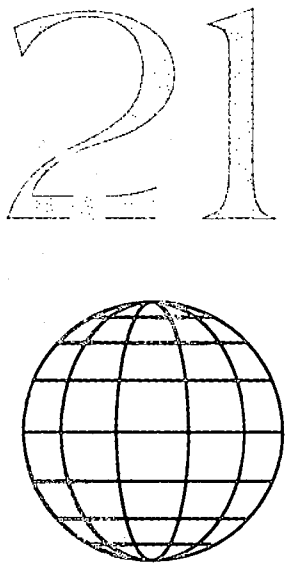
そしてその時「今世紀に流された涙は人間の精神の新たな春に向けて土壌を準備するものであった」ことを目にする喜びを得ることでしょう。

注1 キアラ・ルービック―国連本部におけるシンポジウムにて―（一九九七年五月二十八日）

注2 キアラ・ルービック―国連本部におけるシンポジウムにて―（一九九七年五月二十八日）

注3 キアラ・ルービック―国連本部におけるシンポジウムにて―（一九九七年五月二十八日）

注4 『オッセルバトーレ・ロマーナ』紙（一九九五年十月八日付）参照



「法華経」の世界観を基本に

ユニタリアン教会
ジーン・リーブス博士

比叡山宗教サミット十周年記念の集いに参加でき、大変嬉しく、身震いするほどの深い感動を覚えております。比叡山は、いわば法華経の最も重要なふるさとの一つであり、宗教サミットにとってこれ以上ふさわしい場所はないでしょう。

東京の立正佼成会の新しい団参会館には、三つの聖山を描いた二階分ぶち抜きの高さの大壁画があります。釈迦牟尼仏陀が法華経を説いたと伝えられる、インドの「霊鷲山」ことグリドラクータ山、法華経の偉大な解釈者であった智顗が、法華経を拠りどころとして天台宗を創始した、中国南部の天台山、そして最澄(伝教大師)が、鎌倉時代に発展した日本仏教—特に禅宗、浄土真宗および日蓮宗—の母体と言われる日本天台宗を創始した、比叡山です。

インド、中国、日本のこれら三山は、釈尊の時代から現在に至るまで、法華経の特別なふるさとであり、地理的な本拠地でもあります。

この話が、二十一世紀における若者や無信仰者の問題とどう取り組むかという部会のテーマとどういう関係があるのか、といぶかる方もいらっしゃるでしょう。

まず最初に申し上げておかねばならないのは、私には、このテーマについてお話しできる特別な権威も見識もないということです。私がこのテーマを選んだというよりも、仰せつかったと言う方が正しいかもしれません。私には、二十一世紀の若者や無信仰者、少なくとも二十一世紀初頭における彼らは、今世紀末の若者や無信仰者とそれほど大きく違わないのではないか、という気がします。

今日の若者や無信仰者が、宗教指導者、すなわち単なる管理者ではなく導く者としての宗教指導者に求めるのは、教義、儀式あるいは教団のみではありません。確かに教義、儀式、教団のどれも非常に重要です。しかし、彼らは、そういったものだけでなく、これを仮にビジョンと呼びますが、一種のビジョンを求めているのです。なかでも、彼らが求めるのは、人類がもっと実りある生を生きることを可能にするようなビジョンです。つまり、現実に根ざしているという感覚と、自分たちに与えられた世界を創造的に超えて行くインスピレーションを同時にもたらすようなビジョン、いわば根と翼、茎と花、生まれ出た場所と向かう場所を同時に与えてくれるようなビジョンです。預言者が言ったように、ビジョンがなければ、民は滅びます。

言い換えれば、若者や非信仰者は、私たち自身の間に、国と国の間に、諸宗教の間に、そして人類と自然環境の間に、もっと調和に満ちた関係を築けるビジョンを必要としているのです。

そのようなビジョンがなければ、二十一世紀の若者や非信仰者の考え方はずっと変わりません。彼らは、宗教指導者が、自分たちの宗教の優位性を主張したり、真理と善性は自分たちの宗教にのみ存在すると説くような、思い上がった態度をとっていると思うでしょう。また宗教が、宗教的な方向性の違う人々の間の戦争をあおるために悪用されていると思うでしょう。不寛容、迫害あるいは殺人の根拠として、宗教が利用されていると考えるでしょう。二十一世紀の多くの若者や非信仰者が、明らかな証拠をもとに、組織宗教は、神にも仏にも、地球にも人類にも奉仕していないと信じることさえありうるのです。生に肯定的で、生を高め、しかも調和に満ちた世界について何のビジョンも持ち合わせていない宗教指導者の私利私欲に奉仕しているだけだ、と信じることさえありうるのです。

おそらく、先に述べたビジョンと似たビジョン、あるいは少なくともその基礎のようなものは、あらゆる偉大な宗教的伝統の内に見い出すことができます。なかでも法華経の中には、このようなビジョンが、最も力強い基本テーマの一つとして明確に示されています。多様性の中の統一性、統一性の中の多様性というビジョンです。ある思想はその柱として、きわめて強力で圧倒的に壮大な統一性を前提としているため、多数の実在は大海の水滴のように、その二つの大きな実在の中に消え去り

ます。また別の思想はその柱として、究極的には統一性は全くなく、善悪の力の戦いのみがあるという、物の道理に抜き難いほど深く根ざした多様性、あるいは少なくとも二元性があることを前提としています。これに反し、法華経は、統合あるいは統一された全体の中に現実の尊い多数が存在する世界を、非常に多くの方法で描きだしています。

法華経には、草木のたとえがよく出てきます。たとえば、世界はさまざまな草木—大樹、小樹、大草、中草、小草—無数の多種多様な、生を営む草木として表現されます。仏法は大きな雨雲として表現されます。雨雲は全ての草木に等しく雨を注ぎますが、草木はその雨を自らの必要と能力に応じて受け、雨の滋養を吸って生長します。このたとえにも、多様なものを生かす共通の滋養が統一性である、という思想が表われています。

法華経のビジョンの中には、救いに至る方法が無数に提示されていますが、それらには二つの乗物の象徴であらわされることが良くあります。これらは全てある状況に適した手立てであり、釈尊や仏の業を行う者全てが、この手立てを用いて、生きとし生けるものの救済という釈尊の最初の誓い—この統一目標は特に二つの乗物に象徴されます—を果たそうと努めるのです。

このように、法華経には、共通の滋養または源、そして共通の目標または目的という両方のイメージを見い出すことができます。

法華経に出てくる数多くのたとえ話の中に、魔法の城の話があります。ある一行が救いに至る道を旅しています。その道はまことに急峻で、容易に登り得ない道だったので、その困難に耐え切れず一行は救いを求めるのを諦め、引き返そうとしました。そこでリーダーは魔法で城を呼び出し、皆はそこでゆっくり休んで元気を回復します。こうして一行は、素晴しい宝を求める旅を続けることができたのです。

ここにもまた、人生の途上にある人々を助ける方法としての教えのビジョンが示されています。法華経には、この一時休息所などのような、道を模索する人々を助ける有用で効果的な教えや実践が数多く出てきます。ここで言う道とは、仏の道でもあります。

法華経は、多くの宗教について直接は触れていません。道教、神道、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教あるいはヒンドゥー教ですら、私たちが今日、偉大な宗教であると認めるものについて、著者は知らなかったし、知りえなかったのです。

しかし、法華経のメッセージとその意義は明確です。法華経は、世界の全体性と幸福のために、多くの宗教は恵みとなり得ることを指し示しています。なぜなら、多数を育む統一性が花開き、あらゆるものが健康で救済されるためには、多数が必要とされるからです。

だからといって、多数が全て同じというわけではありません。それどころか、さまざまな開祖、啓示、文化的伝統に根ざす宗教は、互いに非常に異なっています。諸々の宗教は多数という現実そのものです。全ての宗教がどれも等しく優れていることにはなりませんし、ましてや全ての宗教が万人にとって等しく良いなどとは言えません。他の宗教よりも効果的な修行を見い出した宗教もあるでしょうし、他の宗教より人々の心を高める逸話が豊富にある宗教もあるでしょう。また、ある時期、他の宗教よりも偉大な指導者に恵まれる宗教もあるかもしれません。

しかし、同じ源から滋養を与えられ、同じ目標を追及している限りにおいては、実は全ての宗教は一つであるか、あるいは一つになり得るのです。私たちは力を合わせ、世界を全てにとって、より健全で健康で慈善に満ちた美しい場所にすることができます。

もちろん、以上述べた法華経のビジョンが、宗教の唯一のとらえ方ではありません。しかし、私たちの住む世界をより平和で美しい場所にするため、私たち全てをあらゆるものの幸福のための宗教協力に加わるよう促す、素晴しいビジョンであると、私は信じています。

このようなわけで、日本において比叡山は法華経にきわめて縁りの深い聖山でございますから、宗教サミットを開催するにはまさにふさわしい地であると再び申し上げてお話を終わります。

テーマ② 人権問題と宗教者の責務

少数民族への和解と協力を

カトリック・サン・クリストバル・デ・ラス・カザス教区「正義と平和協議会」代表
ゴンザロ・イトゥアルテ・ヴェルドゥスコ神父

人権問題における宗教者の責務についてお話しするにあたり、私は、あえて私の属するローマカトリック教会の批判を試み、そこから私たちの討議の目的に役立つヒントを提供したいと考えております。あらゆる信仰と宗教に対する深い尊敬の念を抱きつつ、経験と希望を分かち合うことが、私の話の唯一の目的です。

他の時代の外国人の道徳的意図を判断することは避けますが、メキシコに進出したカトリック教会は、この国が始まって以来、目覚ましい貢献をし、同時に負の影響をも及ぼしてきたことは明らかです。ここでは、人権、特に貧しい人々の人権に対する理解、実践および侵害について述べさせていただきたいと存じます。

政治戦争でもあり宗教戦争でもあったイベリア半島の再占領の後、歴代のスペイン国王は王権神授説をかかげ、現在のラテンアメリカとカリブ海諸国を征服し、キリスト教への改宗を進めました。

神と王の名のもとに、征服者たちはインディオを屈服させ、彼らの主権と財産と自由を奪い、「真の宗教」を強制しました。彼らはキリストの十字架を持ち込み、インディオをその十字架にかけました。この暴力行為は、ラテンアメリカ諸国とその多様な文化を誕生させるきっかけとなりましたが、その代償は、多くの地域で今なお差別される敗北者によって支払われたのです。カトリック信仰がイデオロギーに利用され、唯一の認可された宗教である国教として、スペイン帝国の利益を追及するための極めて有用な道具として、権力と癒着したことは明らかです。

しかし、同じカトリック教会の内部から、インディオの人権を侵害する植民地政策に批判的な立場をとる人々が現れ、人権および国際的な人道主義に基づく権利に関する根本教義を誕生させました。

アントン・デ・モンテシノス師、ペドロ・デ・コルドバ師、フランシスコ・デ・ビトリア師、そしてもちろん、バルトロメ・デラス・カザス師などの名が思い起こされます。国家や教会、征服者や入植者からインディオを守ろうとした人々です。

このような史実を述べるのは、私がインディオの土地の出身者であるためです。バルトロメ・デラス・カザス師は、私の出身地であるメキシコ、チャパス州、サンクリストバル・カトリック教区における最初の司教でした。チャパスは、五〇〇年前のザパティスタ・インディアンの反乱で知られていますが、ザパティスタ・インディアンは今なお全てのメキシカン・インディアンと共に彼らの権利を求めて戦っています。

カトリックは、歴史を通して、さまざまな方法で、人権侵害の合法化、隠蔽あるいは正当化に利用されました。ついには宗教的動機を含む内戦を引き起こし、メキシコ国内で夥しい血が流されました。

カトリック教会と政治権力経済勢力の結びつきが、人権の組織的かつ構造的な侵害に加担する否定的な要素だったことは明らかです。もちろん、私は人々の中に善意がなかったとは申しません。しかし、政治権力、経済勢力の論理は、自らの利益を優先し、使える資源はいかなるものでも利用するのです。だからこそ、我々カトリック教徒は、自らの信仰が、生命や人民の権利を損ねたり万物の不利益になるように利用されることを防ぐため、自らの態度と責務を見直す必要があると思うのです。

信教の自由は世界的に認められた権利なのですから、私たちは、文化的、政治的、経済的あるいは社会的権力から独立して、この権利を行使しなければなりません。そして、そのような権力に対し、人民の要求する正当な業務を実行させるよう批

判的な姿勢をとることが重要です。カトリック界においては、告解派的な政治集団は、多くの場合、人権および人民の権利に対する重大な侵害を犯す権威主義政権や独裁政権さえも支えるため、教会の道徳的権威を利用してきました。

カトリック司祭と軍部の不透明な関係については、念入りに調査する必要があります。

カトリック教会の中心であり、複雑な外交的ネットワークを持つバチカン市国の継続は、メキシコを始めとするラテンアメリカにおいて、人権ならびに教会の権利さえも侵害する行為に加担しました。政府および軍は、これと共謀する一部のカトリック教会当局者と手を組み、このような組織を利用する方法をわきまえていました。新たな千年紀におけるカトリック教会は、ラテンアメリカの生活を暗く覆った独裁政権に関わる不正行為を理由として、バチカン市国組織、特にその大使（ローマ教皇使節）を排除するのが健全と言えましょう。多くの場合、彼らは権力の駆け引きに進んで身を任せたのです。

六〇年代の第二バチカン公会議以来、カトリック教会は、信教の自由ならびに諸宗教間の関係、協力および寛容に関する教義を深めてきました。しかし、教会員とその階級制度の慣行において、しばしば、この教義は適用されることがありませんでした。そのため否定的な緊張状態を生じさせ、他の宗教あるいは他のキリスト教宗派とさえ、実りある協力関係の構築を妨げました。

我々カトリック教徒は、自分たちの共同体を啓蒙し、他の宗教共同体と力を合わせ、常に最貧層、民族集団、少数民族、疎外された人々、見えざる人々の権利に重点を置き、あらゆる者の人権の行使と擁護を促進する機構を構築するよう主張すべきです。

カトリック教会が人権に関する教義を深め改新することは、人権と万物の尊厳の神学的基礎について、教会員の啓蒙と教育を促進する責任を教会が負う効果をもたらします。この点からも、早急にカトリック教会の規則と内部慣行を見直し、カトリック共同体への完全な尊敬を回復し、あらゆる者の権利の最大限の尊重をもたらすため必要な変更を図らねばなりません。

私は、教会内で女性が排除されている問題を深く憂慮しています。我々の教えは全ての人間の平等な尊厳を定義しているにもかかわらず、女性には、権威ある地位や職に就く権利がなく、それらに就く資格は男性に限られています。

インディオに対する人種差別の問題もあります。インディオは教会の正会員になることを許されませんし、カトリック教会はインディオの文化に対する配慮が欠け、また尊重もしていません。これは、次の千年紀が到来する前にカトリック教会が精算しなければならない歴史的な負債です。

少数民族と貧しい人々が置かれている状況もまた極めて重要な課題です。彼らは、生まれた時から、当然享受すべき社会参加の権利を奪われています。

今では、多くの人々が、自分たちの人道的理念と正義を求める熱意が、宗教的言説によって暴力と不公正を正当化する人々の行動と相容れない、という理由でカトリック教会を去りました。

信仰上の見地に立てば、人権に対する理解は、必ず学問的、政治的な定義を超えます。それは、万物との共生をはかる人間生活の意味と運命に到達します。さまざまな宗教共同体が、互いに補完し合う複数の理解を人類に対して提供すれば、それらはやがて政治経済制度に極めて重要な貢献を果たすに違いありません。宗教が提供する理解は、人権侵害が例外的な行為とみなされる、数百万の人々にとっての日常茶飯事ではなくなる社会状況をつくりだすための多大な貢献をするはずです。

世界の宗教は、人類の歴史を通じて、戦争、不和、人種差別、暴力などの原因、口実あるいは根拠になってきました。人類が成熟段階に達した今こそ、諸宗教の賢明な貢献により、連帯責任として宗教教義を浄化すべき時です。

そして今こそ、諸宗教は、宗教共同体の目的とは異なる目的に利用されることから袂を分かつべきです。宗教共同体が優先すべきことは、神または絶対者、あるいは宇宙との霊的交わり、ならびに人間共同体内部の霊的交わりをつくりだすことです。

さまざまな宗教共同体が、あらゆる破壊的傾向を一掃するような自己批判を

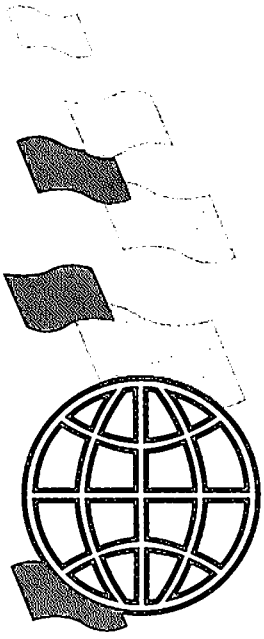
試み、現実的な対応により複数の集団を受け入れることが必要不可欠です。早急に宗教対話を持ち、互いに尊敬し合える実り多い関係を築き、その関係を、調和を背景に人間の尊厳を擁護し、促進する真の協力へと発展させなければなりません。

どの宗教も、人間同士のふれあいを豊かにし、現実と人間の運命についての理解を深めるのに役立つあらゆるものを、自らの叡智の中に探し求めなければなりません。

宗教は、経済的、政治的制度に立ち向かう際に、貧しい人々、女性、被差別者ならびに少数民族の権利の擁護と増進のために制度改革を要求する道徳的基準であり、極めて重要な実例となる避けられない義務を負っています。

今こそ和解と協力の時です。私たちは、宗教の偉大な活力が浪費されるのを見過ごすことはできません。私たちは原動力として、開発、国内および国際的な正義、ならびに倫理規範の新しい役割を推進するという、共通の確固たる使命を託されています。伝統を重んじながらも、新たな現実によって啓蒙され、ありとあらゆる暴力、競争および対立を過去の遺物としたいという強い願いによって導かれています。

全ての宗教者は、生命、人権ならびに自然の尊厳について、人類を教え導くという重大な責任を分かち合っています。私たちは、各宗教の権利の尊重へと至る、喜びに満ちた対話と宗教協力の道を歩む必要があります。そして、このグローバル化の時代に、あらゆる人間の貢献により、人類史上初の世界平和を達成しなければなりません。



人権問題と宗教者の責務

―真宗仏教徒の立場から―

真宗大谷派教学研究所所長
西田真因師

最近、私どもは、現代の子供の心が深く病んでいることを象徴するような事件に遭遇して深い衝撃を受けております。そこには、今日の「人権問題と宗教者の責務」という問題が象徴的に現れているように思うのであります。宗教者は、人間とは何か、人間の存在の意味は何か等々の問題を説く責務を持っております。「透明な存在であるボク」という少年の言葉は、生きる意味を喪失した心の表現でありましょう。それが私ども宗教者の心を激しく撃つのであります。

さて、人権問題に対する宗教者の責務について、次の三点にしぼって意見を述べさせていただきます。第一は人権の理論的根拠の問題、第二は人権感覚の育成の問題、第三は人権の視座からの教団の自己点検の問題、以上三点であります。

先ず第一は人権の理論的根拠の問題であります。「人権」という観念はヨーロッパ近代の自然法思想の中から育った観念であります。日本語としても翻訳語として成立している言葉で、日常感覚の中から出てきた言葉ではありません。そのために法的な用語として流通してはいますが、どこか日本人の深い感覚に根ざした言葉になりにくい面があります。それは日本人にとって理論的根拠がはっきりしていないということにも一因があるのではないかと思われます。

私ども日本の仏教徒にとっても「人権」は新しい言葉であります。しか

し、私ども仏教徒にとって「人権」という言葉はありませんでしたが、いうまでもなくその概念がなかったわけではありません。仏教では、一切の衆生がその心の深奥において求めている願いは「仏になりたい」という願いであると教えられています。その「成仏」の願いをもった存在として一切衆生を見る〈まなこ〉が仏の（まなこ）であります。私どもはその仏のまなこに教えられて、生きとし生ける者すべてがその心の深奥に成仏の願いを秘めた尊い存在であることを教えられるのであります。しかも、仏は「一切衆生悉有仏性」（『涅槃教』）と説かれます。すなわち、その成仏の可能性（仏性 buddhadhātu）が一人ひとりの衆生に有ると説かれるのであります。その可能性の実現にはいろいろな方法があり、各宗派によって異なるでありましょうが、いづれにしろ、最終的には仏に成ってその深奥の願いを成就すると説かれます。一切衆生の中でも、私どもは人として生まれさせていただきました。人として生まれることによって、仏に成る仏の教えを聞くことができます。したがって、私ども仏教徒にとりましては、人間は互いに仏に成ることを求めて、その仏道を歩む者であります。そこに互いが互いを尊敬し合うべき道理がある。実は、ここに私ども仏教徒にとっての「人権」の理論的根拠があるのであります。これは一切衆生の生きる意味の問題でもあります。

第二は人権感覚の育成の問題であります。人権感覚の問題はその根底の生命感覚の問題とも通底しております。したがって、人権感覚を育成していくためには根源的には生命感覚を培っていかなければならないと思います。奈良時代の行基菩薩の作と伝えられていますが、「山鳥のほろほろとなく　こゑきけば　ちちかとぞおもふ　ははかとぞおもふ」という歌があります。これは単に一人の優れた仏者の歌にとどまらず、当時の仏教の生命感覚を表現したものでありましょう。そういう生命感覚は、たとえ「人権」という言葉はなかったとしても感覚的には古代的な或る種の人権感覚を培っていたと思われます。ところが、近代文明は自然を征服すると称して自然破壊を進めてきました。現代文明は、私どもがその恩恵に浴しているのでありますが、自然破壊が誰の目にも危機的な状態まで来ていると感じられています。また生命工学や遺伝子操作技術の開発は人間に利益をもたらしてはいますが、一方臓器をパーツと考えていくような生命観を培ってはいないでしょうか。そういうことから思われますことは、私ども現代人の生命感覚が冒され、深いところで病んでいるのではないかということであります。冒頭に述べた、子供の犯罪にしても生命感覚の希薄化によるものでありましょう。喜びや怒りや哀しみや楽しみを生きている一人の生命としてのあたたかみが感じられない。何か機械的な無機質な存在となっている。そんな現実の情況の中で、生命感覚の回復を目指すには、宗教者が生命は何故尊いかという生命存在の意味を説いていく責務があります。

第三は人権の視座からの教団の自己点検の問題であります。私どもは宗教者として社会に人権の侵害がないよう訴えていかなければなりません。しかし、先ずなにより私ども仏教者自身がそのような人権感覚をもって生きているかどうかを検証してみる必要があります。その自己点検は二つの領域にわたってなされるべきであります。一つは現実の自己の教団の内部の問題であります。もう一つは教団の歴史の検証であります。私どもは自己の教団の歴史を省みるとき、時の政治に加担し、支配のイデオロギーを提供してきた事実はいなめません。たとえば差別即平等と言って、現実の社会的差別を是認してしまう思想的根拠を提供し、また善因善果悪因悪果の宿業説を説き社会的差別を自業自得としてあきらめさせていく思想を提供してきました。しかも、それらの言説によってみずから差別戒名または差別法名をつけ、身分差別を温存助長してきました。これらの歴史的事実の点検とともに、その根拠となった教学・教化についても厳しく点検しなければなりません。これらについては現在、各教団において鋭意検証が進められているところであります。そのことが現実の教団の自己点検とも連動しているのであります。

以上、三点にしぼって申し上げましたが、要は、現代の根源的課題は、私どもの視座から見るとき、現代人の〈意味の喪失〉にあると思われます。どう生きたらいいかわからないという深い〈困惑〉が現代人の心の奥底にあるように思われます。そこに、人権問題の核心がある。その核心の問題に応えていくこと、そこに宗教者の根源的責務があると思います。

最後に一言付け加えることをお許しいただきたいと思います。自由と平和と権利の平等が実現され、何人も自己の尊厳をおかされることなく「成仏」の道、すなわち浄土真宗においては「願生浄土」の仏道を歩むことのできる社会を私ども真宗大谷派では「同朋社会」という言葉で表現しております。私どもは、その「同朋社会」の顕現に向けて宗門をあげて同朋会運動を推進していることでございます。今回、この意見発表の機会を与えていただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後、心も新たに一層の努力をつくしてまいる所存であります。

大地―命の根源―と人権問題

アオテアロア・マオリ族宗教指導者
ポーリーン・E・タンジオーラ師
Tena Koe

敬愛する諸先輩方、さまざまな宗教宗派の皆様、そして渡辺名誉議長と天台宗の皆様、このたび日本宗教代表者会議のお招きにより、ジョセフ・テリト氏と私は、このおめでたい集いに列席させていただくことが出来ました。この神聖な場所にお招きいただきましたことは、私たちの将来の人生にとっても、また未来の世代にとっても、いつまでも霊的な影響を及ぼすことでしょう。

このように数多くの宗教宗派の方々とその先達及び指導者の先生方がご参集になり、祈りを通じて人類社会を高められることによって、数多くの問題が解決の道を見出すに違いありません。世界に向けて「比叡山メッセージ」は、平和の精神の強い力を発揮することでしょう。

人権問題と宗教者の責務

枝の間から木漏れ日が差し込み、水が滝を流れ落ちる。鳥は枝から枝へと舞い、そよ風に乗って子供たちの笑い声が聞こえる。母なる大地には美が与えられています。

無邪気な笑いは限りなく貴いのに、私たちはなぜこのような宝石を大切にしないのでしょうか。

私たちは毎日のように不正を見聞きしているにも拘わらず、それらに鈍感になってしまったのでしょうか。

人間は、地球の軌道を厳密に説明できます。また、地球と宇宙との相互作用についても説明します。これは現代の世界における科学の功績です。私たちは、宇宙空間に「発射される」多くの人々が無事に帰還を果たすよう共に祈りを捧げようと集うことさえします。しかし、その一方で私たちの目はかすみ、数百万人の人々が虐げられ人権が踏みにじられているのに見えないのです。

私たちの耳には、侮辱されている老若男女の嘆きが聞こえません。実際に他者を人権侵害から救うことを求められると、私たちのエネルギーのレベルは一段下がってしまうようです。私たちの手は、これらの人権侵害が行われている国の政府首脳に、手紙を書こうとはしません。祈りを捧げる

方が気楽だからです。どうか誤解しないで下さい。**祈りは極めて力強いもの**です。

私がお話しするよう依頼されたテーマは「**信仰を持つ人々**」についてです。オックスフォード英語辞典で説明すると、とても難しくなります。引用させていただきますと、「宗教的教義を信じること、典拠に基づく信仰—真実とは別に神の実在を霊的に理解すること—信仰の体系」などとあります。

土着の共同体に生まれ、百六十年以上にわたって様々な宗教的見方を伴う植民地化にさらされながら、それでもなお私たちの中には万物の根源である Matua Io すなわち全ての創造主を信じる者たちがいます。私たちは、人間やその他の生命を含む生きとし生けるもの全てを尊ばねばなりません。あらゆるものには Mauri すなわち生命力が宿っているからです。そして、これは決して弱めてはなりません。

創造された私たちの精神は、特定の棚や引き出しにしまっておくことは出来ません。精神界は我らが兄弟への責務を引き受け、それを果たすよう定めているのです。私たちの義務は、あらゆる人間の重荷を分かち合うことです。

私たちの精神は、究極的に人権という大儀に向けて一切の他の課題とは独立し、献身するよう導くのです。

ありのままの人間性によって私たちはしばしば苦境に立たされます。「正しい生き方をしているか」と監視される立場や境遇におかれることを好む者はいませんが、私たちが逃げ込むときの言い訳は、「仕事に厄介なことになるかもしれないから」とか、「経営者に政治的だと思われて職を失うことになるかもしれないから高くつきすぎる」とか、たいてい行動を起こすことによってあからさまな敵意が生じる場合の想定などです。

安全な場所に逃げ込み、苦境から遠ざかることは楽です。しかし私たちの奥底にある精神は、私たちの人生にとってのみ大切であるような平穏と平和を許しはしないでしょう。

自らの導きに従いたいと願うとき、人の力は考慮に入れるべきものになります。しかし私たちの wairua（精神）は強く、人生に目的を持っているにも拘わらず、ああ、人々の抑圧を目の前にした時、内心は恐怖に震えるかもしれません。こうして人権が踏みにじられると、行動が伴わない同情は何の役にも立たないでしょう。

謙虚さには、心の強さと大いなる英知が伴い、形而上学的なものが支配するのです。

正しい志を持てば、必ずや良い結果をもたらすものです。従って、宗教者は、自らの責務を直視しなければなりません。さもなければ、協力し合って人権を擁護するという責務を果たすことは出来ません。

権利と責任について話し合うだけで全てが変わると信じるのは、単純すぎるといえます。平和が必要なのは私たちの最も奥にある魂です。魂の平和がなければ、私たちの精神は、周囲の人々との調和や平和的共存のために努力することはできないでしょう。

私たちの同胞が、水もなく、雨風をしのぐ場所もなく、母なる大地を踏みしめることさえ許されていないときに、私たちに民主主義や信仰を持つ人々について語る権利はありません。宇宙は、人間が分かち合いにより結びつけられた秩序ある全体となることを求めています。造物主の絶対的な英知は、全生命が平和に共存しているときのみ、人の霊性が安まるよう定めたのです。人権は大地と分かち難く結びついています。私たちは大地であり、大地は私たちです。大地無くしては信仰も他者の人権に対する責務の必要もあり得ません。

このような言い伝えがあります。私たちのことばでは、このように言います。

Ki te Taiao
Ki te Ao Marama
Tu toi te Rangi
Tu to te Whenua

大まかに訳しますと、このようになります。

生命のエキスを吹き込め、世界へ
環境へ
この光の世界へ
空がいつまでも続くように
大地がいつまでも続くように

私たちがどのような霊的或いは宗教的次元に属していようとも、お互いを尊重しつつ集い、私たち全体のリーダーシップによって、人々の精神を高め、生命のエキスを分かち合えるようにと祈ります。

Tena Koutou Tena Koutou Tena Koutou Katoa

人権は神が与えた権利

世界教会協議会副総幹事
S・ウェスリー・アリアラジャ博士

今年の七月四日、私たちの地球から一億二千マイル離れた隣の惑星である火星の荒涼とした表面に、パスファインダーによって小さなロボット・ソージャナーが着陸したとき、惑星間旅行の分野に大きな一歩が踏み出されました。このときの科学界の興奮と熱狂に比較できるものがあるとすれば、それは二十八年前の宇宙にまつわる一大イベント、即ちこれもまた地球の隣にある月の表面に人類が一歩を踏み出したときに他ならないでしょう。

速やかに幕を閉じようとしている二十世紀は、科学技術が大きな進歩を遂げた世紀といえるでしょう。この進歩は大気圏外の宇宙のみならず、微細で精巧なDNA組成などの体内構造にも向かい、生命の基本要素を操作するという人間にとって重要な可能性を開きました。

人知の可能性を讃える一方で、見識ある人々はそこに潜む皮肉を見落としませんでした。約一億七千百万ドルの建造費をかけたパスファインダーと二千五百万ドルをかけたソージャナーが無人の火星の表面を探査している一方で、この地球上には、神が与えた人間の尊厳をもってこの地球という惑星の上を歩く基本的人権さえ奪われて、極貧の中或いは難民キャンプや収容所で暮らす数百万人の人々が存在するのです。二十一世紀には、驚異的な近代的通信の発達が国際化のプロセスを更に押し進め、人間生活を一層密なものにするといわれています。

しかし、私たちの経験に拠れば、科学技術の進歩と市場の国際化のどちらも、「人間的」な要素を、ほとんど或いは全く考慮しない論理に基づいていることは明らかです。むしろ技術的進歩とグローバル市場の影響力は、貧しい人々や国々を疎外する結果をもたらしました。多くの国々や人々が、進歩のためには「無くてもかまわないもの」になってしまいました。

何よりも経済論理を優先させる国際化の勢力は、国民の権利と利益の擁護者であるはずの国家や政府の力をも矮小化してしまいました。この勢力は、各国の経済とマスメディアに対する巨大な影響力と支配力を獲得し、政府を支援したり或いは倒したりする力さえ手に入れて、国民の利益や権利のための政治機能を事実上低下させています。それどころか、多くの政

府は、政府自身が人権侵害の張本人となってしまったのです。

戦時中に人々の基本的人権がおろそかにされたり侵害されたため、或いは現在のように巧妙な形で人権が侵害されたために、国際社会は一九四八年に世界人権宣言を採択しました。宣言は、人権、性別、言語或いは信仰に関わりなく、あらゆる人間に対する人権及び基本的自由の尊重を促進するため国際協力を図ろうとするものでした（第一条三項）。ここで唱われた権利は、経済的、社会的及び文化的権利に関する国際協定に、更には女性の権利、児童の権利、拷問、集団虐殺、マイノリティや先住民族の権利等を対象とした個別的人権に関する数多くの条約に反映されました。

個々の人権は擁護されるべきですが、その一方で国連が人権の意味を、「本来我々に備わっており、それなくしては人間として生きることができないような権利」（一九八七年、国連）として包括的に定義したことは注目に値します。

神を信仰する宗教では、これらの人権のことを「神が与えた権利」と呼びます。聖書には、人間は「神のかたち」に創られたとはっきりと記されています。

アジアの宗教では、生命の単一性ならびに万物の原理としての dharma と ahimsa（非暴力）に重きを置き、あらゆる生命の神聖さと尊厳という同様の指針を示しています。仏教では「すべての命の相互依存性」と「慈悲」を強調することで、生命の尊厳を守るようにくり返し教えています。

技術、経済、政治が、人間性を犠牲にした利潤追求に向けられている世界においては、あらゆる人間の尊厳と権利を守るのが、宗教の第一の責務になります。宗教界が人権に関わることは「政治的」領域に踏み込むことだとする宗派が一部に存在することは、非常に残念です。そういう方たちは、宗教の果たすべき役割は人権などの「世俗的」問題ではなく、もっぱら「霊的」問題にあるとお考えになっているのではないでしょうか。これでは人権擁護への宗教者の声は弱々しくなります。これは宗教それ自信への裏切り行為です。

なぜなら、人間の尊厳と自由は私たちが人間であるために欠かせないものだからです。とりわけ全ての宗教は、社会における相互の人間関係に非常に重きを置いているため、人間生活の霊的な側面は社会的側面を決して切り離すことができません。私たちのどの宗教にも人権を侵され、不当に扱われた人々のために立ち上がった預言者、改革者、聖人たちがいました。

人権に対する宗教の責務は、宗教心に基づく声明を発表することではなく、私たちの修行の一部として、あらゆる人間と社会の権利と尊厳を進んで説くことから出発すべきです。人権の侵害を監視するのは目覚めた社会だけなのですから。

しかし、私たちは更に先へと進み、個人と社会の権利を擁護し、必要とあればそれらを守るために闘う必要も出てくるでしょう。人々の権利を無視するような進歩は無意味であること、また人間共同体の一部を置き去りにするような進歩は無益であることを人々に警告するのは、人類の幸福に関与する者全ての責務です。

一九二八年、有力なキリスト教神学者の一人が「分裂した教会では世界に立ち向かえない」という有名なスローガンのもとに、キリスト教会の連帯を呼び掛けました。今日、物質的進歩の勢いは、分裂した宗教界にとって手強すぎるといえます。私たちは、あらゆる人間とコミュニティの尊厳と権利を守る闘いに加わる必要があります。次世紀における宗教の威信は、この活動に参加しようとする私たちの意志にかかっていると言っても過言ではありません。

テーマ③ 共生の理念の確立と宗教

全宗教に共通の価値観をみつめて

サルボダヤ運動創立者
A・T・アリヤラトネ博士

今回の宗教サミットを組織し、準備して下さった天台宗および日本宗教代表者会議の皆様に御礼申し上げます。今から十年前、今日私たちが直面している地球全体の問題と戦うという共通の目標のため、あらゆる宗教、宗派を集めて始まった運動は、このサミットを経てさらに強化され、実践の中に具体化されるものと確信しております。私をここへお招き下さいました渡邊惠進天台座主に厚く御礼申し上げます。

地球上に存在するあらゆる形態の生命は互いに結ばれています。最小の細胞から、最大の生命存在すなわち私達の地球に至るまで、この相互関係なくして、健康的に共生することは不可能です。宗教はこの真理を悟り、生命と愛を尊重しています。釈尊は、あらゆる存在に対する慈(Metta)又は思いやりを非常に重んじました。釈尊は、縁起に関する教えの中で、私たちがいかに原因と結果の鎖に支配されているかを説き明かし、幸福と調和に満ちた人生を送りたければ、常にこの原理を忘れないで欲しいと懇願されました。

このような教えにも関わらず、私たちの周囲には、不調和と混沌と争いがあふれています。人間は心の中で自分自身と戦っています。人間の頭と心も分離していて、言うべきことや為すべきことをわきまえていながら、ある種の状況下で、それとは正反対の行動をとらざるを得ないという乖離状態が存在します。したがって、私たちは一人の人格の内にも矛盾をかかえながら生活しているのです。これが本人に多大なストレスや重圧、さらには精神的苦痛をさえもたらします。またストレスが健康に悪影響を及ぼし、それがもとで重い病気を患ったり、早死にしたりすることさえあります。

同様に、家族同士や家族以外の人との間にも同じ乖離状態が存在しており、同様の不幸な結果を招くことがあります。この場合、矛盾は人格に内在せず、広く深刻な社会的結果を伴う対立状態をもたらします。こうして社会全体が病んでしまうのです。これは、家族の絆や伝統的な価値体系、宗教的規範の崩壊、アルコール中毒や麻薬中毒、窃盗やその他の犯罪の増加、婦女子に対する性的嫉がらせ、政治的暴力や内戦、さらにテロリズムという形で顕在化します。

このような退化現象は、これらをきわもの的に扱う無責任なメディアの報道によりさらに加速されます。人々はこのような状況に慣れてしまい、成長期の子どもたちは心理的な悪影響を被っています。殺人、レイプ、流血、戦争などのシーンが、まるで一般社会に不可欠な要素であるかのように、通信メディアを通じて、全世界にまことに無責任にたれ流されています。国際経済においては、このような邪悪な生業の罪深い行為に対し、大量の資本投下がなされています。真の開発と社会調和が忘れ去られ、邪悪で倫理に反する非道徳的な手段を用いた金儲けが、正当化されているのです。社会全体が、経済成長と一人当りの収入増加にのみ気をとられ、個人と社会の幸福をめざす真の進歩というものを忘れています。

このような状況のもとで、宗教の基盤、あるいは人格と社会の精神的内容が完全に見失われています。一部の宗教団体でさえ、このような傾向に陥っています。今は、諸宗教の間で縄張り争いをする時ではありません。

力を合わせて無信仰や物質主義と戦うことが、宗教界全体の責務です。私たちの社会におけるこの極めて危険な傾向と戦うために、宗教は何ができるでしょうか。私は、宗教は次に概略を示す二項目のような、共通の方針と戦略に従うべきだと信じます。これにより、人類文明のこの重大な節目に、人間に関する全ての領域で、破壊主義的な勢力を阻止し、再び人々の心の中に霊性と道徳と倫理の火をともすべきです。

一、貧困、病気、犯罪、戦争、環境、エコロジー、生物の多様性の破壊および汚染に関する問題、政治的・経済的不安、ならびに精神的・道徳的退廃などは、別々の問題に見えますが、全て相互に関係しています。すなわち悪循環です。ですから私たちは、私たちの行動とプログラムが広範囲の影響力を持ち、最終的には共生の理念が受け入れられるよう、あらゆる領域において積極的に力を発揮することを誓う必要があります。

二、このような建設的なプログラムを成功させるためには、あらゆる宗派が思想上の差異を乗り超えて、あまねく受け入れられる価値体系を築き、協調して活動する必要があります。各宗派は自身の主体性を保持しつつ、宗教者が直面する共通の問題に取り組むため協力しなければなりません。

スリランカのサルボダヤ・シュラマダナ運動は、そのような宗教協力の一つの具体例です。サルボダヤは仏教思想に基づいていますが、スリランカのあらゆる宗教共同体と協力して活動しています。あらゆる人々が、カースト、人種、宗教、国籍に関わりなく、平等に扱われています。過去四十年間に、サルボダヤはスリランカ国内の約一万二千の村で人々を組織するのに成功しました。人々は、非暴力的手段を通じて、あらゆる宗教に共通な精神的価値に基づく新しい社会秩序を築くため、相互に協調し、自然と調和しつつ活動しています。サルボダヤは、これらの村で、貧困の撲滅、健康と衛生状態の改善、環境の保護、子供、女性、お年寄り、身体障害者、孤児の介護、平和建設などの目的のため積極的なプログラムを実施しています。サルボダヤは、物質的幸福と精神的幸福を両立させつつ、同時に築けることを証明しました。宗教組織の支援があればサルボダヤと同様のプログラムを世界中で成功させることができるでしょう。

神道の心と万物の調和

高千穂神社宮司
後藤俊彦師

本日は世界宗教者平和の祈りの集いにおいて、神道の立場から意見を述べさせていただく機会を得て光栄に思っております。

ひとくちに神道と申しましても「八百万神々」というぐらいですから、神道人の宗教観も実に多元的です。今日は神道という固定した立場を離れて「神道的日本人」といった気持ちで私見を述べさせていただきます。

「共生の理念の確立と宗教」というのが与えられたテーマですが、今日「共生」と申しますと各宗教間のことのみならず、世界の多くの国々や自然と人間との共生といった地球的（グローバル）な観点から語られることが多く、現代文明が進歩すればするほど、これらは分かち難く相互かつ緊密に結びついております。

神道はわが国最古の神話・歴史書である『古事記』『日本書紀』に記載されたわが国の起源神話等々を信仰の基盤としておりますが、教祖はもと

より厳密な意味での教義をもたず、一種の儀礼的信仰としていつとは知れぬ遠ひ昔からわが国土に自然に生まれ、長い歴史の中でそれぞれの時代に応じて新しひ思想や価値観をとり入れながら発展してまいりました。

わが国に仏教が伝来したのは西暦五三八年（欽明天皇七年）といはれますが、用明紀には「天皇は仏法を信じ、神道を尊ぶ」と記されてをります。それまで日本古来の神々を信仰していた私どもの祖先たちは、仏教もまた「客なる神（蕃神）」として受け入れ、以来千年にわたって神道と仏教とはこの国で平和的に共存してきたのであります。たとえば第一回の宗教サミットが開催された比叡山は伝教大師（最澄）によって大陸伝来の仏教をわが国土と国民に適合した「日本仏教」（大乗仏教）として発展させるために延暦七年（西暦七八九年）より創建されたものですが、山には延暦寺の守護神として地主神である日吉大社（大山咋神）が鎮座してをります。このやうにわが国では、神道と仏教とは宗教的トラブル摩擦を生ずるよりも、むしろ相互に影響し合いながら融合し発展してきた面の方が大きいのです。

日本仏教が著しい発展を遂げた鎌倉時代（十二世紀）の人に西行という人物がいました。彼は若くして出家し、仏道を身をもって生きた歌人でわが国の芸術史上重要な人物でもあります。戦乱の世を生きた西行は深く仏教に帰依すると同時に神祇に対する尊崇も篤く、晩年には伊勢皇大神宮、内宮、外宮それぞれに対して三十六番からなる歌集二巻（『御裳濯河歌合』『宮川歌合』）を奉納して神宮に誠を捧げてをります。

また、この時代の国を二分しての源氏と平氏との戦いを記述した『平家物語』は、その背景に仏教的無常観と戦死者に対するわが国古来の神道的鎮魂の思想が融合して日本文学史上希有の作品が生まれました。このやうに神道と仏教徒が共存したことは、わが国民性の形成に大きな調和をもたらして独自の精神や文化を創り出してきました。

このやうな神道と仏教との共存と調和を可能にした理由としてこの国の風土と「和を尊ぶ」日本人の性質があげられます。先に引用した用明天皇の御子で、今でも多くの日本人から敬仰されてゐる上宮聖徳法王太子は、十七条の憲法の中に「和を以て貴しと為す」と記して当時激しかった氏族間の争いを戒められました。

さらに古くわが国の建国神話の中で、人皇第一代の神武天皇は、小国分立して争っていた国々を統一した後に「八紘為宇」といふ理想をお示しになりました。八紘為宇とは沢山の国々や人々を一つの大家族として仲良くまとめていくといふことであります。さらにそれに先立つ葦国神話では、イザナギ・イザナミ男女二神の神々が国を生み、その国を治めるために天照大神の皇孫である瓊々杵尊が、高天原から稲穂を携へて地上（日向国高千穂峯）に光臨してきたと伝へてをります。天照大神とその子孫の神々（現在の皇室の御先祖にあたります）は、日本人の生と幸福を約束しその根元となる稲作を日本中に広められた大元の神たちであり、日本国はもともと稲作による福祉国家の実現を理想として誕生した国なのであります。そして皇室を中心として国民が一つにまとまり人々の生命の根源であり村や国の基となる稲穂の神の祭りを一様に営んできた。相異なる氏族やクニやムラが、共通の命の根源を認めることによって融和してゆくといふことは、神も人も多くの自然までもが同じ命から生まれ出でお互いにつながりを有っているといふ神々の系譜となっています。特に稲作を基本とする農耕社会では多くの自然の条件とその恵みに負ふところが大きく、人々の協同作業とそれぞれの能力に応じた力の結集が不可欠の条件でもありました。

太古の昔、人類の祖先たちは超越的にして偉大なる絶対の存在に対して、或いは人々の命の糧となる自然の恵みに対して、畏れと感動をもってこれを礼拝したであらうと思います。その聖なるものの存在と解釈が民族や地域によって様々に異った表はれ方をし、異った宗教や教義となって発展してきたことは事実です。そして己が所属する宗教とその教義がそれを信仰する人々にとって譲ることのできない絶対のものであることも承知していますが、この唯一絶対という考へは歴史上、往々にして他の宗教と並び立

つことを許さないという独善的で排他的な風土を作り出してきました。しかし、人間が一人で生きることができず、この世界が自分一人だけの世界だけではなく、自分の世代だけの世界でもないやうに、この世界は全ての存在が未来永劫にわたって共存共栄していく世界なのであり、日本人の死後観では死者の霊魂もまた共にあり続ける世界なのであります。そこでは他者（或いは他宗教）に対する理解と多元的価値を容認する「寛容さ」が求められます。寛容はまた愛や慈悲そして誠の心なしには生まれえず育つこともできません。惟神（かんながら）の道を説く神道は大らかにして、みずからに謙虚な信仰的風土をもってをります。従って神道人は一人一人が神の「みことも ち」（神々から一つの使命を授けられている）として世の中に貢献し、世界人類の共存共栄のために祈ることを綱領として掲げています。中国の格言にも「求同存異」といふ言葉がありますが、世界の諸宗教にもまたそれぞれにふさはしい特性と使命があって、決してすべてを一色で塗りつぶすことを私は好みません。

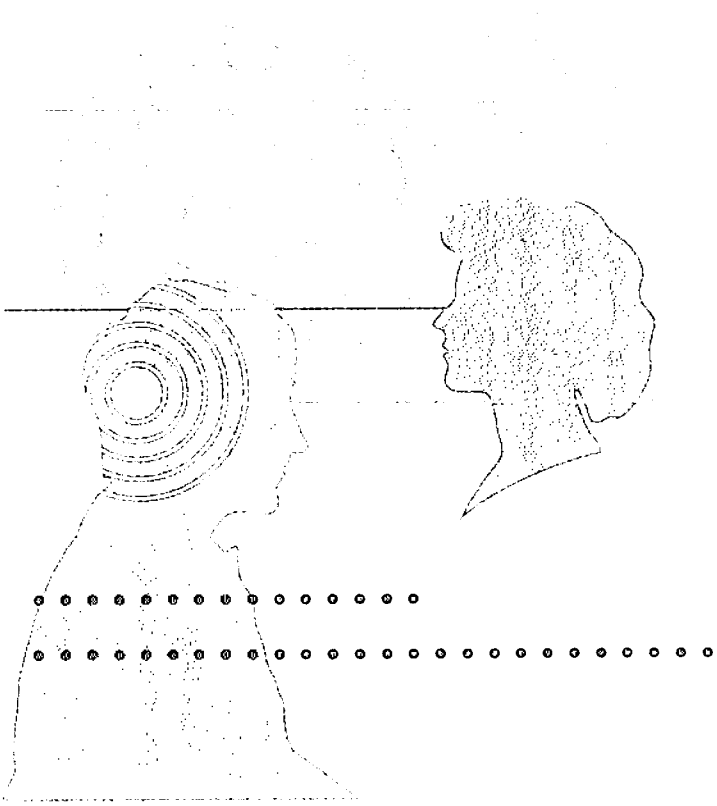
最後に歴史家の多くが、古代ローマ帝国が長期にわたって繁栄した理由の一つに、ローマが宗教に寛大であったことを指摘しています。また十八世紀、プロイセンの王であったフリードリッヒ大王は、「宗教はすべて寛大に扱わなければならぬ。浄福を得んがためには人おのおのの流儀あるべし」と言い、彼の時代に小国プロイセンは大いに繁栄したと申します。神社の祭礼では宗教・宗派の異なる多くの若者が、「天下泰平・五穀豊穣」と大書したお札のかかる神輿（みこし）を一緒に担ぎます。ここに私は日本社会の和と活力の一因があると信じてをります。人間にとって最も影響力のあるものーそれが宗教であり、もし宗教と宗教とが互いに争うならば人類にとってこれほどの不幸はありません。巨大化していく戦争や地球環境の悪化という行き詰まりつつある文明を克服する道はすべての宗教が原点に立ち返り霊的文明の開拓に力を尽くす以外にはありません。

私ども日本人が敬愛してやまない先帝・昭和天皇は

あめつちの神にぞ祈る朝なぎの
海のごとくに波たたぬ世を（昭和八年）

と詩に詠まれ、戦後のある時「平和（ピース）とは必ずしも戦争をしていない状態をさすのではなく、国と国とが調和（ハーモニー）している姿を云うのであらう」とおっしゃったと洩れ承はってをります。

現在の日本は多くの問題をかかへてをりますが、京都に数多い神社や寺院、そしてわが日本の風景の中に本日のテーマの解答を導き出すヒントが発見されますことを期待して私の意見発表を終わらせていただきます。



宗教の根本原理を共に学ぶ

パトナ大学
ウマ・シャンカール・シャルマ教授

Ⅰ

人類がこの地球上に出現して以来、生存のための戦い、支配しようとする戦いが存在していました。やがて、少し向上した人々によって生き残りのための平和的手段が考えだされ、道徳的秩序の概念が生まれました。リグヴェーダによれば、「リタ」と呼ばれる道徳的秩序は、存在それ自体を保証する根本原理です。この「リタ」は、主として生き方を示す宗教へと発展しました。「リタ」は、人生に対する自覚的態度全体を指す名前であり、理性的な認識と知識により形成され啓発されます。

宗教は科学と分かち難く結びついています。狭義における科学は宗教の必要不可欠な統合的要素であり、広義における科学は哲学を含み、科学は宗教とほぼ同一と言えます。現代思想家の多くが支持するこの観点から、文明進歩の段階の全てにおいて、哲学、科学ならびに宗教の三つの知的側面が必要であるという結論を導くことができます。

これらの相互関係には興味深い点があります。科学は哲学の胎内で形成され、宗教の形で成熟します。しかし、ある領域では科学がこの二つから解放され、一方、別の領域では、この二つが科学を凌駕しました。これは健全な進歩の兆候とは言えません。この三つは、人間をその最終目標としなければなりません。宗教は生き方を示し、科学は生活の快適さをもたらし、哲学は知的欲求を満たします。

Ⅱ

至る所で紛争と不和がはびこる現代世界においては、人間を本質的に最高存在とする（jīvo brahmaiva nāparah）ヴェーダの概念を信じることが、あらゆる問題の究極的解決を助けると思われます。先に述べたように、あらゆる思考過程と実践は、最終的に人間生活に恩恵をもたらすためのものです。それが、全ての精神的、肉体的努力の中心になります。人間とは、個体ではなく、最高存在のきらめきであり、すなわち最高存在と同一なのです。

現代の最も尊敬すべきヴェーダーンタ哲学者であるビベーカーナンダ師は、「一つ一つの魂は潜在的に神です。目標は、内的および外的な本性をコントロールすることにより、この内なる神を発現させることです。これを労働、崇拝、精神のコントロール、哲学の内の、いずれか一つ、いくつか、あるいは全てにより行い、自由になりなさい。これが宗教の全てです。教義やドグマ、教会や寺院、儀式や儀礼などは、副次的な些事に過ぎません。」と述べています。

Ⅲ

人の生は神の遊び場であり、いかなる場合にも、無意味なものとして捨てられたり、ないがしろにされたりするべきではありません。実世界においては、万人が本来持っている潜在能力を発揮し、最終的には生の精神的価値へと導かれるように社会はそれ自身のために、万人に適切な教育を提供し、貧困を撲滅し、万人にふさわしい仕事を保証しなければなりません。そうすれば、生の物質的、精神的実在は、世界全体に成果をもたらすようになります。このような生の理念は、ヒンドゥー教の生活理念と一致し、また本質的にカトリックにも民主主義にも通じるものです。

生の理念は世界平和を守るために必要です。世界共通の目的に寄与する、生のこのような楽天的な面が、地球上のあらゆる人間にゆだねられない限り、私たちは単に世界平和を夢見る者に過ぎません。ですから、人間はどんな立場にあろうとも尊敬の念をもって見られるべきであり、その邪心は

厳しい手段ではなく、平和的な手段によって正されなければなりません。人間の潜在的可能性は、最新の技術と心理学を用いて探り、それに基づく職業指導が行われる必要があります。人間は働くように教え導かれねばなりません。人は āśrama（当然為すべき労働）の体系を採り入れる必要があります。第二次世界大戦による壊滅的な打撃を被った日本が、人間の尊厳と労働の尊さの原則と愛国心をよりどころとし、たちまちのうちに復興を遂げたことは大変喜ばしいことです。しかし、発展途上国は、それとはほど遠い状況にあります。したがって、現在の人間と生に関する支配的な考え方を新たな形に作り変える必要があります。

Ⅳ

人間生活を完璧に調和のとれたものにするためには、あらゆる宗教が共通のプログラムに取り組み、共に考える必要があります。どの宗教も、他の宗教にも等しく受け入れられるような根本原理を持っています。ジャイナ教徒が mahāvrata と呼び、「ヨーガ・スートラ」の著者であるパタンジャリが yama と呼ぶヒンドゥー教の倫理は、五つの行いに要約されます。すなわち、ahiṁsā（不殺生、不傷害）、satya（真理または正直）、asteya（盗まない）、brahmacarya（邪まな欲望を抑制する）、aparigraha（蓄えない）です。仏教の pañca-śīla にも似たこのような倫理的教義は、キリスト教、イスラム教、ゾロアスター教やその他の宗教でも受け入れられています。これらは、全き調和の状態にある人間生活を形成するのに十分な行いであり、そういった生活は世界中の人間の基本的権利でもあります。マハトマ・ガンジーが、調和に満ちた生活をもたらすこれらの徳を重要視したのも当然でした。

人と人との違いは、カースト、思想信条、人種、宗教など、表面的な条件によって人為的につくりだされたものです。理性と技術的進歩の恩恵を受ける現代世界においては、このような条件は撤廃しなければなりません。この理念をはるか昔に予見していたウパニシャッドの賢者たちは、説教の一番最初で、門弟と共に次のように詠唱しました。

"Saha nāv avatu sahanaubhunaktusaha vīryam karāvavahai,tejasvi nāv adhītamastu mā vidviṣāvahai."

「この知識がわれら皆を守りますように、この知識がわれら皆に浸透しますように、われらが力を得て、われらの学問が輝き、ついにはわれらの間の憎しみが消えますように。」

よく引用される詩句の中には、万物に善を為すことについての説得力ある教えが示されています。

Sarve bhavantu sukhinaḥ（あらゆるものを幸福にせよ）、sarve santu nirāmāyaḥ（あらゆるものを病から救え）、sarve bhadrāṇi paśyantu（あらゆるものが、家、息子、富などの慰めを見い出せるようにせよ）、mā kaścid duḥkhabhāg bhavet（何人も苦しむべからず）。これは、次のように誓った釈尊の理念でもありました。「私は帝国を手に入れたいのではない。天国へ行きたいのでもない。救済が私の目的ではない。私はただ不幸な人々の苦しみをなくしたいと切望する。」この理念は、功成り名を遂げた全ての人々、特に裕福な人々がその胸に刻みつけるべきでしょう。

Ⅴ

人生は連続した過程であります。過去は現在の中に埋もれ、現在は未来によって改められます。この過程において、悪が優位となり善を打ち負かすこともあります。しかし、危急の場合には、聖人や予言者、時には全能の神が、人の生における不調和な事態を改めてくれます。そして人間生活の善のみが現れて、愛、憐れみ、慈悲などの徳の道を示します。これらは外から押しつけられるものではなく、人間に本来備わっている美徳であり、正常な知性の作用です。それには霊感のみが必要です。ですから、生の調和は内的なものであり、人間の心の中に生じることは明らかです。ウパニシャッドにおいては、眠れる魂を目覚めさせるための具体的な提案がなされています。"uttiṣṭhata, jāgrata, prāpya varān nibodhata" つまり、目

覚めよ、起きよ、そして目標に到達するまで努力せよ。仏教の教えの"atmadīpo bhava"にも、これと同様の内的霊感が示されています。

この短いお話しのしめくくりとして、一致に重きを置くリグヴェーダの結びの賛歌から、詩句を引用させて頂きます。

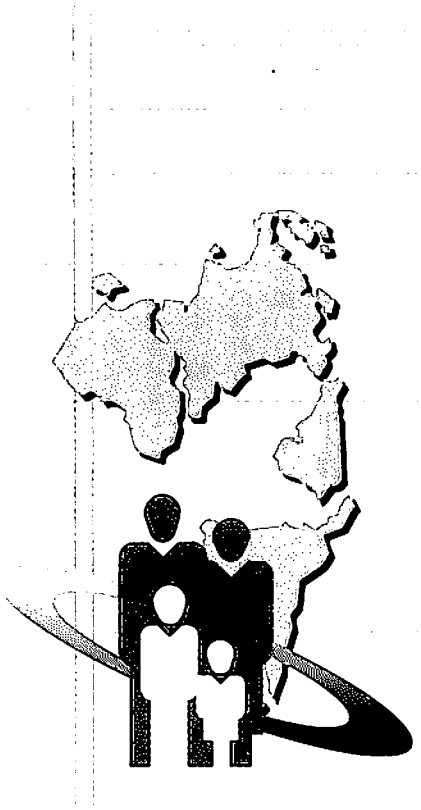
"Saṁ-gacchadhvaṁ sam-vadadhvaṁ/ saṁ vo manāṁsi jānatām!
Devā bhāgaṁ yathā pūrve/ saṁ-jānānā upāsate!!"

「行いに調和をもたらし、話すときに調和を心がけ、
あなたがたの心の理解に調和をもたらしなさい。
卓越した古代の神々が
心を一つにして目的を達成したように。

"Samānī vā ākūtiḥ/ samānā hṛdayāni vaḥ!
Samanām astu vo mano/ yathā vaḥ susahāsati!!"

「意志が一致するように、心が一致するように
考えが一致するように、そうすれば、あなたがた全てが完全に結びつけられるだろう。」

Om Śāntiḥ Śāntiḥ Śāntiḥ



全ての者の力を合わせて

ミクマク族メディシンマン
タリー・スポッティド・イーグル・ボーイ師

本日は、カナダの先住民である私の部族を代表し、またミクマク族の最初の国家の評議会議長の代理として、ここに出席させて頂きますことを光栄に思います。私たちは、世界平和について話し合うため、本日ここに集いました。私は一致についてお話ししたいと思います。拝聴させて頂いたどの方の発表も大変すばらしいものでした。このように美しい言葉で話すことができる皆様に心から敬意を表します。

造物主、神、全能の神、最高存在、最高の霊、これらが私たち一人一人に果たすべき義務を課しました。これは大変な仕事です。しかし、今日ここに、あらゆる宗教者、霊的な人々が一堂に会しています。そして嬉しいことに、私はここに居て皆様がご一緒に連れていらっしゃった方々を見ることが出来ます。皆様はご先祖を連れていらっしゃいました。ご先祖様はこの真ん中に座っておられます。皆様はそれぞれの霊を連れていらっしゃったのです。ご先祖様は皆様の言葉に耳を傾けておられます。そして皆様を導き、私を導いておられます。私たちの前には山ほどの仕事が待ち受けています。私たちは、来るべき世代の指導者になる子供たちを教え導かねばなりません。彼らに手本を示さねばなりません。

私は、ここに座りすばらしい方々がお話しになるのを拝見し、そのお言葉に耳を傾けていました。皆様は、一致協力し、共に良い仕事をし、力を合わせ、苦しんでいる人々、迷える人々、私たちの助けを必要としている

人々のための良い祈りにおいて、私たちの精神を一つにすることを説かれました。そして私の全身全霊にそのことが満ちたのです。

私たち先住民の文化には、このような方法があります。この方法の意味するところは、人々を一致協力させることです。そこで宗教指導者、宗教者の皆様にお願いがございます。輪になって、ひとつになりましょう。そうすれば、世界中のすべての宗教者と宗教を結ぶ聖なる輪を修復することができます。皆様どうかお願いいたします。

私が祈りを唱え、皆様の肉体と魂の中を探る力強いエネルギーについて語ります。これを「聖なる輪を直す」言います。これは世界平和のため、愛のためです。そちらにいらっしゃる皆さんもいらして仲間に入ってください。この祝福に加わってください。これは、私たちのエネルギーを集めて聖なる輪を直すすばらしい方法なのですから。私は自分の部族の言葉で祈ります。あそこの同時通訳室にも通訳できる方はいらっしゃらないでしょうが、そこがいいところなのです。しかし、偉大なる霊、全能の神、イエス・キリスト、仏陀あるいはあらゆる宗教の霊的指導者には、これが理解できます。心の中から発する祈りだからです。では、皆様の霊に呼びかけ、偉大なる神に呼びかけてください。霊あるいは神を皆様の心の中に入れてください。力を合わせましょう。

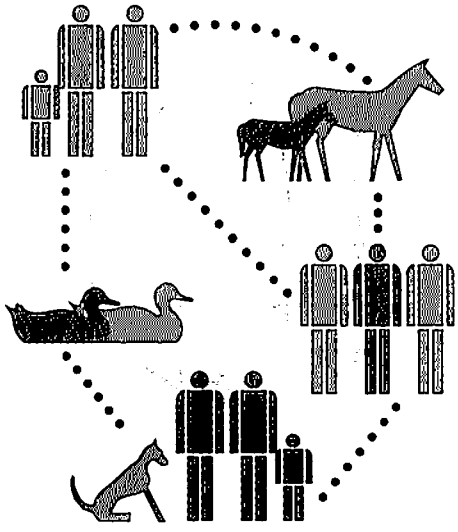
(部族の言葉による祈り)

偉大なる霊よ、皆様の一人一人が祝福され、神、偉大なる霊、あるいは皆様の信ずる神が、皆様に恵みと力をもたらし、その力によって皆様の信徒を、私の部族を、その他の人々を、世界中の全ての子供たちを、動物を、そして母なる地球を、私たちに助けを求めている地球のことを、忘れてはなりません。これら全てを救うことができますように。偉大なる霊の力が今、今日ここに参加している私たち一人一人の内に満ちています。私たちは力を合わせ、手を結び、聖なる輪を修復しています。では、偉大なる霊をたたえる歌を歌います。

(部族の言葉による誉の歌)

私たちには、偉大なる霊の力を借りて、また皆様全ての宗教指導者の力により、為さねばならぬ大切な仕事があります。私たち宗教者や宗教指導者は、繰り返し申し上げますが、力を合わせて活動しなければなりません。時として、私たちの間には宗教上の戦争が起こります。それは必要ないものです。私たちは協力して活動しなければなりません。また私たちには、人々に知らせなければならないことがあります。やがて指導者になるのは子供たちであり、次の世代なのですから、子供たちを正しく導かねばならないということです。これは神と偉大なる霊と皆様のメッセージです。私たちは全員がそのことを知っています。

すべての皆様に愛を送ります



テーマ④ 宗教に基づく社会貢献

イスラームは万人の平和を願う

シリア イスラム法学最高指導者
シェイク・アハマド・クフタロ師

慈悲ふかく慈愛あまねき神の御名において

万世の主に讃えあれ。そして預言者ムハンマドに、彼の兄弟なる預言者と使徒たちに、彼らの家族と信徒たちに、審判の日まで平和と祝福あれ。

比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」にお招き頂き、大変光栄です。主催されました皆様に厚く御礼申し上げます。

この集いに参加された宗教指導者の皆様、私の兄弟である皆様にご挨拶申し上げます。二十一世紀における人類の問題を皆様と話し合う機会を得まして、大変嬉しく思っております。

私の申しつかったテーマは、宗教に基づく社会貢献です。このような宗教の貢献は、社会、家庭、国、ならびに地球社会にまたがっています。

家庭のレベルにおいて、宗教の唯一最も重要な役割は、道徳的な性格を備えた人間を育てることだと思います。そうすれば、その人はやがて、自分の家族や共同体や社会のために喜んで身をささげるようになるでしょう。これを実現するには、一人一人が、聴覚、視覚、理性ならびに慈悲と分別のある心を与えたもうた神、創造主を信じなければなりません。人の心は、人を取り巻く無数の顕現を通じて、創造主を知ることができます。人は、一日五回の礼拝と常に神を思い起こすことにより、心を清めるよう神に命じられています。瞑想と神を思い起こすことにより、人はさらに神に近づきます。このようにして人は、邪心、妬み、悪意、貪欲、傲慢、利己主義などとは無縁の、天使のような人間になるのです。真の信仰者は、自分と同じように他者を愛し、それどころか自分よりも他者を愛し、他者に食物を与えるためには、喜んで空腹のまま床につきます。

私は、個人と神との間の平和が確立されなければ、個人と他者の間の平和もありえないと信じております。この場合、その人は邪心と悪徳に支配された人生を送るでしょう。疑い深くなり、密林の野獣を恐れる以上に、仲間である人間を恐れるようになるでしょう。ただ警察と監獄を恐れるようになるでしょう。そして法の剣がなくなる時、世界は腐敗と抑圧に満たされます。

そのために神は預言者と使徒を遣わされ、彼らを清浄と神聖と認識の手本とされました。神は、彼らを正しい行いの模範として人間のもとに遣わされました。神は、人間が現世と来世において容易に肉体的、精神的幸福を得られるべしとの神の意志を実現するため、彼らに、人間を教え導く書物とお告げを託されました。

さらにイスラームは、夫婦を導いて、愛と献身の心で、互いを慈しむと同時に、子供たち、親戚および隣人たちも慈しむ責任を課します。子供たちには親孝行が課せられます。親が年老いた時には、特にそうしなければなりません。預言者ムハンマドは、人は審判の日にアッラーの慈悲、神の慈悲を請うと言っています。アッラーはこう尋ねます。「汝は、この世のあらゆるものに、すずめにさえも慈悲深くあったか。そうであれば、今日、我は汝に慈悲をたれることができる」。ムハンマドの使命は、地球に世界平和が訪れるように、あらゆるものに慈悲を施すことです。クルアーン（コーラン）の中で、アッラーは預言者ムハンマドにこう言っています。「わ

れはただ万有への慈悲として、あなたを遣わしただけである。」（二一預言者の章、一〇七）

預言者ムハンマドは、隣人がひもじい思いをしているのを知りながら、満腹で床に就くいかなる者をも咎めています。信徒集団から追放することさえしています。預言者のこの教えからわかることは、世界はほぼ地球村になったと言えるのですから、この村のあらゆる貧しい人々を気づかい、食物を分け与えるのは、各個人、社会、国または世界的組織の義務だということです。

神はクルアーンの中でこのように言っておられます。「アッラーに仕えなさい。何ものをもかれに併置してはならない。父母に懇切を尽くし、また近親や孤児、貧者や隣人や遠い縁者、道づれの仲間や旅行者、およびあなたがたの右手が所有する者に親切であれ。」（四女の章、三六）

イスラームは、女性を男性による絶対的な支配から解放し、女性が自らの権利を守る自由を与えました。たとえ議会の大多数が女性の権利に反対し、女性が孤立したとしても、女性を勝利者としました。

預言者は、女性の権利を守るために、姦淫や密通を禁じました。売春行為は、相手の男性が独身であろうと既婚であろうと禁じられています。これは、結婚の神聖と夫婦の絆を破る障壁であり、子供たちや家族の道徳の低下を招きます。さらに、性病を蔓延させる原因となります。性病の中には治療法がみつかっていないものもあります。

イスラームは、子供たちを慈しみ育てます。楽園には喜びの家があり、そこには子供に喜びを与えた者だけが入ることができます。イスラームは、たとえ統治者や支配者であろうとも、子供を抜かして自分の順番を先にしてはならないと定めています。

共同体のレベルにおいて、預言者は、その構成員を共同体のために協力して働かせました。預言者ムハンマドはこう言っています。「神の手は共同体または社会と共にある」。こうして人間同士を結ぶ絆が、知識、叡智および道徳になります。

現代社会の進歩は、科学的な知識と技術を基準に評価されます。イスラームは、ムスリムに、一生を通じて絶え間なく知識を追い求めよと命じています。これには、宗教学のみならず、あらゆる有用な学問の習得が含まれます。知識を求めて世界中を旅することさえ要求しています。預言者ムハンマドはこう言っています。「知識を求めよ、たとえそれが中国にあろうとも」。彼が今日生きていたとしたら、こう付け加えたことでしょう。たとえそれが東京、ロンドン、パリ、ニューヨーク等々にあろうとも、と。

イスラームは、そればかりでなく、知識を持つ者に無料で他者を教育する責任を課しています。他者を教育しない有識者は、神罰に脅かされます。預言者ムハンマドは学者を非常に高い地位に置いています。彼はこう言っています。人々の中で、預言者の次に最も優れた者は、何かを学び、それを他者に教える人、すなわち、知識を独り占めしない人である。同時にイスラームは、無知な者に知識を求めることを命じており、それを怠った者はやはり神罰に脅かされます。

ムスリムは怠けることは許されません。法に則った方法で生活費を稼いで、自身と家族のためにそれを使わなければなりません。他人からの援助をあてにしてはなりません。預言者ムハンマドはこう言っています。「より高いところにある与える手は、より低いところにある受け取る手よりも優れている。」

イスラームは、ムスリムに対し、力によるものであろうと言葉によるものであろうと、他者を傷つけることを禁じています。盗みや、攻撃によって不法に金を得ることを禁じています。

このように、ムスリムは地球上を歩く天使のようでした。やがて誰も訴訟を起こさなくなると、裁判官たちはその地位を退きました。平和と安全が支配する世の中には、警察や監獄も必要ありませんでした。もし誰かムスリムが誰も見ていないところであっても悪事を働くなら、自らが裁判官

として自分自身を断罪するでしょう。

ムスリムは警官となり、自分自身に法を執行するでしょう。邪淫の罪、信頼を裏切った罪、あるいは人を侮辱した罪を犯したため、預言者ムハンマドのもとへ自分を罰して欲しいと頼みに行くでしょう。ちょうどホムスの町の支配者がしたように。彼はカリフ・オマールのところへ行き、自分の共同体に住む非ムスリム市民を侮辱したため、辞職することを許可して欲しいと願い出ました。

イスラームは、貧者に必要なものを与えることを富める者、恵まれた者に命じています。富める者、恵まれた者は、病院、孤児院、高齢者や障害者のための施設を建てなければなりません。イスラームは、失業者のために職をみつけることを彼等に義務として課しています。また貧しい若者が結婚し、道徳にかなった家庭を築くのを経済的に援助することさえ勧めています。イスラームは、富める者に、毎年資産と利益の二・五％をこのような良い目的のために支払うことを命じています。これを「ザカート」と言います。

国のレベルにおいて、イスラームは人権に対する配慮を求めています。イスラームは、万人に対し、教育と就業の権利を保証しています。失業した場合は、その人が職をみつけるまで、国家が給付金を支払う義務を負います。もしその人が借金を返すことができなければ、その人がムスリムであるかどうかにかかわらず、国家は借金の肩代りをします。イスラームは、人種、民族、宗教、肌の色あるいは性別によるあらゆる差別を禁じています。ムハンマドは、万人に正義と平等を保証し、非常に高い水準の正義を実現したので、後にも先にも彼に並ぶ者はいませんでした。

昔ある時のこと、ムハンマドが信奉者たちに真直ぐ並ぶよう注意していた時、彼はある男の胸を打った棒をその男に与えました。ムハンマドはその男に、私を打って仕返しせよと言いました。その男が、あなたは私の裸の胸を打ったと言うと、預言者は打たれるために胸をはだけました。男は打つ代わりに棒を投げ捨て、預言者を抱きしめてくちづけし、あなたのために全てを捧げますと言いました。

真理と誠意に基づき運営される健全な社会を築くために、イスラームは、人々が特定の教義に従うよう強制されることを禁じています。ムスリム社会においては、思想と信教の自由が守られ、尊重されています。クルアーンはこのように選択の自由を擁護しています。「真理はあなたがたの主から来るのである。だから誰でも望みのままに信仰させ、また望みのままに拒絶させなさい。」（十八洞窟の章、二九）

イスラームは、狂信、極端および行き過ぎを咎めています。全てにおいて飲食に関しても、礼拝においてさえも、度を過ごさないことを勧めています。

イスラームは、ムスリムに、酒や麻薬の犠牲にならないため、これらに近づくことを禁じています。こうすれば、個人も社会も、肉体的、知的、精神的に健全になるでしょう。

イスラームは、父、母、教師あるいは支配者など、責任のある全ての人に対し、不当な権力の行使を避け、正義と慈悲に基づく社会の発展のために努力するよう求めています。人々を抑圧する社会は必ず崩壊します。預言者ムハンマドは、六十年間の礼拝よりも一時間の正義を重んじています。

地球社会のレベルにおいて、預言者ムハンマドは全ての人間の友愛を認め、こう言いました。「人は、好むと好まざるとにかかわらず、その同胞の兄弟である」。彼は祈りの最後にいつもこう言いました。「神よ、私は汝のしもべが皆兄弟姉妹であることを証します。」

さらにイスラームは、動物の世話をすることさえも求めています。ある女が猫を閉じ込めて餌を与えず、猫が自分で餌をみつけることも許さなかったので、彼女は地獄の劫火で罰せられたと伝えられています。また喉が渇いている犬に水を与えたという理由で、神は罪深い女を許しました。

イスラームは、緑化と環境美化のために木々の世話をすることを求めています。たとえ復活の日であろうとも、木を植えなさいと言っています。

イスラームは、地球がごみであふれたり、汚染されたりしないように、ごみを木の下や川に投げ捨てることを許していません。

イスラームは、万人にあまねく平和がもたらされることを求めています。

二つの党派あるいは国家の間に紛争が起これば、両者に対して和解が呼びかけられます。戦争は許されていないため、私たちは争いを傍観しているわけにはいきません。正義と公正を確立するために、仲裁役を果たさなければなりません。

最後に、神の律法を真剣に学ぶことができましょう。それには、全ての預言者と神の使徒を信じることが必要です。賢明で理性的な道理に照らしてみれば、この知識は二十一世紀の人々への恵みとなるのです。平和に生き、神の賜物である神の律法に従うことにより、人は裁判官も警察も監獄もない世の中で仲良く暮らすことができるでしょう。そして進歩と繁栄と豊かさを享受するでしょう。

もし、ここにお集りの皆様のような、良識ある公明正大な宗教指導者が委員会を結成し、預言者と神の使徒を強く支持するイスラームを研究されるなら、神のお告げは、個人、家庭、社会、そして全世界を、徳、友愛、憐れみおよび愛の上に築くことである、ということをご理解下さる、と私は信じます。

ご承知のように、月あるいは火星探査のために数十億ドルが費やされています。それならば、宗教の賜物への探検旅行、平和と人間を愛する専門家の案内による旅はできないものでしょうか。

宝物は必ずみつかると私は確信しております。その宝は、現世において人間に幸福をもたらすのみならず、人が天の霊界へ旅立つ時にも、同行して幸福をもたらしてくれるでしょう。マスメディアにも、この天界と現世における人類共同の試みにぜひ参加してもらうと良いと思います。マスメディアは、宇宙チャンネルに投資し、欠点を持つ人間にたいし慈悲、叡智、知識、道徳、および魂の浄化を求める番組を流すという形で貢献し、この試みを完璧なものにすることができます。我らが最愛の地球は、私たちが真の天国の楽園へ旅立つ前に、喜びと幸せの楽園となるでしょう。讃えあれ、アッラー、万世の主、そして皆様の安らかならんことを。ご清聴ありがとうございました。

「アッシジ精神」による社会の建設をめざして

コンベンツァル聖フランシスコ修道会総長
アゴスティーノ・ガルディン師

三千年紀を目前にひかえ、歴史上で特別なこの時期に、宗教は社会にどのような貢献ができるのでしょうか。宗教は本当により良い社会を築くのを助ける立場にあるのでしょうか。宗教は本当にどのような貢献ができるでしょうか。

これらの問いを、私が申しつかった短いスピーチのテーマと結びつけたいと考えております。これらの問いは、あらゆる信仰者にとり、また信仰者が人類の歴史の中で果す責務とのかかわりにおいて、極めて重要です。おそらく、これらの問いは非信仰者にとっても興味深いテーマでしょう。

もちろん、一般論として、宗教が現代社会に貢献し得る数多くのことがらを列挙することも可能です。たとえば、平和問題から人権擁護に至るまで、世界の飢餓や富の配分から万物の保護に至るまで、という具合にです。しかし、私は、冒頭の問いに対する答えの根底にある問題に着目したいの

です。私は、カトリックの信者として、また有名なアッシジの聖フランシスの精神を受け継ぐ者の立場から、私見を述べさせて頂きたいと存じます（一九八六年十月二十六日に教皇ヨハネパウロ二世が、世界の諸宗教の代表者とキリスト教徒を招き、世界平和を祈る集いを催した地アッシジを、私は象徴的な意味で代表する者として、この町から参上しております）。

まず最初に、社会のどの部分に対して宗教者が貢献できるか、いや貢献すべきかを問わねばなりません。現代社会の特徴全部を完璧に述べようとすれば、広範囲になることは避けられません。そこで、カトリック教会の重要な文献から引用させて頂き、基本的なポイントをいくつか取り上げるにとどめたいと存じます。

> このように見てくると、現代世界は強力であると同時に無力であり、最善と最悪の可能性を持ち、自由と屈従、進歩と退歩、友愛と憎しみのいずれにも道が開かれている。そのうえ、人間は、自分が発明した力が人間を苦しめることも、人間に仕えることもでき、それを正しい方向に向けることは自分の責任であると自覚している。そこで人間は自問する。（第二バチカン公会議、Gaudium et Spes 現代世界憲章 n.9）

多くの社会において明らかな進歩があったにもかかわらず、なお多くの、しばしば深刻な社会秩序の大変動が見受けられます。私たちキリスト教徒は、その原因の一部が、弱体なあるいは疑問の余地がある経済的、政治的および社会的構造にあることを認めますが、先の引用に戻れば、このような困難あるいは不幸な状況は、「根本的には人間の高慢と利己主義に基づくものであって、これらは社会環境をも退廃させる。」（Gaudium et Spes 現代世界憲章 n.25）のです。

したがって、宗教はこのレベルにおいて真の貢献を求められています。行き届いた政治、社会、司法上の構造あるいは措置を社会にもたらす決定は、正に道徳的態度と選択に基づいて行われるべきだとの観点から、宗教の貢献が求められるのです。社会的激変、特に社会的不公正は、文化、経済および司法上の観点から説明することもできます。しかし全ての根源は道徳上の問題であることも多く、社会で働く人々の道徳的選択にあります。

この観点から、「アッシジの精神」に活力を与えた教皇ヨハネ・パウロ二世の書簡を引用させて頂きたいと存じます。この「アッシジの精神」は、比叡山での集いを生むきっかけとなりました。また私は、アッシジの聖フランシスの精神を受け継ぐ者として、ある意味では、この精神を思い起こして頂くためにここに出席させて頂いているのです。一九八七年に教皇ヨハネ・パウロ二世は、現在の社会状況について、次のようにお書きになりました。

> 「政治的誤算」や「軽率な経済的決定」には「利己主義」や「先見の明のなさ」がかかわっていることは疑いありません。このような評価には、倫理と道徳の問題がこだまのように響きます。これが人間の置かれている状況ですから、各自の行動や不作為をより深く分析するためには、何らかの方法により倫理的に評価することは避けられません。（Sollicitudo rei socialis 1987 n.36）

したがって、人間を必要とし、尊厳を大切にする、正義と平和に満ちた社会をさらに追求するために、宗教あるいは信仰が最も重要な役割を果たせる、また果たすべきなのは、道徳的レベルにおいてなのです。信仰者は、道徳的態度、特に人々の生活について、ひいては人々の共生の方法について地球規模の視野でとらえる基本的選択について、その決定的な正当性、最も深い拠り所、ならびにそれを理解するための可能な限り広い視野を、信仰の内に見い出します。宗教は、信仰者が根本的な問いを発する時、根

本的な答えをもたらします。すなわち人生の意味と道徳的経験を含む最も深遠な人間の経験の意義です。それは、善悪を見分ける能力であり、その結果としての、善を選び悪を退ける基本的な決断です。

私の話をまとめると、こういうことになります。

積極的に社会を建設するには、どうしても積極的な道徳的価値に基づく必要があり、これらの価値は宗教的人生観に深く根ざしている。宗教は、これらの価値を受け入れ、理解を深め、信念をもって従うよう私たちを導くのです。

では、これらの価値とはどういうものでしょうか。

一言で表現しましょう。それは、キリスト教徒にとってあらゆる価値を統合したものであり、キリスト教信仰の中心的メッセージです。すなわち愛です。キリスト教徒にとって、それは自分に注がれる神の限りない愛であり、人は、この愛を他者に、特に最も貧しい人々にもたらすよう召されています。愛は実在であり、贈り物であり、同時に人間生活の最も重要な務めでもあります。福音書（いかにして神の子が、神の愛の完全性を具現するために人間になられたかの物語）の中心を成すのは、次のようなイエス・キリストの御言葉です。「互いに愛し合いなさい、私があなたがたを愛したように」。そして小さく、貧しく、つつましいアッシジの聖フランシスは、あらゆる状況における愛、あらゆる人に対する愛を旨とし、その愛に導かれて生涯を送ったという理由だけで、非キリスト教徒を含む世界中の数多くの人々から今なお敬愛されているのです。

愛の上に築かれる社会など、かなわぬ夢に思えるかもしれません。だからこそ、宗教は、この夢の実現にできる限り近づくため、貢献しなければならないのです。

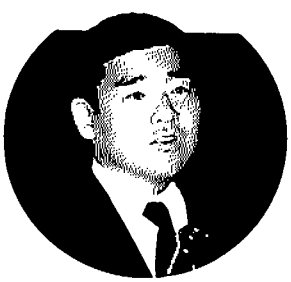
私たち宗教者は、愛に基づく社会に向けて持てる力の全てを注がねばなりません。この愛は、社会の多様な領域や状況において、何よりも、正義と平和に、民族紛争を始めとするあらゆる紛争の原因を取り除きたいという願いに、人間の尊厳と基本的人権の尊重に、寛容に、富の公平な配分に、相互の連帯に、そして最も貧しい人々を助けることを通して顕れます。

聖フランシスの町からの祈りをお届けいたします。どうかこの比叡山（京都）の集いにより、あらゆる宗教の信仰者の内に、アッシジの精神と心を一つにして、粘り強くしかも大胆に愛の文明を築く意志が高まりますように。

（英語訳　イザベル・クイングリー）

すべての人が信仰者となるように

パーフェクト　リバティ教団教主
御木貴日止師



私ども新日本宗教団体連合会（新宗連）には、四つのスローガンがあります。「信教の自由」「政教分離」「宗教協力」、そして「国民皆信仰」の四つです。その内容を簡単に説明させていただきたいと思います。

先ず「信教の自由」というのは、誰からも、特に政府から制約されずに、自分の信じる宗教を信仰する、そして布教する自由のことです。もちろん、信仰したくない方には、誰からも信仰を強要されずにおれるという自由もあるわけで、そういう自由を含めて、それらの自由を守り抜くことを、その内容としています。

二番目の「政教分離」とは、政府がいかなる宗教にも特権を与えない、

そして逆に、いかなる宗教も政治に特別待遇を求めないという、政治と宗教の間で独立性を尊び合うということです。

この二つが、新宗連のスローガンに掲げられているのには、歴史的な理由があります。

新宗連の正式名称である「新日本宗教団体連合会」は、英語の正式名称を見てもそうなのですが、「新宗教の連合体」であると読めてしまいます。しかし実は、「新しい」という形容詞は「日本」にかかっており、その意味は「新しく生まれ変わった日本」「新日本」の宗教団体の連合体であるということなのです。

新宗連は、第二次世界大戦が終わった後の一九五一年に結成されたわけですが、それまでの日本での政治と宗教のかかわり合い、あるいは、憲法で保証されていた国民の権利といったものに対する反省から、現在の憲法には、この両方がうたわれているわけではあります。しかし当時も、そして今も、私たちが権利を主張し続けていかなくては、制限を受ける恐れがある、あるいは憲法に違反するようなことが起こる恐れがあるような状態でありますから、ここでわざわざ掲げ、なおかつ今も、スローガンの中に盛り込まれたままになっているわけです。

三番目が「宗教協力」です。これは、各宗教団体の間の理解と協力をもとに、宗派の違いを超えて、国内、国外を問わず、各宗教団体と共に、世界平和と人類の幸福のために協力していくことを呼びかけたものです。これは正に、この宗教サミットと同じ主旨に立つものと言えるでしょう。

そして、最後の「国民皆信仰」です。日本ではアンケート調査などによりますと、宗教に関心を持ち、信仰を持っている人の比率が低いので、全国民に宗教心を持っていただこう、という願いで掲げられたものであります。そして既に信仰心を持っている人には、更に深い信仰心を持っていただくこと。そのようなことが、ひいては世界をより平和な状態に近づけていくことになると信じます。

そこでこの席では、この四番目のスローガンであります「国民皆信仰」ということと、今回テーマとして頂きました「宗教に基づく社会貢献」ということに関しまして、私が思うところを述べさせていただきます。

現在の地球上では、貧困、差別、テロリズム、環境破壊といった様々な問題があります。そういった問題に勇気をもって立ち向かい活動しておられる方々――国連やその専門機関、各国政府、NGO、個人レベルでのボランティアの方々、そういう方々に対しては、心からの感謝を申し上げます。

そして、このような問題が、あと数年のうちに、今世紀中に、すべて解決するという希望は、残念ながら、ほとんどないと言っても過言ではありません。「ほとんどない」という状況であるが故に、その方たちを私たち宗教者が応援するということは、現在はもちろんのこと、二十一世紀になってからも大きな社会貢献と呼べることだろうと思います。

さてここで、このような貢献というのは、宗教だけができるものではないということと、場合によっては、宗教ではできないこともあり得ること、そして二十一世紀の百年間には、それらの問題がすべて解決することもあり得る、ということに注意しておく必要があると思います。

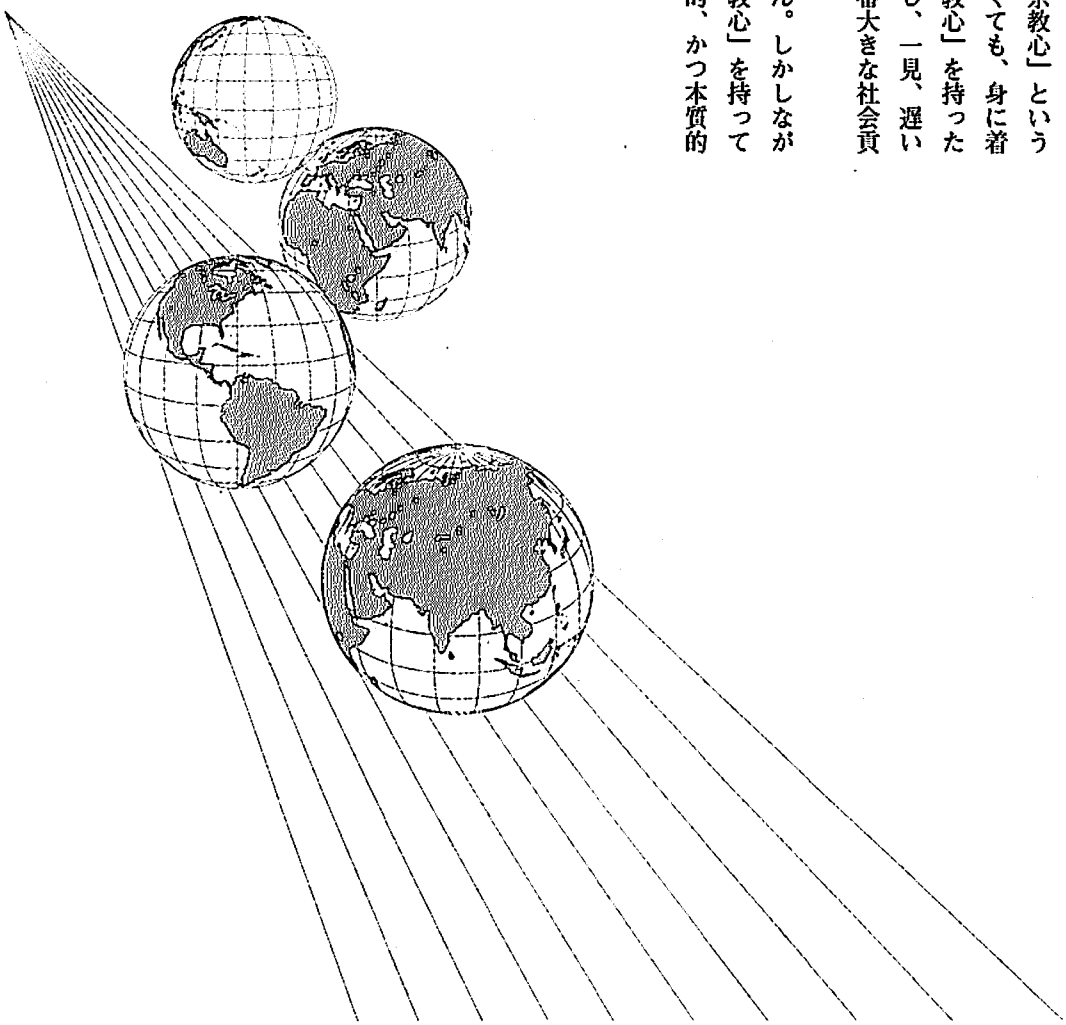
そのようなことを考えますと、二十一世紀における「宗教に基づく社会貢献」という今回のテーマについては、別の角度から、私たち宗教者だけができること、私たちだからこそできることを考えていくべきではないだろうか。そういう面もあるのではないかと思うのであります。

つまり、政治や経済による、より直接的な問題解決の方法も大事でありましょうが、現在はもちろん、二十一世紀になってからも、それ以降であっても、私たちが常にできる社会貢献というのは、世界のより多くの人に信仰心を持ってもらうこと。そういう人たちを増やしていくということ。そして、すでに信仰を持っている人にも、より深く信仰心を持ってもらうこと。私たち宗教者のそのための活動こそが、社会から求められているの

ではないかと思うのです。

そのためには、直接的には、それぞれの宗教が、それぞれの方法で布教活動をしていくということが一番であろうと思います。「宗教心」というものは、必ずしも特定の宗教に帰属するという形をとらなくても、身に着けることができるものかもしれませんので、そういう「宗教心」を持った人を増やしていくことが、間接的に見えるかもしれませんし、一見、遅いように見えるかもしれませんが、実は、私たちができる一番大きな社会貢献ではないかと思うのです。

もちろん信仰は、他の人に強要できるものではありません。しかしながら「祈り」、あるいは私たち自身の信仰心を通して、「宗教心」を持っている人を増やしていくこと、それが私たち宗教者の、最終的、かつ本質的な社会貢献ではないかと思うのであります。



フォコラーレ（一致をめざす少年少女運動）

一九八七年に始まった「世界宗教者平和の祈り」が十周年を迎える今回の集いに、私たちも参加させていただいたことを心からうれしく思い、感謝申し上げます。十年前にも、フォコラーレ「一致をめざす少年少女運動」の代表が何人か参加し、世界中の十五万人の子どもたちが署名した、平和へのメッセージを読ませていただきました。

今も世界中で、あらゆる種族、文化、宗教に属する多くの子どもたちが、より一致した世界をめざして、様々な形で働きかけています。私たちは彼らの代表として、アジアのいろいろな国から、今日ここに集まりました。

世界に真の平和を築こうという新しい考え方を、多くの人々に伝えるため、この十年間に、私たちは、自分の国や世界レベルでも、様々な活動を行なってきました。人々を隔てる偏見や壁を崩し、家庭や学校で出会う分裂を乗り越えるよう努めてきました。

また今年の五月には、フォコラーレの子どもたちが八千人、イタリアのローマに集う世界大会が開かれ、私たちも参加することができました。この大会の中で、自分たちの体験を分かち合い、人間どうしや国レベルでも、互いに尊重し合い、大切にし合う世界を築くことができる、という希望を抱きました。大会の一部は、衛生中継で世界中に放映され、多くの国内放送を通して、ブラジルからオーストラリア、韓国、アメリカ、アフリカに至るまで、世界中の大勢の子どもたちが、大会の様子を見ることができました。未来の世界には、希望と一致があることを共に確かめ合い、すばらしい瞬間を共に生きることができた大会でした。この大会の最後に、私たちは皆で一つの約束をしました。それは「お互いの愛の約束」で、相手のために自分の命を与える覚悟をもって愛し合う、というものです。これは、イエス・キリストが私たちに教えて下さった愛で、私たち皆のため十字架上で命を捧げる前に、

キリストはご自分の弟子たちに向かって、次のようにおっしゃいました。「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と。私たちは、これこそが本物の愛の尺度であることを経験しました。

さて、「以前人々は、今よりも質素な生活をしていたのに、もっと幸せだった」という話をよく聞きます。一方、現代は、多くの発展や生活レベルの向上、技術や情報手段の進歩にもかかわらず、孤独や寂しさに苦しむ人が多く、自殺してしまう人さえいます。人間は、物質的には豊かになっても、生きることの本当の意味を見失い、心は貧しくなってしまったように感じられます。私たちは、全ての人々に幸せをもたらしたいと願い、そのために、「愛の道」を歩むことを選びました。

また、多くの人が「物を持てば持つほど幸せになれる」と考えていますが、人は「所有する」時ではなく、「与える」時にこそ幸せになれるのを、私たちは経験しました。私たちは、これを「与える文化」と呼んでいますが、二十一世紀の世界が、この新しい生き方を土台として築かれていくよう、心から願っています。

大勢の大人や子ども、若者、また、あらゆる国、言語、文化の人々と共に、私たちは、「もう一つの新しい世界」を築くことは可能だと信じています。それは、全ての人が、唯一の父であられる神様の子どもとして、互いに兄弟として、生きることのできる世界です。弱い人が抑圧されず、他の人を蹴落とす競争もない世界、人々が互いに支え合い、助け合う世界です。そこでは、もう「敵」という言葉は使われることがないでしょう。

全ての人が本物の平和を生きることのできる、この新しい世界が実現するよう、心から祈りながら、私たちも皆さんとご一緒に、力を尽くして働いていきたいと、強く望んでいます。

一九九七年八月四日　比叡山にて

特別フォーラム

―フォーラム

最終日の八月四日。国立京都国際会館において、比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」特別フォーラム―二十一世紀に向けての人類の課題と宗教―が開催され、公募に応じた五百名も一般視聴者としてこれに参加した。フォーラムでは、現代社会が抱え、二十一世紀に向けて解決されなければならない大きな課題を三点に絞り、イスラム教、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教の各代表に見解を述べていただいた。

「対立している人々の和解」「人間の尊厳」「科学と生命倫理の問題」について、以下は各々の発言主旨である。

アル=オバイド博士（イスラム教）

イスラム教における「和解、特に宗教の融和に対して一番大切なことは勤勉であることだ。」ここでいう勤勉とは、「アッラーの教えに沿って生きることであり、それは隣人との間の和解を求める。」

「「全ての生命は、より良い世界を作るために、アッラーによって送り込まれてきた」ものであり、イスラム教は、人間の根本は同一だという考え方なので、どんな人であれ、人間としての尊厳は守られなければならない。」

「イスラム教は、科学技術の進歩に貢献してきた歴史がある。科学技術は生活や信仰の向上に役立つものであり、決して信仰心の欠如を引き起こす類のものではない。だから研究自体に制限を加えることはないが、環境を損ねるような事柄に対しては制限を設けたり、禁止したりすることはある。」「科学によって明らかにされたことに対しては、深い考察が必要である。理論と人間の生活に影響を与えるものとは区別して考えなければならない。」

アリアラジャ博士（プロテスタント）

「宗教的な和解とは、それぞれ独立して成長してきた宗教集団同士が対話を行うこと。」

「宗教の最も重要なテーマの一つが、人間の尊厳に対する人々の意識を、より高めていくということである。現代社会には、正義に反する行為がまかり通っているので、それを気付かせることは宗教の役割。反正義に対しては総力を挙げて動員（mobilize）をすること。これは宗教にとって大きな社会的貢献である。」

「科学者は自分の興味の赴くままに研究を進めるのではなく、本当に人々に役立つものを優先しなければならない。その判断基準の部分で宗教は関わっていく必要がある。また科学者は自分の研究や開発の結果には全面的に責任を持つべきである。現代は、何の分野にしろ専門化が進みすぎて個々の間で交流がなくなりつつある。特に科学技術においては、科学、宗教、そして一般の間の対話を行うことが必要ではないだろうか。」

アリンゼ枢機卿（カトリック）

「紛争は、他人の権利を無視した自己満足によって引き起こされるが、宗教は、自分の権利と同様に存在する他人の権利を気付かせることができる。どんな人でも受け入れ、赦し施しを与える〈宗教心〉を持つことができるならば、和解への望みもでてくる。」

「人間は生来人間としての尊厳を有している。だから人間はいつも人間としての尊厳をもって扱われるべきである。」「人間は創造主ではなく、創造主が創造したものを保護するだけの存在である。だから全てのものを悪用したり無用に消耗したりすることは許されない行為である。」人間の尊厳を傷つけている問題、特に人口問題に関して「父母になる責任は誰にもあり、各々の義務は果たさねばならない。世界というテーブルにパンが足りないならば、パンを買いに行くか、もしくはパンをもっと作ることが良い解決策であろう。」

「カトリックは生命のあらゆる段階を尊重しているので、安楽死、堕胎行為など正義に反する行為は受け入れることはできない。」「人間は神によって知的生物体として創造された。だから、科学技術の進歩は神の恩寵に報いる行為であり、人間性の向上にも役立つ。しかし、無条件ではなく、道徳上の規制はあってしかるべきである。」

ローゼン博士（ユダヤ教）

「和解とは、単に政治上の問題ではなく人間の根元に関わる問題。あらゆる宗教には、その宗教独自の要素と全ての宗教に通じる普遍的要素がある。人間は一人一人は違うけれど、人間性という部分で共通している。人間は神に似せて作られた。だから人間性は聖なる部分であり、和解は〈人間性〉、つまり宗教的普遍性を強調することによって成り立つのではないだろうか。」

「聖書は人間を「世界を生かす、庭を耕し守る」存在だと言っている。つまり、人間に自然の様々な可能性に挑戦すべきだといっているが、可能性の使い方については責任が生じる。宗教の説く規律は、その責任に対して何らかの役割を担えるであろう。」

「治療行為と科学とは分離して評価することが重要であろう。つまり治療行為とは病気を治す方法を確立することであり、科学とはまだ未知であることや病気の治療法を発見することである。それは遺伝子工学の分野においても同様であり、区別を明確にするためには、宗教と科学の対話が不可欠である。」

シャルマ博士（ヒンドゥー教）

「人々の和解は、共通の考えの上に立てば実現可能なことである。そして宗教間には他人への奉仕を奨励したり、人を傷つけることは罪であるというような共通の倫理が存在しているので、これらを基盤にして諸宗教が話し合いのテーブルにつくことは安全かつ確実な和解の方法であろう。」

「例えば、ヒンドゥー教では古来より植物に対して宗教的な敬意が払われてきたが、このような心は失われつつある。それは、人口の増加に伴って植物自体が減少しているためであり、この例一つをとってみても、人口問題は現在の宗教の衰退、ひいては人間の尊厳を損なう問題として、特に発展途上国においては、貧富の間で発生する差別問題や資源の分配と絡んだ問題と深く関わっている。」

「科学技術はさらに進歩していくだろう。宗教はそれに伴って、心の平和を担うべく、役割を大きくしていかなければならない。宗教と科学は、社会に対して一体となって貢献していかねばならない。」

杉谷義純師（仏教）

「あらゆる宗教は真実のみであり、受け手側である人間によって様々な解釈がなされるだけである。最澄上人の『己を忘れて他を利するは、慈悲の極みなり』という言葉をローマ教皇は引用し、宗教対話の精神を述べられたが、このように宗教は互いに理解し合えるものである。」

「他人の人権を認めることは、自分をいかに倫理的に高め、自己規制をしていくかということである。この〈自律性〉は、先進国では特に失われつつあるのではないだろうか。発展途上国への援助でも、物的援助が中心で精神的交流が伴っていないため、相手の共感を得られない援助となっている場合が多い。これは自他共に精神的荒廃をもたらしている例だ。仏教では生きとし生けるもの全てに仏性があると説くが、人間も開発する側ではなく生かさせていただいている生命の一つである。人間の欲望に対しては、全てではなく必要最小限を満たすことで満足する考え方が必要であり、それには宗教的コントロールが有効である。」

「宗教と科学の関係は、どちらにどちらが欠けてもいびつになってしまうものである。命は仏様からいただいたものであり、それ自体に何ら違いはない。ただ、病弱であるとか、差があり、この差を縮めるために人間の英知を用いることは良いことである。しかし、命の発生を人間が操作することは、真理に対する冒涜である。科学と宗教のかかわりあいは公式を作ってそれを適用すれば済む問題ではなく、宗教は深い洞察をもって、科学と共に歩まなければ未来はない。」

「これからの時代は、分離と効率の文化から融合と助け合いの文化へと変革されなければならない。他人と自分、自然と人間という区別は限界に来ている。体と心は一体であり、自然の中で人間は生き、他人の思いを自分は共有する、このように包括的な生き方が必要となる。」

なお、この模様は「二十一世紀における宗教の役割―世界宗教サミットから―」と題して、一九九七年十月二十四日、NHK教育テレビ番組『金曜フォーラム』で放映された。

出席者（ラストネーム・アルファベット順）

●イスラム教
アブドッラー・イブン・サーリフ・アル＝オバイド博士（世界イスラム連盟事務総長）

●プロテスタント
S・ウェスリー・アリアラジャ博士（世界教会協議会副総幹事）

●カトリック
フランシス・アリンゼ枢機卿（ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官）

●ユダヤ教
ディビッド・ローゼン師（ADL諸宗教対話部部長）

●ヒンドゥー教
ウマ・シャンカール・シャルマ博士（パトナ大学教授）

●仏教
杉谷義純師（日本宗教代表者会議事務総長・天台宗宗務総長）

●コーディネーター
柏倉康夫（京都大学文学研究科教授）

以上（七名）

平和の祈り式典

平和の祈り式典

開式の辞

事務次長　田中恒清師（石清水八幡宮權宮司）

平和の鐘

主催者代表挨拶

名誉議長　渡邊惠進師（天台座主）

各宗教代表者の祈り

表白・祈願文等朗読者

仏教　ダルマパール・マハーテーラ師　稲葉義猛師（高野山真言宗管長）
キリスト教　S・ウェスリー・アリアラジャ師　飯田徳昭師（日本聖公会首座主教代務者）
教派神道連合会　芳村正徳師（神習教管長）
新日本宗教団体連合会　宮本丈靖師（妙智會教団会長）
神道　佐古一洌師（松尾大社宮司）
ヒンドゥー教　ウマ・シャンカール・シャルマ師
民族宗教　ポーリーン・E・タンジオーラ師

Tenth Anniversary of The Religious Summit Meeting on Mt. Hiei

The Interreligious Gathering of Prayer for World Peace

1997.8.4

イスラム教　シェイク・アハマッド・クフタロ師
ユダヤ教　ディビッド・ローゼン師
シーク教　スージャン・シン・ウーバン師
ゾロアスター教　ホミ・ダラー師
バハイ教　カテライ・ファード師
諸宗教組織・WCRP日本委員会・世界連邦日本宗教委員会　ジェームズ・P・モートン師

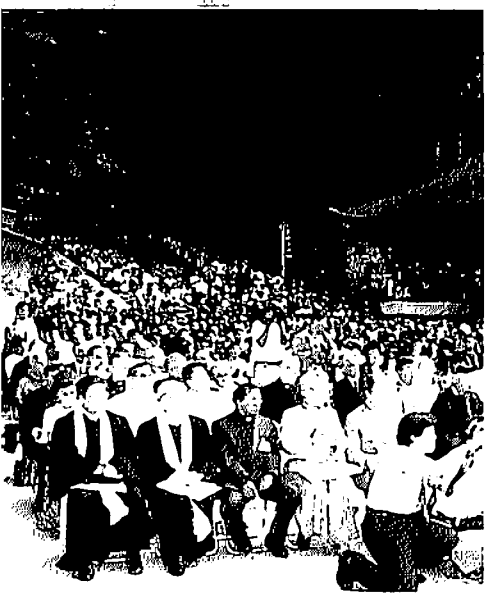
比叡山メッセージの発表

議　長　白柳誠一師（WCRP日本委員会理事長）

平和の交歓

閉式の辞

常任委員　小林隆彰師（比叡山延暦寺執行）



世界宗教者 平和の祈りの集い

「平和の祈りの式典」挨拶

比叡山宗教サミット十周年を記念して開かれた、「世界宗教者平和の祈りの集い」に、世界各地からご参加下さった代表の皆さん、また、日本各地から参加された各宗教教団の代表の皆さん、信者の皆さん、本日は、京都での二日間の会議のお疲れも見せず、ようこそこの比叡山へ御登嶺下さいました。皆さんのご光臨を心からお待ちしておりました。

日本宗教代表者会議を代表し、かつ比叡山山主としても、心から歓迎いたします。

いまこの聖地比叡山で、今日再び世界の宗教代表者の皆さん、そして、平和のために心身を捧げて御尽瘁しておられる皆さんと共に平和を祈ることができますことは、私どもにとってこの上ない喜びであります。

顧みますと、十年前、山田恵諦師を始め、仏教会の代表―阿部野竜正師、日本キリスト教界の代表―里脇浅次郎師、教派神道の代表―出口直日師、神社神道の代表―徳川宗敬師、新宗連の代表―庭野日敬師、そして葉上照澄師などの呼びかけで歴史的な宗教サミットが開かれましてよりこの方、世界の宗教界は急速に相互の理解を深めてきました。

世界各地では、それぞれの宗教が平和のための協力を重ねてこられ、比叡山でも、毎年この会場で平和の祈りを続けてきました。なかでも、イスラム代表を招いてのムルタカ会議や、子どもサミット、そして、第二次世界大戦終戦五十周年には世界の戦争犠牲者の慰霊を行い、切実に平和を願い求めてまいりました。

しかし、世界の現状は皆様十分にご承知の通り、極めて厳しい状況にあります。

今回の祈りの集いの眼目が、神の愛、仏の慈悲に人間が本当の意味で目覚め、欲望を押し止め、助け合い、分かち合う心と行動にあることを思うとき、祈りが一層強力でなければならないことを痛感いたします。

人々の奪い合いの心を慈悲に変えなければ、人類の未来は暗いのではないでしょうか。

しかし、人類の未来を悲観することはありません。

人類は神のみ子であり、み仏の一人子であります。祈り続ければ、人々の心が助け合い返し合う心に変革するものと確信しております。

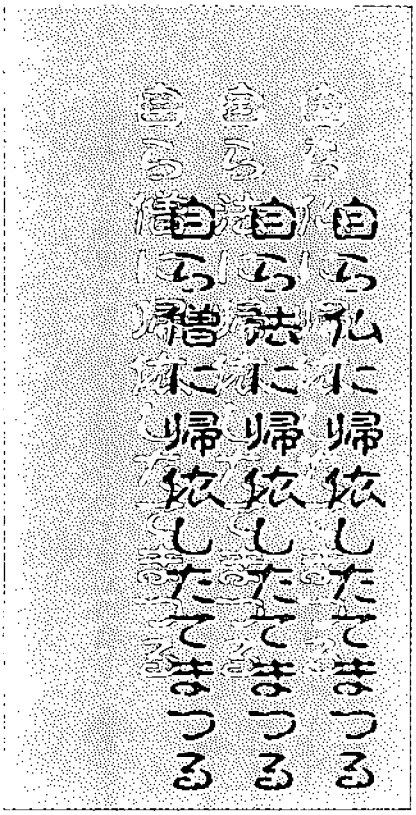
そのために我々は、心を込めて神仏に祈りを捧げようではありませんか。

現実の生活の中で苦しむ多くの人々のために、飢餓で生命を失っている子どもたちのために、そして何よりも争いに明け暮れる人々に武器を捨ててもらうために、さらには、一人一人の人間の心が穏やかに成りますように、祈ろうではありませんか。

終わりに臨み、皆さんの祈りの力が一層強まらんことを祈念して、ご挨拶といたします。

日本宗教代表者会議名誉議長
天台座主　渡邊惠進

Lord, make us instruments of your peace.
Where there is hatred, let us sow love,
where there is injury, pardon,
where there is doubt, faith,
where there is despair, hope,
where there is sadness, joy.



祈りのことば

それぞれの神に、それぞれの仏に、
言葉は違い、儀式は違ったが、心がひとつになるのがわかった。
「どうか、人類が助け合い、共に生きることができますように。
世界平和が一日も早く訪れますように。」
その真摯な気持ちが比叡山を満たした。
静謐な空気の中に祈りの言葉が流れた――。

我々日本仏教徒の代表はここ比叡山上に集い、日本はもとより世界の仏教徒をはじめ多くの人々と共に、世界の平和と人々の心の平安と、命あるものとの共生を願い、祈りを捧げます。

**O my God! O my God! Unite the hearts of Thy servant and reveal to them Thy great purpose.
May they follow Thy commandments and abide in Thy law.
Help them, O God, in their endeavor, and grant them strength to serve Thee. O God! leave them not to themselves, but guide their steps by the light of Thy knowledge, and cheer their hearts by Thy love.
Verily, Thou art their helper and their Lord.**

ON Mt.HIEI

بسم الله الرحمن الرحيم

﴿ربّنا عليك توكلنا وإليك أنبنا وإليك المصير﴾.
(سورة الممتحنة: الآية ٤)

﴿ربنا إغفر لي ولوالدي وللمؤمنين يوم يقوم الحساب﴾.
(سورة إبراهيم: الآية ٤١)

﴿ربنا آتنا من لدنك رحمة وهيىء لنا من أمرنا رشداً﴾.
(سورة الكهف: الآية ١٠)

﴿ربنا لا تزغ قلوبنا بعد أن هديتنا وهب لنا من لدنك رحمة
إنك أنت الوهاب﴾.

(صدق الله العظيم)

WORLD SUMMIT

We pray that the way be spread.
We pray that humanity be saved.
We pray that all humanity be forgiven.
We pray that all nations have peace.
We pray that all churches are saved.

宗教者平和の祈り

The Interreligious Prayer for Peace

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を
波立たぬ世を願ひつつ新しき年の始めを迎え祝はむ

比叡山宗教サミット十周年を記念して、
あまた数多の宗教者が集ひ
平和の祈りを捧げることは、
誠に意義深いものがあります。
ここに我々が奉ずる教祖様達を代表して、
万物の共存・共栄を説き、
もって平和で穏やかな世の到来に向け、
私は、昭和天皇と今上陛下の御聖言を
謹んで、平和の祈りと致します。

MEETING

水と緑の地球に住む58億の人々と
生あるものすべてが、
希望にあふれた新世紀の到来を待ち望む今、
ここ比叡山山頂の祈りの場において、
新日本宗教団体連合会は、
真の恒久平和が、一日も早く実現するよう、
心を込めて祈りを捧げ行動してまいります。
そして、宗我を超え、祈りを結集し、
理解と信頼、正義と寛容、
更に慈しみと勇気をもって平和への道を
歩むことをお誓い致します。

1. Uttitthe pappamajjeyya dhammam sucaritam care
Dhammacari sukham seti asmim loke paramhi ca.
2. Na bhaje pappake mitte na bhaje purisadhame
Bhajetha mitte kalyane bhajetha purisuttame.
3. Sabbe tasanti dandassa sabbe bhayanti maccuno
Attanam upamam katva na haneyya na ghataye.
4. Na hi verena verani sammantidha kudacanam
Averena ca sammanti esa dhammo sanantano.
5. Caram ce nadhigaccheyya seyyam sadisamattano
Ekacariyam dalham kayira natthi bale sahayata.
6. Puttamatthi dhanammatthi iti balo vihannati
Atta hi attano natthi kuto putta kuto dhanam.

The Interreligious Gathering of Prayer for World Peace

(Rg ve da 1. 89.1) May auspicious thoughts come to us from every quarter, unfailing and unfaltering, removing all obstacles, so that gods may always be for our progress and unfailing protectors day by day. (29)

是の比叡の浄き処を厳の斎庭と祓い清めて
天津神籬刺立て招寄り座寄る掛巻くも綾に畏き
天照皇大神を始め天津神国津神八百万神等
の大前に斎主教派神道連合会芳村正徳
恐み恐み白さく
此の世の万物は神の恩恵に依りて産れ興さしめ給ひて
豊かに幸久栄に成し幸へ給へる時世
を以て茲に比叡山宗教サミット十周年記念として
世界宗教者平和の祈りの集いを催すに当たり
恐ろに乞祈寄らくを平らけく安らけく相諧ひ
聞食して各も各も広く大しき心を以て万の国々と
睦び親しみ又心傷つけ争ひ事の災無く
様々な宗教は有れども皆平和を願ひ思へる心は一つにして
清き正しき誠心に満ちて浦安の
世を弥益々に富栄え行かしめ給へと恐み恐みも白す

Peace,
hand in hand
with Justice,
And Prayer.

広島平和祈念式典参加日程・内容

広島平和式典参加について

八月一日から四日までの公式行事に臨んだ海外代表者の一行は、杉谷事務総長の案内により、広島を訪問した。

五日に広島入りした一行は、広島県宗教連盟の歓迎を受け、まず、原爆記念公園を訪問。二十万名の原爆による物故者名簿が奉安されている原爆慰霊碑、八万余名の身元不明者が眠る原爆犠牲者供養塔へ献花、焼香。続いて原爆資料館を見学し、館内で英語版ビデオ「ヒロシマ母たちの祈り」で映像により実際の被害状況を学習した。

海外代表者の中には広島訪問が初めての人もあり、原爆を含め、戦争がもたらした余りにも大きな被害、そして戦勝国、戦敗国に拘わらず人類の心に残した傷の大きさを改めて実感した。

六日は、早朝から広島県宗教連盟主催の慰霊法要に参列。訪問団を代表して杉谷事務総長が献花、海外代表者を代表してニュージーランドのタンジオーラ師が焼香した。

続いて午前八時から広島市主催の平和式典に参列。原爆投下時刻の午前八時十五分には、会場を埋め尽くした参加者と共に黙祷を捧げた。

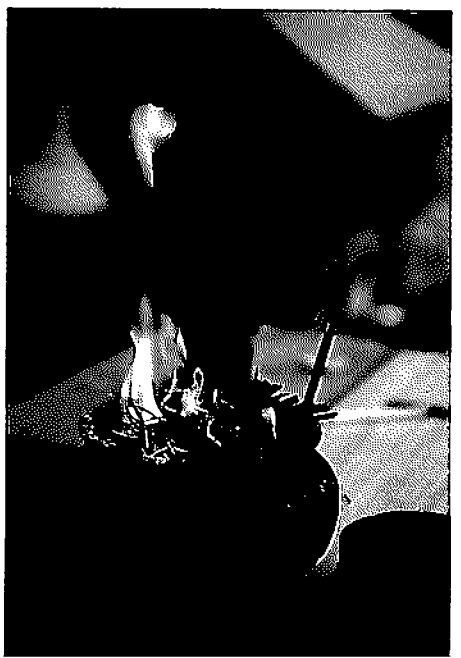
一行はその後、広島全日空ホテルで、広島県宗教連盟主催による歓迎集会、懇親会に臨み、ここでも諸宗教の壁を乗り越えた交流を深めあった。

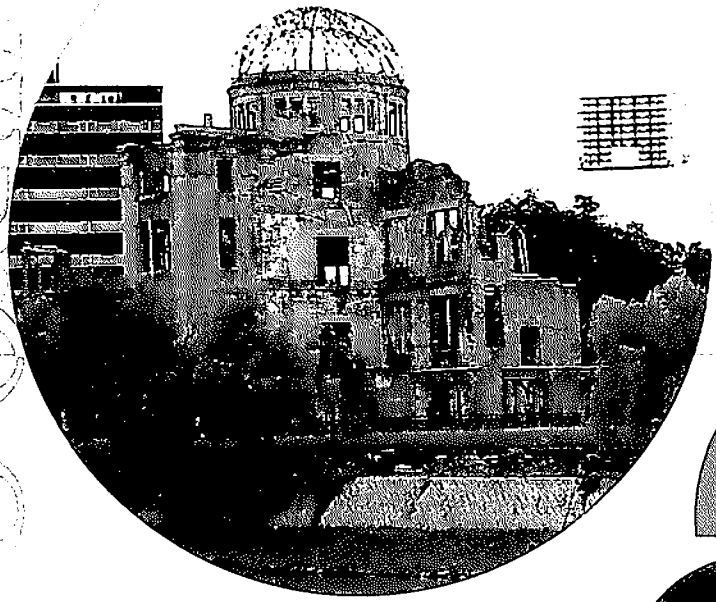
席上、今回の広島訪問、平和式典の参加に対する感想を求められた代表者の一人、ローゼン師は「広島や長崎は、人間の生と死を同時に感じることができる。そして悲惨と苦しみ、再生と希望の生き証人である」と述べ、さらには世界平和実現のために課せられた宗教者の責務の重要性を強調。

全ての行事参加を無事終えた海外代表者一行は、再会を祈りながらそれぞれ帰国の途についた。

8月5日(火)～6日(水)

1997年





TENTH ANNIVERSARY OF
THE RELIGIOUS SUMMIT MEETING
ON MT.HIEI

THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PEACE

JAPAN CONFERENCE OF
RELIGIOUS REPRESENTATIVES

資料

開催までの経過

2・6　第1回「比叡山宗教サミット10周年記念行事」準備会　妙法院門跡

4・25　第2回準備会　京都パークホテル

6・6　第3回準備会　明治記念館

7・8　第1回「比叡山宗教サミット10周年記念行事」テーマ検討小委員会
「日本宗教代表者会議」第1回設立準備会　立正佼成会京都教会

25　第2回テーマ検討小委員会　立正佼成会京都教会

8・22　第2回設立準備会　京都宝ヶ池プリンスホテル

27　「日本宗教代表者会議」設立会議・発会式　京都宝ヶ池プリンスホテル

9・26　第1回事務局会議　天台宗務庁

10・31　第2回事務局会議／第1回常任委員会・第1回運営委員会合同会議　京都グランドホテル

12・20　第3回事務局会議　立正佼成会京都教会

1・27　第1回総務部会・第1回会議部会合同会議　神社本庁

31　第1回儀典部会　天台宗務庁

2・4
〜
11　訪欧使節団派遣（団長…南　佳伸）
訪問先…ローマ教皇庁諸宗教対話評議会（イタリア・ローマ）
フォコラーレ運動マリアポリセンター（イタリア・カステルガンドルフォ）
聖エジディオ共同体本部（イタリア・ローマ）／ミラノ大聖堂（イタリア・ミラノ）
世界教会協議会本部（スイス・ジュネーブ）／国連高等難民弁務官事務所（スイス・ジュネーブ）
カンタベリー大聖堂（イギリス・カンタベリー）／ランベス宮殿（イギリス・ロンドン）

14　第4回事務局会議／第2回運営委員会　智積院会館

27　第2回儀典部会　比叡山延暦寺事務所

3・3　第1回渉外・接遇部会　立正佼成会京都教会

25　第3回儀典部会　比叡山延暦寺事務所

28　第2回総務部会・第2回会議部会合同会議　新宗連会館

4・4　第2回渉外・接遇部会　立正佼成会京都教会

5・12　第5回事務局会議／第3回運営委員会　知恩院和順会館

5·26　第3回会議部会　天台宗務庁

6・6　第3回渉外・接遇部会　立正佼成会京都教会

7　第4回儀典部会　延暦寺事務所

16　第2回常任委員会／比叡山宗教サミット10周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」記者会見
リーガロイヤルホテル京都

26　「比叡山メッセージ」第1回起草委員会　リーガロイヤルホテル京都

7・2　第4回渉外・接遇部会／第6回事務局会議　天台宗務庁

8　第3回総務部会議　天台宗務庁

11　第5回儀典部会　延暦寺事務所

14　第4回会議部会　天台宗務庁

16　第2回起草委員会　京都パークホテル

16　第5回渉外・接遇部会　立正佼成会京都教会

21　語学ボランティア説明会　国立京都国際会館

23　第4回総務部会　天台宗務庁

28　京都宝ヶ池プリンスホテル事務局開設

30　第6回渉外・接遇部会　京都宝ヶ池プリンスホテル

31　第7回事務局会議　京都宝ヶ池プリンスホテル

8・1　語学ボランティア事前説明会　京都宝ヶ池プリンスホテル

比叡山宗教サミット10周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」

2　開会式典・記念講演・特別演奏　国立京都国際会館

3　意見発表部会（2部会同時開催）　国立京都国際会館

4　平和の祈り式典　比叡山延暦寺

10・13　第8回事務局会議／会計監査／第3回常任委員会・第4回運営委員会合同会議
京都宝ヶ池プリンスホテル

31　「日本宗教代表者会議」事務局　解散

日本宗教代表者会議規約

一、 本会議は日本宗教代表者会議（Japan Conference of Religious Representatives）＝J.C.R.R. と称し事務局を比叡山延暦寺内に置く。

二、 本会議は比叡山宗教サミット十周年記念世界宗教者平和の祈りの集いの主催団体として設置する。

三、本会議は日本宗教連盟及び日本宗教連盟協賛五団体の協力を得て前条の目的に賛同する代表的宗教者をもって構成する。

四、本会議の運営をはかるため次の役員を置く。

1

名誉議長	一　名	名誉顧問	五　名
顧　　問	若干名	相 談 役	若干名
参　　与	若干名	議 長 団	七　名
常任委員	若干名	事務総長	一　名
運営委員	若干名	事務次長	三　名
監　　事	三　名		

2 イ、名誉議長・名誉顧問は本会議を代表する。

ロ、顧問、相談役並びに参与は本会議の運営に助言を行う。

ハ、議長団は比叡山宗教サミット十周年記念世界宗教者平和の祈りの集いにおける会議を運営すると共に常任委員会に出席し助言を行う。

ニ、常任委員は常任委員会を組織し本会議の業務を議決する。

ホ、事務総長は本会議の事務を統理する。

ヘ、運営委員は運営委員会を組織し常任委員会に提案する事項の立案及び議決された事項の執行にあたる。

ト、事務次長は事務総長を補佐し事務を推進する。

チ、監事は本会議の業務並びに会計を監査する。

五、本会議は必要に応じて各種委員会並びに事務局に担当部を置くことができる。

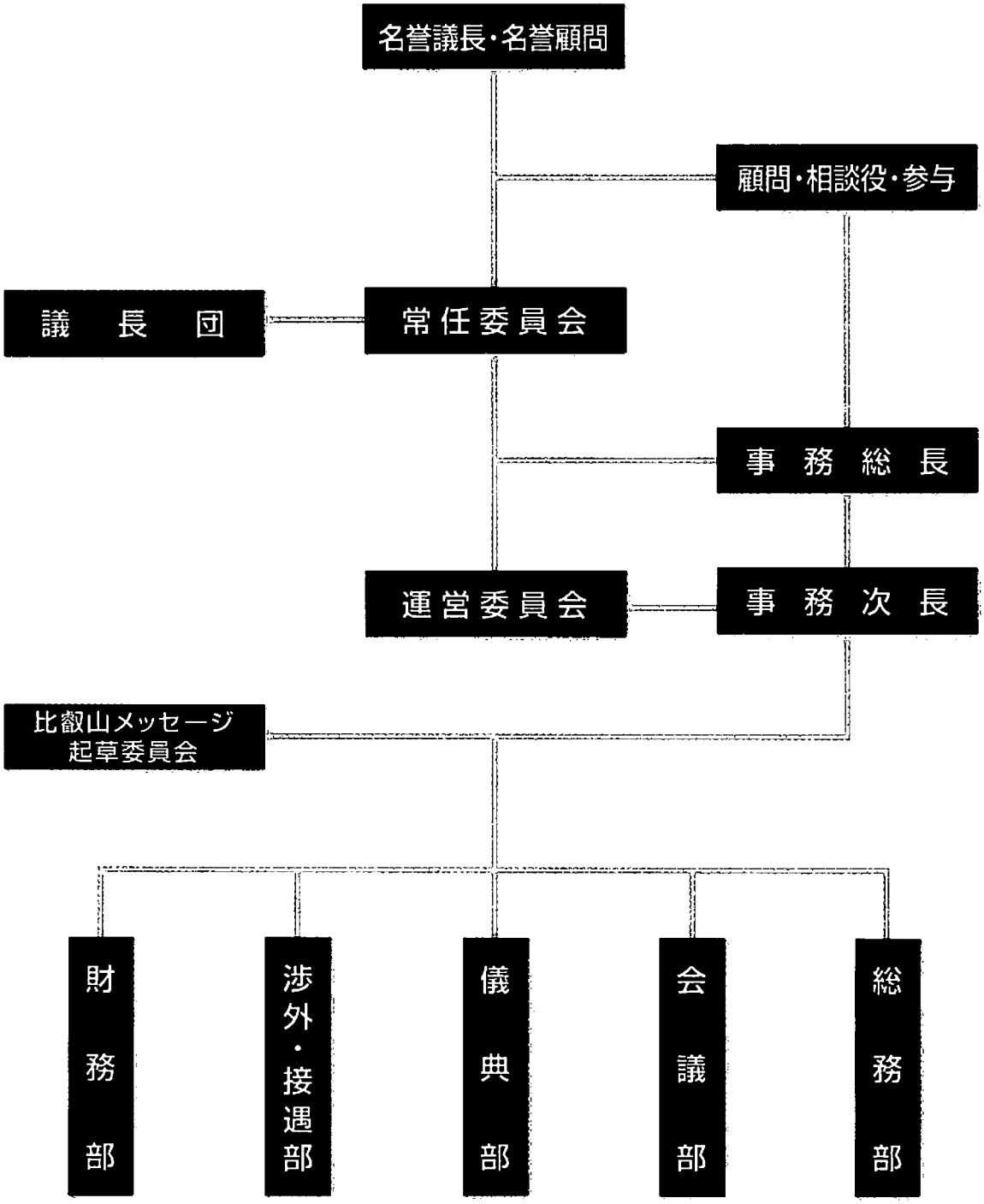
六、本会議の経費は寄付金その他をもって充当する。

七、その他必要な事項は常任委員会の議決を経て定めることができる。

八、本会議は所期の目的を達成した後常任委員会の議決を経て解散する。

九、この規則は平成8年8月27日より施行する。

日本宗教代表者会議組織図



●海外参加者一覧

●ハバイ教

カテライ・ファード博士	バハイ国際共同体特使	日本
（同伴）坂本桂子女史	日本バハイ全国精神行政会会員	日本

●仏教

ダルマパール・マハーテーラ師	ベンガル仏教協会事務総長	インド
（同伴）我妻絢子女史	タイケン・ケンジントン大学助教授	日本
A. T. アリヤラトネ博士	サルボダヤ運動創立者・主事	スリランカ
（同伴）ワサンタ・サマラウィクレマ女史	アリヤラトネ博士秘書	スリランカ
チャロム・ウィスモル氏	世界仏教徒連盟（WFB）会長特使	タイ
（同伴）アムボーン・アルンラングシ氏	世界仏教徒連盟（WFB）事務総長代理	タイ
テップ・ボーン師	カンボジア仏教会会長	カンボジア
（同伴）渋井修師	通訳	カンボジア
宋　月珠（ソン・ウォルチュ）師	韓国仏教宗団協議会会長	韓国
（同伴）金　月棲（キン・ウォルソ）師	韓国仏教宗団協議会常任副会長	韓国
（同伴）金　能貫（キン・ヌンガン）師	曹溪宗社会部長	韓国
（同伴）徐　聖雨（ソ・ソンウ）師	曹溪宗僧侶	韓国
（同伴）韓　徳林（ハン・トッリン）師	曹溪宗宙司	韓国

●キリスト教

カトリック

フランシス・アリンゼ枢機卿	ローマ教皇庁諸宗教対話評議会長官	バチカン
ヴィンコ・プルジッチ枢機卿	サラエボ大司教	ボスニア・ヘルツェゴビナ
（同伴）マト・ゾヴキッチ神父	サラエボ大司教館	ボスニア・ヘルツェゴビナ
尻枝正行神父	ローマ教皇庁諸宗教対話評議会次官補	バチカン
アゴスティーノ・ガルディン師	コンベンツアル聖フランシスコ修道会総長	イタリア
マクシミリアン・ミッチー師	コンベンツアル聖フランシスコ修道会諸宗教対話局長	イタリア
（同伴）川下　勝神父	コンベンツアル聖フランシスコ会日本管区長	日本
トマス・ミッシェル神父	イエズス会諸宗教対話事務局事務局長	イタリア
ゴンザロ・イトゥアルテ・ヴェルドゥスコ神父	サンクリストバル・デ・ラス・カザス教区「正義と平和協議会」代表	メキシコ

オーソドックス

マル・グレゴリオス・ヨハンナ・イブラヒム師	シリア正教アレッポ総主教	シリア
ウィリアム・E. スウィング主教	カリフォルニア教区主教（英国国教会特使）	U.S.A.
（同伴）メアリー・T. スウィング女史	スウィング主教夫人	U.S.A.

プロテスタント

S.ウェスリー・アリアラジャ博士	世界教会協議会（WCC）副総幹事	スイス
ジーン・リーブス博士	立教大学教授（ユニタリアン教会）	U.S.A.

●ヒンドゥー教

ウマ・シャンカール・シャルマ博士	パトナ大学教授	インド
（同伴）アブヘイ・シャンカール氏	シャルマ博士子息	インド

●民族宗教

アオテアロア・マオリ族

ポーリーン・E. タンジオーラ師	アオテアロア・マオリ族宗教指導者	ニュージーランド
（同伴）ジョセフ・セルウィン・テリト氏	マオリ族研究所所長	ニュージーランド

ミクマク族 タリー・スポッティド・イーグル・ボーイ師	ミクマク族メディシィンマン	カナダ
カオダイ教 フム・ダク・ブイ師	カオダイ教アメリカ本部事務総長	U.S.A.
（同伴）ホン・ダク・ブイ女史	ブイ師夫人	U.S.A.
（同伴）ジャスパー・ブイ氏	ブイ師令息	U.S.A.
（同伴）チウ・ヴァン・ダング博士	ブイ師医師	U.S.A.
（同伴）ナー・ニュエン・ダング女史	ダング博士夫人	U.S.A.

◎イスラム教

アハマッド・オマル・ハーシム博士	アル　アズハル大学学長（副総長）	エジプト
（同伴）ムハンマッド・ムハンマッド・アボーレイラ博士	アル　アズハル大学英語-イスラム学科学部長	エジプト
シェイク・アハマッド・クフタロ師	シリア　イスラム法学最高権威者	シリア
（同伴）サバ・ジャブリ女史	クフタロ師夫人	シリア
（同伴）ファローク・アクビク氏	通訳	シリア
（同伴）ナジャ・アルチャー女史	アクビク氏夫人	シリア
アブドッラー・イブン・サーリフ・アル=オバイド博士	世界イスラム連盟事務総長	サウディアラビア

◎ジャイナ教

プリマインダー・N.ジェイン（バワ）氏	ニューヨーク宗際センター国連代表	U.S.A.

◎ユダヤ教

ディビッド・ローゼン師	ＡＤＬ諸宗教対話部部長	イスラエル
（同伴）シャロン・ローゼン女史	ローゼン師夫人	イスラエル
（同伴）ダニエル・クロフ氏	会社社長	イスラエル

◎シーク教

スージャン・シン・ウーバン師	「ヴァンガード・フォー・ピース」協会会長	インド
（同伴）ハリンダー・ドゥウガ女史	ウーバン師秘書	インド
（同伴）S.B.ドゥウガ氏	「ヴァンガード・フォー・ピース」協会役員	インド

◎ゾロアスター教

ホミ・ダラー博士	世界ゾロアスター教徒文化財団理事長	インド

◎諸宗教組織

ジェームズ・パークス・モートン師	ニューヨーク宗際センター所長／「理解の殿堂」(TOU)会長	U.S.A.
（同伴）ルイス・M.ドラン神父	ニューヨーク聖エメリック教会諸宗教対話プログラムコンサルタント	U.S.A.
ウィリアム・F.ベンドレー博士	世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）国際委員会事務総長	U.S.A.
ロバート・トレアー博士	国際自由宗教連盟（ＩＡＲＦ）事務総長	イギリス
アゴスティーノ・ジョバンニョーリ教授	聖エジディオ共同体アジア地域責任者	イタリア
アルベルト・クワットルッチ教授	聖エジディオ共同体「人々と宗教国際会議」事務総長	イタリア
ナタリア・ダラビッコラ女史	フォコラーレ運動諸宗教対話部	イタリア
（同伴）クリスティーナ・リー女史	フォコラーレ運動スタッフ・通訳	イタリア
（同伴）黒河内きみ子女史	通訳	イタリア
キム・モン・ウォン神父	ＫＣＲＰ会長	韓国
（同伴）クワンスー・パーク博士	ＫＣＲＰ事務次長	韓国
（同伴）パル・クン・チョン博士	ＡＣＲＰ議長	韓国
（同伴）リー・スン・スグ女史	ＫＣＲＰ事務局員	韓国

●日本宗教代表者会議役員名簿（1997年8月1日現在／順不同・敬称略）

◎名誉議長

渡邊　惠進	天台座主	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所

◎名誉顧問

出口　聖子	大本教主	亀岡市天恩郷	大本本部
高井　隆秀	全日本仏教会会長 ／真言宗智山派管長	京都市東山区塩小路通大和大路東入東瓦町964	真言宗智山派宗務庁
濱尾　文郎	カトリック司教協議会会長 ／カトリック横浜司教	横浜市中区山手町44	カトリック横浜司教館
細川　護貞	神社本庁統理	東京都渋谷区代々木1-1-2	神社本庁
庭野　日敬	新日本宗教団体連合会名誉理事長 ／立正佼成会開祖	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会

◎議長団

廣瀬　靜水	教派神道連合会理事長 ／人類愛善会会長	亀岡市天恩郷	人類愛善会総本部
白幡　憲佑	全日本仏教会理事長	東京都港区芝公園4-7-4	全日本仏教会
竹田　　眞	日本キリスト教連合会委員長 ／日本聖公会東京教区主教	東京都港区芝公園3-6-18	日本聖公会東京教区事務所
岡本　健治	神社本庁総長	東京都渋谷区代々木1-1-2	神社本庁
深田　充啓	新日本宗教団体連合会理事長 ／円応教教主	兵庫県氷上郡山南町村森1-1	円応教
白柳　誠一	ＷＣＲＰ日本委員会理事長 ／カトリック枢機卿	東京都文京区関口3-16-15	カトリック東京大司教館
池田　瑩輝	世界連邦日本宗教委員会委員長 ／真言宗中山寺派成就院名誉住職	宝塚市中山寺2-11-1	真言宗中山寺派成就院

◎顧　問

坂田　安儀	禊教教主	山梨県北巨摩郡小渕沢町高天原	身曾岐神社
大森　徳春	神道大教管長	東京都港区西麻布4-9-2	神道大教本局
柴田　辰彦	實行教道主	埼玉県大宮市盆栽町377	實行教本庁
黒住　宗晴	黒住教教主	岡山県岡山市尾上神道山	黒住教本部
杉山一太郎	扶桑教管長	東京都世田谷区松原1-7-20	扶桑教大教庁
大桃　吉雄	御嶽教管長	奈良県奈良市大渕町3775	御嶽教大本庁
巫部　健彦	神理教管長	福岡県北九州市小倉南区徳力5-10-6	神理教本院
芳村　正徳	神習教管長	東京都世田谷区新町3-21-3	神習教本祠
新田　邦夫	神道修成派管長	東京都杉並区松庵3-15-12	神道修成派教庁
千家　達彦	出雲大社教管長	島根県簸川郡大社町大字杵築東195	出雲大社教教務本庁
宮崎　奕保	曹洞宗管長	東京都港区芝2-5-2	曹洞宗宗務庁
大谷　暢顯	真宗大谷派門首	京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754	真宗大谷派宗務所
中村　康隆	浄土門主	京都市東山区林下町400-8	浄土宗宗務庁
田中　日淳	日蓮宗管長	東京都大田区池上1-32-15	日蓮宗宗務院
稲葉　義猛	高野山真言宗管長	和歌山県伊都郡高野町高野山132	高野山真言宗宗務所

松山　寛恵	臨済宗妙心寺派管長	京都市右京区花園妙心寺町64	臨済宗妙心寺派宗務本所
濱野　堅照	真言宗豊山派管長	東京都文京区大塚5-40-8	真言宗豊山派宗務所
岡野　正貫	孝道教団統理	横浜市神奈川区鳥越38	孝道教団本部
森田　禅朗	和宗管長	大阪市天王寺区四天王寺1-11-18	和宗宗務所
清水谷孝尚	聖観音宗管長	東京都台東区浅草2-3-1	聖観音宗浅草寺
小倉　霊現	念法眞教煌主	大阪市鶴見区緑3-4-22	念法眞教教務本庁
成田　芳脇	曹洞宗大本山総持寺貫首	横浜市鶴見区鶴見2-1-1	曹洞宗大本山総持寺
藤堂　恭俊	浄土宗大本山増上寺法主	東京都港区芝公園4-7-35	浄土宗大本山増上寺
岩間　日勇	日蓮宗総本山久遠寺法主	山梨県南巨摩郡身延町身延3567	日蓮宗総本山久遠寺
大久保良順	天台宗妙法院門跡門主	京都市東山区妙法院前側町447	天台宗妙法院門跡
小堀　光詮	天台宗三千院門跡門主	京都市左京区大原来迎院町540	天台宗三千院門跡
安田　久雄	カトリック大阪大司教	大阪市中央区玉造2-24-22	カトリック大阪大司教館
島本　　要	カトリック長崎大司教	長崎市橋口町1-1	カトリック長崎大司教館
櫻井勝之進	多賀大社名誉宮司	滋賀県犬上郡多賀町	多賀多賀大社
白井　永二	鶴岡八幡宮名誉宮司	神奈川県鎌倉市雪ノ下2-18-18	鶴岡八幡宮
阿部　　信	賀茂別雷神社名誉宮司	京都市北区上賀茂本山339	賀茂別雷神社
工藤　伊豆	神社本庁副総長	東京都渋谷区代々木1-1-2	神社本庁
酒井　逸雄	神宮少宮司	伊勢市宇治館町1	神宮司庁
外山　勝志	明治神宮宮司	東京都渋谷区代々木神園町1-1	明治神宮
坪原喜三郎	伏見稲荷大社宮司	京都市伏見区深草藪之内町68	伏見稲荷大社
千家　尊祀	出雲大社宮司	島根県簸川郡大社町大字杵築東195	出雲大社
宮本　丈靖	妙智會教団会長	東京都渋谷区代々木3-3-3	妙智會教団
飯島　正三	思親会会長	神奈川県伊勢原市子易1459	思親会
御木貴日止	パーフェクト　リバティー教団教主	大阪府富田林市新堂2172-1	パーフェクト リバティー教団
庭野　日鎮	立正佼成会会長	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会
三宅　歳雄	ＷＣＲＰ日本委員会名誉顧問	大阪市大正区三軒家西3-8-21	金光教泉尾教会
斎藤　禎平	日本ムスリム協会名誉会長	東京都渋谷区代々木1-24-4	日本ムスリム協会
中山　善衛	天理教真柱	奈良県天理市三島町271	天理教教会本部

相談役

出口京太郎	大本相談役	亀岡市天恩郷	大本本部
江田　廣典	天台宗宗機顧問会会長	埼玉県川越市仙波町3-31-23	天台宗長徳寺
木川田一郎	日本聖公会退職主教	大阪市住吉区苅田9-13-4-306	
亀谷　荘司	日本キリスト教連合会顧問	千葉市花見川区検見川町5-2213	日本福音教会検見川教会
田中　文清	石清水八幡宮名誉宮司	京都府八幡市八幡高坊30	石清水八幡宮
雲藤　義道	ＷＣＲＰ日本委員会顧問	島根県出雲市所原町2852	浄土真宗本願寺派西念寺
藤井　教雄	世界連邦日本仏教徒協議会名誉会長	東京都中央区日本橋小伝馬1-3	日蓮宗身延山東京別院
副島　廣之	世界連邦日本宗教委員会特別顧問	東京都世田谷区赤堤1-19-2	

常任委員

委員長 加藤　知衛	服部天神宮宮司	大阪府豊中市服部元町1-2-17	服部天神宮
副委員長 田中　健一	カトリック司教	京都市中京区河原町通三条上ル	カトリック京都司教館
米倉　由美	禊教理事長	山梨県北巨摩郡小淵沢町高天原	身曽岐神社
栗田　行雄	實行教総務	東京都世田谷区奥沢5-23-23	
鵜下　　博	御嶽教顧問	埼玉県飯能市大字坂石580	秩父御嶽神社
藤原　徳行	黒住教教務総長	岡山市尾上神道山2770	黒住教本部
植村　　彰	大本本部長	亀岡市天恩郷	大本本部

千家　遂彦	出雲大社教東京分祠所長	東京都港区六本木7-18-5	出雲大社教東京分祠
尾立　聖兆	神道大教責任役員	東大阪市東石切町2-1-3	神道大教石切神宣大教会
乙川　良英	曹洞宗宗務総長	東京都港区芝2-5-2	曹洞宗宗務庁
能邨　英士	真宗大谷派宗務総長	京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754	真宗大谷派宗務所
成田　有恒	浄土宗宗務総長	京都市東山区林下町400-8	浄土宗宗務庁
永井　祥文	日蓮宗宗務総長	東京都大田区池上1-32-15	日蓮宗宗務院
新居　祐政	高野山真言宗宗務総長	和歌山県伊都郡高野町大字高野山132	高野山真言宗宗務所
細川　景一	臨済宗妙心寺派宗務総長	京都市右京区花園妙心寺町64	臨済宗妙心寺派宗務本所
楠　宗親	真言宗智山派宗務総長	京都市東山区塩小路通大和大路東入東瓦町964	真言宗智山派宗務庁
鳥居　慎譽	真言宗豊山派宗務総長	東京都文京区大塚5-40-8	真言宗豊山派宗務所
小林　隆彰	天台宗総本山延暦寺執行	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所
室田　襄	岩屋神社宮司	京都市山科区大宅中小路町67	岩屋神社
真弓　常忠	八坂神社宮司	京都市東山区祇園町北側625	八坂神社
九條　道弘	平安神宮宮司	京都市左京区岡崎西天王町	平安神宮
建内　光儀	賀茂別雷神社宮司	京都市北区上賀茂本山339	賀茂別雷神社
寺井　種伯	大阪天満宮宮司	大阪市北区天神橋2-5-6	大阪天満宮
加藤　隆久	生田神社宮司	神戸市中央区下山手通1-2-1	生田神社
木山　照道	大神神社宮司	奈良県桜井市三輪1422	大神神社
葉室　頼昭	春日大社宮司	奈良県奈良市春日野町160	春日大社
宮西　惟道	日枝神社宮司	東京都千代田区永田町2-10-5	日枝神社
黒岩　龍彦	宮崎神宮宮司	宮崎県宮崎市神宮2-4-1	宮崎神宮
田中　弘清	石清水八幡宮宮司	八幡市八幡高坊30	石清水八幡宮
西高辻信良	太宰府天満宮宮司	福岡県太宰府市太宰府1114	太宰府天満宮
毛利　義就	明治神宮権宮司	東京都渋谷区代々木神園町1-1	明治神宮
佐原　慶治	妙道会教団会長	大阪市天王寺区松ヶ鼻4-34	妙道会教団
力久　隆積	善隣教教主	福岡県筑紫野市原田427	善隣教
折茂　正光	大日然教教主 ／新日本宗教団体連合会事務局長	東京都新宿区西新宿8-3-28	大日然教
岡野　武徳	解脱会理事長	東京都新宿区荒木町4	解脱会
保積　史子	大和教団開祖	仙台市青葉区錦町2-4-24	大和教団
新井三知夫	救世真教会長	群馬県群馬郡箕郷町中野292	救世真教
石倉　恒男	大慧會教団会長	大阪府堺市大美野142	大慧會教団
吉岡　優	祖神道教団教主	西宮市山口町船坂1319	祖神道教団
田中　偉仁	真生会会長	岐阜市彦坂178	真生会
水野宮久子	神ながら教教主	愛知県名古屋市東区徳川1-15-18	神ながら教
出居　茂	修蕣団捧誠会副総裁	東京都豊島区池袋本町3-11-1	修蕣団捧誠会
田澤　豊弘	松緑神道大和山教主	東津軽郡平内町大字外童子字滝ノ沢12-13	松緑神道大和山
石田　昇	妙智會教団理事長	東京都渋谷区代々木3-3-3	妙智會教団
酒井　教雄	立正佼成会理事長	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会
西田　武	一燈園当番	京都市山科区四ノ宮柳山町8	一燈園
三宅　龍雄	金光教泉尾教会副教会長	大阪市大正区三軒家西3-8-21	金光教泉尾教会
樋口　美作	日本ムスリム協会会長	東京都渋谷区代々木1-24-4	日本ムスリム協会
牧　遠雄	浄土宗総本山知恩院執事長	京都市東山区林下町400	総本山知恩院
千家　尊祐	出雲大社権宮司	島根県簸川郡大社町宮内	出雲大社
矢田部正巳	三嶋大社宮司	三島市大宮町2-1-5	三嶋大社
山本　行隆	椿大神社宮司 ／国際自由宗教連盟（IARF）会長	鈴鹿市山本町1871	椿大神社
畑林　清次	天理教教会本部表統領	奈良県天理市三島町271	天理教教会本部

運営委員

委員長 即真　尊鼎	天台宗総本山延暦寺総務部長	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所
副委員長 赤銅　重夫	円応教責任役員	兵庫県氷上郡山南町村森1-1	円応教
津田　正裕	教派神道連合会理事	東京都中野区本町4-36-3	
吉田　仁六	神道大教教務部長	東京都港区西麻布4-9-2	神道大教本局
黒住　忠篤	黒住教本部公室長	岡山市上神道山2770	黒住教本部
栗田　幸子	實行教総務補	東京都世田谷区奥沢5-23-23	
倉田　功久	黒住教東京支庁長	東京都世田谷区池尻2-21-18	黒住教東京支庁
佐々木　宏	神理教東京出張所所長	東京都練馬区石神井台3-22-20	神理教東京出張所
出口　眞人	人類愛善会総本部事務局長	亀岡市天恩郷	人類愛善会総本部
三原　正彦	扶桑教参元	茨城県西茨城郡岩間町下郷3198	天正会
安田　倭子	神習教京滋教務庁長	京都市中京区室町夷川上ル44	日月明照分教会
松田　一	教派神道連合会幹事	亀岡市天恩郷	大本本部
横山　敏明	曹洞宗総務部長	東京都港区芝2-5-2	曹洞宗宗務庁
五辻　信行	真宗大谷派総務部長	京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754	真宗大谷派宗務所
江口　定信	浄土宗総務局長	京都市東山区林下町400-8	浄土宗宗務庁
渡邊　潤明	日蓮宗綜合企画部長	東京都大田区池上1-32-15	日蓮宗宗務院
田岡　照邇	高野山真言宗総務部長	和歌山県伊都郡高野町大字高野山132	高野山真言宗宗務所
後藤　牧宗	臨済宗妙心寺派総務部長	京都市右京区花園妙心寺町64	臨済宗妙心寺派宗務本所
山田　俊和	天台宗総務部長	滋賀県大津市坂本4-6-2	天台宗務庁
小林　照寧	真言宗智山派総務部長	京都市東山区塩小路通大和大路東入東瓦町964	真言宗智山派宗務庁
浅井　侃雄	真言宗豊山派総務部長	東京都文京区大塚5-40-8	真言宗豊山派宗務所
荒川　正窓	全日本仏教会事務総長	東京都港区芝公園4-7-4	全日本仏教会
田中　光成	全日本仏教会総務部長	東京都港区芝公園4-7-4	全日本仏教会
眞泉　善常	浄土宗総本山知恩院公室長	京都市東山区林下町400	総本山知恩院
上田　尚正	日蓮宗国際開教室室長	東京都大田区池上1-32-15	日蓮宗宗務院
木ノ下寂俊	天台宗妙法院門跡執事長	京都市東山区妙法院前側町447	天台宗妙法院門跡
松景　昭稔	天台宗三千院門跡執事長	京都市左京区大原来迎院町540	天台宗三千院門跡
逸見　道郎	国際仏教興隆協会事務局長	神奈川県横須賀市逸見町1-11	浄土真宗本願寺派浄土寺
田中　健一	カトリック司教	京都市中京区河原町通三条上ル	カトリック京都司教館
花井　拓夫	カトリック田辺教会司祭	京田辺市河原受田31	カトリック田辺教会
武藤　六治	日本聖公会京都教区主教	京都市上京区烏丸通下立売上ル	日本聖公会京都教区事務所
佐藤　丈史	日本キリスト教連合会参与	東京都杉並区浜田山3-33-18	五宝商事株式会社
佐古　一洌	松尾大社宮司	京都市西京区嵐山宮町3	松尾大社
小串　和夫	熱田神宮権宮司	名古屋市熱田区神宮1-1-1	熱田神宮
吉井　貞俊	西宮神社権宮司	兵庫県西宮市社家町1-17	西宮神社
打田　文博	神社本庁渉外部長	東京都渋谷区代々木1-1-2	神社本庁
中島精太郎	明治神宮役員室長	東京都渋谷区代々木神園町1-1	明治神宮
宮本　惠司	妙智會教団理事	東京都渋谷区代々木3-3-3	妙智會教団
畠山　友利	立正佼成会渉外課長	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会
後藤　益巳	立正佼成会京都教会教会長	京都市東山区三条蹴上げ	立正佼成会京都教会
斎藤　謙次	新日本宗教団体連合会事務局次長	東京都渋谷区代々木5-57-10	新日本宗教団体連合会事務局
生田　茂夫	新日本宗教団体連合会大阪事務所所長	大阪市西区江之子島1-8-21-111	新日本宗教団体連合会大阪事務所
河野　公俊	ＷＣＲＰ日本委員会事務次長	東京都杉並区和田2-6-1普門館内	ＷＣＲＰ日本委員会
當麻　信章	浄土宗総本山知恩院総務部長	京都市東山区林下町400	総本山知恩院
工藤　晋正	黒住教総務部長	岡山市尾上神道山2770	黒住教本部
中田　千朗	日本国際青年文化協会常務理事	東京都港区芝公園4-7-35　増上寺会館内	日本国際青年文化協会
南坊城充興	道明寺天満宮宮司	藤井寺市道明寺1-16-40	道明寺天満宮
野下　千年	日本カトリック研修センター所長	名古屋市昭和区広路町隼人30-1	日本カトリック研修センター

深堀　明義	カトリック長崎大司教区司牧企画室長	長崎市中町1-13	カトリック中町教会
吉田　昭壽	浄土宗社会局長	京都市東山区林下町400-8	浄土宗宗務庁
鎌田　良昭	世界連邦日本仏教徒協議会事務総長	埼玉県和光市白子2-18-1	天台宗地福寺
土佐　忠雄	天理教教会本部総務部長	奈良県天理市三島町271	天理教教会本部

◎監　事

長谷川霊信	念法眞教教務総長	大阪市鶴見区緑3-4-22	念法眞教教務本庁
上杉　千郷	諏訪神社宮司	長崎市上西山町18-15	諏訪神社
三宅美智雄	ＷＣＲＰ日本委員会事務総長	東京都板橋区常盤台1-28-14	金光教常盤台教会教会長

◎参　与

出口　斎	大本教学委員会委員長	亀岡市天恩郷	大本本部
別所　法山	天台眞盛宗宗務総長	滋賀県大津市坂本5-13-1	天台眞盛宗宗務所
五條　覚照	金峯山修験本宗宗務総長	奈良県吉野郡吉野町吉野山1296	金峯山修験本宗宗務庁
小林　慶存	天台寺門宗宗務総長	滋賀県大津市園城寺町246	天台寺門宗宗務本所
小岩井貫承	聖観音宗宗務総長	東京都台東区浅草2-3-1	聖観音宗浅草寺
吉田　英哲	和宗宗務総長	大阪市天王寺区四天王寺1-11-18	和宗宗務所
岡野　鄰子	孝道教団副統理	横浜市神奈川区鳥越38	孝道教団本部
九野　純孝	妙見宗宗務総長	大阪府豊能郡能勢町野間中718	妙見宗宗務本庁
廣安　俊道	真言宗大覚寺派宗務総長	京都市右京区嵯峨大沢町4	真言宗大覚寺派宗務庁
大谷　博通	新義真言宗宗務総長	東京都文京区湯島4-6-12　湯島ﾊｲﾀｳﾝB-1211	新義真言宗宗務所
樫原　禅澄	真言宗善通寺派宗務総長	香川県善通寺市善通寺町3-3-1	真言宗善通寺派宗務庁
倉信　隆源	真言宗御室派宗務総長	京都市右京区御室大内33	真言宗御室派宗務所
上田　光仁	真言宗山階派宗務長	京都市山科区勧修寺仁王堂町27-6	真言宗山階派宗務所
川原　一哲	真言宗山階派宗務長	京都市山科区勧修寺仁王堂町27-6	真言宗山階派宗務所
木村　竜弘	真言宗山階派宗務長	京都市山科区勧修寺仁王堂町27-6	真言宗山階派宗務所
平野　暎哉	真言宗泉涌寺派宗務総長	京都市東山区泉涌寺山内町27	真言宗泉湧寺派宗務所
仲田　順和	真言宗醍醐派宗務総長	京都市伏見区醍醐東大路22	真言宗醍醐派宗務本庁
丸山　秀彦	真言宗国分寺派宗務総長	大阪市北区国分寺1-6-18	真言宗国分寺派宗務庁
吉井　恵貫	真言宗須磨寺派寺務長	神戸市須磨区須磨寺町4-6-8	真言宗須磨寺派宗務庁
国定　浄運	真言三宝宗宗務長	宝塚市米谷字清シ1	真言三宝宗宗務所
鈴木　貫晶	信貴山真言宗宗務長	奈良県生駒郡平群町信貴山2280-1	信貴山真言宗朝護孫子寺
帯盛　竜応	真言宗犬鳴派宗務総長	泉佐野市大木8	真言宗犬鳴派宗務所
藤原　義章	東寺真言宗宗務総長	京都市南区九条町1	東寺真言宗宗務庁
五十嵐隆明	浄土宗西山禅林寺派宗務総長	京都市左京区永観堂町48	浄土宗西山禅林寺派宗務所
畔柳　正顕	浄土宗西山深草派宗務総長	京都市中京区新京極桜之町453	浄土宗西山深草派宗務所
川崎　観隨	西山浄土宗宗務総長	京都府長岡京市粟生西条ノ内26-1	西山浄土宗宗務所
安藤　光淵	真宗高田派宗務総長	津市一身田2819	真宗高田派宗務院
脇阪　義幸	真宗仏光寺派宗務総長	京都市下京区高倉通仏光寺下ル新開町397	真宗仏光寺派宗務所
福家　弘之	真宗興正派宗務総長	京都市下京区堀川通七条上ル華園町70	真宗興正派宗務所
高田　信昭	真宗木辺派宗務長	滋賀県野洲郡中主町木部826	真宗木辺派宗務所
秋庭　稔	時宗宗務長	藤沢市西富1-8-1	時宗宗務所
森田　昭光	融通念佛宗宗務総長	大阪市平野区平野上町1-7-26	融通念佛宗宗務所
虎山　秀禅	臨済宗南禅寺派宗務総長	京都市左京区南禅寺福地町	臨済宗南禅寺派宗務本所
小幡　蘭谷	臨済宗円覚寺派宗務総長	鎌倉市山之内409	臨済宗円覚寺派宗務本所
永井　宗誠	臨済宗建長寺派宗務総長	鎌倉市山之内8	臨済宗建長寺派宗務本院
島見　周悦	臨済宗天龍寺派宗務総長	京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町68	臨済宗天龍寺派宗務本院
長尾　守峰	臨済宗相国寺派宗務総長	京都市上京区今出川通烏丸東入ル相国寺門前町701	臨済宗相国寺派宗務本所

胥木　雄豎	臨済宗東福寺派宗務総長	京都市東山区本町15-778	臨済宗東福寺派宗務本院
赤松　達明	黄檗宗宗務総長	宇治市五ケ庄三番割34	黄檗宗務本院
川口　日唱	法華宗(本門流)宗務総長	東京都豊島区北大塚1-26-4	法華宗(本門流)宗務院
土屋　善敬	法華宗(陣門流)宗務総長	東京都豊島区巣鴨5-35-6	法華宗(陣門流)宗務院
長鍬　泰信	法華宗(真門流)宗務総長	京都市上京区智恵光院通五辻上ル紋屋町330	法華宗(真門流)宗務庁
中山　昭夫	顕本法華宗宗務総長	京都市左京区岩倉幡枝町91	顕本法華宗宗務院
小山　日誠	本門佛立宗宗務総長	京都市上京区御前通一条上ル東竪町110	本門佛立宗宗務本庁
髙辺　信幸	本門法華宗宗務総長	京都市上京区寺ノ内通大宮東入ル妙蓮寺前町875	本門法華宗宗務院
安田　暎胤	法相宗宗務長	奈良市西ノ京町457	法相宗宗務所
大野　玄妙	聖徳宗宗務長	奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺山内1-1	聖徳宗宗務所
橋本　聖国	華厳宗宗務長	奈良市雑司町406-1	華厳宗宗務所
佐伯　快勝	真言律宗宗務長	奈良市西大寺芝町1-1-5	真言律宗宗務所
川井　戒本	律宗宗務長	奈良市五条町13-46	律宗宗務所
古屋　眞孝	神社本庁理事／浅間神社宮司	山梨県東八代郡一宮町一宮1684	浅間神社
中野　尹兌	神社本庁理事／北海道神宮宮司	札幌市中央区宮ヶ丘474	北海道神宮
磯貝　洋一	神社本庁理事／志波彦神社鹽竈神社宮司	宮城県塩竈市一森山1-1	志波彦神社鹽竈神社
曽田　勝彌	神社本庁理事／堀出神社宮司	新潟県新津市本町3-14-6	堀出神社
松田　幸史	神社本庁理事／聖神社宮司	鳥取市行徳2-705	聖神社
多田　允一	神社本庁理事／十二社神社宮司	徳島県名西郡神山町阿野字池ノ平125-1	十二社神社
髙千穂有英	神社本庁理事／英彦山神社宮司	福岡県田川郡添田町英彦山1	英彦山神社
平尾　旨剛	神社本庁監事／日枝神社宮司	富山市山王町4-12	日枝神社
櫻井　正弥	神社本庁監事／速谷神社宮司	広島県廿日市市上平良308-1	速谷神社
鳥羽　禮自	京都府神社庁副庁長／城南宮宮司	京都市伏見区中島宮ノ前町28	城南宮
今原嘉麻呂	京都府神社庁参事	京都市北区紫野今宮町21	京都府神社庁
鳥居清三郎	賀茂御祖神社宮司	京都市左京区下鴨泉川町59	賀茂御祖神社
田中　邦夫	平野神社宮司	京都市北区平野宮本町1	平野神社
髙井　和大	貴船神社宮司	京都市左京区鞍馬貴船町180	貴船神社
齋藤　重介	大原野神社宮司	京都市西京区大原野南春日町1152	大原野神社
宮下　　務	吉田神社宮司	京都市左京区吉田神楽岡町30	吉田神社
浅井與四郎	北野天満宮宮司	京都市上京区馬喰町	北野天満宮
海部　光彦	籠神社宮司	宮津市字大垣430	籠神社宮司
文室　隆紀	護王神社宮司	京都市上京区烏丸通下長者町桜鶴円町385	護王神社
松原　　宏	建勲神社宮司	京都市北区紫野北船岡町49	建勲神社
吉田　良武	豊国神社宮司	京都市東山区大和大路正面茶屋町530	豊国神社
多田　隆男	梨木神社宮司	京都市上京区寺町通広小路上ル染殿町680	梨木神社
渡邊　　誠	愛宕神社宮司	京都市右京区嵯峨愛宕町1	愛宕神社
西村　　尚	白峰神宮宮司	京都市上京区今出川通堀川東入ル飛鳥井町261	白峰神宮
木村　幹彦	京都霊山護国神社宮司	京都市東山区清閑寺霊山町1	京都霊山護国神社
津江　孝夫	大阪府神社庁副庁長／今宮戎神社宮司	大阪市浪速区恵美須西1-6-10	今宮戎神社
江端　市松	大阪府神社庁副庁長／守居神社宮司	守口市土居町2-22	守居神社
岡田　一郎	大阪府神社庁参事	大阪市中央区久太郎町4丁目渡辺6	大阪府神社庁
奈須　光興	枚岡神社宮司	東大阪市出雲井7-16	枚岡神社
山本　博之	大鳥神社宮司	堺市鳳北町1-1-2	大鳥神社
森岡　一良	生國魂神社宮司	大阪市天王寺区生玉町13-9	生國魂神社
水無瀬忠成	水無瀬神宮宮司	大阪府三島郡島本町広瀬3-10-24	水無瀬神宮
中塚　昌宏	阿部野神社宮司	大阪市阿倍野区北畠3-7-20	阿部野神社
敷田　年博	住吉大社宮司	大阪市住吉区住吉2-9-89	住吉大社
柳沢　　寮	大阪護国神社宮司	大阪市住之江区南加賀屋1-1-77	大阪護国神社
小池　義行	髙津宮宮司	大阪市中央区髙津1-1-29	髙津宮
岡田　善夫	兵庫県神社庁庁長／八幡神社宮司	西宮市中須佐町4-3	八幡神社

三木　宣通	兵庫県神社庁副庁長／斎神社宮司	姫路市広畑区北野町2-3	斎神社
西川稜威雄	兵庫県神社庁参事	神戸市中央区多聞通3-1-1	兵庫県神社庁
浦上　邦男	伊弉諾神宮宮司	兵庫県津名郡一宮町多賀740	伊弉諾神宮
中山　　隆	廣田神社宮司	西宮市大社町7-7	廣田神社
藤原　正克	長田神社宮司	神戸市長田区長田町3-1-1	長田神社
近藤　公博	海神社宮司	神戸市垂水区宮本町5-1	海神社
長尾　家次	出石神社宮司	兵庫県出石郡出石町宮内99	出石神社
安黒　義郎	伊和神社宮司	兵庫県宍粟郡一宮町須行名407	伊和神社
栃尾泰治郎	湊川神社宮司	神戸市中央区多聞通3-1-1	湊川神社
吉井　良隆	西宮神社宮司	西宮市社家町1-17	西宮神社
本田　　廣	射盾兵主神社宮司	姫路市総社本町190	射盾兵主神社
杉山　義弘	廣峰神社宮司代務者	姫路市広嶺山52	廣峰神社
泉　　慶雄	兵庫縣姫路護国神社宮司	姫路市本町118	兵庫縣姫路護国神社
久保田梅継	兵庫縣神戸護国神社宮司	神戸市灘区篠原北町4-5-1	兵庫縣神戸護国神社
飯尾　　精	赤穂大石神社宮司	赤穂市上仮屋旧城内	赤穂大石神社
福本　賀郎	多田神社宮司	兵庫県川西市多田院多田所町1-1	多田神社
森　　武雄	奈良県神社庁副庁長／石上神宮宮司	天理市布留町384	石上神宮
西辻　芳正	奈良県神社庁参事	橿原市久米町934	奈良県神社庁
上田　善久	龍田大社宮司	奈良県生駒郡三郷町立野南1-29-1	龍田大社
樋口　俊夫	廣瀬神社宮司	奈良県北葛城郡河合町川合99	廣瀬神社
川南　　勝	談山神社宮司	奈良県桜井市多武峰319	談山神社
佐藤　靖夫	丹生川上神社宮司	奈良県吉野郡東吉野村小968	丹生川上神社
三苫　重格	丹生川上神社上社宮司	奈良県吉野郡川上村迫167	丹生川上神社上社
上杉　留蔵	丹生川上神社下社宮司代務者	奈良県吉野郡下市町長谷1-1	丹生川上神社下社
河崎　　宏	吉野神宮宮司	奈良県吉野郡吉野町吉野山3226	吉野神宮
梶谷　良助	大和神社宮司	天理市新泉町星山306	大和神社
吉村　光貞	石園座多久虫玉神社宮司	奈良県大和高田市片塩町15-33	石園座多久虫玉神社
田村　勝則	滋賀県神社庁長／田村神社宮司	滋賀県甲賀郡土山町北土山470-1	田村神社
小野　定親	滋賀県神社庁副庁長／苗村神社宮司	滋賀県蒲生郡竜王町綾戸468	苗村神社
中嶋　建乃	滋賀県神社庁参事	滋賀県大津市小関町3-26	滋賀県神社庁
加藤　泰朗	建部大社宮司	滋賀県大津市神領1-16-1	建部大社
伊達　俊雄	日吉大社宮司	滋賀県大津市坂本5-1-1	日吉大社
佐藤　久忠	近江神宮宮司	滋賀県大津市神宮町1-1	近江神宮
岡本　秀康	御上神社宮司	滋賀県野洲郡野洲町三上838	御上神社
村田　武夫	太郎坊阿賀神社宮司	滋賀県八日市市小脇町2247	太郎坊阿賀神社
山本　賢司	滋賀縣護国神社宮司	滋賀県彦根市尾末町1-59	滋賀縣護国神社
岳　　尋幸	日牟礼八幡宮宮司	滋賀県近江八幡市宮内町257	日牟礼八幡宮
鳴津　正三	和歌山県神社庁庁長／熊野那智大社宮司	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智山1	熊野那智大社
島田　久愛	和歌山県神社庁副庁長／神明神社宮司	和歌山市堀止西2-4-48	神明神社
杉原　　直	和歌山県神社庁副庁長／九頭神社宮司	和歌山県那賀郡粉河町荒見296-4	九頭神社
土屋　金弥	和歌山県神社庁参事	和歌山市一番丁３　桜花会館内	和歌山県神社庁
吉良　義章	竈山神社宮司代務者	和歌山市和田438	竈山神社
上野　　元	熊野速玉大社宮司	和歌山県新宮市新宮1	熊野速玉大社
奥　　鈴雄	伊太祁曽神社宮司	和歌山市伊太祈曽558	伊太祁曽神社
九鬼　宗隆	熊野本宮大社宮司	和歌山県東牟婁郡本宮町本宮1110	熊野本宮大社
仲谷林之助	丹生都比売神社宮司	和歌山県伊都郡かつらぎ町上天野230	丹生都比売神社
大津　瀧大	闘鶏神社宮司	和歌山県田辺市湊655	闘鶏神社
田中　穂光	神霊の家教主 ／新日本宗教団体連合会理事	大阪市住吉区帝塚山東2-5-2	神霊の家

榊原　法公	法公会会長 ／新日本宗教団体連合会理事	愛知県知立市西町亀池24	法公会
左藤　滋光	澄禅律院住職 ／新日本宗教団体連合会監事	滋賀県蒲生郡日野町平子88	澄禅律院
鉢呂　神龍	天恩教教主 ／新日本宗教団体連合会評議員	京都市北区衣笠西馬場町36	天恩教
石川　靖夫	霊波之光教会代表役員 ／新日本宗教団体連合会評議員	千葉県野田市山崎北亀山2683-1	霊波之光教会

◎比叡山メッセージ起草委員

委員長 雲井　昭善	大谷大学名誉教授	京都市左京区下鴨泉川町53-59	天台宗大覚寺
リノ・ベリーニ	カトリック・ザベリオ会司祭	京都市左京区上高野防山町1-6	静観庵
茵田　　稔	神道宗教学会会長／秩父神社宮司	埼玉県秩父市番場町1-1	秩父神社

事務総長

杉谷　義純	天台宗宗務総長	滋賀県大津市坂本4-6-2	天台宗務庁

事務次長

奥田　宗弘	大本副本部長	亀岡市天恩郷	大本本部
南　佳伸	立正佼成会資任役員	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会
田中　恒清	石清水八幡宮権宮司	八幡市八幡高坊30	石清水八幡宮

事務局

総務部

部長 打田　文博	神社本庁渉外部長	東京都渋谷区代々木1-1-2	神社本庁
次長 小堀　光實	天台宗国際平和宗教協力協会事務局次長	滋賀県大津市坂本4-6-2	天台宗務庁
津田　正裕	教派神道連合会理事	東京都中野区本町4-36-3	
斎藤　謙次	新日本宗教団体連合会事務局次長	東京都渋谷区代々木5-57-10	新日本宗教団体連合会事務局
生田　茂夫	新日本宗教団体連合会大阪事務所所長	大阪市西区江之子島1-8-21-111	新日本宗教団体連合会大阪事務所
逸見　道郎	国際仏教興隆協会事務局長	神奈川県横須賀市逸見町1-11	浄土真宗本願寺派浄土寺
横山　和土	天台宗三千院門跡総務部長	京都市左京区大原来迎院町540	天台宗三千院門跡

会議部

部長 花井　拓夫	カトリック田辺教会司祭	京田辺市河原受田31	カトリック田辺教会
次長 河野　公俊	ＷＣＲＰ日本委員会事務次長	東京都杉並区和田2-6-1普門館内	ＷＣＲＰ日本委員会
黒住　忠篤	黒住教本部公室	長岡山市上神道山2770	黒住教本部
中村　史郎	円応教資任役員	京都市伏見区京町7-28	円応教桃山教会
澤田　晃成	立正佼正会渉外課参事補	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会

儀典部

部長 出口　眞人	人類愛善会総本部事務局長	亀岡市天恩郷	人類愛善会総本部
次長 真嶋　康祐	天台宗総本山延暦寺管理部長	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所
松田　一	教派神道連合会幹事	亀岡市天恩郷	大本本部
佐々木光澄	天台宗総本山延暦寺総務課長	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所
誉田　玄光	天台宗総本山延暦寺管理課長	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所
宮本　惠司	妙智會教団理事	東京都渋谷区代々木3-3-3	妙智會教団
奥　茂宣	石清水八幡宮権禰宜	八幡市八幡高坊30	石清水八幡宮

渉外・接遇部

部長 後藤　益巳	立正佼成会京都教会教会長	京都市東山区三条蹴上げ	立正佼成会京都教会
次長 畠山　友利	立正佼成会渉外課長	東京都杉並区和田2-11-1	立正佼成会
吉田　仁六	神道大教教務部長	東京都港区西麻布4-9-2	神道大教本局
ルカス・ホルスティンク	カトリック・フランシスコ会司祭	京都市下京区岩上通四条下ル佐竹町388	フランシスコの家
中嶋　茂博	京都府神社庁主事	京都市北区紫野今宮町21	京都府神社庁
杉野　一郎	カトリック京都司教区派遣	京都市北区上賀茂松本町18	京都美術研究所
浦地　洪一	日本聖公会京都教区聖マリア教会司祭	京都市左京区岡崎入江町84	日本聖公会京都聖マリア教会

財務部

部長			
山田　俊和	天台宗総務部長	滋賀県大津市坂本4-6-2	天台宗務庁
次長			
徳江　宏正	天台宗総本山延暦寺財務部長	滋賀県大津市坂本本町4220	延暦寺事務所
志井　圓定	天台宗総務課長	滋賀県大津市坂本4-6-2	天台宗務庁

世界宗教者平和の祈りの集い

共に祈った三日間（マスコミ報道）

前回と状況一変
民族紛争も議題

世界の宗教者が初めて日本に集った「比叡山宗教サミット」十周年を記念し、八月一日から三日間、京都市内や比叡山延暦寺（大津市）で「世界宗教者平和の祈りの集い」が開かれる。世界平和の実現に宗教者はどう貢献していけるのか。　京都総局　沢田　豊子

既成仏教で信者数が最大級の浄土真宗本願寺派は、日本宗教代表者会議に役員を出していない。同会議に関さない創価学会は「世界の宗教との対話は独自に進める」との立場を取り、一部の宗教者は「祈るだけで平和が来るのだろうか」と疑問も投げかけている。

平和へ貢献模索

この十年間で、世界の総造は一変した。冷戦が終結する一方、各地で民族紛争が多発。宗派や教義が異なるが故に、対立が激化したケースも多い。このため、今回設定された八つのテーマのうち、一つは「宗教の平和活動と民族紛争」。ボスニア・クルジュ、コソボから来日するカトリックの大司教らが意見を述べる。ミャンマーラントとカチンからは、先住民に広まっている民族宗教の代表者が参加する。

宗教と国家権力が結びついた不幸な歴史から、戦後のわが国では宗教離れが加速した。しかし、心のよりどころを失った現代人は、宗派を超えた広い視野での〈宗教〉を求めているようにも思える。そのなかで開かれる宗教の"世界会議"。世界平和の実現に何をなし得るのか――。論議の高まりに注目したい。

かけで、「世界平和祈願祭会」がイタリア・アッシジで開かれ、諸宗教の関係者が平和への祈りをささげた。

「サミット」は、アッシジの聖神を引き継ぎ、各宗派が同席し語り合うことに意義があるとされ、参加者の一部が平和への所信を表明しただけで、具体的な議論はなかった。比叡山メッセージは「使命はあまりに大きく、われわれの力はあまりに小さいとしつつ「祈りから始めなければならない」と呼びかけ、行動よりも祈りに重点が置かれたといえる。

今回の事務総長を務める杉谷隆興・天台宗宗務総長は、この十年間の国内の各宗派の動きを「国際的な問題に対し、意見を述べようという機運になっている。難民救済などで、他宗教との協力も進められてきた」とし、意欲を見せる。

だが、温度差もある。

十年前の「宗教サミット」は、天台宗が比叡山開創千二百年を記念して発案し、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、神社本庁、教派神道連合会、新日本宗教団体連合会ならびに日本宗教代表者会議を結成、一九八七年八月に比叡山などで開いた。十六カ国からキリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教などの代表二十四人、国内から

は約六百人が参加。平和を求める「比叡山メッセージ」が採択された。

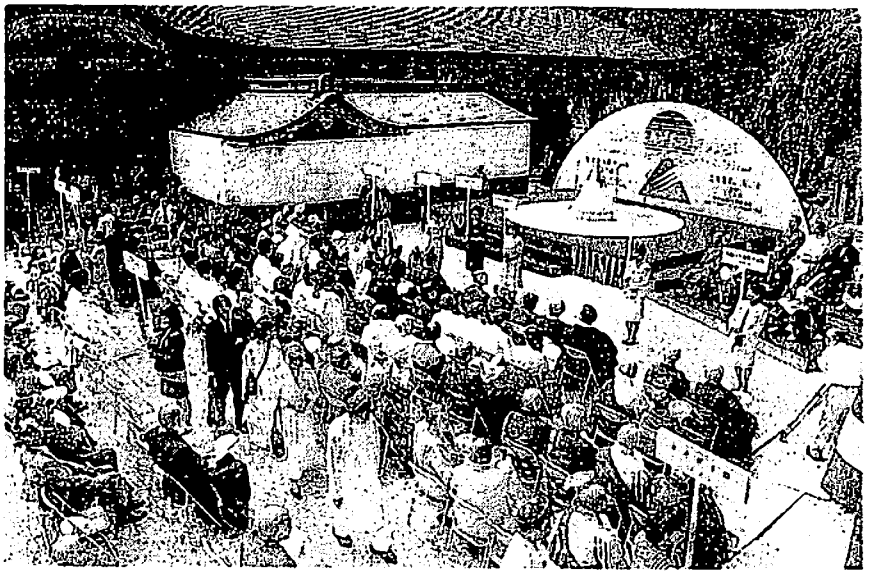
高まる協力機運

教義や世界観の違いで、時に戦争をも起こした宗教の各派が集った前段には、第二バチカン公会議（一九六二～六五）が諸宗教との協力を打ち出したことに始まる各宗派間の協力機運の高まりがあった。

「サミット」前年の八六年には、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の呼び

1997年7月18日・読売新聞

次々と会場入りをする各宗教・宗派の代表者ら



平和の祈り新たに

宗教サミット10周年記念

比叡山メッセージ

各宗教・宗派代表ら発表

大津　「心に〝平和の祈り〟を築きたい」――。比叡山宗教サミット10周年を記念して4日、天台宗総本山・比叡山延暦寺（大津市坂本本町）で開かれた「世界宗教者平和の祈りの集い」の式典。日本を含め19カ国から集まった宗教家らが「比叡山メッセージ」を発表し、平和への祈りを新たにした。

宗教サミットは1987年8月、16カ国の宗教家が比叡山に集って実現。「宗教の目標はせんじ詰めれば人類の幸せと世界平和の二つです」との意思を貫いた故山田恵諦・天台座主の呼び掛けが発端だった。世界平和のために宗教家の連帯を訴えるメッセージが世界に発信され、大きな反響を呼んだ。

この日の式典には、海外からの約30人を含め計約1200人が参列。「平和の鐘」とともに、参列者が黙とうをささげた後、名誉議長の渡辺恵進・天台座主が「一人一人の人間の心が穏やかになりますよう、祈ろうではありませんか」とあいさつ。各宗教・宗派の代表者がそれぞれの形で平和の祈りを行い、最後に「平和の尊さを新しい時代の担い手となる若者たちに強く訴えるとともに、全人類が絶望してやまない平和の賜物が、地球上に恵まれんことを祈る」と比叡山メッセージを発表した。

最後に、小林隆彰・延暦寺執行は「みんなが力を合わせて努力すれば、平和が実現するに違いないと思った仏教人師も、今日の式典を快くご覧になったのでは」と笑顔で話した。

8

ocations include: Bangkok • Beijing • Bonn • Brussels • Chicago • Hong Kong • Jakarta • Kuala Lumpur • London • Los Angeles •

1997年8月5日・毎日新聞

宗教の非力、自ら「反省」

各宗派の指導者「平和の集い」

海外十八カ国の宗教指導者ら約二千人が京都と比叡山（大津市）に集まった「世界宗教者平和の祈りの集い」（主催・日本宗教代表者会議）は四日、三日間の日程を終えて閉幕した。東西冷戦下で世界平和メッセージを採択した「比叡山宗教サミット」から十年。その冷戦の終結後に多発した民族紛争や内戦で、宗教は当事者間の対立をむしろ深刻化させてさえいる。「集い」は最後に、「世界の危機に対して自らの非力を反省し、ともに生きる世界の実現を」とのメッセージを発表した。が、「宗教間の対話を自らに課す」参加者たちには危機意識がにじんだ。

（京都支局・阿部　毅　田中　京子）

比叡山メッセージを発表して終わった宗教サミット＝4日午後、大津市の比叡山延暦寺で

■悔い

開会冒頭、日本の宗教者の多くが、世界各地で噴出する宗教・民族対立に触れ、反省と非力さを率直に述べた。

会場では、カトリックのサラエボ（ボスニア・ヘルツェゴビナ）大司教、ピンコ・ブルジッチ氏が耳を傾けていた。カトリック教徒、イスラム教徒、セルビア正教徒が殺りくを繰り返し、今も紛争は続く。

ブルジッチ氏は内戦中、争いを否定する人道主義を訴えて反発を招き、兄妹四人と親族が故郷の町から追放された。それでも今年六月、ユダヤ教を交えた四宗教間で協議会設立の準備委員会を発足させるなど、和解へ努力を続けている。

初日の講演で、明石康・国連事務次長が登壇した。国連事務総長特別代表として旧ユーゴスラビアの紛争打開に腐心した経験を踏まえ、「各国に規律を課していた米ソ二極構造崩壊後の間隙（かんげき）を埋めるのは宗教指導者だ」と説き、「宗教を使った迫害、暴力を許さないよう、声を大にして発言してほしい」と訴えた。ブルジッチ氏も「権力者による宗教の悪用が対立を深め、その悪用を止められない現実があった」との思いをかみしめた。

だが、母国の現実を前に、諸宗教の協調は容易でない、との実感は消えない。民族紛争がテーマの部会で、「イスラム教徒は『和解』という言葉を好まない。彼らは、和解すれば殺された市民、破壊されたモスクなどを忘れることになる、と主張する」と述べた。

民族対立助長に危機感

時時刻刻

■模索

四日の特別フォーラムでは、イスラム教、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教の各代表者が同じテーブルについた。主要テーマの一つが「民族紛争」だ。

「時には民族、時には経済・政治、時には宗教がかかわり、さまざまな要因が混じり合っている」。カトリックのアリンゼ・パチカン諸宗教対話評議会長官は、紛争、対立の複雑さをこう指摘した。

政治的紛争などにいったん利用されると、宗教は対立を増幅させてしまう、との認識で各代表は一致した。では、争いの和解に、宗教者がどのような役割を果たせるのか。ヒンズー教のシャルマ・パトナ大教授（インド）はこう提言した。「他人によいことをすること。自分が他人から期待することを行うこと。これはすべての宗教に共通の価値観だ。このような共通点を見いだせれば、平和が実現できる」

だが、そのインドでは、ヒンズー教徒がイスラム教の礼拝所を襲うなどの宗教対立が根強く残り、イスラム国家パキスタンとの国境紛争を含む対立もある。

■次世紀へ

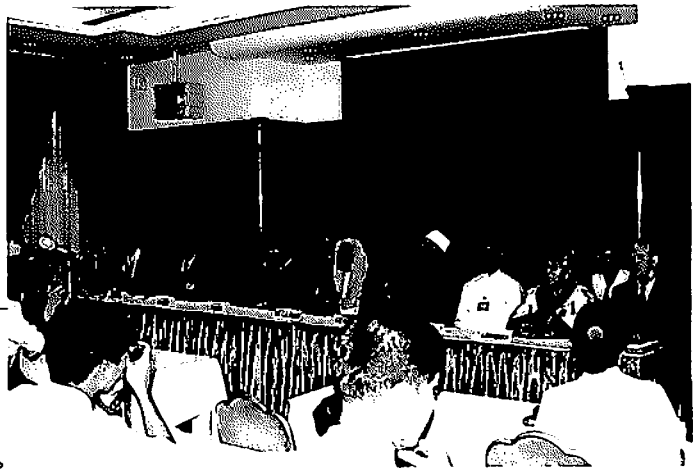
期間中、鮮やかなオレンジ色の袈裟（けさ）姿の老僧が精力的に会場を巡った。カンボジア仏教協会のテップ・ボーン会長。「暴力では何も解決できない。戦争を引き起こす兵器を売るな、買うなと運動しなければならない」と訴えた。

ポル・ポト政権時代は一切の宗教活動が禁止され、寺は収容所に。強制的に還俗させられ、農作業をしていた。現在、寺の境内などで学校づくりに力を注ぐ。

ボーン氏は記者会見で、「仏教の非暴力の教えで、国を再建している」と、内戦からの復興に果たす宗教の役割に力を込めた。しかし、母国では、七月の政変でフン・セン第二首相派がラナリット第一首相派を力で追い落とし、両派の敵対は地方でなお続いている。

今回のメッセージに、宗教者自らの非力さが記されたのも、こうした現実があるからだ。それでも、主催者団体の事務総長を務める天台宗・杉谷義純宗務総長は「日本で意見を述べ合ったことを心にとどめ、それぞれの国に持ち帰り、日常の宗教活動に生かすこと。それが平和につながってほしい」と話した。

1997年8月5日・朝日新聞



記者会見

8月4日、祈りの式典の後に行われた記者会見。杉谷事務総長をはじめ、海外代表者が、今回の行事の意義について語った。

世界の宗教者 手と手結び…

比叡山

世界中の宗教者が集まった比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」が四日、三日間の日程を終えた。参加者約千二百人が手をつないで平和への祈りをささげた＝大津市の比叡山延暦寺で（記事③面に）

1997年8月5日・中日新聞

京都、比叡山で「世界宗教者平和の祈りの集い」

閉会式では、さまざまな衣装を着た宗教者が壇上に並んだ＝京都市左京区の国立京都国際会館で

二日から三日間、京都市と比叡山延暦寺で開かれた「世界宗教者平和の祈りの集い」では、宗教者の非力を反省し、対話のあり方自体を問う発言も目立った。一九八七年に開かれた「比叡山宗教サミット」の十周年を記念した集いだが、冷戦構造の崩壊や民族紛争の激化など、世界情勢の大きな変化も背景にある。

アッシジ精神を継承

十年前の宗教サミットは、その前年に諸宗教の代表がイタリアのアッシジに集まった「世界平和の祈り」の精神を引き継ぐ形で開かれた。今回の集いも日本の仏教、キリスト教、神道、新宗教などでつくる「日本宗教代表者会議」が主催。海外からキリスト教、仏教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教など十八カ国三十四人、国内から約二千人が参加した。

十年前にも「祈るだけで平和が来るのか」との批判はあった。それだけに、今回は「祈り続けてきたが、宗教や民族の違いによる対立は後を絶たず、力の及ばないことを痛感する」（西本願寺・[illegible]総長）など、反省の言葉が閉会式のあいさつから聞かれた。

最終日に採択されたメッセージにも「環境破壊、人口問題、民族問題など、世界の危機的な現実に対して宗教がどれほどの癒（いや）しの働きかけをしてきたか、自らの非力を認めざるをえない」といった文言が入れられた。

対話のあり方問う

祈りの中身どう具体化

そうした反省からか、前回にはなかった対話形式の部会が八つのテーマに分かれて開かれた。明石康・国連事務次長とフランシス・アリンゼ・バチカン諸宗教対話評議会長官の対談や、現代的問題を話し合う特別フォーラムを組んで、一般にも参加を呼び掛けた。

対話がマンネリに陥る危険性や、形式や名目のレベルにまで形骸化しにくい現実を指摘する声も多かった。

「現在の宗教対話は不十分。若者や女性も含めた、草の根レベルの新しい宗教協力が必要だ」（ウィリアム・F・スイング聖公会カリフォルニア教区主教）

「数多くの対話が行われてきたが、同じ顔触れで、ほとんどが形にはまった形式的なもの。深い交流のやり取りがない。もっと広く参加を呼び掛け、小集団で討議するとか、互いのコミュニティーで一定期間生活し合うとか、[illegible]い」（ジェームズ・モートン「環境の聖殿」会長）

「すべての問題のかぎは宗教の和解にある。宗教指導者による和解のための委員会を付設しては」（シーク教徒のスーシャン・シン・ウーバン氏）

「宗教は他者の救いや平和のためにあるべきものであり、そのためなら自分の宗派がなくなったとしてもいいである」（[illegible]・日本聖公会司教）

「これだけの宗教者が集まったのだから、具体的アピールを出して、世界に訴えかけよう」との声もあったが、実現しなかった。宗教者の立場がさまざまで議論がまとまりにくく、アピールが政治的に利用されることへの警戒感も根強かったようだ。

十年前には、国際的に対立する教団同士もあり、宗教代表が一堂に顔を合わせることも珍しかった。しかし、その後、交流が進んで、出会いの場が飛躍的に増えたことも事実。[illegible]・アジア宗教者平和会議事務総長はこう話した。

「まず現段階に集まって、現実において交流することです。そこで培われたネットワークは、何かが起きたときに必ず役に立つ。被災救援や人権擁護などの活動は、世界宗教者平和会議（WCRP）やアジア宗教者平和会議（ACRP）が日常的に行っている。こうした現場の活動も、祈りの集いが開かれるようになって活性化してきた」

平和への祈りをいかに行動に移し、形あるものにしていくか。対話の内容を深めていくことが、これからの課題だろう。

（沼田 洋一郎）

生命科学もテーマに

最終日の四日、特別フォーラム「21世紀へ向けての人類の課題と宗教」が開かれた。主要テーマの一つは、宗教と生命科学のかかわりだ。カトリック、プロテスタント、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教、仏教の指導者たちが、それぞれの見解を述べた。

当日の発言と、事前に主催者に届けられた文面によると、参加者は同じ問題意識を共有していた。宗教と科学の対話をどう位置づけるか、神仏と科学の領域の間に、どう一線を引くかということだった。

ユダヤ教・ADL宗教対話部長のローゼン師は、こう主張する。

「ユダヤ教は人間を造物主の協力者と考えてきた。だから、より良い世界を作るために科学、技術を進歩させることは、われわれの義務なのだ」

「しかし科学が進歩すればするほど、われわれは道徳的ジレンマに直面することになった。遺伝子工学が、その最たるものだ。いったいそれは、どこに行き着くのだろうか」

許される科学と、許されない科学。その区別を、どこでつけるか。

「明確な一線を引くことはできないが、ユダヤ教の学者は、治療行為と技術革新を区別する。指針は、はっきりしている。どんな遺伝子工学であっても、その目的は治療でなければならないということだ。ユダヤ教にとって、クローン人間は絶対、許容できない」

世界イスラム連盟事務局長のオバイド博士の意見。

「イスラム教は科学の進歩に大きく貢献してきたし、今後もするだろう。だが関心は科学、技術に倫理をもたらさない。従ってイスラム教は、研究の限界を認めない。しかし、人間、環境を損なう物を作ることは、禁じられる」

天台宗宗務総長の杉谷義純師は、こういう。

「人の命は過去世、現世、未来世と三世におよぶ。そこには連続性がある、と仏は説く。しかし凡夫には、それが分断したものとして認識されてしまう。そこで欲望が非理を尽くそうとするあまり、クローン人間のように一線を踏み越えてしまう。縁起、つまり因果の関係のなかで生かされている認識を忘れ、限界を超えれば人類の未来はない」

クローン人間に警戒感

共通したもう一つの問題意識は、一線を踏み越えた生命科学が人間の尊厳、人格を侵害しないかということだった。バチカンのアリンゼ枢機卿が示したカトリックの見解はこうだ。

「神は人間を創造主の協力者として造られた。科学、技術の追求は望ましいことだ。しかし、科学者は技術や研究のためではなく、人間の道徳的向上のために貢献しなければならない」。また、体外受精などで[illegible]を敬うことについては「献身行の中で回帰させるようなことは、人間の尊厳を侵害する」といった。

さらにクローン人間についての意見は―。

「そこでは、人間の個別性とアイデンティティー（自己同一性）によってでなく、非物理的に群生され、組織をつくる技術のあった人間に似た者だけが作られる。それは、人間のよりどころとなっている固有性と非再現性という二つの基本原則を侵害する」

ヒンズー教のシャルマ博士は、こう述べた。

「古代文化は、人間を魂として遇した。だが近代技術の追求は、人間を単なる物に変えてしまった。しかし、科学がなくては生は豊かでない。われわれは魂の向上のために、人間に対して敬意を払うべきだ。人間は、神聖で、精神的に成長する存在なのである」

杉谷師は、臓器移植に関連して、天台教学の立場をこう説明する。

「脳を人体部分のなかで特別視する考え方は、脳の死を人間の死とする考え方に通じる。それは劣った脳や病んだ脳をさげすむことにつながり、弱者の排除思想に至りかねない」

臓器移植のために、死が拡大解釈される。死者の体が医療資材化される。こうした生命科学の陥穽に、生と死の専門家である宗教家は深い危機感を抱くのだが、その声は科学者には届かない。そして、今年二月クローン羊ドリーのニュースが伝えられた。宗教と科学の関係を問う出来事だ。「祈り」の主催者は、予定にはなかった特別フォーラムの開催を決めた。主催者の事務総長でもある杉谷師はこう説明する。

「フォーラムは結論ではなく出発点。科学が神仏の領域に踏み込み、[illegible]しあうようなことにはならない。諸宗教が共通する認識、一致できるところを探るのが目的だった」

（北島 [illegible]）

こころ

題字・篠田 桃紅

1997年8月5日・朝日新聞夕刊

宗教サミット開幕

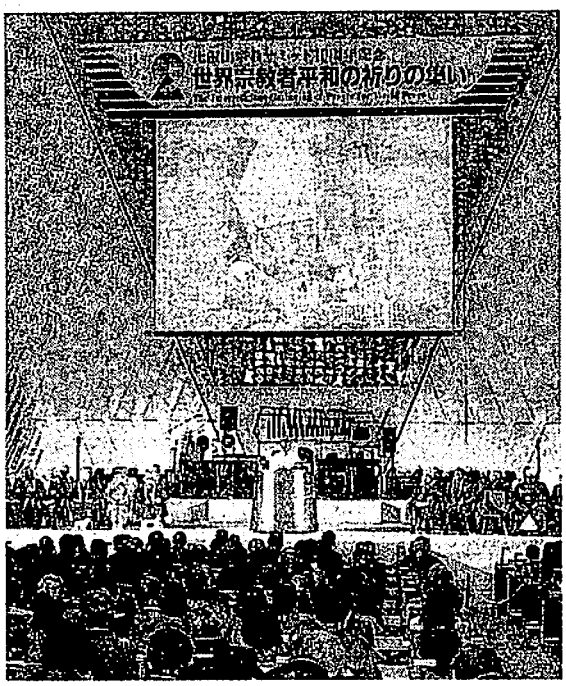
明石・国連次長が記念講演

世界十九カ国から各宗教の代表者が一堂に集い、平和について話し合う「世界宗教者平和の祈りの集い」が二日、京都市左京区の国立京都国際会館で三日間の日程で開幕した。仏教、キリスト教、イスラム教をはじめ世界の三十三宗派の代表者が出席、国内から約二千人の宗教者が参加した。

昭和六十二年に比叡山（大津市）で行われた「比叡山宗教サミット」の十周年を記念した集い。この日は明石康・国連事務次長が記念講演し、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の話を交えながら「民族間の〝寛容〟を育てる宗教教育が紛争解決には必要」と訴えた。

そのほか、バチカンのフランシス・アリンゼ枢機卿が「宗教協力と民族の融和」をテーマに講演。世界的な打楽器奏者のツトム・ヤマシタさんの記念演奏会も行われた。

三日は各宗教の代表者による意見発表が行われ、最終日の四日には、十年前と同様に、比叡山延暦寺で平和への祈りをささげ、「比叡山メッセージ」が発表される。



比叡山宗教サミット10周年を記念し、約2000人の宗教者が一堂に会した「世界宗教者平和の祈りの集い」＝2日午後、京都市左京区の国立京都国際会館

人民裁判は芝居
旧ポト派を批判

カンボジア仏教会会長のボーン師

「世界宗教者平和の祈りの集い」に出席のため京都入りしているカンボジア仏教会会長、テップ・ボーン師(六六)が二日、記者会見に応じ、カンボジア情勢について「ポル・ポト元首相の人民裁判は芝居にすぎない」と、旧ポル・ポト派を激しく批判した。

ボーン師は「（ラナリット氏の）フンシンペック党はポル・ポト派と手を組み、単独政権獲得をねらっている」などと状況を説明。「カンボジア和平のためには、僧侶、国王、人民が一体となって協力することが必要」と強調した。

また仏教会はフンシンペック党にも、（フン・センの第二首相の）人民党にもくみしない中立の立場を守る考えを示し、「世界の宗教界がカンボジア情勢に関心を持ってもらいたい」と訴えた。

1997年8月3日・産経新聞

「共に生きる世界」実現へ

因縁も宿業も、信ずる神もそれぞれに違う人々が、京都市と比叡山に集まった。日本宗教が世界に呼びかけた「世界宗教者平和の祈りの集い」（二一四日）。国内からは神道、仏教など八十六宗教、延べ約四千人が参加。海外からはキリスト教、イスラム教など九宗教の代表や指導者が来日し、共に平和を祈り、語り合った。争いの絶えない世界ではあるが、だからこそ、人々が平和を信じ、祈ることの大切さを感じさせた三日間だった。（編集委員　原田大輔）

平和への祈り！ ①

比叡山・世界宗教者の集い

異なる神を信ずる人々が比叡山の山上で共に祈りをささげた＝比叡山・根本中堂前特設会場

「平和の祈りの集い」は、一九八七年に開かれ、日本の宗教界が「比叡山宗教サミット」の十周年を記念して催された。百近い宗教の代表らが集まるのは、世界的にも珍しい規模だ。今回の集いは、ほとんどが「世界の中で、宗教がいかに役割を果たし、希望の持てる未来を作り上げていくか」、最大のテーマとなった。

京都市の京都国際会館を会場に三日間にわたって行われた記念公開シンポジウムでは、パチカン諸宗教対話評議会長官のアリンゼ枢機卿（キリスト教）、エジプト・アルハズル大学前総長のハーシム教授（イスラム教）ら内外宗教の代表者らが宗教の役割について意見を交わした。

最終日の四日には、集いの総括ともいえる「平和の祈り式典」が比叡山延暦寺の根本中堂前で開催され、集いの「成果」である「比叡山メッセージ」が全世界の宗教者、人々に向かって発せられた。

山頂の日差しが傾き始めた午後三時半過ぎから始まった式典では、渡邊恵雄・天台座主（日本宗教代表者会議名誉議長）が「人類は神の前に祈りをささげた。

◇

主催団体＝日本宗教代表者会議（神社本庁、教派神道連合会、全日本仏教会、日本キリスト教連合会、新宗教の会議＝世界宗教者平和会議＝WCRP、世界連邦日本宗教委員会）（別項）

（明日から三回にわたり祭壇で祈りをささげた。表紙東財産の内容を紹介します）

比叡山メッセージ

比叡山宗教サミット十周年を記念し「世界宗教者平和の祈りの集い」に結集したわれわれは、世のすべての人に対し、心からメッセージを送りたいと思う。

十年の間に様々な宗教の対話と相互理解は対立に進められ、平和を祈願する宗教者の輪（ちゃうたいい）は、いっそう固く結ばれてきた。その平和、現代が直面する環境悪化による環境問題、食糧、飢餓と過剰な食料や人口問題、貧富、人種や暴力・抑圧と隠れ状況問題、飢えとんとした世界的な現状に対して、宗教がどれほどの強しの働きかけをしてきたかをかえりみるとき、われわれは自らの非力さを痛感せざるを得ない。人類は存亡の危機に瀕している。

現代の諸問題は極めて複合的であるが、環境の保全と生けるものとの共栄こそ、人類共同体としてのわれわれにとって、最大の課題と自覚しなければならない。

我々は生命を大切にし、各宗教的主張を尊い、正義と愛、寛容と慈悲の宗教心を最高度に発揮する努力を重ねるべきである。今こそ自らの祈りが足りないことを反省し、我欲の海となりかねない人間の心に自制心を喚起し、苦しみや悩みを分かち合い、ゆるしあい、共に生きる世界の実現を目指して邁進しなければならない。平和の調物が、この地球上に思われんことを切に祈る。

（1997年8月4日）

信仰のあり方を議論

祈りだけでは…厳しい現実に葛藤も

今回の「祈りの集い」を後援しているのが「自らの非力さを痛感せざるを得ない」というメッセージ中の一文だ。

世界が東西二つの陣営に分かれて対立していた十年前、やはり比叡山に集まった宗教者たちは「紛争の解決、核兵器および通常兵器の軍縮、環境保全…」（当時のメッセージ）の実現への祈りをささげた。そこには、当時、座を同じくすることの珍しかった異なる宗教の代表者たちが、一緒に会して平和のために祈った。

今回、比叡山に集まった宗教者たちは「紛争の解決、核兵器の廃絶」を強調。

しかし、十年が過ぎ、祈りは深まったのだろうか。答えは否だ。東西陣営こそ終わったものの、環境、人口問題は悪化。揺ぎ切の果ては宗教に名を借りた地域紛争まで発生している。今回、比叡山に集まった宗教者たちの多くが、この厳しい現実を指摘し「宗教は」の十年、何をしてきたのか」という言葉さえ漏らした。

「自らの祈りが足りないことを反省し…共に生きる世界の実現を目指して邁進しなければ」という今回のメッセージには、十年前に見られたような楽観的な明るさはない。むしろ暗とんとする世界の中で、単なる祈りだけでは通じない現実にさらされながら、何とか厳しい時代への希望を見つけ出したいと考える宗教の葛藤ぶりが見られる。

果たして宗教は本当に平和へ貢献できるのか。懐疑と自信が揺れる中で開かれたのが、今回の「祈りの集い」だった。（赤塚正通）

比叡山世界宗教者平和の集い

比叡山宗教サミット十周年記念の「世界宗教者平和の祈りの集い」が、国立京都国際会館で開かれ、宗教の世界の諸問題への取り組みなどを討議。最終日の四日、世界に向けて「平和の碧を築こう」との〝比叡山メッセージ〟を発信して閉幕した。しかし、旧ユーゴや中東の民族対立などが熱心に討議されたのに、日本に最も近い朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）への食糧支援は討議の対象にならず、「集い」にいびつさの影を落とした。（編集委員・黒住隆興）

北朝鮮食糧支援

討議なく、いびつさの影

三日間の集いの二日目にテーマ別部会が開かれた。テーマは「宗教の平和活動と民族紛争」や「東西の宗教対話と相互理解」「宗教者間の連帯と人類の果たすべき役割」など八つ。旧ユーゴや中東、カンボジアなど民族・地域紛争問題を討議。〝許し〟〝和解〟〝寛容〟の語が飛び交い、参加者は感動しあった。しかし、今、最も緊急を要する北朝鮮の食糧支援は話題にすらならなかった。これに気付いたアジア宗教者平和会議（ACRP）の飯坂良明事務総長が報告者の一人で世界宗教者平和会議（WCRP）国際委員会事務総長、ペンドレー博士に「北朝鮮支援を全然取り上げないのはまずい」と連絡、彼が草稿なしに「北朝鮮に食糧を支援しよう」と呼び掛けた。これが北朝鮮支援に触れた唯一の発言だった。

関係者の話によると意図的に北朝鮮支援を避けたのではない。この種の会合をすべき役割」など八つ。旧日本で開くと宗教対話や宗教協力の対政は、どうしても欧米のキリスト教や中東のイスラム教、ユダヤ教、インドの諸宗教などに向けられ、北朝鮮は議論の外におかれるという。

北朝鮮が閉鎖社会で宗教が圏外なのはまだしも人道支援までそっ外となると、その「世界平和」観はいびつとのそしりを免れなくなる。

北朝鮮支援は宗教界では、カトリック系の援助団体、カリタス・ジャパンが取り上げないのはまずい（東京都江東区、日本カトリック会館内）が二年余前からコメ計五百トンなどを送っている。朝鮮の人たちに配給されることを見届けてきており、八月中にもコメ三百トンを追加支援する予定だ。

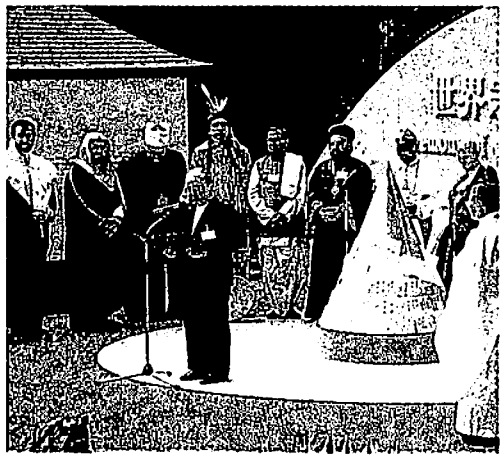
また、バチカンも先月二十二日から二十六日まで財務管理局長のクラウディオ・マリア・ケリ大司教を団長とする北朝鮮ミッションを派遣、法王からの見舞金を送るとともに、現地視察団の報告をもとに今後の支援のあり方を検討するよう要請したのだ。

今回、飯坂ACRP事務総長が北朝鮮支援を急ぎよとか。

今回の「集い」を日本宗教代表者会議事務総長として実現した仏教連盟天台宗宗務総長は「宗教者の役割を再認識し、次へ歩み出す考え方を話し合い、祈るものだ。その考え方は寛い合い、殺し合つ心から分かち合い、お返し、いたわる心に転換しようとするもの

欧米、中東を意識

分かち合う心あっても



比叡山山頂で4日、開かれた世界宗教者平和の集い

「世界宗教者平和の祈りの集い」　一九八六年、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が世界の一日休戦を願い、イタリアの宗教都市、アッシジで世界の宗教指導者を集めて集いを開いた。これに参加した故山田恵諦元天台座主がその精神を受け継いで翌八七年、内外の宗教指導者を集めて京都で宗教サミットと比叡山で平和の祈りの集いを開いた。

毎年、記念の八月四日、比叡山山頂で関係者が集い、平和の碧を築らし、平和を祈っている。この精神で中東のイスラム指導者をイスラムやユダヤ教のリーダーを招いての中東平和会議、子どもサミットなど実践活動も行ってきた。

今回はその十周年記念で天台宗と日蓮宗、カトリックなど八十六宗教・宗派と世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会、世界宗教者平和会議（ACRP）日本委員会、世界連邦日本宗教者委員会で組織した日本宗教代表者会議、仏教やキリスト教、イスラム教、ユダヤ教など九宗教、七組織の代表三十四人（十八カ国）を招いた。チカンのアリンゼ諸宗教対話評議会長官やオバイ世界イスラム連盟事務総長ら高位の聖職者も出席。

これまで「集い」を指導してきた飯坂ACRP事務総長も「この種の会合は考え方をつくるものだ。それを実行するのがACRPやWCRPといった機関。こうした機関はわれわれの考え方を支えてくれればよいのでないか」と同じ見方を示す。

十年前に、「集い」を提唱して実現させた故山田恵諦元天台座主はかつて「パンずれ、十個のパンを十五人に分け合って食べねばならないときがくる。そのとき、それができる心を培っておかねば」と言っていたことがある。その時がやってきたのかもしれない。

これができていれば、現実の問題に対応できて、「集い」の精神が考え方づくりにあったことをあげる。

で、これができていれば、現実の問題に対応できて、「集い」の精神が考え方づくりにあったことをあげる。

核心

1997年8月6日・北陸中日新聞

平和を祈り10年

願い

分かち合いの世紀へ

比叡の山に、世界の宗教者が一堂に集い、人類最大の願い「世界平和」の実現に向け祈りを捧（ささ）げた「比叡山宗教サミット」が、八月で十周年を迎える。この間、ベルリンの壁が崩れ、東西冷戦は終結したが、新たに民族・地域紛争や悪化する環境問題などを抱え、世界平和への行く手はまだまだ厳しく、遠い。新世紀を前に、世界の祈り人が、来月二日から再び集い、祈りを重ねる。二度目のサミット開催を前に、祈りの明日を探った。（社会部　河部光男）

「われわれの使命はあまりに大きく、われわれの力はあまりに小さい。われわれは、まず祈りから始めなければならない」

一九八七年八月。キリスト教、仏教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、神道など世界の七大宗教の指導者らが、比叡山から世界に向けて平和へのメッセージを発信した。

座主の決意

比叡山宗教サミットの「花」を植えたのは、行動するお座主として親しまれた山田恵諦第二百五十三世天台座主（一八九五―一九九四）だった。

その座主に、サミット開催を決意させたのは、八一年、ローマ法王ヨハネ・パウロII世が、東京で日本の宗教者に行ったあいさつだった。「己を忘れて他を利するは慈悲の極みなり」。法王は現世ではなく、比叡山延暦寺の開祖・最澄の言葉を引用した。

以来、山田座主は高齢をものともせず、イタリア・アッシジでの第一回世界平和の祈りの集いに出席するなど、日本でのサミット実現に向け、世界各地の宗教者を訪ね、訴え続けた。

「平和をもたらすべき宗教が、相手の言葉に耳を傾けず、自己の主張のみにとらわれて互いに争っていたのでは、地球の平和は、やっていけません」と。

日本の宗教者も、宗派の枠を超えて参加。内外から約千人が比叡の森に集まり、世界の平和を祈った。

サミットの事務局長を務めた杉谷隆睦天台宗務総長は言う。「宗教の壁を超えて平和を目指す。これが座主の精神の原点だった」

広がる対話

サミット後、山田座主は九十八歳で亡くなったが、その祈りは、さまざまな花を咲かせた。国際的な宗教の連合体「世界宗教者平和会議（WCRP）」は、難民支援のプロジェクトを進め、宗教協力を強めている。

日本でも立正佼成会、天台宗などが一緒になり、阪神大震災の被災地・神戸市の町を旧ユーゴに贈る運動を展開した。総部市や亀岡市では、地元の仏教、神道、キリスト教、新宗教関係者らが懇話会を誕生させた。

比叡山では、毎年八月に祈りの集いを続けている。中東の緊張が高まった九〇年には、イスラムの宗教者に対話の機会を提供した。WCRP委員の広瀬静水大本会議（日本宗教連盟理事長）は「宗教者同士の対話に不慣れだった日本の宗教者もサミット後は、スムーズに交流できるようになった。出会いを重ねることが、次の平和行動に結びついてゆく」と話す。

尽きぬ課題

成果の一方で、平和は祈るだけで実現できるのか。そんな声も根強い。旧ユーゴ、アフリカ、北アイルランドなどでは、宗教そのものや民族が原因となり紛争が続いている。地球温暖化など環境問題も深刻だ。宗教の魅力が薄れたとの指摘もある。

山田座主とともに世界を行脚した小林隆彰延暦寺執行は、二十世紀は「奪い合いと争いの時代」だったと話す。「二〇五〇年には地球上の人口が百億人になるという。もう奪い合いではやっていけない。『分かち合い』の二十一世紀にするため、祈りだけでなく行動する時が来ている。時間はない」。

比叡山宗教サミットでバチカンの代表と握手する故・山田恵諦天台座主（前列左端、1987年8月）

比叡山宗教サミット　上

2日に開会式

大津市の天台宗総本山・延暦寺などで開かれる二度目の比叡山宗教サミット「世界宗教者平和の祈りの集い」（八月二日―六日）の具体的な内容が、二十七日までに決まった。

集いは、第一回サミットの十周年を記念して開催。世界の宗教の指導者二十人を含め内外から約二千人が参加する。初日の二日には国立京都国際会館（京都市左京区）で開会式、記念講演などを行う。翌日は同会館で、参加者が平和活動と民族紛争など八つの分科会で発表する。四日は会場を延暦寺に移し、世界の平和を祈る式典を行う。五、六日は海外からの代表を中心に、広島の平和式典などに参列する。

三日の分科会では、カンボジアのテップ・ボーン仏教会長、旧ユーゴのヴィンコ・ブルジク枢機卿（カトリック）らが民族紛争について話し、別に若者などに対する宗教者の使命をめぐっての発表もある。

1997年7月28日・京都新聞

平和への祈り ②

比叡山・世界宗教者の集い

東西対立の終結後、世界各地で民族紛争が相次いでいる。中には宗教の違いが原因となって起きた戦争も多い。宗教は戦争を引き起こすものなのか。「世界宗教者平和の祈りの集い」では「宗教協力と世界平和」がテーマの一つとして話し合われた。世界の宗教指導者からは「宗教は戦争を起こしていない」という反論が相次いだ。宗教が戦争をどう考え、どうかかわりを持っているのかを紹介する。

（秋田正雄）

京都国際会館で行われた「宗教協力と世界平和」を考える部会。世界の宗教指導者15人が意見を述べた＝3日

「宗教と戦争」を考える

人間は平和求める存在

紛争により国家が分裂、多くの犠牲者を出した旧ユーゴスラビア（ボスニア・ヘルツェゴビナ）のサラエボ大司教、ヴィンコ・ブルジク枢機卿（カトリック）は「宗教の名のもとに行われる戦争は、最も宗教に背く罪である」と力説。報道、学者による「旧ユーゴ紛争は宗教戦争である」という分析に異議を唱えた。

報道陣は「紛争中に旧ユーゴ内のイスラム教、ロシア正教、カトリック、ユダヤ教が『それぞれ多くの価値を共有しており、相互の尊重、協力、自由な生活のための確かな基盤を共有できる』という声明を出した。自分ならこのように処遇されたいと思うように処遇せよ、という黄金律を共有している。それぞれ信徒に説いている」と、宗教が紛争解決のため努力していることを紹介した。

そして「私は信じている。宗教には、敵（ゆる）し、和解させる力がある」ことを」と信念を語った。

◇

やはり内戦の歴史を持つカンボジア仏教協会長のテップ・ポーン師は「仏教は暴力を否定している。個人ひとりが身につけなくてはならない見方、考え方を一人ひとりが身につけなくてはならない。それができなければ放置と強奪、怒りを呼び社会が混乱する」と話した。

そして「仏教の教えによる平和原則とは、人間を殺す兵器、自然を破壊する兵器、戦争を引き起こす兵器を生産するな、売るな、買うなということ。これを徹底的に原則することで人々は仏の力を強く信じるようになり、心が満足し、平和が訪れる」と話した。

◇

過去には宗教の違いによる宗教分裂の歴史をも持つインド、シン・ウーバン師（シーク教）は「今では、キリスト教やシーク教がヒンズー教やイスラム教の架け橋になっている。インドの個人たちは特定の宗教のための活動はしていない。

紛争原因説に反論続出

◇

では、宗教の側は「宗教は平和を求める」と異口同音に強調するのに、どうして「宗教戦争」と呼ばれる紛争が多発するのか。

これについて、日本の教派神道を代表した黒住教団は「人民の同胞意識や連帯感が乏しいときに、相互の不信感や憎悪感が生じる。（指導者らが）人心を統合しようと、宗教や民族といったところにある人々の固執を利用するため、結果的に宗教、民族と呼ばれる争いに発展してしまう」との分析を披露した。

「宗教協力と世界平和」を考える会議では全部で十五人が意見発表した。そこでの議論の成果は最終日に発表された比叡山メッセージに「生命を大切にし合う宗教的土壌を培い、正義と愛、寛容と慈悲の宗教心を浸透させる努力を積み重ねる。平和のために祈ることは平和のために働くことである」という文言で盛り込まれた。

1997年8月22日・産経新聞

平和を祈り10年

政治、宗教の「壁」越え

苦悩

「宗教者は、政治家でも学者でもない。平和への貢献は、神仏に対する祈りが中心だ」。比叡山宗教サミットの参加者の中には、こう説く人もいる。

阻まれる願い

だが、現実の内戦や飢餓などを前に、祈りだけで十分だろうかと自問し、行動を始める宗教者も多い。行動する宗教者を悩ましし、歯がゆさを感じさせるのが、政治の壁だ。

一九九五年春。韓国と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)のキリスト者らが来日し、日本クリスチャン・アカデミー関西セミナーハウス(京都市左京区)で会議を開いた。日本や欧米のプロテスタントが見守る中、両者は朝鮮半島の平和的統一促進のため共同行動をとることを確認した。

会議は当初、北朝鮮のピョンヤンで開かれるはずだった。しかし、北朝鮮と韓国の政治の壁が、戦後五十年の節目に統一の弾みをつけたいという宗教者の願いと夢を阻んだ。

日本のプロテスタント関係者は、会議の中止を考えた南北の宗教者を「対話の流れまで止めてしまってはいけない」と説得、京都での会議を実現させた。

牧師でもある関西セミナーハウスの平田哲所長(六五)は「祈りは基本だが、行動を伴わない宗教には失望を感じる。確かに政治の壁は厚いが負けてはいられない」と話す。

命がけの連携

同じ九五年、旧ユーゴでは、国内のカトリック、プロテスタント、ギリシャ正教、イスラムの宗教者が、戦争状態になってから初めて、宗教の壁を超え、平和実現のための合同会議を開いた。政権に反発すれば宗教者といえど、命にかかわる状況だった。

「宗教者が命をかけ連帯の声を上げた意味は大きい」。旧ユーゴで活動する日本緊急救援NGO(非政府組織)グループのスタッフ、根本昌広さん(四二)=立正佼成会職員=は宗教者の役割をあらためて痛感した。

根本さんらは、旧ユーゴの各地で、戦火で肉親を失った子どもたちの心のケアに携わっている。「キリスト教やイスラム教は現地で争いに巻き込まれているため、直接利害のない仏教徒には心を開いてくれる人が多い」と話す。

内なる障害も

行動する宗教者の前に立ちはだかる、もう一つの壁がある。宗教そのものだ。

「同じ仏教といっても教えが微妙に違う。最初は現地の人々に受け入れられなかった」。いまも戦火が絶えないカンボジアで、難民の支援を続けている曹洞宗国際ボランティア会(SVA)の有馬実成専務理事(六二)はこう語る。

カンボジアでは、僧りょは自分の修行に徹するのが常識とされている。修行よりも「奉仕活動」を全面に押し出す生き方は、僧のやることではないとされ、説教の申し出も素直には受け入れられなかったという。

「理解してもらえなくてもいいから、ここで一番必要な仕事は何か教えてくれ」と、有馬さんらは住民や僧りょに頼んだ。泥まみれになり、井戸掘りに取り組んだ。遠巻きにしていた住民が、一人また一人と、一緒に手伝ってくれるようになった。宗教者という鎧(よろい)を脱ぎ捨て、一人の人間として接するうちに信頼関係が生まれ、教えの違いはいつの間にか障害ではなくなったという。

行動すればするほど、悩みや、いら立ち、歯がゆさは増す。

「でも…」と有馬さんはいう。「祈りだけでなく、街頭や山野で、宗教者が民衆と一緒に汗を流し、小さな歩み、行動を続けていくことこそ、平和への早道ではないか」

カンボジアの仏教徒らと一緒にプロジェクトを進める曹洞宗国際ボランティア会のメンバー

比叡山宗教サミット 中

1997年7月29日・京都新聞

1997年8月4日・Asahi Evening News

RELIGIOUS UNITY SOUGHT

World religious leaders strive for reconciliation at a series of lectures on Mount Hiei, near Kyoto.

By TARO KARASAKI
Asahi Evening News

KYOTO—Representatives from 16 religions and religious organizations worldwide Sunday wrapped up a series of lectures on dealing with regional conflicts and enhancing world peace, in which they agreed to promote dialogue among their followers and try to reduce ignorance and isolation.

The religious leaders, participating in the 10th Religious Summit Meeting on Mount Hiei, were to adopt today a joint statement calling for promotion of interdenominational dialogue and to offer a joint prayer for world peace at Enryakuji temple.

Participants at the summit in individual presentations held over the weekend cited many cases in which their own doctrines could be used for the pursuit of wealth and power or to facilitate the perpetration of war. The participants also agreed that it was their duty to promote the idea that all beliefs pray to a single God.

"The key is mutual understanding. This does not mean giving up beliefs and identity, nor seeking economic benefit," said Mar Gregorios Yohanna Ibrahim, an Orthodox Christian priest from Syria, in a speech.

Ibrahim condemned the egoism of some religious activists who dominate the population in his country through aggressive evangelism.

"Absence of serious relations between Christians and Muslims is principally due to evangelism," he said.

"What unites beliefs exceeds what separates them," Ibrahim said. "God is one and unique." Ibrahim added that both the West and the East have to learn to admit the existence of each other's faiths.

"Religion seeks to give meaning and guidance to our being. Interreligious dialogue is essential in breaking down the barrier of prejudice, fear and isolation," said Rabbi David Rosen, of Israel.

"We are all limbs of a common body," Rosen said.

"People are living in an age of constant murder and destruction. It is necessary for religious groups to unite and stop this destruction," said Ahmad Umar Hashim, a Muslim and president of Al-Azhar University in Egypt.

United Nations Undersecretary-General for Disarmament Affairs and for Public Information Yasushi Akashi, delivering a keynote lecture on the opening day Saturday, said that too often religion has served as tools of zealous political leaders who seek war to further their power.

"Religion must not be misused in a way to encourage intolerance, and must encourage tolerance among various nations by showing the common grounds to people who otherwise would see themselves different," Akashi said.

Akashi outlined a four-point guideline for the role of religions in helping prevent regional strife.

"Ensure that religions are not used as a pretext for violence, use the teachings to spread moral values, use moral and religious teachings to condemn the decisions backing conflict, and promote reconciliation," Akashi urged.

Interfaith meet for world peace starts in Kyoto

By Kahori Sakane
Daily Yomiuri Staff Writer

KYOTO—Religious leaders from around the world gathered in Kyoto on Saturday on the opening day of the Interreligious Gathering of Prayer for World Peace.

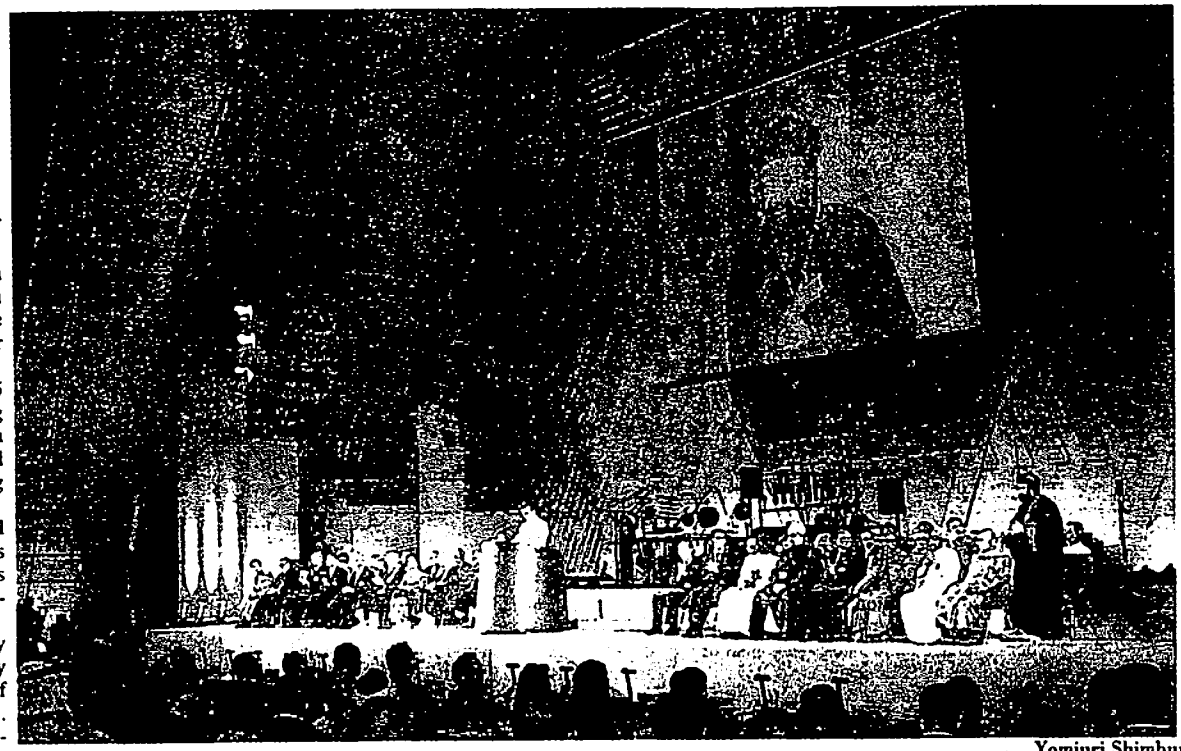
Over 2,000 leaders and followers of 95 faiths, including Buddhism, are attending the three-day event, which marks its 10th anniversary this year. The participants hail from 19 different countries, including Japan.

Among the participants are Cardinal Francis Arinze, president of the Vatican's Pontifical Council for Interreligious Dialogue, and Ahmad Umar Hashim, president of Al-Azhar University in Egypt.

The summit was started 10 years ago by the Tendai Buddhist denomination shortly after it marked the 1,200th anniversary of the founding of its head temple at Mt. Hiei.

The annual gathering has attracted eminent religious leaders from all over the world, fulfilling an idea first proposed by Pope John Paul II in 1986 in Assisi, Italy.

At that time the pontiff urged interreligious prayer as an ideal way to achieve peace and mutual understanding.



Yomiuri Shimbun

Participants gather on a stage at the International Conference Hall on Saturday in Kyoto

Ven. Gijun Sugitani, secretary general of the Japan Conference of Religious Representatives, the host of the event, opened the three-day meet Saturday at Kyoto's International Conference Hall.

In his address, Sugitani said it was important for religious leaders to cooperate so that people of different faiths could pray together for world peace.

世界宗教者平和の祈りの集い
報道結果

テレビ

NHK	8月2日「ニュース7」（全国放送）
	8月4日「ニュース7」（全国放送）
KBS京都	8月4日「ニュースワイド京都」
びわ湖放送	8月4日「ぶるるるぶびわこ」

新 聞

全国紙・ブロック紙

朝日新聞	6月17日
	8月3日（大阪版）
	8月5日（全国版）
	8月5日夕刊（全国版）
	8月5日（大阪版）
読売新聞	6月17日
	7月18日（全国版）
	7月28日夕刊（大阪版）
	8月3日（大阪版）
	8月3日（滋賀版）
	8月5日（滋賀版）
	8月5日（大阪版）
毎日新聞	8月5日（大阪版）
	8月5日（滋賀版）
産経新聞	6月17日
	7月28日夕刊（全国版）
	8月3日（大阪版）
	8月21日夕刊（全国版・連載1回目）
	8月22日夕刊（全国版・連載2回目）
	8月25日夕刊（全国版・連載3回目）
	8月26日夕刊（全国版・連載4回目）
日本経済新聞	6月17日
	8月3日（大阪版）
	8月5日（全国版）
	8月8日（全国版）
	8月10日（全国版）
中日新聞	8月2日
	8月3日
	8月4日
	8月5日
	8月5日
	8月6日

英字紙・その他

赤旗	8月3日
マイニチ・デイリー・ニュース	7月29日
デイリー・ヨミウリ	8月3日
アサヒ・イブニング・ニュース	8月3日
	8月4日
	8月5日

地方紙

東奥日報	8月3日
山形新聞	8月3日
東京新聞	8月2日
	8月6日
岐阜新聞	8月3日
	8月5日
北陸中日新聞	8月3日
	8月5日
	8月6日
日刊県民福井	8月3日
京都新聞	6月17日
	7月25日
	7月28日
	7月29日
	7月30日
	8月1日夕刊
	8月2日夕刊
	8月3日
	8月4日
	8月5日
	8月9日
	8月12日夕刊
神戸新聞	8月3日
	8月5日
奈良新聞	8月3日
山陽新聞	8月3日
	8月5日
中国新聞	8月3日
四国新聞	8月3日
	8月5日
	8月14日
高知新聞	8月3日
長崎新聞	8月3日
熊本日日新聞	8月3日
南日本新聞	8月5日夕刊
琉球新聞	8月5日

あとがき

この度の比叡山宗教サミット十周年記念「世界宗教者平和の祈りの集い」は、一九九六年(平成八年)二月の第一回準備会を始めとして、一年六ヵ月の歳月をかけ開催に至りました。その間に開かれた準備のための会合は公式なものだけでも三十数回、まさに諸宗教者が教派宗派の壁を超え、一つの目的に向かい、心を一つに協力し合った証しとしての集いでありました。

十年間の成果を一言で表現することは容易ではありませんが、この長期にわたる準備に際し、日本宗教連盟加盟五団体と世界宗教者平和会議（ＷＣＲＰ）日本委員会、そして、世界連邦日本宗教委員会を含めた七団体の代表者が、それぞれの立場を超えて当然の事のように、友好的なふれあいの中でこの集いを作り上げていったところに大きな成果を見出すことができたのではないでしょうか。

日本においては、諸宗教者が出会い、語り合い、行動を共にするという事が、日常的に行われておりますが、世界に目を転じたとき、そこには、まだまだ道遠いものがうかがわれます。今回海外から参加された宗教代表者の中に、中東や

ボスニアの方々がいらっしゃった事は、宗教協力による平和への歩みを実践している日本の宗教者への期待の現れと解せましょう。

そういう意味で、この集いに参加した一人ひとりが、宗教による世界平和実現に向けての真の仲介役としての自覚をさらに持つ事が重要と認識させて頂きました。

そして、もう一つ大切な事は、協力の和への努力を継続させていく事であります。やがていつの日か必ず世界の隅々にまで、この調和がより大調和となることを信じて、仮にその歩みが遅々たるものであっても、実践を続けていく事であると確信させて頂きました。

最後に、御協力頂いた各委員や事務局、そして、十以上のご教団から、この集いを陰で支え、成功に導かれた原動力としてのお働きを頂いた多くの若いボランティアの方々のご尽力に対し、心の底から感謝の意を表したいと存じます。そして、この若い人々の奉仕の姿に、未来の光明が確実に現れていた事を特筆し、結びとさせて頂きます。

日本宗教代表者会議事務次長
南　佳　伸
（立正佼成会責任役員）

THE INTERRELIGIOUS
GATHERING OF PRAYER
FOR WORLD PEACE

比叡山宗教サミット10周年記念
世界宗教者平和の祈りの集い

資料提供　IPRシャンドウィック株式会社
株式会社ヒューテック
写真撮影　谷　研一
西川　勇
装丁・レイアウト　コイズミデザインファクトリー
発行日　平成十年二月二十日
発行所／発行人　滋賀県大津市坂本四・六・二
天台宗務庁内
日本宗教代表者会議
☎〇七七（五七九）〇〇二二
印刷所　佐川印刷株式会社

JAPAN CONFERENCE OF RELIGIOUS REPRESENTATIVES

日本宗教代表者会議